
きっと僕にできるコト

月織黎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きつと僕にできるコト

【Nコード】

N6780I

【作者名】

月織黎

【あらすじ】

『ナンバース・チルドレン計画』。それは、年々増加していく凶悪犯罪に対抗すべく、特殊能力を持った人間を人工的に産み出すという、日本政府が編み出した切り札。しかしその計画は破綻し、多くの異能力者が世間に放たれてしまった。その打開策としての最後の手段『アンチ・ナンバース計画』が立ち上げられた。その申し子として産まれたのが、救世主・『エナジードレイン』を持った人工受精児、綺羅衣翼きらえ・たすくである……はずなのだが、扱いは結構ずさん。殺しても死なないパーフェクト委員長、銃を使わないちよっと残念な

銃士、詠^{うた}うことに特化した最強の陰陽術士、世界を完全に隔離する鉄壁の結界士、百発百中千発千中万発万中の絶対的な狙撃手、あらゆる法則を無視する何でもアリの吸血鬼……。キリングマシンとして育てられた翼は、様々な人達と会うことで成長していく。個性溢れる彼らの前には、専らツツコミに回らざるを得ない翼。愉快痛快世界崩壊のドタバタギャグでんこ盛り、バトルファンタジーストーリー。とくとご覧あれ！

1・「ちょっと変わったフツ」の日常」救世主編（前書き）

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・半角の（ ） で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・全角の（ ） で書かれている部分は主人公の情景補足
- ・《 》 で書かれている部分は傍点（強調）

1・「ちょっと変わったフツの日常」救世主編

「助けてえっ！！」

*

夜の静寂を女性の甲高い叫びが引き裂いた。如何に尋常ならざる窮地に陥っていることはその一言が物語っている。閑静でしかし平穩な片田舎だったはずの町は、彼女にとって最早恐怖と絶望が蔓延る暗黒街として脳髓に記憶されてしまったに違いない。

叫びつつも走るのはやめない女性。あまりの恐ろしさのせいもあり既に息は切れ切れだ。汗にまみれ、肩が激しく上下し、顎は上がっている。ハイヒールは途中で片方脱げていたが、そんなことを気にする余裕は彼女にはない。

首だけで振り返る。きつと元の町並みがあるという淡い期待を抱いて。

しかし男は立っていた。運がいいのか悪いのか、ちょうど街灯の真下にいたので男の姿は夜の闇の中で鮮明に浮かび上がった。

ひっ　！　息を吸い込む音にならない音。悪夢はもう疑いようのない現実としてそこにある。アドレナリンが急激に分泌され、彼女は脚の限界を振り切って更に加速を強制させる。

数メートル後方を追う男。顔面は土気色で目は血走った三白眼。口許は不気味に歪み、端から唾液がだらしなく垂れている。およそ常人とは思えない形相だった。

そして、右腕には刃物。

否。

《右腕自体が刃物だったのだ》。肘から先が出刃包丁のように変形を遂げていたのである。その怪現象が、彼女を混乱の極致に至らしめている最大の原因だった。出来の良いハリボテ道具でないことは既に文字通り痛感している。男の刃は彼女の左肩の皮膚を薄く、しかし衣服を通り越して確実に切り裂き、その部位からは鮮血が垂

れている。

女性は緩くカーブした車道に差し掛かったところで足がもつれ、転倒した。立ち上がるうにも膝が震えうまくいかない。致命的な隙だった。男はもう眼前に迫っていた。

「あ、あ、あ……」

ガチガチと歯を鳴らせて、後ずさる女性。そんなものは焼け石に水だと分かっているも、今となっては 生命の危機に瀕した今となっては、一秒でも命を長らえさせようとする動物的な本能だった。男は口の端をより一層吊り上げて、刃と化した右腕をゆっくりと振り上げる。刀身が重たいのか、上げた腕はふらふらと狙いは定まってはおらず、だがしかしどこに当たろうが必殺だろう。鋭利な刃はひとたび振り下ろされれば、柔肉を切り裂き、骨を断ち、命を奪うのに十分すぎる兵器である。

次の瞬間。前触れもなく。断頭台の如くそれは音もなく振り下ろされた。

「いやああアアア!!!」

女性が大気を乖離せんばかりの悲鳴を発する。あるいはその瞳には一足早く三途の川が映っていたかもしれない。

しかしその凶刃が女性を両断するまさに直前。

《僕の糸》が、それを遮って止めていた。

どちらにとつても、僕の介入は夢想だにしなかったものだろう。それが想定内の範囲内の出来事であったのは、あくまで男の背後に立っていた僕だけだった。

二人にとって、僕はどんな風に見えていただろう。女性から見れば救いをもたらす天使、男から見れば破滅を招く死神といったところか。

「……現行犯逮捕だ」

僕は不敵に笑って言い放った。

「情状酌量の余地はないぜ」

*

数時間前。

よくよく考えれば当たり前のことではあるのだが、急用というもののは突然できるものだし、突然にできるということは勿論予め決めていた都合がある程度キャンセルせざるを得ない状況になるということだ。ついでに言わせてもらうなら、気分の良い時に感じる嫌な予感とは中八九的中するものである。何故なら良い気分の時よりも良い気分になる知らせがそうそう良いタイミングで訪れるはずがなく、僕のこれまでの少ない人生経験を振り返ってみてもそんな至福の出来事はまずありえない。嫌な気分の時に相乗効果で嫌な知らせがあることは割と多いのだが、どうしてこつちも釣り合いがとれないのか甚だ不思議でならない。

……と。前置きが長くなったが、事の発端はとある平日の学校の放課後。僕のポケットにしまつてある携帯電話が震えたことが始まりだった。因みに、僕の携帯は常にマナーモードに設定してある。

ディスプレイには……案の定だ、『所長』の二文字と十一桁の数字の羅列。

「ちよつとごめん」

会話をしていたクラスメイトであるところの音葉おとばに一言断る。彼女が勝手知つたるといった様子で頷いたのを確認して僕は通話ボタンをプッシュした。

『たすく。翼。喜べ。仕事だ』

相も変わらず開口一番それか。喜べない。

「所長。いい加減そのテンプレートな第一声直した方がいいぜ。慣れる僕でさえたまに着信拒否にしたいくなる」

『うむ。いつもと変わらず壮健な様子だな。結構結構。今授業中か？ いや、だとしたらそもそも電話に出られないか。む。もうこん

な時間か。だとすると放課後か？ クラスメイトと談笑でもしていたか？ だとしたら悪かったな。ああ、音葉が相手だったとしたらそんな心配は無用か。それとももう家に帰っているのか？ だとしたら一層都合がいい。とりあえず、端的に結論だけ言おう」

「常々言っていることだけど、アンタのそれは『端的』でも『結論だけ』でもないからな」

僕の嫌味を華麗にスルーした所長は基本的に仕事ができ理解もある、上司としての能力は完璧な人なのだが、思い込みが激しく、気が付いたらあつという間に話が脱線してしまうのが玉に瑕で、たまにこうして僕がツツコミを入れてやらないとそのうち一周回って本線に戻ってくるまで待つ羽目になる。こうして自分から戻ってきてくれたのはまだマシな方だ。

「というか、『音葉なら大丈夫』って考え方はやめてくれないかな。一応民間人だぞ。更に言うならたった二台詞でこんなにツツコませないで頂きたい。」

「とりあえず、事務所に行けばいいんだろ？ どれくらい急げばいいんだよ」

「ああ、早いに越したことはないが今は急ぐレベルではない。一時間以内に来てくれ」

「ん、了解」

そう言って終話ボタンを押す。待ち受け画面には『7/16(日) 16:00』とあった。季節は初夏。窓から見える太陽はまだ制空権を掌握している。

「お仕事？」

僕が通話を終えたのを見計らって音葉が声をかけてきた。

みのりかわ
実川音葉。十七歳女子。私立相楽森学園高等部三年B組が誇る品行方正を絵に描いたかのようなクラス委員長。成績も冗談じゃないくらい優秀で、彼女が間違えた問題は出題者側にミスがあるまで言われている。百点満点のテストで百五点取るくらいの勢いだ。性格もまるで菩薩のように大らかで実直。かといって完璧に清濁併せ吞

む粹にはまり切ったタイプという決してわけではなく、正しいことは正しい、悪いことは悪いと面と向かつてはつきり言う（たとえそれが目上や教師であつてもだ）。黒髪ロングの髪の毛をピンクのリップでサイドポニーに束ねて、化粧もしていないはずなのに非常に肌つやが良く、銀縁眼鏡がよく似合う。同じ学校の同じクラスで同じ授業を受けているだけでも光栄なのに、しかもなんと僕の友達だといふのだからまさに夢のようだ。自慢のクラスメイトである。

「……綺羅衣君。私に関する美辞麗句が三百文字以上にも亘って説明されてる気がするんだけど、気のせい？」

「気のせい気のせい。無茶苦茶気のせい」

即答するしかない。こういう勘働きの良さからも、彼女の才媛ぶりが窺えるだろう。コイツといると女の勘というのはつくづく恐ろしいと思う僕だった。

「こほん。それで、お仕事でしょ？ 今の電話」

「ああ、所長から。でも今回はそんなに危なくないっぽい」

私立相楽森学園は、高等部に入るとアルバイトの自由が認められるのだが、僕は諸事情から自分が働いていることを極力周囲に知られないようにしている。電話で所長も話していた通り、音葉はちょっとした例外なのだ。

「そっか。でも、危険がないと思って油断しちゃダメだよ。綺羅衣君が怪我したら私、悲しいからね」

「ああ、サンキュな。悪いな、せつかく話に付き合ってくれてたのに」

「いいんだよそんなこと。お仕事なら仕方ないもの」

一方的に会話を終了させられる羽目になったというのにもかかわらず、音葉は全く気分を害した風もなく、むしろ僕の身の心配をしてくれる。こういう面が彼女の人格者ぶりを裏付ける確たる証拠となっている。

そう言っ僕は帰宅の準備をするべく自分の鞆を取りに自分の席に戻る。言い忘れたが、さっきまでいたのは音葉の席、教室の真ん

中の一番前で教卓の真正面。僕の席は一番廊下側の後ろから二番目だ。教室を半分横断する形になる。

「それじゃあ、気をつけてね。また明日」

当たり前のように教室の出入り口まで見送りに来てくれる音葉。僕はそれに肩越しに手を振って応じた。

尚、誤解されないように断っておくが、音葉と僕は恋人でもなんでもない。友達以上の関係であるのは否めないが。

まあ。

長くなつたが、僕が友達と雑談をしているところに仕事先から電話がかかってきて別れることになった、という一言で片付ければそういう日常のどこにでもある普通のワンシーンだ。

普通じゃないのは、僕の仕事と、僕　　綺羅衣翼という存在そのものだというだけで。

*

UN事務所。

僕の仕事先はそう呼ばれている。ネーミングの由来は後に譲るとして。決して繁華街とも田舎とも呼べない中途半端な場所に位置するこの町のドセンターにその事務所は存在する。平均的な男性の歩幅なら相楽森学園から三十分とかならない三階建てのオフィスビルに僕は訪れていた。

三階　　つまりは最上階の所長室のドアを二、三度ノックする。

一瞬の間も置かず「入れ」の一言を聞いてから僕はその扉を開けた。内装は、所謂社長室のようなもので（因みにこれは偏見で物を言っている。人生経験の浅い僕に本当の社長室なんてものがどういふものかは知らない）、デスクの上にノートパソコン、茶絨毯の敷かれた床。黒革張りのソファにテーブル、その上にはちよつとした観葉植物なんか置かれており、壁には設置された書棚がある。蔵書や資料集が思いの外少ないのは、なんでもかんでもデータ化するという現代人にとってのある意味特権とも言えよう。

で。そのデスクに腰掛けノートパソコンを食い入るように見ていた所長　本名を真田真正あなたまさたという。まるで生まれてくる時代を間違えたかのような古風なネーミングをしかし、本人はいたく気に入っているご様子だ。もう夏だというのにきつちりとした紺地のスーツにネクタイ。およそクールビズとは程遠い容姿の三十代の男性が、優等生の必須アイテムとも言える眼鏡を中指でくいつと上げた。

「遅かったな」

「そもそもアンタがこっちの都合も考えずに連絡を寄越したんじゃないか。第一、一時間以内でいいと言ったのは他でもない所長だろ」それはそれで的を射てはいるが、お前の脚ならここまでの片道くらい五分もあれば十二分だろうに」

「こんなところで能力の浪費は避けたいんでね。あくまで今の僕は平均的な思春期の身体能力より若干高いくらいだぜ。三十分で着いたんだから上等だと思ってくれ。」

で。仕事っていうのは？」

「そう急くな翼。急いで事は仕損じるといふぞ」

「急かせてる本人が言つな。あと、その台詞もいい加減聞き飽きたからな」

言っていることが支離滅裂この上ない。コイツが所長である以上、それを無視することは立場上僕にはできないのだが、流石にこうまで理不尽さを押しつけられるといくらなんでもやるせない気分になる。

所長は眼鏡の奥で光る双眸に真剣みを灯して口を開く。

「三つ隣町で、最近起こった通り魔事件のことは知っているな？」

通り魔事件。平和なこの町には似ても似つかない単語だが、僕も耳にしたことがある。三つ隣町、ここよりも更に辺鄙な町なのだが、そこで先日ローカルニュースの一面を飾った殺人事件だ。被害者は若い女性、殺傷方法はナイフなどではなく鋭利な長物の類。地元を騒乱させるには十分な凶報だった。犯人は今日現在以て未だ捕まっておらず、一般住民達はさぞや戦々恐々としていることだろう。

……つーかまさか。

「察しがいいな、翼。君に是非この事件を解決してもらいたい」

「……なんでさ。うちはいつから何でも相談事務所になったんだ。」

「そんな僕らみたいなのじゃなくって警察にでも頼めばよかるうに」

「ほう。ではそれが“ナンバーズ”の仕業だと言ったとしても、お前は傍観者に徹しているつもりか？」

びく、と。僕はその単語に敏感に反応する。

「……何桁？ 連中がらみなら急がないとヤバいんじゃないの？」

「“セラ”の確認も済んでいる。波長から察するに三桁の中頃だろう。対象の能力は『トランス』。恐らくは力を持って余したあまり暴走したんだろうな。確かに急ぎの案件に違いはないが、今のところ波長は安定している。すぐに被害が出る心配はない」

抜け目ねー。相変わらず手際が良すぎて怖い。

「分かった。とりあえずの任務は対象の尾行。事が起きたら被害者が出る前に防いで可能なら説得。それが出来なかつたら」

「ああ。お前の一番の得意分野じゃないか。」

一応言っておくが、今回のお前に与えられる報酬は成功報酬で八十万だ」

「お金には興味ねーよ」

八十万、言うまでもなく単位は『銭』ではなく『円』である。高校三年生の身分にしてみれば途方もない金額なのだろうが、生憎とこの仕事は昨日今日始めたわけではないので、僕は軽い金銭感覚麻痺を起こしている（いつだったか、音葉に話してはじめて気が付いた）。それに、僕にとって報酬は二次的なもので、金額の高い安いは関係ないのだ。

「分かっているが、これも私の仕事のうちなのだよ。というわけで前金としてこれだけ渡しておく。交通費にでも使え」

そう言っ僕に茶封筒を手渡してくる。ピン札の福沢さんが大家族になっていた。明らかに三つ隣町までの交通費という額じゃない。ん。了解。あとは現地に行っ自分の足で探すよ」

「宜しく頼んだ」

そう言って僕は事務所を後にした。

さて。今回の任務は終わるのに何日かかるやら。

*

各駅停車の電車で六駅。目的地に到着。セラの気配を辿って僕は難なく対象 『トランス』の居場所を捕捉した。

対象は、ありていに言えばホームレスだった。公園の隅っこに段ボールを敷きつめて陣取って寝そべっている。年齢は二十歳前後なのだろうが、あまりにみすばらしい風体からはとてもそうは見えない。どう見てもリストラされて行き場を失くしたサラリーマンとかの類だ（これも偏見でものを言っている）。

ひとまずは、様子見だ。この仕事の一番のネックは現場を押さえなければならぬことだ。セラの残滓があるのでまず間違いないだろうが、無関係の人間だという可能性も捨てようがないからだ。あつちが動いてくれなければこちらも動きようがない。僕は二階建ての民家の屋根の上に身を潜めていた。

そして、時刻が二十四時を回り、明日は今日になった。

その瞬間、スイッチが入ったかのように男が身を起こした。急激に活発化した体内を巡るセラに過剰反応、その男は薬物中毒者のように荒い息を繰り返し、痙攣しているように身体を小刻みに震わせている。

ナンバーズの力の暴走。セラの励起も確認。間違いない。あれが今回のターゲットだ。

あの様子だと、恐らく説得は不可能だろう。セラの波長の乱れから察して、理性のタガは完全に外れているだろう。今の彼はおよそ人の姿をした野獣だと思っただ方がいい。……まあ、あくまで言葉の綾で、猛獣の方が余程可愛いものだが。

ふらふらとした足取りで公園から出ていく男。

いよいよか……。

「^{アンチ}解封」

僕は限定的に自分にかけていた封印を解除する。これより、綺羅衣翼は“異能殺し”へと姿を変える。

男は特に当て所なく歩いているようだった。行き当たりばったりで何か。まさに辻斬り。ここだと場所が悪い。僕は先行して男の歩く方向へと向かう。屋根から屋根へ。十メートルくらいの跳躍程度のことは、限定解除した今の僕には造作もないことだ。

しかし。アクシデントは常に唐突に襲ってくるもので。

「っ
っ」

俯瞰している僕には分かった。男が向かう辻の曲がり角。右側から二人組の男性が歩いてきたのだ。

何分街灯の少ないド田舎なので、両手には懐中電灯が握られている。紺地の制服にかぶった帽子。腰には警棒と拳銃。見るからに警邏中の警官だった。

「ちっ……っ」

確かに囃がかかるのはこちらとしては是非もないことだが、二人組、それも警官となつては都合が悪い。二人いるという意味でも都合が悪いのに、末端の警察官（こんな田舎に勤務してくらいだから、巡査がいいところだろう）相手となると後々の情報処理が厄介になりかねない。

ということ、申し訳ないが二人には今回の場ではご退場願おうと思つた。

僕は二階建て家屋の屋根の上から二人の背後に音もなく着地する。そしてそのまま、二人の延髄に寸分違わず手刀を叩き込む（これには細心の注意を払わなければならない。今の僕が下手に力を入れると二度と目が覚めなくなるどころか首を刎ねてしまいかねないからだ）。とん、と軽くタッチするだけで大の男二人は糸の切れたマリオネットの如く気を失つてその場にくずおれた。

「お……っ」と

力が抜けた二人の警官を小脇にひよいと抱える。

しかし、まずい。その交差点をターゲットが右折してきたらこの場に直面してしまう。それは非常にいただけない。加えて、ヤツはもう交差点にさしかかりつつある　　！

(瞬間！)

僕は術式を心の中で詠唱する。次の瞬間、僕はさっきまでいた屋根の上に跳躍していた。おかげで男の視野には僕らの姿は映らなかつたはずだ。

さてどうするか。当分この二人は目を覚まさないだろうが、流石にこのまま屋根の上に放置しておくのはまずいよな……僕ならともかく、普通の人間が昏倒した状態でこの高さから間違っても落ちたりしたら、間違いなく死ぬし。

かといって時間はほとんど猶予がない。できれば派出所まで運んでやりたいのだが、如何せんターゲットがいつ行動に移るか分からないのだ。

仕方がない、若干リスキーだが、さっきまで見張っていた公園のベンチに寝かせておこう。そう考えて僕は二人を両脇に抱えたまま屋根と屋根を飛び移る。そうして間もなくさっきまでターゲットが寝そべっていた公園のベンチに二人を横たえた。

「悪いね。こつちも仕事なんぞな」

そうして聴こえてはいないだろうが、形式上の謝罪を口にしたところ。

「キヤアアアアア！」

遠くから女性の悲鳴が聞こえた。そんな悲鳴は命に瀕した時に発するものだと、僕は経験上知っている。

「くそっ」

最悪のタイミングだ。この僅か数秒の間にヤツは行動を起こしたらしい。

声のした方向を考えるとここから百メートルつてところか。

(間に合ってくれよ　　！)

僕は疾走する。そのスピードたるや、下手な自動車をも軽く凌駕

する。こんなアクシデントのせいで任務失敗なんてまったく笑えないにも程がある。

数秒駆け抜けたところで、その場に直面する。女性　女物のスーツに身を包んだ二十代半ばと思しき、ぱつと見た感じは大手会社のキャリアウーマンだろうか　　が左の肩口を押さえて、そこからうつすらと出血している。そして肝心の男は、右腕を出刃包丁のような巨大な刃物へと変化させていた。

……質量保存の法則はどこに行った。

『トランス』だ。ヤツがナンバーズだというのは疑いようがない事実だった。

女性は数歩後ずさったかと思うと、背を向けて全力で逃げ出した。男の後方から走ってきた僕には最早眼中にない。生物的な生命の危機を嗅ぎ取ったか。その判断は正しいのだが、追う側のこちらとしてはぶつちやけ迷惑だ。しかも、結構速い。本能的に足の速さのりミッターを解除しているのだろう。あれを意識して発揮させることができれば世界新記録を狙える。

男も追いかける。僕も勿論追いかけるのだが、悠長なことを考えていたせいでスタートダッシュが遅れてしまった。

「助けてえっ！！」

女性が叫ぶ。一人の生命が危うい場面において不謹慎かもしれないが、その悲鳴を聞きつけて近隣住民が目覚まさないか若干の不安もあった。

彼女はしばらく走ったところで足をもつれさせて転倒した。ハイヒールは走るのにあまりに不利な靴なのだから、まあ一言で片付けてしまえばそれは当然の帰結だった。

男は刃物と化した右腕を振り上げる。それはギロチンの刃を彷彿とさせた。二人とも僕に気付いている様子はない。

僕は首から提げたシルバーの十字架状のネックレスを握り締めて。

「モドリス
ルシフェライゼ 霊装解除。銀麗糸」

と呟いた。

次の瞬間。

ざあつ。

さざ波のような美しい音を立て、其は真の姿を顕にする。十字架状のシルバーネックレスはその形を無数の糸へと変化させ、僕の意のままに糾われる霊装と化す！

それがすんでのところでは振り下げられた男の凶刃に絡み付き、女性の前で停止せしめた。

「……現行犯逮捕だ。情状酌量の余地はないぜ」

男は振り返る。田舎の街灯ではいささか心許無いが、常人ではない僕にはその姿がはつきり視認できた。目は三白眼を通り越して完全に白目をむき、玉のような汗を流しつつ荒い吐息を繰り返すばかりだ。

「言葉を理解できるかどうかは分からないが、一応忠告だけはしておく。抵抗するだけ無駄だぜ。一度僕の“ルシフェラーゼ”に捕らえられたらちよつとやそつとじゃ逃げられない」

「……もう何言ってるのか分からねえよ。完全に自我を失って暴走してやがる。」

そこで、僕の糸がするつと抜けた。男は右腕を刃物から元の腕に戻したのだ。おかげで物理的に収縮した腕は僕の糸の束縛から逃れた。

「……なるほど。ある程度の戦闘経験は積んでるってわけだ」

『トランス』は完全に標的を僕に切り替えたようだ。振り返って僕と対峙する。否。僕という存在が『標的』^{ターゲット}ではなく『敵』^{エネミー}であると認識したらしく、敵意はさっきまでの比ではない。

因みに被害者の女性はというと、張り詰めきっていた緊張が切れたらしく気を失っている。好都合だ。今ならまだアンタは“そつち側”にちゃんと戻れるから、安心しな。

男 『トランス』は、今度は出刃包丁から先の尖った“槍”へと変形させた。なるほど、考えたな。尖形の槍なら一度糸で絡め取

つてもするりと抜けてしまふ。確かにある程度の実戦経験は積んでいるようだ。

「突進してくる『トランス』。自我を喪失させている分、野性的な戦闘能力が増幅しているのか、その速度は常人のそれとは段違いだ。そのスピードを以て、槍と化した右腕を打突させてくる。」

しかし。“異能殺し”である綺羅衣翼の前にはそんなもの普通の人間と五十歩百歩もいいところだ。

僕はルシフェラーゼを繰り、一点に集中させた打突を難なく防衛する。

銀麗系ルシフェラーゼ。僕の唯一の武装であり、最強の兵器。一本一本がナノミリ以下の極微細な系。その総数たるや実に七千本。セラを籠めに籠めて僕専用^にに精製・作製されたそれは、僕のセラに呼応して自在に操ることができる。伸縮硬軟自在、射程距離は最少数センチから最長三百メートル。硬度は天然で最も硬いとされているダイヤモンドをも軽く凌駕する。一本でおよそ二トンを持ち上げることができ、セラを送り込むことによって、時にはありとあらゆる楯を両断する剣に。時にはありとあらゆる鎧を貫通する槍に。時にはありとあらゆる方向から襲撃する鞭に。時にはありとあらゆる攻撃を遮断する楯になる、頼れる僕の^{あいはつ}霊装だ。

ルシフェラーゼの名前の由来は、ホタルなどの生物発光における化学反応に必要な酵素からである。酵素のルシフェラーゼの命名は、かの有名な墮天使ルシフェルに由来する。それは基質特異性を持っていて、ある発光生物のそれはその生物のルシフェリンとしか反応しない。つまり、このルシフェラーゼを操ることのできる僕のルシフェリン（この場合はセラだが）のみだ。ルシフェラーゼを手足のように操れるのは、物理的にも能力的にもこの世でただ一人、僕だけというわけだ。

セラというのは、ナンバーズが持つ特殊な魔力の総称だ。名前の由来は、熾天使セラフィムから引用されている。熾天使セラフィム

と墮天使ルシフェルによるコラボレーションはまったく当て擦りも
いいところだが、それはさておく。

僕は防御したトランスの槍を右の踵で地面に叩き付け、更なる追
撃として左上段蹴りで無防備になったトランスを蹴り飛ばす。ある
程度の手加減はした。無論、普通の人間に概算六十キロの体重を持
つ人間を数メートルも吹き飛ばすことはできないのだろうが、綺羅
衣翼は普通の人間ではないから例外だ。今の僕は、オリンピックで
金メダルを獲ると小学校の運動会で一位を獲るのを容易く同列に
語れるくらいにずば抜けた身体能力を備えている。

ブロック塀に肩口から激突する『トランス』。その衝撃でヤツの
衣服が破ける。そして、その肩には『524』というナンバリング
が印されていた。

「五百番台か……。まったく、ちよろい仕事だぜ……。ふっ！」

体勢を立て直す隙すら与えず、ルシフェラーゼが四肢に絡み付き、
『トランス』は磔刑に処された罪人の如く壁に縫い付けられた。苦
悶の表情を浮かべつつも『トランス』は咄嗟に縛られた部位を刀身
に変形させ、脱出を試みる。……が。

「無駄だつて言ったろ。ルシフェラーゼの強度をなめないでもらお
う。生半可な刃物じゃ、傷一つ付けられない。」

「さあ」

ここから先が僕の本業だ。僕の 綺羅衣翼の能力を以て
。 「ナンバー524『トランス』。貴様を……消去する」
デリート

ばたつく『トランス』。蜘蛛の巣にかかったかのようなそれに僕
は接近し。

首筋に。右手をかけた。

能力を発動させる。セラが活性化して身体の芯が熱くなり、今こ
そ“異能殺し”の真髓が発揮される。

「あ、が、がつ……。っ」

『トランス』が苦しみとも快感ともつかない声で喘ぐ。徐々にヒト
としての生色が戻っていく『トランス』の顔。それに反比例するか

のようにその体内を駆け巡っていたセラが喪失されていく。

『エナジードレイン』。

それが僕、綺羅衣翼の能力だ。ナンバーズの能力を例外なく消去し、分解し、吸収する。それこそが綺羅衣翼を“異能殺し”と言わしめている所以である。

そして数瞬。ナンバー524『トランス』の能力は完全に消失した。と同時に《元》トランスは死んだように気を失った。

僕はルシフェラーゼを解き、普段のネックレス形態に戻す。あとは僕の仕事じゃない。ここまで暴走してしまったら通常の人間のような生活には戻れない。社会不適合者としてUN事務所の管轄下にしてしばらくの間、矯正生活を余儀なくされるだろう。

「と、その前に……」

気絶している被害者女性に近づく。とりあえず最悪の事態は免れたものの、人外めいた異形を一度でも目にしてしまった民間人を野放図にはしておけない。

『エナジードレイン』の応用、記憶削除。申し訳ないがここ数分間の悪夢めいた記憶はなかったことにしてもらおう。傷や衣類の欠損までは対処し知れないが……まあ、その辺りは意識を取り戻した後自分の都合がいいように解釈してもらえばいいか。

僕は近くの塀を背もたれにして女性をそっと座らせる。放置しておいても、こんな田舎では婦女暴行の危険性もないだろう。

これで任務終了。被害者は（ほぼ）なし、僅か数時間足らずのスピード解決だった。

ポケットから携帯電話を取り出し、着信履歴の一番上のダイヤルに発信する。

真夜中だということにもかかわらず、三コール目で相手は通話に出た。

『真田真正だ』

電話帳に登録してあるのだろうに、いつものことながら律儀にフルネームで着信に応じる所長。

僕は端的に言った。

「ミッションコンプリートだ」

*

話は二十年前に遡る。

日本政府が、年ごとに増加する凶悪犯罪・国際的大規模テロに対抗すべく、ある大プロジェクトを極秘裏に立ち上げた。

千人の子供達を集め、《人造的に特異能力を持つ新人類を産み出す》という、科学的プロジェクト。

『ナンバーズ・チルドレン計画』と呼ばれたそれは、世界中から集められた十三人の権威的科学家達によつて、地図にすら載っていない無人の秘島に巨大な研究所を建設して行われた。

そこで後天的に強力無比様々な特殊能力を授けられた子供達にはそれぞれ全身のいずかに特異者の証明としてのナンバーリングが振るわれ、能力を手に入れた少年少女はその研究所内で戦闘訓練を組み、学習プログラムを受け、ゆくゆくはこの世界の救世主たらんと育てられていった。

だがしかし、ある者は過剰な薬物投与によつて発狂死し、ある者は研究中に事故死し、またある者は性格や能力において不適合と判断され、産みの親である科学者達の手によつて処分された。結果として、成功被験体として完成されたのは全体の四割程度の人数ということになった。

しかしながら、その計画は完遂を目前にして頓挫することになる。いや、正確には破綻したというべきか。

後期に産み出されたある一人の子供が謀反を起こし、研究所とその孤島そのものを破壊したのだ。その事件は混迷を極め、大半の人間は島と運命を共にした。命から逃げるのびた数人の研究者達とナンバーズもいたが、混乱に乗じて逃亡したほとんどの子供達は教育不十分なまま世界中に散り散りになってしまった。

不慮の事故とはいえ、もとより極秘裏に行っていた研究である。政府は頭を抱えずにはいられなかった。結果論として異能力者を多く世界に送り出すことになってしまったのだ。それらの中には世間的常識に欠けている者もいることだろう。逆に強大な力に呑み込まれて暴走する者もいるかもしれない。もし本能の赴くままその力を振るえば一体どうなるか。救世主となるべく産み出された子供達が皮肉にも悪魔の子になってしまふ。この危険因子を放任しておくわけにはいかないのは明確だった。

そこに二人の科学者が決起した。『ナンバーズ・チルドレン計画』に携わって生き永らえた、十三人の博士のうちの二人だ。その二人が立ち上げたのが、UN計画。正式名称『アンチ・ナンバーズ計画』である。世界中に残されたナンバーズを説得し、教育し、それが不可能な場合は最悪、排除する。大袈裟でもなんでもなく、人類を救済する最後の手段であり陰の希望だった。

だが、何の策もなくナンバーズに対抗するのは無謀が過ぎる。あるいは力による抵抗も余儀なくされるであろう。ナンバーズという異能力者に対しては、軍隊一個小隊を投じても場合によっては心許無い。よって、計画を立ち上げた第一人者の二人（こういう呼び方が正しいかどうかはこの際無視する）の片割れ、奇羅衣博士きろいが、一つの存在を一から、正規のナンバーズとは違い、文字通り細胞の一つ一つから造り上げた。ナンバーズが後天的に授かった能力を悉く分解する能力『エナジードレイン』を先天的に授けられた人造人間。幾たびも失敗をし、失敗の上に失敗を重ねて、今から六年前にようやく成功し誕生した存在、“アウト・オブ・ナンバー”。絶倫した身体能力を持ち、それを活かすため血反吐を吐くような過酷な戦闘訓練を受け、かつ暴走を防ぐべく人道的な英才教育を授かり、この世でたった一人、世界を『たすける』という意図を持って産み出された存在。

それが誰であろう。この僕　　綺羅衣翼だ。

「……ちっ」

目覚めは最悪の部類だった。

よりもよって昔の夢を見るなんて……。

元トランスを事務所の局員に引き渡し、報酬を受け取って、自宅に帰ってきたのが午前二時過ぎ。シャワーを浴びてさっぱりした後、すぐに僕は横になった。眠りはすぐに訪れたが、代わりに厭な夢を見てしまったようだ。

尚、僕の家は1Kの小さなアパートの一室だ。ここは所長が宛がってくれた部屋で、『学生の一人暮らしはこれくらいが妥当だろう』という意見だった。僕も特に不満があつたわけでもなく、寝る場所と風呂とトイレがあつたのでそれで十分だった。

一応戸籍上では、所長が僕の保護責任者ということになっている。まあ、これも妥当なところだろう。変にアパートの管理人とかに怪しまれても面白くないので、僕はあくまで世間的には『わけあつて両親がおらず、一人暮らしをしている高校三年生の男の子』という設定で通っている。

そんなことよりも、寝汗で服が張り付いて気持ち悪い。夏の暑さだけではない、どちらかというを見た夢のせいだ。

「……もっかいシャワー浴びよ……」

幸いにして時間はまだ早い。学校に行くまでにはまだ十分時間があつた。その後は朝食にしよう。昨日（正確には今日の深夜）の報酬のおかげで当面は懐が温かい。少し豪勢にいくとするか。

そんなこんなな、ちよつと変わったフツの日常。

綺羅衣翼、六歳の日常だった。

Episode 1: TRANS - end

1・「ちょっと変わったフツの日常」救世主編（後書き）

序盤の導入部分です。ぶっちゃけると、Episode 1に関しては、自然な流れでの説明的な内容だったりします。でも、ラストにちよろつと出てくる……かも？ これからどうぞ宜しくお願いします。

2 - 1 ・クラスメイトの問題児「かぐや姫が、その実」(前書き)

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・半角の（ ） で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・全角の（ ） で書かれている部分は主人公の情景補足
- ・《 》 で書かれている部分は傍点(強調)

2-1・クラスメイトの問題児「かぐや姫が、その実」

*

事の発端は七月十七日火曜日（つまりはトランスの事件を片付けた直後なのだが）。夏休みを目前に控えたある日の相楽森学園高等部三年B組。半ば消化試験的な感が否めない一時限目が終わり、十分という短い休み時間の間に遅刻組もあらかた揃って、これまた二時限目授業という名の消化試験が始まって二十分くらいが経過した頃、教室後ろの扉がガラリと大きな音を立てて開いたのが始まりだった。

「すみません。遅刻しました」

堂々とそう宣言して輝夜^{かぐやひめ}緋姫が入室してきた。

遅刻しておいて堂々と放言する生徒もアレだが、話があの輝夜となると話は別だ。一瞬ざわついたクラスメイトも「なんだ、輝夜か」と納得し、教師も慣れたもので「以後気をつける」と言ったただけ特に注意はしなかった。

輝夜緋姫。僕はあまり彼女のことを知らないが、二年の時から同じクラスなので彼女が特徴的な問題児だということくらいは知っている。

まず、『かぐやひめ』という名前だけで注目を浴びる。そのうち突然月に帰ってしまうのではないだろうかという懸念を抱かせる冗談みたいな名前だ。

次に、外見の特徴が挙げられる。女子にしては高い身長（多分170cm弱だろう）に整った顔立ち。音葉も美人だが、それとはまた違った感じのフェロモンを感じさせる大人びた美貌。強気な目に白磁のような滑やかな肌。スタイルも非常に良く、出るところは出て引き締まるところは引き締まっている。この町ではキャッチャースカウトとかの類は目にしないが、都会を少し歩けばすぐにモデルの勧誘がかかりそうだ。そして何より特徴的なのが、髪の色。見目鮮

やかな緋カラークリムゾンのロングヘアを腰くらいまで無造作に垂らしている。この学園は、特に頭髪を染めてはいけないという学則はないし、実際茶髪に染めている生徒くらいはちらほら見られるのだが、流石に赤というエキセントリックな色は彼女を置いて他にいない。本人曰く、染めているのではなく地毛、だそうだが真偽のほどは定かではない。

他にもまだある。彼女は夏だろうがなんだろうが、常に服が長袖なのだ。我が校は私服登校が認められているので違反ではないが、四季を通して一貫して長袖ブラウスにロングスカートなのだ。ポリシーがあるのかなんのかは知らないが、少なくとも僕は彼女の半袖姿を見たことがない。

あと変わったことに、日傘を常備している。皮膚が弱いのかどうしてかは知らないが、とにかく外に出る時は日傘を持ち歩いているのだ。加えて言うなら、屋外での体育は全て見学か欠席である。

更に、意識してかしないかで、彼女はとにかく他人と接することを拒む。休み時間もいつだって一人きり。誰かに話しかけたり話しかけられたりしているのは見たことがない。そんな輝夜だから、委員会などで誰かとグループを組む時も常に最後まで残る。本人も最後に残ったグループに嫌々参加しているのが丸分かりなので、そのグループにとってはモチベーションダウンにしかない。僕だって友達と呼べるような友達は音葉くらいしかいないが、学園生活に必要な不可欠な日常会話や社交辞令くらいはクラスメイトと交わしたりする。

そして　これが彼女が教員達から疎まれていた最大の原因なのだが　遅刻早退が異様に多く（欠席だけはしない）、関係ない僕でも単位が心配になってくる。しかも、定期テストに至っては全科毎回毎回赤点ギリギリなのだ。しかも、狙って危うい点数をとっている節がある。というのも、一年と三ヶ月の間一緒のクラスである僕でも、輝夜が授業中に教師から問題を出された時に答えられなかったのを見たことがない。どこからか流れてきた噂によると、テ

ストでもわざと難しい問題ばかり解いてそれが悉く正解、にもかかわらず簡単な問題は敢えて空欄にしたりあからさまな誤答を書いたりして赤点ギリギリを狙っている、とのことだ。

とまあ、全くと言っていいほど会話をしたことがない僕でさえこれだけのことを知っている。それだけ色んな意味で有名なのが輝夜緋姫という女生徒だった。今回のように授業中に恥ずかしげもなく闖入してくるのは珍しくもないことなのだった。

*

「輝夜さん、今日も遅刻だね」

昼休み。音葉と昼食を食べていると（僕には友達がないので昼は一人か彼女と一緒に。こういうところが周囲に誤解されがちな主な原因である）、世間話のように彼女が切り出した。

「ああ、別段珍しいことでもないだよ」

僕は総菜パンを咀嚼しながら応えた。

「クラス委員長としてほっとけないのは分かるけどな。いくら言っても暖簾に腕押し、糠に釘だぜ、ありゃあ」

いくら人望があり成績が良いからといって、結局のところ音葉は一委員長でしかないのだ。音葉が言って更生するなら、とつくに教員達が放っておかないだろう。

「うん、そうなんだけどね……。昔はそんなことなかったのになあ……」

「あん？ お前、輝夜のこと昔から知ってるのか？」

「え？ ああ、うん。小学校中学校とも同じだよ」

言っただけだった？ とばかりに言う音葉。それは初耳だ。

「日傘は昔から差していたんだけどね。中学の時は成績も良くて遅刻も早退もほとんどなかったよ。まあ、体育の授業が見学続きだったのは今と同じだけれど。性格も、控え目だけれど明るくて、私は好きだったな」

僕は何分産まれてこの方六年しか経っていないので、学校という

ものに通うのはこの相楽森学園がはじめてだ。だが、音葉の通っていた中学校は地元では有名な進学校だったはず。その彼女をして『成績が良い』と言わしめるのだから、結構な学力を誇っていたことは想像に難くない。

余談だが、僕は彼女達が中学校で勉強を教わっている間、研究所で戦闘方法を教わっている真つ最中だった。まあ、その合間で勉強も教わっていたからそれなりの学力を誇る。

「でも……」

と、ふと音葉の顔が曇る。かと思えば「ごめん、なんでもないと誤魔化すように作り笑いを浮かべた。

「なんだよ、気になるな」

「うん……あんまり人に言うことじゃないから。ん、でも、綺羅衣君になら言ってもいいかな」

そう言っつて小さくちよいちよいと手招きをする。『お耳を拝借』と言っているようだ。

僕は言われた通り耳を寄せる。音葉の息が耳にかかってくすぐったい。

「実はね、中学を卒業した直後くらいに……輝夜さんのご両親、失踪してるんだって」

「失踪？」

「うん。理由も前触れもなく、突然いなくなっちゃったんだって。搜索届を出してはいるようだけど、まだ見つかってないんだって。

多分、それがショックで輝夜さん、塞ぎ込んだんじゃないかな」

年頃の娘を残して失踪、か。穏やかじゃないな。そう考えれば今のひねた性格に合点がいかないでもない。

「おんなじ高校に入学したのは本当に偶然だったんだけどさ。私も高校に入学して聞かされてびっくりしたよ。輝夜さんの生活態度の変わり様にもね。支えになってあげたくて何度も声かけているんだけど、どれも呆気なく撃沈」

そう言っておどけたように肩を竦める音葉。でもどうやらまだ諦めてはいないらしい。

「とことんおひとよしだな、お前は」

「そんなことないよ。私はただ友達の力になってあげただけ」

そういうところがおひとよしなんだ、とツッコミを入れたくなつたが敢えて言わなかった。そういうところが音葉のいいところであり、彼女という人格を形成している根底の部分なのだ。

「このことはくれぐれも他言無用だからね」

「分かってるよ」

そもそも僕にはクラスメイトのそんなへヴィな内容を話すような相手がいない。

そんな内容の会話をしてしまったせいか、それからは無言で食事を続けた。二人の間に流れるどこか重苦しい雰囲気。

「ごちそうさま」

音葉が小ぶりで女の子らしい弁当箱に蓋をし、両手を合わせてそう言った。僕はパンなのでとくに食べ終えている。

「ん。それじゃ、また後でな」

「うん。午後の授業、寝てちゃダメだよ？」

最後に委員長らしく一言釘を刺して、何となく気まずい昼休みは終わりを告げた。

まもなく五時限目の担当教師が入ってくるが、輝夜の席は空席のまままだ。日直の号令によって開始されても、その席が埋まることはなく。

結局。午後の授業に、輝夜緋姫が顔を出すことは最後までなかった。

*

週末の二十日金曜日。今日で一学期が終わりになる。長い夏休みが始まるのは、僕にとって嬉しくも残念でもない。もともと、学校に通っている理由は特にない。単なる知的好奇心で通い始めた高校

で、二年以上通学している今でも、友達らしい友達は音葉くらいしかいない。まあ、音葉が通常の友人百人分くらいに匹敵するので釣り合いは取れているっちゃ取れてるが。

さて、相変わらず終業式の長々とした学園長の訓示を聞かされ（僕は三年間しか経験していないが、普通の人はこれに十二年間耐えてきたのか。そう思うと少し尊敬する）、クラスでもちょっとした担任の話があり、今日の、そして一学期の授業は全て終わったということになる。

僕はちよつと小腹が空いたので、購買までパンを買いに行くことにした。流石に終業式にまで生徒が殺到することもなく、珍しく貴重な総菜パンが買えたのは、ちよつとした僥倖である。

その、教室までの帰り道。

（あ……）

階段の上から輝夜緋姫が降りてきた。服装は相変わらずの長袖ブラウス、くるぶしまであるロングスカートにニーソックスである。右手に鞆、左手に日傘を携えて凜と背筋を伸ばして歩いている。

こういう時に普通のクラスメイトなら別れの挨拶くらいするのだろうが、相手が輝夜となると話が違ってくる。だが、音葉に言われたからというわけではないが、たまには少し気さくに声くらいかけてみるもいいかもしれない。それでもなんだか声をかけづらい気配を纏っているし、変に因縁をつけられるのも面白くないのでやはりやめておいた方がいいだろうか。

などと考えているうちに、輝夜は僕の葛藤のことなど露知らず（存在を視認しているかどうかすら怪しい）、僕の数段上にまで降りてきている。まあ今日はそういう巡り合いなのだろう、と、僕はそのまま通り過ぎるものだと思っていた。

と。輝夜が段差を一步降りた瞬間。

「あ」

「っ」

一瞬の出来事だった。

何が起きたか一瞬では分からなかった。

気が付けば、僕の腕の中に輝夜が収まっていた。

輝夜が一段降りた時、彼女が突然体勢を崩したのだ。鞆から手を放し咄嗟に手すりに手を伸ばそうとしたが届かず、結果的に落下することになった。まさかわざと避けるわけにもいかず、僕は咄嗟にパンを手放して彼女の身体を受け止めていたというわけである。いくらある程度封印してあるとはいえ、僕の腕力は普通の男子よりも遙かに高く、女子一人の体重を受け止めるくらいは容易かった。思った以上に軽い。温かく、そして柔らかい。手放した鞆が階下に転がり落ちる。

しかし、終わってから考えるとなんだか不自然な落ち方だった。足をもつれさせたというわけではない。足を段差に付けた刹那、何かの発作でも起きたかのように彼女の膝から力が抜けたのだ。発作というのは言い得て妙かもしれない。事実、今僕の腕の中にいる輝夜は吐息が荒く、心なしか身体は熱を帯びているようだった。左手に握っていた日傘を杖代わりに、ほとんどの体重を僕に預けている。とにかく、一瞬の出来事だったのだ。

「……つと。危ねえな、だいじょう」

その瞬間。僕の中で何かがざわめいた。

「」

「はあっ……、はっ、は……。……綺羅衣、君？」

切れ切れの声で輝夜が呟いた。意外だ、僕の顔と名前を覚えていたのか。その時はそんなことは考えもつかなかった。

その言葉で、僕は我に返る。

「あ、ああ。大丈夫か？ 立てるか？」

「え、ええ。大丈夫。ありがとう」

そう言っつてそつと離れる。まだ若干足許が覚束ないが、しっかりと立っている。

でも、今は、一体。

「ごめんなさい。私、急ぐから」

そう言い残して、輝夜は言った通り急いで階段を駆け下りていった。靴を取り上げ小走りで逃げるように去っていった。僕の腕の中には、まだ輝夜の温もりと柔らかさが残っている。

全ては、本当に一瞬の出来事だったのだ。

なのに。

(輝夜を抱き止めた瞬間)

僕はどうして、《彼女からセラの波動を感じたんだ》

？

*

…… 釈然としない気分のまま家に帰ってきた。

あの後、食欲はすっかり失せ、せつかく買ったレア総菜パンは食べる気になれず靴の中に詰め込んだまま放置されている。季節柄、早く処分しなければならぬのは分かっているが、どうしても食べる気が湧いてこないのだ。

原因は決まっている。別れ際の輝夜のことだ。

(あの感覚)

僕の勘違いでなければ、あれは確かにセラだった。だとすると、輝夜は……。

(いや……)

曲がりなりに、いくら親しくないとはいえ、二年以上同じ学校に通い、うち半分以上は同じクラスだった人物だ。僕が今まで気付かないはずがない。事務所の探索網にも引っかからなかった。彼女が《そう》であるはずがない。

それでも、感じた確かなセラ。一瞬の出来事だったが、紛れようもない異能力者特有の魔力の名残。

紛れようもない、はずなのだが……。

「ああ、くそ……」

さっきからもやもやしてしょうがない。ショット(ショット・G・

スカイハイ。同僚である）じゃないが、卵が先かひよこが先か、みたいな答えの出ない禅問答を延々と頭の中で繰り返している。

帰り着くや否や、僕は着替えもせず寝転がっていた。で。今はもう夜である。終業式は午前中で終わったので、残照を通り越して月が輝いている時間だ。

昼から寝転がったままなので、当然カーテンは開けっ放しだ。外を見やると、空に煌々と満月が輝いていた。周りに雲は一切なく、文句の付けようのない快晴と言っていていいだろう。

月夜というものは、人間から見れば綺麗な月見日和なのかもしれないが、妖しの存在にとっては魔力が最も満ちる刻だと言われている。そう考えると、あの丸い星がなんだか不気味に見えてくる。

「かぐや、ひめ」

かぐや姫は、竹から産まれてあそこへ帰っていったんだよね……。そんな詮無いことをふと思いついた。

「自宅でクラスメイトの名前を呟く野郎って、客観視してどうなんだよ……」

これじゃあまるで、僕が輝夜にぞっこんな痛い奴みたいじゃないか。

「……よし」

自分で自分にツッコミを入れるだけの余裕は出てきた。あんまり深く考えるのはやめよう。うん。

とりあえずメシでも食うか。そう思った途端、ポケットの中でバイブレーションが着信を告げた。

嫌な予感。

ディスプレイには、『所長』の二文字と十一桁の数字の羅列。嫌な予感は募る。

「はい」

『翼。今動けるか？』

いつもの端的でも結論だけでもなかった。彼らしからぬ第一声。嫌な予感ますます募っていく。

『緊急事態だ。私としたことがとんだ迂闊だ。千慮の一失とはまさにこのことだ。弘法にも筆の誤り、河童の川流れとはまったく今の私を指しているようだ。先達は実に訓戒に満ちた名言を残したものだ』

「とりあえず落ち着け所長。いつもの悪癖が一層出てる」

このままだと一時間くらい諺で自虐を続けそうなのでツッコんで制する。コイツがここまでテンパるところは見るのも聞くのもはじめてだ、それだけでもかなりの異常事態が発生したということは十分に了解した。

「ナンバースだな？ いくつだ？」

『ああ。ちよつと待て』

電話越しに数回呼吸する気配があつた。

『ああ。とにかく緊急事態だ。』

今回のターゲットは 『

嫌な予感は一際増幅していく。

まったく。

『……ファースト
第一期ナンバース。……ナンバー？だ』

嫌な予感ほどの中するものだ。

*

通常のナンバースは、身体のどこかに数字で刺青が刻まれている。しかし第一期、一番から十番のことはとりわけ“ファーストナンバース”と呼び、刺青は普通の数字ではなくローマ数字で刻印が入っているらしい。

らしい、というのは僕自身それを見たことがないからだ。ファーストナンバースはプロジェクト開始直後だったため、強大な力を制御し切れない等の不安定要素が多く、完成体として育てられたのはたったの二人だけだという。

そのファーストナンバーズのうちの一人　ナンバー？が、ある
うことかこの町に潜んでいるのだという。

『ファーストナンバーズはセラの波長も安定していない。私達も現
状では完全に察知できないのだ』

とは所長の談。

『この町にいることは断定できたが、どんな能力かなどは一切分か
っていない。細心の注意を払って迅速に対処してくれ』

セラが安定していない　つまり、危険度が高い。

僕はかすかに感じるセラの残滓を辿って　小さな確信も手伝っ

て　ある建物を訪れていた。

あおやなぎ
青柳荘。

僕が住んでいるアパートもかなりボロかったが、ここは更に酷い。
木造二階建て。エレベーターなどという文明の利器とは程遠い、階
段を一段昇る度に錆びついた足場がギシギシと音を立てて恐怖心を
そそる。下手をすれば震度三の地震でも倒壊してしまいそうなオン
ボロアパートだった。

203号室。間違いない。この室内からセラが発せられている。

僕は音を立てないようにドアノブに手をかける。鍵がかかっ
た。今の僕なら鍵を破壊することはおろか扉ごとぶち破ることも可
能だが、今はとにかく慎重に慎重を期さねばならない。

つくづく思うことだが、こういう時には僕の霊装ルシフェラーゼ
は非常に便利だ。ピッキングも可能だし、一ミリでも扉に隙間があ
ればそこから糸を伸ばして遠隔操作して内側から解錠することも可
能である。僕は逡巡した後、後者を選んだ。こちらの方が手間がか
からないし、音も殺せる。

室内に滑り込むようにして入る。

電気は点いていなかった。カーテンは閉まっておらず、光源は窓
から差し込む満月の灯のみ。ただ、何か音が聞こえる。

じゅる、じゅる、と。何かを嚙るような音。

ごりゅ、ごりゅ、と。硬い砂肝を噛み千切るような音。

ぐしゅ、ぐしゅ、と。泣いている子供が鼻をかむような音。

光源は窓から差し込む淡い月光のみ。ただ、たとえそれがなくとも、僕の目には見えていた。部屋の中央に、膝座りをして蹲る

《緋色の髪をした少女が》。

じゅるじゅる。ごりゅごりゅ。ぐしゅぐしゅ。

ごりゅごりゅ。ぐしゅぐしゅ。じゅるじゅる。

ぐしゅぐしゅ。じゅるじゅる。ごりゅごりゅ。

少女はまだ、僕の侵入に気付いていなかった。

ただ。

一心不乱に。

泣きながら。

《血を吸っていた》。

自分の左腕に噛みついて。

《自分の腕を喰っていた》。

まったく、笑えないにも程がある。

「……輝夜」

「え……？」

少女は名を呼ばれてようやく気が付いたようで、俯いていた顔を上げる。

真っ赤な目許は涙に泣き腫れて。

真っ赤な口許は血にまみれていた。

「きらえ……くん？」

《かぐや姫が、その実、吸血鬼だったなんて》

これが。

綺羅衣翼と輝夜緋姫の、本当の意味での邂逅だった。

To be continued...

2-1・クラスメイトの問題児「かぐや姫が、その実」(後書き)

リニューアル後の読者の方のために解説します。第一章で音葉が出てきましたが、当作品のヒロインは彼女ではなくこの章で登場する輝夜緋姫です。現時点では見せ場がありませんが、すぐに馬脚を現しますので、お待ち下さい。

2 - 2 ・輝夜緋姫「だから僕はお前の味方だ」(前書き)

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・半角の（ ）で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・全角の（ ）で書かれている部分は主人公の情景補足
- ・《 》で書かれている部分は傍点(強調)

2-2・輝夜緋姫「だから僕はお前の味方だ」

＊
物心ついた時には、施設にいたわ。

当時の私は何も知らなかった。知っていたのは自分の名前、『緋^め姫』という自分の名前だけだった。もともと、当時は『緋』も『姫』も難しかったから書けなかったけれど。あとは何も 本当に何も知らなかった。

施設にいたのは、私と近い年くらいの子供達が大勢、それに、数人の“マザー”達だけだった。そこが、私のような『身寄りのいない子供達を預かる施設』だと悟るのに、そう時間はかからなかったわ。

そんな中で、私はとりわけ浮いていたの。子供からも大人からも、奇異の目で見られていた。

だってそうでしょう？

最初っから、『髪の色が真っ赤だった』んだもの。

特に子供達からは気味悪がられていたわね。仲間の輪の中に入れてもらうことすらできなかった。声をかけられたかどうかも、今となっては覚えていないわ。あるいは、率先して独りでいるのを選択したのかもしれないわね。読書が好きで、施設にあつた蔵書は、童話から辞典に至るまで、ほとんど全て網羅したわ。

読書が好きだった、というのには少し語弊があるかしら。正確には、外で遊ぶことが嫌いだったの。

日差しが。

太陽の光が。

痛かったのよ。

光に照らされた皮膚だけが、燃えるように痛くて火傷したように赤くなっていたの。医師に診てもらっても結局は原因不明。極端な皮膚アレルギーだろうとしか診断されなかった。半ば匙投げ感が否

めかなくなったのは今でも覚えているわ。……それからね、日傘を常備するようになったのは。子供ながらにナイスアイデアだったんじゃないかしら。長袖を一年中着るようになったのは、日傘の後。最初は暑くて我慢できなかったけれど、太陽に焼かれるよりはよっぽどマシだった。

その施設には、毎日のように大人達が訪れていた。ほとんどが夫婦だった。その大人達が来るたび、子供ははしゃいで我先にと足許に寄っていったけれど、私はずっと少し離れた場所で傍観しているだけだった。そうして大人達に連れられて施設を出ていった子達を、何度も見てきた。

けれど、その大人達は一人として私に見向きもしなかった。いえ、正確に言うのなら注目はされていたのでしょうね。悪い意味で、だけど。

赤い髪、無愛想な顔、特異な体質。

まるで虫けらを見るような蔑視を注がれていたのを子供ながらに敏感に感じ取ってはいた。

そんな私だから、里親なんていつまで経っても見つからない。マザー達は八方手を尽くして引き取り手を探してはいたようだけれど、大半は諦めが多かったでしょうね。『私などという邪魔者を体よく引き取ってくれる大人なんてそうそういるはずがない』、と。今にして思えば滑稽だわ。結局のところ、マザー達も所謂世間体を気にしていたに過ぎないのよ。

三年が過ぎて、そろそろ小学生に入らなければいけない歳になった。その頃は既に私は子供の中で最年長で、それでも結局引き取り手は現れず、次から次へと新しく連れて来られる後輩が先に施設を出ていくのを見送り続けていた。

マザー達はさぞや困ったことでしょうね。六歳にもなった女の子を学校にも通わせず放置しておくわけにはいかない。最終的には、マザー達同士での押し付け合いみたいになったわ。「あなたが連れられていきなさい」「あの子を長く見ていたのはそっちでしょう」「あれ

で隠しているつもりだったのかしら？ 寝かしつけられた後に毎晩のように談義される声を、私はひどく冷めた感じで聴いていたわ。そんな私のことを、なんと呼ぶのかと考えて、ああ、これが、という単語を思いついたわ。

不様。

ふふ、およそ六歳児が考える言葉とは思えないわよね。童話の中のお姫様は、いつだって幸せになった。でも、私は幸せにはならなかった。不幸せとも思わなかった。本当に、不様だわ。

あれは……とても寒い冬の日の出来事だった。ある老夫妻が施設にやって来たの。輝夜^{かくや}、という変わった苗字だった。子宝に恵まれなかったんですって。勿論、当時の私にはさっぱり意味が分からなかったけれど。

どうせまた、誰かが連れて行かれるんだろう。子供達は輝夜夫妻の周りに我先にと集まっていたけれど、私はいつものように、ただ遠巻きに眺めているだけだった。

でもその時、ふと目が合ったの。私は逸らそうとした。なのにできなかった。その二人の四つの瞳には今まで感じてきたそれとは、全く異なる感情が含まれていると不意に直感したの。

畏怖でもなく。

憐憫でもなく。

軽蔑でもなく。

とても温かな 温情だった。

『うちに……来ない？』

いつの間にか、輝夜夫妻は私の許へと歩み寄って来ていた。女性は膝を屈めて、私と同じ目線でそう言ったの。垂れ目がちな、聖母のような目を細めて。

『綺麗な髪の毛じゃないか』

男性は、私の頭をくしゃ、と撫でてくれた。武骨で大きい、とても温かな掌だったのを今でも忘れられない。

『え、あ、う……』

頭を撫でられるなんていう経験はこれからはじめてだった。私はどうしていいのか分からず、ただ例えようのないくすぐったさだけを享受していた。

『お名前は？』

女性が尋ねたわ。私は咄嗟のことにどう対応していいのか分からなかったけど結局。。

『…………ひめ』

と、声と勇気を振り絞って答えた。それを聞いた女性は上品に笑って『いいお名前ね』と微笑んだ。そして。

『緋姫ちゃん。うちにいらっしやいな。今日から貴女は輝夜緋姫よ。ほおら、とつてもいいお名前』

その言葉を聞いて。。

私は泣いた。

ただただ…………号泣した。

あれだけ大人ぶって、無愛想で、小生意気だった緋姫はどこにもおらず、そこにいたのは嗚咽を隠すこともなく泣き喚くだけの女の子だった。

寒い冬に、ふと差し込んできた暖かな日差し。

でもその日差しは 痛くなかった。

ただ 温かく 愛おしかった。

その日から、私は『輝夜緋姫』という名前を得たの。

そうして私は輝夜家の養子ということになったのだけれど…………あまりに歳の離れた養父母を“お父さん”“お母さん”と呼ぶ気にはなれず、“おじいちゃん”“おばあちゃん”と呼ぶことにしたの。生活に困ったことはないわ。おじいちゃんは長年やってきたサラリーマンを定年退職した後だったし、おばあちゃんはずっと専業主婦で、年金生活で衣食住を静かに賄っているだけだった。特に目立った財産があつたわけでもなく、ただ二人きりで暮らすのが寂しいから養子を求めたんですって。

学校には問題なく通えたわ。読書 亜流の英才教育の賜物か、成績は良かったし。不安だったのは保健体育の授業だったけれど、そこはおばあちゃんが先生とうまく掛け合ってくれて、屋外での授業は全て見学で構わないという特例措置が下ったの。

小学校を卒業して、制服の指定がない私立の中学校に通わせてもらった。ずっと日傘は手放せなくて荷物になるのが少しばかり煩わしかったけど。

今にして思えば、なんて平和で幸福な九年間だったろうと思う。おじいちゃんと、おばあちゃんと、私。特殊な家庭で育った特殊な体質の持ち主だったけれど、それを補って余りあるくらいに溢れんばかりの愛情を、二人は私に注いでくれたの。

でもある日。秋が深まり、中三も終盤に差し掛かったある日のこと。いつものように体育の授業をしていた時のこと。

その時、女子はソフトボールをやっていて、私はいつものように日傘をさしてベンチからクラスメイトを見ていたのだけれど。白球が打ち上がって三塁ランナーがホームにヘッドスライディングした時のことよ。よくまあ学校の授業程度でそこまで白熱できるものだ、私は感心していたのだけど、ホームインした女子が勢い余って膝を擦り剥いてしまったの。皮が剥け、鮮血が滲んでいたわ。その子はすぐに保健室に連れて行かれて何事もなく終わった。ただそれだけ。

でも。私は。その血を見た瞬間、こう思ったの 思ってしまったの。

《ああ、美味しそうだな》と。

視界が赤一色に染まった。気を失ったことにすら気付かなかった。目を覚ましたのは保健室のベッドの上だった。心臓が激しく脈を打っていた。暑くもないのに額や背中から滲み出る汗が止まらなかった。ただ猛烈に《喉が渴いていた》。

その日はそのまま早退したわ。家に帰り着くや否や大量に水を飲んで、それでも一向に喉の渇きはなくならなかった。

私は訝しがるおじいちゃんおばあちゃんを気にかける余裕もなく部屋に戻って、机の引出しにしまっていたカッターナイフを手にとって。

徐に。自分の手首を切ったの。

どうしてそんな衝動に駆られたのか、今でも分からない。ただその時はそうする以外頭の中に選択肢がなくて。

ひたすらに 溢れ出る血を啜った。

これが、とにかく美味しかった。筆舌にはとても尽くし難い。それまでの私が一番好きだった飲み物は青森県産100%生搾り林檐ジュースだったのだけれど、そんなものは足許にも及ばないくらいに、かつて味わったことのない濃厚で甘美な味だった。

でも、次の瞬間に、その傷は癒えていた。手加減などしなかった、かなり深く切ったはずだったのに、その傷は痕も残らずに消えていた。何度も試した。切っては血を飲み、しかしあつという間にその傷はなくなり、また切って血を飲んで、癒えて。

ぞっとした。今まで自分の体質に疑問を抱かなかったわけじゃない。異常に太陽光に弱い身体。血を求める赤い衝動。傷ついてもすぐに癒える再生能力。

これじゃあ、まるで。

『きゆう、けつ、き』

震える喉から発せられた、しわがれた一言。私は枕に顔を埋めて絶叫した。

……衝動は日に日に強くなっていった。次に手首を切ったのは一週間後、その次はその五日後、更に次は二日後。そして。

私は毎日血を欲するようになっていた。夜が来ては血を飲み、眠れぬまま朝を迎え、日傘をさしての登下校、そして月が昇る頃にはまた血を。いつしか私はカッターナイフを用いず、腕にむしやぶりつくようにして噛み付き、その腕の肉ごと血を啜っていた。

おじいちゃんとおばあちゃんも心配してくれていたけど、幸か不

幸か中学卒業間際だったので、受験ノイローゼということで誤魔化せた。

でも、自分の身体は誤魔化すことはできなかった。

《これじゃあ足りない》。

それは踏み越えてはいけない一線だと、私はずっと自らを律してきた。なんとか受験に合格し、相楽森学園に入学が決まった。そして、中学を卒業して数日が経った日の夜のこと。……今日と同じ、綺麗な満月の夜に。

私は。

おじいちゃんとおばあちゃんを。

育ての親を。

「 《喰ったのよ》 」

*

「自分でもはつきり覚えていない。寝静まったおじいちゃんとおばあちゃんの部屋を訪れ。血も、肉も、骨も。何も残さずに……喰らい尽くしたわ」

そう、輝夜緋姫は語った。

「本当に、文字通り何も残らなかったから、世間的には“失踪”という形になっているわ。今は遠くに住んでいるおじいちゃんの弟顔を見たこともないおじいさんに、最低限の生活費だけを仕送りしてもらっているの」

僕にとつて、これは想定外のパターンだった。“異能殺し”である綺羅衣翼きらえ たすくをして、セラを嗅ぎ取れなかった理由がようやく分かった。

《人と混ざり過ぎているのだ》。人間の放つ波動と、異能ナンバーズが放つ波動。それらが螺旋のように難解に絡み合っていて、ナンバーズ特有のセラだと判別できなかったのだ。

輝夜が自分の腕を喰っているところを目撃した後のことであ

る。とにかくファーストナンバーズを徒に刺激するわけにはいかない。僕は取るものも取り敢えず、興奮した輝夜を宥め、事情の説明を求めた。曲がりなりにも、今まで平穩無事に生きてきたクラスメイトの輝夜を問答無用で消去する^{デリート}ことなど僕にはできなかつた。

そうして訥々と、輝夜は自分の生い立ちを話し始めた。少なくとも、輝夜はこれまで一度も 養父母を除いて 他人に危害を加えたことはなかつたのだ。

ナンバー？『ヴァンパイア』。ファーストナンバーズの最後の一人の本性はしかし、あまりに人間過ぎた。話をしている間も 気付いているのかいないのか 彼女は涙を流し続けていたのだ。育ての親を力の暴走で殺めてしまったことを悔いているのだらう。他者を傷付けたくないという、ヒトとして当然の抑止力。それでも抑えきれなくなれば、彼女は自分自身を喰うことによって生き永らえていたのか。

僕はそつと視線を下ろす。輝夜が、さっきまで喰い付いていた左前腕のセンター辺り。そこにはくつきりと“？”の刻印が印されていた。十字型の傷と言えなくもないが、吸血鬼に十字架とは、いくらなんでもブラックジョークが過ぎる。

「……………綺羅衣君は」

ぼそ、と呟く輝夜。

「綺羅衣君は、吸血鬼退治の人なの？」

「え？」

「私を……………殺しに来たんじゃないの？」

その言葉に……………恐怖は感じられなかつた。まるで、既に死を甘受しているかのように。

「違う……………、僕は……………」

「違うの？ それにしては随分と大仰な銀の十字架を提げているよ
うだけれど？」

「だから違う！ 僕は……………」

「いいわよ。抵抗しないから。殺して頂戴。もう飽き飽きよ……………あ

あ、なんなら、殺す前に犯しておく？」

「なっ　！」

名案、とばかりにとんでもないことを口走る輝夜。

「私ね、それなりに魅力的な身体していると自負してるわよ。まだ処女だけど……、どうせ殺されるなら勿体ないから貴方にあげる。地獄にまで何かを持って行きたくない。殺される前に全部失ってしまいたい。それが　」

それが、贖罪だから　。

そう言わんばかりに、僕を見上げる輝夜。その目は既に色を失っているようにも見えた。

……『エナジードレイン』。

使えば輝夜は……吸血鬼ではなくなる。

でも、恐らく同時に　人間でもなくなる。

存在そのものが、消失する。

何も残らない。

虚無になる。

それは……人殺しとどこが違う　？

僕にその覚悟は　。

(翼。お前は　)

「　っ！」

ぱん！

「え……？」

乾いた音。不意に脳に蘇った言葉に、僕の手は知らずのうちに動いていた。

「……あ」

驚いたように顔を上げる輝夜。左の頬はくつきりと赤くなっていく。日差しを浴びてこなかったせいだろう、地肌が病的に白いので、その赤みは一層際立った。

そして……少なからず僕も驚いていた。

輝夜の頬を、平手打ちした僕も。

「っ……ふざけんなよ」

「綺羅衣、君？」

赤くなつた左頬にそろそろと手をやりつつ、心底怪訝そうに僕を見上げる輝夜。叩かれた衝撃よりも、叩かれたという事実^{タスク}に思考回路がついていっていないようだ。

「ふざけんなっ！ なに被害者面してんだ！ なにが殺されたい、だよ！ 甘えんな！ 僕はそんなことしないね！ ああしないとモ！ 誰が人殺しなんかするもんか！ 死にたいなら一人で勝手に死にやがれー！」

知らず、激昂していた。口が勝手に……動く。

「いいか、よく聴け輝夜。お前は吸血鬼なんかじゃない。お前は

」

お前は……。

そこで、言葉に詰まる。

お前は……なんだよ。

おいこら。

何黙つてるんだ僕の口。

勝手に動き出して勝手に止まんな。

だからといって……何を話せばいい？

輝夜のそれはなんだ？ 『ナンバーズ・チルドレン計画』？ ナンバー？ 『ヴァンパイア』？ 僕のこと？ アンチ・ナンバーズ？ 『エナジードレイン』？ アウト・オブ・ナンバー？

話したところで……何になる？

輝夜の何を……助けてやれるっていうんだ。
翼。

《あの人》につけられた、僕の名前。

僕の仕事であり、助く者^{タスク}。

だから僕は……。

「《お前は人間だ》」

そう。綺羅衣翼が紡ぐべき真言はその一葉只一つ。

「ッ!?」

電撃にでも撃たれたかのように反応を示す輝夜。僕は構わず続ける。

「お前は人間だよ輝夜緋姫。人間であろうとするうちは、どんなヤツだって人間だ。僕だって人間じゃないけど人間でありたいと思ってる。だから、そんな人間こそを綺羅衣翼は助けてやる。僕がお前を助けてやるよ。どんなに死にたがってようが、それこそ僕にや関係ないね。とことん大きな世話を焼いてやるさ。手を伸ばせば届く距離にいるヤツは、命を懸けてでも助ける。それが僕の矜持だ。お前なんかのために曲げてやるもんかよ」

「な、なにを言ってる……」

戸惑う輝夜。僕が何を言っているのか、心底理解できないのだから。

僕は自分の服の襟首を引っ張り、露出させる。

「ほら」

「えっ。……え……」

「吸えよ、血。これからは我慢しなくていい。僕がくれてやる。もう自分を責めなくていい。もう自分を虐げなくていい。もういつまでも過去に囚われなくていい。」

もう一度言うぞ輝夜緋姫。よく聴け。綺羅衣翼がこれからとびつきりかっこのいい台詞を言ってる」

そう前置きをして僕は息を吸い込む。そして。

「お前は人間だ！僕は人間の味方だ！だから僕はお前の味方だ！！ 天地が覆ろうがこの事実を覆らない！！」

僕は力強く言い切った。

「あ。」

輝夜は半ば放心状態でいたが。

すつと僕に手を伸ばし。

そつと僕の首筋に口を近付けて。

「ごめんなさい っ」

それは、誰に対する謝罪だったのか。それすら定かではないまま、輝夜は僕の首に齒を喰い込ませた。

「っ……………」

一瞬奔る鋭い痛み。だがそんなものが今はむしろ心地良い。

「……………っく、……………んっ……………、……………っんく」

嚙下の音に混ざって、嗚咽の声も響く。首筋に一滴、二滴、三滴と、いくつもの涙の粒が落ちる。

僕は不敵に笑って言い放った。

「……………ばーか。こういう時は『ありがとう』って言うもんなんだよ」
輝夜は僕の血を吸ったまま。

確かに、こくりと頷いた。

*

「『苦勞』」

僕は事務所に足を運んでいた。

あの後、輝夜は緊張の糸が切れたかのように眠りこけてしまい、とりあえず中間報告という形で所長に電話すると。

『直接会って話したい』

というのでここまでやってきたというわけだ。

「別に苦勞はしてないけどな。戦闘があつたわけでもないし、結果オーライなんじゃない？」

「吸血鬼に自分の血をくれてやった人間の台詞とは思えんな」

「はっ、違くない」

珍しく苦笑する所長。不謹慎ながら、僕もつられて笑ってしまつた。

「『ヴァンパイア』か……………。データ上では、ナンバー？は研究中に事故死したということになっているんだが……………。ファーストナン

「バーズの生き残りは二人だけ、という先入観に縛られて、私ともあ
るう者が柄でもなく焦ってしまった。まったく、文明化社会の盲点
だよ」

「? 事故死ってどーゆー意味さ」

「額面通りさ。端的に言ってしまうえば、隠蔽工作だ」

「見てみる、という風に手招きして、デスクのノートパソコンを指
し示す。僕はそれを覗き込んだ。」

『ナンバー10、能力不適合、二月十四日死亡』
とあった。

「ファーストナンバーズには、時の研究者達は躍起になって取り組
んでいたからな。政府に提出するのに、そんな当初の時点から失敗
作があったとなると困るだろう?」

「あー」

「なんとなく得心がいった。恐らく輝夜の場合、高いコストを払っ
て遺伝子操作研究を敢行したにもかかわらず《能力が発現しなかつ
たと誤解されたのだろう》。実際は造り出されてからおよそ十二年
後に『ヴァンパイア』が顕現するわけだが。一言で言うならば、《
潜伏期間が長すぎた》のだ。ウイルスに感染した人が、すぐには発
症しないように。」

「研究中の事故死と見せかけて、秘密裏に破棄したってことか」

「迷惑な話だがな。規模の違いこそあれ、飼っていたペットをそこ
らに捨てるようなものだ。無責任も甚だしい。……このことを奇羅
衣博士や真田博士が知っていたら、こんなことにはならなかったろ
うに」

「……………」

「ん? どうした翼。……ああすまない。ここで奇羅衣博士の名前
を出すのは不謹慎だったか」

「別に……………」

「確かに一瞬複雑な心境にはなったが……、まあ今更だろう。どち
らにせよ終わった話だ。思い返すのも馬鹿らしい。」

「ひとまず、ナンバー？に関しては当面は安寧と判断していいだろう。確かに人格と能力が混ざり合い過ぎているようだし、都合良く片方だけを残すのは無理そうだ。ある程度血を分け与えていけば、おいそれと暴走はせんだろうしな。お前のことだ、一度犠牲になった以上は放任もできないのだろう？」

「当たり前だつて」

刹那的な感情に任せて、輝夜に血を与えたわけじゃない。

それに、もしこれでもまだ輝夜が暴走するという最悪のケースだつて、あるいは考えられるのだ。その時は、今度こそ僕は“異能殺し”として容赦なく躊躇いなく、『ヴァンパイア』を消去するだろう。

でも。

「最悪のケースを引き起こさないよう、最善の努力をするよ」

今はそれが、綺羅衣翼の結論だ。

「ふん。お前らしい潔さだな。私はそういう実直さが嫌いじゃない。

……ほら」

ほら、と言つて手渡されたのは、銀色のアタッシュケースだった。机の脇にあつたから、さつきから気にはなつていたんだが……まさか。

「今回の報酬だ。今後お前がナンバー？に譲る手間賃の先行投資も含まれている」

「後者は僕が勝手にやったことだから必要ないんだが……」

パチン、パチンと留め金を二つ外して、中身を確認。

……福沢さん大家族だった。明らかに相楽森学園の生徒数よりも多い。

「……多すぎね？」

「なにしろファーストナンバーズ相手だったんだ。正当な報酬だよ」

「いやいやいやいやいや」

うわーい、今夜以降、僕ん家に忍び込んだ泥棒さんは大儲けだー。

まさかこんな寂れた町のあんなボロアパートに二千万もの大金があるなんて思いもしないだろう。

「ふむ。なら、私が今からする質問の回答に対する、私からの謝辞と受け取ってもらおう」

そう言つて。所長は唐突に声を低くして。

「翼。何故そこまで人を殺めるのを躊躇う」

「

「お前は危険因子を排除するために人によって造られた、言わば兵器だ。……どうしてその殺戮兵器が、《たかが少女一人》を消すのを躊躇う」

……卑怯だ。

さつきは不謹慎だ、とか言つておきながらここでその話を蒸し返すか。しかも回答料つき前払い。誤魔化しようがないじゃないか。

しかし所長は止まらない。

「《三年前の事件があったからか》？」

「

僕は胸に手を当てて逡巡する。

暫時。

「いや。それはない」

そう、僕は断言した。

「ただ、一つの事件を忘れるのに、三年は短すぎる。

……これじゃ不服か？」

「いや、十分だ。……任務ご苦労、綺羅衣翼。今はゆっくり休むといい」

「ふん……」

これ見よがしに業務報告を告げた所長に背を向け、僕は事務所を後にした。

三年は短すぎる。それだけのことだ。

携帯を開いて時刻を確認する。ちょうど零時を回ったところだった。今この時より夏期休暇である。

「やっ、と……」

とりあえず。

明日の朝一で、自宅の施設機能を強化してもらおうとしよう。

E p i s o d e 2 : V A M P I R E - e n d .

2 - 2 ・輝夜緋姫「だから僕はお前の味方だ」(後書き)

ひとまずは、これで無事に輝夜編は終了です。次回は番外編で彼女が再登場。思う存分暴れてもらいます。

2・5・番外その巻「綺羅衣翼がこれからとびつきりかっこ悪い台詞を言っ

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・半角の（ ）で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・全角の（ ）で書かれている部分は主人公の情景補足
- ・《 》で書かれている部分は傍点（強調）

*

事の発端は七月二十一日土曜日の、もう日付が変わろうかという短夜のこと。輝夜の件が片付いた翌日である。激しく連打されてけたたましく鳴り響く僕の家のインターホンが始まりだった。因みに僕は既に布団の中に入っとうとうとしていたところを叩き起こされた形になるので、現在すこぶる機嫌が悪い。ええい誰だこんな時間に。僕の安眠を邪魔するために放たれた刺客か。エクストラナンバー「アンチ・スリープ睡眠妨害」か。そんなナンバーズ聞いたことないぞ。というかそんな無駄に限定された能力を持った人間造るために立ち上がったわけじゃあないよなあ。『ナンバーズ・チルドレン計画』！？もしそれが真実だとしたら、僕はそんな下らない連中と戦うために造り出されたっということになるよなあ！？ 途方もない金と才能の浪費だよなあ！？

……などとそれこそ詮無いことを考えている間にも、インターホンは鳴り止まない。しつこいな……。だが！ ここで折れるのは何か負けた気分になる！ 悪徳セールスマンにとっては、扉は一度開けさせてしまえば九割方成功なのだ。悪徳商法に乗らない・負けなない・屈しない、それが綺羅衣翼です。というわけで僕は徹底無視のスタンスを貫こうと思う。

数分は経過しただろうか。ついにインターホンが鳴りやんだ。やった……やったぜ……僕はとうとうエクストラナンバー「アンチ・スリープ」を打ち破ったんだ……（架空の存在だが）。これで世界の平和は恒久的に約束され、僕の睡眠も約束された。……とはいっても、とつくに眠気なんて遙か彼方へ吹っ飛んでしまったわけだが。だがしかしである。僕はこの瞬間“残心”という概念の重要性を痛感する。

ガンガンガンガンガンガンガンガンガン！

くれているのだよ！ といつても実際に使ったのは一人だけである。無闇に金かけるとかえって怪しい。

僕が完全勝利を確信したその瞬間。 。
ばきいいいいいいいいいいいいいいいいいい！！

激しい音を立てて、《施錠された家の扉》がぶち抜かれた。

「……………」
「あーはいはいなるほどね。如何に頑丈に扉が施錠されていても《扉そのもの》はボロアパートのまんまだし。安物の素材で作られた一枚の板が蝶番二ヶ所だけで固定されてるだけだし。そこぶち抜けば確かに通れるよ。いやー、まったくどうして僕としたことがとんだ盲点だったなあ。折れたのは僕の心じゃなくて家の扉だったってわけかあ。こりゃ一本とられた。はっはっは。

「……………つてちよつと待てやコラアアア！！」

確かに安物の扉とは言つても普通の人間が貫ける強度じゃないぞ！ 車でも突っ込まないと無理だ！ やっぱり敵か！ 異能者か！ ナンバースか！ まさかのどんでん返し、アンチ・スリープは実在したー！！ 邀撃ようげき！ 邀撃ようげきいつ！！

と。僕のツツコミスキルが久々に炸裂したところで。

「こんばんは、綺羅衣君。一日ぶりね。お邪魔します」

そんな当たり障りのない発言をしつつ入ってきたのは、緋色の口ングヘアを携えたアンチ・スリープ。

……………まさかまさかの輝夜緋姫だった。

「……………」

はっはっは、なあんだ輝夜かあ。僕はてつきり本当にアンチ・スリープなるナンバーズがいるものかと思っちゃったよ。幽霊の正体見たり枯れ尾花。未知って怖いなあ。僅か六年間しか生きていない僕には、世の中不思議がいつぱいだあー。

「『いつぱいだあー』じゃあるかボケエエエエ！！！！」

見事な一人ノリツツコミ。こんな危険と隣り合わせの商売なんて辞めてお笑い目指そうか。なんだか今なら天下とれそうな気がして

きた。

「煩いわね綺羅衣君。近隣住民の方へのマナーがなっていないんじゃないかしら」

「お前が言うなあ!!」

コイツはKYどころじゃない! KBだ! 空気・ぶち壊しだ!

「ぜー、ぜー……」

「何、息を荒くして。気持ち悪い。もしかして私に欲情した?」

「んなわけあるかああ!!」

「で、手強い……。かつて僕が息を切らすほどに戦った相手が一体何人いることだろう。少なくともそういった意味合いではコイツは間違いなく過去最強のナンバーズだ。」

「と、とりあえず輝夜。まず一つ聞かせる。どうやってドアぶち破るなんて荒業やってのけたんだ」

「心外だわ。レディに対して『ぶち破る』なんて物騒な動詞使うものじゃないわ。ちょっと強めにノックしただけよ」

「普通の人間が少し強めにノックしたただけで扉が壊れるか!」

「私、普通の人間じゃないもの」

「……あ」

地雷踏んだ。コイツ、エクストラナンバーなんかじゃなく本物のナンバーズだった。しかも第一期、『ヴァンパイア』。昨日あれだけ血を飲ませたんだから、そりゃあこれくらいの力業は使えるだろう。

「えっと、その……すまん」

「何に對しての謝罪? 私に欲情したことに対して? それなら携帯電話のボタンを三回押すだけで許してあげるわよ」

「ちげーよ! 欲情もしてねーし、三回押すってことはそれ110番通報だろう! 許す許さないの問題じゃねーよ!」

「110番じゃないわ。……427番よ」

「『死にな』!? それ明らかに許してないよなあ!? 呪いかけてるよなあ!?!」

「因みに、かけると427秒後に綺羅衣君が死ぬわ」

「デスノート！？ いや、デスダイヤル！？」

「とにかく」

そう言うと、輝夜は徐に。

「昨日はありがとうございました。本当に……ありがとうございますました」

くつきり九十度に腰を曲げて、僕に対して頭を下げ礼を言った。

「……………あー」

これは予想外もいいところだ。僕としてはそんなに尾を引いてもらったり、改めて礼を言われるようなことをしたわけじゃない。僕は僕として僕にできる最大限のことをしただけだ。

「いや、うん、まあ。そこまで改まられるとこっちとしても対応に困るんだが……………」

「そう」

するつと頭を上げる輝夜。……………あれあれ、そこはもうちょっと尾を引いてもいいんじゃないかなあ？

「まず言えることは、だ。扉を壊すような真似だけはするな。血は必要ならいくらでも分けてやる。お前一人分の血液が丸々なくなっても、僕は死ぬような身体じゃない」

「それも、訊きたかったことの一つよ」

「は？」

「綺羅衣君は私のことを人間だと言ってくれたけれど……………私にはまだその実感が無い。しかも、綺羅衣君は自分で自分のことを『人間じゃない』とまで言った」

……………言ったつけ。案外その場のノリで口走ってしまったかもしれん。

「知ってること、教えて頂戴。私のことや、綺羅衣君自身のこと」

「えーと……………」

これも予想外だなあ……………。自ら率先して自分のことを知りたがるナンバーズも珍しい。いやまあ、養父母を殺してしまった憂き目つ

てのは当然あるんだろうけど。

「…………だめ？」

「うっ！」

不意に輝夜が上目遣いで僕を見上げてきた！ 大人っぽいはずなのにそこはかとなく小動物的要素を醸し出すギャップ！ 美人が発するおねだりっぽいつづらな瞳！ これが所謂“萌え”というヤツか！？ 萌えの境地なのか！？

「駄目なら427番にダイヤルするわ」

「小動物的要素が一瞬にして崩壊した！！」

脅迫だ！ せんせー！ 今まさにいじめが行われています！

「まあ、教えること自体は吝かじゃないんだけどさ…………。結構デープな話になるぜ？ 聞いたら多分引き返せないと思う」

「百も承知よ。おじいちゃんおばあちゃんを殺してしまった時点で私はもう引き返せない瀬戸際まで足を踏み入れているのだから」

決心は固いようだった。

「…………分かったよ。長い話になるからとりあえず座って待ってる」

「待って…………って、どこへ行くの？ お茶なら私は梅昆布茶が好きだから覚えておいて」

「…………お前はもう少し客人としての慎みを持って。」

誰かさんのおかげで通気が良くなり過ぎちまったからな。見てくれだけでも補修工事だ」

中略。

僕は一から十まで、知っている限りの情報を輝夜に教えた。『ナンバーズ・チルドレン計画』発起から崩壊、そして『アンチ・ナンバーズ計画』、輝夜 異能力者『ヴァンパイア』やそれに対抗するべく造られた僕の出生の秘密を全て。僕がまだ六歳しか人生を歩んできていないことも含めて。

「…………そう」

輝夜は途中で相の手を入れることもなく、終始僕の話に耳を傾け

ていた。第三者からすれば電波な絵空事もいいところだが、彼女はまるで全てが繋がったかのような清々しい顔をしていた。

しばし瞑目して考えていた様子の輝夜だったが、やがて顔を上げて言った（言うまでもなくお茶は出していない）。

「綺羅衣君。一度だけ猶予をあげる。今のが壮大な詐欺だったというのなら、今この場で全て暴露しなさい。今ならまだ許してあげないこともないこともあるかもしれないしあったかと思いきややっぱりなくなってなきにしもあらずよ」

「相当曖昧なニュアンスだったな最後……。因みに参考までに訊くが、壮大な詐欺でも今この場で全て暴露しなかったらどうなる？」

「110でも427でも済まさないわ」

……こえーよ。今になって気付いたけどこの女、相当こえーよ。

じいちゃんばあちゃんが死んですっかり毒されたらしい。ただでさえ緋色の髪、その奥に宿る強気な双眸がそれを一層増長している。

「生憎、僕のアドリブ能力はそこまで高くないよ。今言ったのは全部本当だ」

110も427も御免なので、僕にできるのは今の電波な絵空事を信じてもらうよう尽くすしかない。

「そう。信じるわ」

さらっと。彼女はあっさりと僕の言葉を鵜呑みにした。

輝夜は付け加えるように。

「綺羅衣君の言うことだから、信じるのよ」と言った。

「念のため確認するけれど、貴方の『エナジードレイン』？ で、私のナンバーズとしての能力のみを取り除くことは出来ないのね？」

「無理無理。僕にやあー昨日まで、お前がナンバーズだってことから気付かなかったんだぜ？ 僕も『エナジードレイン』もそこまで万能じゃない。輝夜緋姫の吸血鬼性は輝夜緋姫の存在性の根っこの部分から絡まつてるからな。片方だけ都合良く消すのは不可能だ。無理にやろうとしたら輝夜緋姫の存在そのものが消えちまう。言っ

ている意味が分かるな？」

「……もし」

本当に。例え話をするように小さく口を開く輝夜。

「もし、私の存在ごとで構わないから能力を消して、と言ったら。綺羅衣君はどうするかしら」

「拒否だね。断固拒否だ。御免被るよ。ついでにぶちギレるな」

「でしょうね」

僕は当たり前前の答えを口にして。

輝夜は当たり前前の答えを聞いたように嘆息した。

「ま、僕に言えるのはそれくらいだな……。ああそつだ。おい輝夜。僕からも一個訊かせろ」

「何？ スリーサイズなら上から」

「ちげーっつーの！ 人を服着て歩く性欲みたいに見るのはそろそろやめてくれないんじゃないかなあ！？」

「ちよつとした冗談トークよ」

「ちよつとした銃弾トークとしか思えないんだが……。まあいい。お前、なんで僕ん家知ってるんだよ」

「……………」

「何故黙る！？」

「綺羅衣君。今なら遅くないわ。世の中には知っていた方がいいことと知らなければ良かったと後々思っつて自殺に追い込まれることがあるものよ」

「なんで後者自殺確定！？」

「冗談は据え置き」

「売るの！？」

「嘘よ。さておき」

「もつどこからお前を信じていいのかわからないよ……………」

「学校にちよつときょうは いえ、聞いたらこれくらいの住所は げる いえ、教えてくれるわよ」

「今脅迫つて言おうとしたな！？ ゲロるつて言おうとしたんだな

!？」

なんだこの神がかったボケ！ 今まで最大限に活かせなかった僕のツッコミスキルがフル活用されている！ これまで周囲にいなかったタイプだ！ やべえ、ちよつと楽しんでる自分がいる！

「それにしたって、こんな遅くじゃなくてもいいだろうが」

「起きたのがついさっきだったのよ」

「だったら明日にでも」

「嫌。暑いもの」

「あ~~~~~!!」

また地雷踏んでしまった。一見ただけでは分からないが、コイツは紛れもないファーストナンバーズの一角で、異能力者。あまりにもトークが冴え渡るもんだから、ついつい僕は普通の女の子として見てしまう。今のは自己嫌悪の雄叫びだ。

「つたく。とにかくつ。僕に言えることは言い尽くしたよ。そろそろ帰った方がいい。いくら人間離れた頭と身体だからって、こんな時間に高校生の男女が一つ屋根の下ってというのは世間体が宜しくない」

「驚いたわ。綺羅衣君って意外と常識人なのね」

「今の今まで常識人だと思われていなかった方が驚きだよ！」

「まあ、綺羅衣君の言うことももっともね。それじゃあ」

ああ、やっと帰ってくれるのか。若干名残惜しい感じもするが、まあ頃合ってところか。それにコイツが血を欲したら否応なしに会うことになるんだし、そもそもクラスメイトなのだから、二学期が始まれば毎日

「本題に移りましょう」

「なんだったんだ今までの壮大な前振りはあああああ!!!」

綺羅衣翼、産まれてこの方まだ六年足らずだが、間違いなくこれは生涯最大のツッコミだ!!!

「あと、エツチのことも視野に入れているからそのつもりで」

「昨日は軽く流せたけど今日も同じだとは限らないぞ!？」

「ああ、勘違いしないで。エツチといってもエツチ、イー、エル、エルのエツチよ」

「HELL!？ 心中を図るつもりですか!？」

「まさか。私は死なないわ」

「魔性の女だ!」

「こっちはスタンバイオーケーよ。あとはFを押すだけ」

「またデスダイヤル出た!!」

「嘘よ。真に受けないで。本当はエツチ、イー、イー、エルだから」

「そんな特殊な性癖ねーよ! 踵で足蹴にされたいとかいう欲求ねーよ!!」

「エツチ、イー、イー、エル」

「じゃあ扉直せ。すぐ直せ。今すぐに直せ!」

「エツチ……エツチ、エツチ……」

「もう持ちネタ尽きたの!? そんだけ周到に用意して!？」

「ていうかやめて! この部分だけ読んだ読者からいらぬ疑いの眼差しを受けそうだからやめて!!」

「」

「無音のhとかどうやって音にするんだよ!!」

「カオスとしか言いようがない!」

「冗談はこれくらいにして」

「どこからどこまでが冗談かを明確にしてからにしろ!」

「エツチ、イー、エル、エルは冗談」

「それは譲歩できないな!」

「エツチ、イー、イー、エルも冗談」

「当然だ」

「エツチ、イー、イー、エルも冗談」

「そこには少し期待した……」

「も冗談」

「hが気に入ったようだな!? フランス人もさぞや満足だろうよ！」

「体だけの付き合いというのも冗談」

「会話に上ってさえない! というかそれはどう解釈しても十八禁にしなければならないからやめて! 僕はまだ六歳だ!」

「エル、オー、ブイ、イーは本当よ」

「……………」

「何を。」

「そう言っただけだった。」

「どうして、何の銜もなく、冗談の延長線上みたいな言い方で、そんな重要なことが言えるんだ。」

「……………」

「吊り橋効果って知ってるか?」

「そうだ」

「成程。綺羅衣君は突き落とされるくらいがちょうどいいのね」

「前言撤回だ! それじゃねえ!」

「危機的状況下にある男女は、恋愛に落ちやすいというやつでしょう」

「……………」

「だから。」

「なんでこんなに真剣な台詞を、そんなに冗談みたいな言い方ができるんだよ。」

「因みに、少し考えさせてくれ、なんて言った日には一生軽蔑するわよ」

「……………」

「どうやら……………」

「……………」

確かに、輝夜はとんでもなく可愛いし、抜群の美人だ。スタイルもいい。病的なまでに白い肌に緋色の髪の毛というのも、珍しいがそれが逆に絶妙なコントラストを描いており一層チャーミングだ。普通の男目線に考えれば、恋の一つや二つするだろう。

だが、僕だぞ？ 『エナジードレイン』を持って、お前らが勉強に励んでいる間に殺し合いの何たるかを教わっていたような奴だ。人工的に産み出された人造人間だ。所長の言を借りるなら、殺戮兵器だぞ？

それに　こんなことは言いたくないが、輝夜は吸血鬼だ。元は普通の人間だけど、今じゃ魂の根源に吸血衝動が渦を巻いているような女だ。

僕は確かに輝夜を助けるって言った。でも。なんていうか。

こんなの、健全じゃない。近道もいいところだ。輝夜は、もしかしたら　万に一つの可能性で　僕に本気で恋をしているのかもしれない。けれど。

僕は　。

「吸血鬼が血を吸う理由って綺羅衣君。知ってる？」

「は？」

なんでこのタイミングでそんな話題が出てくるんだ？

吸血鬼が血を吸う理由。そんなの勿論　吸血しよくじだろう。

「都市伝説だけれど。吸血鬼が血を吸うのは性行為に近いものがあるらしいわ」

「　」

「私だつて、おじいちゃんとおばあちゃんを　喰ってから、何も手を打たなかったわけじゃないのよ。色々な本屋さんや図書館へ行って調べ回ったわ。血と書かれている本はありとあらゆる蔵書を読み尽くしたといっても過言ではないわね。……その中に、ね。書いてあったのよ。《そういう目的》も含まれている、って」

だとしたら、輝夜は。

「私はね、綺羅衣君。昨日の時点ですぐに貴方しか考えられないのよ」

どうして。どいつもこいつも。先手を打って。卑怯な手を使って。僕にノーと言わせてくれないのか　。

「……一度だけだ」

「え？」

「一度だけ言うぞ輝夜緋姫。よく聴け。綺羅衣翼がこれからとびつきりかつこ悪い台詞を言ってる」

そう前置きをして僕は息を吸い込む。そして。

「お前は人間だ。僕は人間の味方だ。だから僕はお前の味方だ。天地が覆ろうがこの事実を覆らない」。

だから僕は お前から軽蔑されたくない」

じつくり間が空いた。自分でもとびつきりかつこ悪くて、とびつきり卑怯な言い方だと思う。

だけど。

「これも、軽蔑するか？」

それが今のところ、僕の中にある感情全でだった。

呆気にとられたかのような輝夜は、しかし。

「……いいえ」

ゆっくり首を振って。

僕に。はじめて心からの笑顔を見せた。

「そういう狡猾さ。私は大好きだわ」

そんなわけで、だ。

今日び、恋愛のれの字も知らない小学生でも恋人を作るご時世に。綺羅衣翼と輝夜緋姫は、実に稀有な交際を始めたのだった。

*

これは、誰にも明かさずに僕の中でひっそりと眠らせ続けていく秘密。永遠に語られることはないであろう綺羅衣翼のとびつきりの内緒話だ。

僕の告白(?)を受け入れた輝夜は、言いたいことは言い尽くした感溢れる態度で、何の期待も抱かせないような潔白な態度で帰っていった。

『次来的时候は、ちゃんと空気読めよ。ちゃんと扉から入れ』

『たまには、一風変わった登場も大切よ。綺羅衣君もなんだかんだで吝かじゃないでしょう?』

『吝かだよ! とつても吝かだよ!』

なんて会話があったのはご愛敬。

明日早速扉直しに業者に来てもらわないといけない……。まあ、懐は十分過ぎるくらいにホットなので金銭面は完璧にクリアなのが。あとは業者の人になんて言い訳したのか……。まあなんとかならう。

そこに来て、ようやく僕はついさつきまで寝る予定だったのを思い出した。とんだお客人がいらっしやっただせいで、以降発せられるほとんどの台詞がツッコミという、主人公にあるまじき斬新なスタイルになっただけで。

電気を消して、横になる。恋人が産まれてはじめてできて、もつと悶々とするかと思いきや、ツッコミで体力を消耗しすぎたのか、すぐに眠気が訪れた。……。ナンバーズとの対決ですら滅多に消耗しない体力が、こんな短時間で限りなくゼロに近付いたというのは、流星はファーストナンバーズ恐るべしといったところだろうか。

眠りに落ちる前に、僕は枕元の携帯に手を伸ばした。別れ際に交換した、輝夜の番号とメールアドレスが登録されている(尚、僕はメールを使った試しがない)。

……。若気の至りというか、眠気の至り。

何を血迷ったか、僕は慣れない携帯の機能をいじくって、ほとんどが空欄の電話帳に、一つだけ別のグループを作成して、そこに『輝夜緋姫』の名前を登録した。そこで眠りに落ちた。

なので、翌日の朝起きた時には少なからず驚いたものだ。自分でやっておいてなんだが……。これは正直、ものすごく恥ずい。

グループ名、『彼女』。

2・5・番外その壱「綺羅衣翼がこれからとびつきりかつこ悪い台詞を言っ

これからヒロインである輝夜が段々と暴走を始めます。精一杯面白いものを書いていっつもりなので、楽しんで下されば何にも勝る光栄です。

3 - 1 . ないためあ「僕らが、まだ僕らとして出会っ前の、これは物語」(前書

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・ 半角の（ ） で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・ 全角の（ ） で書かれている部分は主人公の情景補足
- ・ 《 》 で書かれている部分は傍点（強調）

3 - 1 . ないとめあ「僕らが、まだ僕らとして出会う前の、これは物語」

「輝夜かくやさんと付き合い始めたあああ!!?」
*

事の発端は八月一日水曜日。夏真つ盛りの今日この頃、太陽は勢力を遺憾なく発揮し、蝉は残り僅かな生命の灯火を燃やし尽くさんばかりに謳歌し、だがしかしその大合唱にさえ勝るとも劣らない実川音葉りかおとほの驚天動地の叫び声が誰もいない私立相楽森学園高等部三年B組の教室に轟いたのが始まりだった。

「どういうこと!? 説明を求めよ!」

「……お、音葉。ギブ、ギブ……。説明はするから首絞めるのは勘弁……」

はつと正気を取り戻した音葉が、締め上げていた僕のシャツの胸元から手を放す。実に華麗な突込絞。コイツ、柔道の寝技の心得でもあったのだろうか。ゆくゆくは『オトハ・グレイシー』として格闘技界に名を馳せるやもしれん。

リアルに死ぬかと思った。新鮮な酸素を体内に吸収する。ライフ・イズ・ビューティフル、生きているって素晴らしい。

「ご、ごめんね。つい取り乱しちゃって……。それで、輝夜さんと付き合い始めたってというのはどういうことなの?」

「いやまあ。一言で説明するのは難しいんだけど、結局僕がヘタレだったっていうか半ば強引に付き合わされることになっていうか打算を追求した結果っていうか」

「……ごめん、さっぱり意味が分からない」
「だろうなあ。」

なんせ僕だって 綺羅衣翼きらいよく自身でさえどうして輝夜緋姫めいと交際を始めたのか未だによく分かっていない。究極の二者択一だったわけだが、僕がああ場でノーと言えた可能性は、今考えてみれば確かにゼロではないのだ。一生軽蔑されることになるとはいえ、血を与

えなければいけないのは彼女を助けた僕の責任であり、義務だ。そこに私利私欲私情を差し挟む余地などない。とどのつまり、輝夜に軽蔑されようが絶交されようがどうしようが、僕が輝夜の暴走を抑えるために血を供給しなければならぬ、という事実是不変のものだということだ。

それでも僕は、輝夜に嫌われたくないという理由で彼女の告白を受け入れた。こればかりはヘタレと蔑まされても反論し切れない。

「かくかくしかじか」

そういった経緯を含めて、僕は音葉に一部始終を説明した。全てを文字として書き表すのには本来なら原稿用紙十枚以上は優にかかるとは思うが、こういう時にはなんとたったの八文字で済むという日本語のミラクル。ビバ、ジャパン。

「ふうん、成程ねえ……。輝夜さんもナンバーズだったんだ」

因みに、繰り返し返すが実川音葉は“例外”である。なのでナンバーズ云々の話もスムーズにできるので説明する側としてはありがたい限りだ。納得の顔で眼鏡をかけ直して右手のペンを器用にくるりと回した。

ところで、どうして僕が夏休みに学校で、しかも音葉と一緒にいるのかというと。実は今勉強中なのだ。長期休暇ならではの課題というやつである。とはいえ高三の夏休みということで、各々の受験勉強に差し支えない量しか出されていないが（もつとも、僕は大学受験などするつもりはないけれども）。

この際なのでぶつちやけると、僕は割と勉強はできる方だ。オール五とまではいかないものの、産まれてから三年間の研究中に英才教育を受けており、必要最低限の小中レベルの知識と学力は普通の人の三倍のスピードで覚えた。しかし、それはあくまで付け焼刃のようなもので、所々に空白が生じることがままある。特に高等数学は、小中学校で習った公式が当たり前のように出てくるので、地盤が固まっていない状態では追い付いていくのがやっとなので苦手なのだ。

そんなわけで、僕はクイーン・オブ・委員長こと実川音葉に勉強を教わっている真つ最中なのであった。今やっているのは数学の微分積分。

「なあ、音葉。ここはどうなるんだ？」

「え？ ああ、えつとね、ここは」

そう言つて懇切丁寧に説明してくれる音葉。普通、頭のいいやつは逆に教えるのが下手だというのが、彼女の場合『とんでもなく』という接頭語がつくほど頭がいいので教えるのも素直に上手い。そんなじよそこらの天才と一緒くたにしないように。

「というわけで、 $a=7$ という解答が導き出されるんだよ」

「ほうほう、成程ね。流石は実川先生。小学校の時点で微分積分をマスターしてただけのことはありますな」

「何そのキャラ？ いくらなんでもそれは言い過ぎだよ」

そう言つて失笑する音葉。

「基本問題をちよつとばかりかじった程度だよ。応用問題なんてちんぷんかんぷんだったもの」

「……………」

……………マスターはしていなかっただけで、本当に習つてはいたらしい。

実川音葉……………怖い子！

「あ、でも綺羅衣君」

ふと思ひ付いたように音葉が話しかけてくる。

「はい、なんでしよう？」

「……………なんで敬語なの？ どうせ付き合ってるんなら、私じゃなくて輝夜さんに勉強教えてもらえば良かったんじゃないの？ 輝夜さんだって本当は頭いいんだし、これくらいの問題は教えてくれるでしょうっ？」

「……………」

……………

……………」

「どうして六十文字分も黙るの!？」

「……………後生だ、そこには触れないでくれ」

僕の中で、アイツに指導を求める選択肢は昨日の夜の時点で永遠に消滅したのだから。最早あれは黒歴史でしかない。

「もしかして、今朝の電話の内容と関係してるの?」

「うん、まあ……………」

僕は今朝一番に「助けてくれ音葉!」と電話をかけたのだ。訝しんだ様子の音葉だったが、その時の僕はとにかく精神に余裕がなく必死で助けを求めた。辛うじて昨日の夜は乗り越えられたものの、夢でフラッシュバックを起こしちよつとしたパニック状態に陥っていたのだ。

「……………昨日の夜なんだけどさ。アイツが僕ん家来て。それでちよつとだけ勉強教わったんだけど……………いや、教わったっていうよりあれは最早……………ああ、思い出すだけで身震いが出る……………!」

というわけで。本筋から少し逸れて昨夜起きた悪夢のような出来事を振り返ってみよう。

*

びんぽーん。

間の抜けたインターホンの音に、僕は微睡んでいた意識を覚醒させる。

事の発端は七月三十一日火曜日。輝夜の一件以来、平和な毎日が続いていた。急な仕事も入らず、友達のいない僕にはそもそも遊ぶという選択肢自体が存在せず、輝夜とも 良くも悪くも何のイベントも起こらず、せつかくなのでたまには自習でもしようとする殊勝な心掛けて卓袱台に向かっていたのだが、如何せん一人ではなかなか捗らなくて、健闘空しく睡魔に負けて、いつの間にか教科書とノート一式を卓袱台に広げたまま突っ伏していたところを起こされたのが始まりだった。

時刻は二十二時半。およそ一般常識のある人間が訪ねてくるとは

思えない時間である。が、僕には一人だけ心当たりがいた。連打しなかったのは前回の教訓で少しは反省したということか。

僕は立ち上がって、新品同様の扉を開ける。

「……よう」

「こんばんは綺羅衣君。十日ぶりかしら」

やはりそこに立っていたのは緋色の長髪を揺らした輝夜緋姫、一応僕の彼女であるが、既成事実は今のところ何も無い。

「………本当だよ？」

「上がっていいかしら？ ちょっと疲れたのよ」

気丈にそう言う輝夜だが、どこか顔色が優れない。心なしか吐息は荒く額にはじんわりと汗が滲んでいた。……暑さのせいだけではあるまい。

……例のアレか。インターホンを連打しなかったのは、実はそこまでする余裕もなかったからなのではないか。

「馬鹿。なんでそんなになるまで放置しておいたんだよ」

いよいよ足許も覚束ない輝夜に肩を貸して家に上げる。万が一のために鍵をかけ、誰かから目撃されないようにする。世間体も何も知ったことか。普段の彼女なら、「あら、何か邪なことでも考えているのかしら？ いやらしい男ね」などと皮肉の一言も発しそうなものだが、どうやらそんな余裕もないらしい。

吸血鬼。

輝夜緋姫は吸血鬼だ。元は普通の人間だったはずだが『ナンバーズ・チルドレン計画』の被害者となって産み落とされた、ナンバー？『ヴァンパイア』という異能を持つ薄幸の少女である。なんの因果か、僕は彼女に生きていくための血液を供給する義務を課せられることになっているのだった。

「ほら」

と言って僕は首を露出させる。まだいささか以上の抵抗感があるのか、輝夜はしばし躊躇したが、顔を近づけて僕の首筋に歯を立てた。

ちう、ちう、ちう。

輝夜が血を吸う音だけが室内に響く。すぐ鼻先にある輝夜の緋色の髪からは、女の子特有の甘いシャンプーの香りがした。

「ん……くっ、……ぷはっ」

数分後。輝夜が僕から離れる。さっきまでの青白い顔はすっかり鳴りをひそめて、瑞々しい白磁のような生氣溢れる顔色に戻っていた。

「もういいのか？」

「ええ、ありがと。ごちそうさま」

伏し目がちにそう言う輝夜。やはり他人の血を吸うという行為にまだ抵抗があるのだろう。

「あんな、輝夜。今度からはそんなに酷くなるより早く来いよ」

「……………」

「言っただろ。僕はお前の味方だし、今となつちやあ彼氏だ。変に遠慮なんてするんじゃないやねえ。迷惑なんてこれっぽっちも思っていない。もし一歩間違えてみる。お前は僕じゃなくて、ここまでの道中を通りすがりの一般人を襲って血を吸っていたかもしれないんだぞ。その危険性を少しでも考えたか？ そうなったら僕はお前を許さないぞ。誰も彼もがバッドエンドだ。そんなのは絶対に嫌だぞ僕は。この際だ。はつきり言ってな、あんまり遠慮なんかされると、それこそ逆に迷惑なんだよ」

僕は一息で一氣に言った。ちよつと言い過ぎたかもしれないが、こうでも言わないとコイツはどこまでも無理をしかねない。養父母を殺してしまつてからの三年間、自分の腕を喰っていたように。僕は彼女のことを想って、むしろ厳しい口調で諭した。

輝夜は僕の辛辣な言葉に対して一言だけ。

「……………ごめんなさい」

と言った。

「今後気を付けてくれればいいよ」

それきり会話が途切れる。壁にかけた時計の歯車が、規則的に秒

針を動かしていた。

「……勉強」

どれくらい経っただろう。ぼそりと輝夜が呟いた。

「あん？」

「勉強していたの？」

輝夜の視線は卓袱台を向いていた。ああ、そういえば僕はさつきまでお勉強の最中だったのだ。……正確には、突っ伏してうたた寝をしていたのだが。それは言わぬが華というやつだ。

「まあな。最近することがなかったからな。今のうちに夏休みの課題を片付けておこうと思って」

「その割には、やけに机の上が散乱しているようだけれど」

「うっ！」

……鋭い。そう言えばコイツも頭いいんだっけ。

「ノートに至ってはなんだが濡れているし」

「ぐっ！」

否定できない！

「自慰行為でもしていたの？」

「そこは断固として否定する！」

数学をおかずに自慰行為に耽る六歳の男なんてレッテルを貼られるくらいなら僕は今すぐにルシフェラーゼで首吊って自決するわ！

「しょうがないわよね。綺羅衣君も男の子だし。保健体育なんて卑猥な単語としか認識していないんでしょう？」

「なんでお前は僕をいつつも変態に仕立て上げようとするんだ!？」

「その気持ちは痛いほど分かるわ」

「分かつちやうんだ!？」

「綺羅衣君の携帯で『しよちょう』と入力すると『所長』ではなく『初潮』と出てくるのよね」

「こねーよ！ 出てこねーよ！」

そもそも『しよちょう』と入力したのはかつて一度だけ、電話帳に登録した時の一回こっきりだ！

「因みに私は、『赤潮』や『黒潮』も保健用語だと勘違いしていた時期があるわ」

「衝撃のカミングアウト！」

「だって『赤』い『潮』よ？ そっちの方を連想するなという方が無理じゃない？」

「お前『潮』って漢字を辞典で引き直せ！ 真っ先に出てくるのは『太陽と月の引力によって生じる海水のみちひき』って意味だからな！」

薄々そうじゃないかと思っていたが今なら断言できる。コイツは相当な毒舌家で、救いようがないくらいエロい！

「それはそうと」

そう言って輝夜は僕のノートと教科書を見比べる。

「……間違いが多いわね」

「なぬ！？」

「正答率四割といったところかしら。綺羅衣君、よく三年生まで上がれたわね」

「ぐぬぬぬ……」

確かに僕の数学の成績が悪いのは否定しきれないところだが……。ましてや、うとうとしながらの勉強だったし……。

「まさか、保健用語だと勘違いしていたなんて……」

「そんな記述は一切ない！ はおよそ3.14だ!!」

「3.141592653589793238462643383279502884197169399375105820974944592309749445923078164062862089986280348253421170679よ、より正確に言うなら」

「……！」

な、何者だ、この女……。円周率を小数点以下百桁まであっさり丸暗記していやがる……！

「決めたわ」

「なにを」

「私が、綺羅衣君に勉強を教えてあげる」

「はあああ？」

「なんでこの話の流れでそういう結論に至るんだ？」

「借りを作りっぱなしっていうのは私の性に合わないの。少しでもいいから恩返しをしたいのよ」

「……………」

「まったくコイツは……：そう言われてしまえば断れないじゃないか。

「分かったよ。それじゃあ輝夜、僕に勉強を教えてくれ」

「あら？ それが教わる側の態度？」

「あっさりと掌を返しやがった！」

「『教えて下さい輝夜先生』。はい復唱」

「おせーてくださいーかぐやせんせー」

「鞭で叩かれた。」

「痛っ！ って鞭!？」

「心が籠っていない生徒に対する輝夜先生からの愛の鞭よ」

「いやいやいや！ どう考えても物理的な鞭だろ！ つーかどこから取り出したそんなもん!？」

「乙女の必須道具をあれこれ詮索しないで」

「詮索する気は毛頭ないが、どう考えてもその中に鞭は含まれない

と思う！」

「頭が悪いミジンコにもう一度だけ言ってあげる」

「今普通にミジンコって言ったよな!？」 僕のことだよなそれ!？」

「コイツ、本当に僕のこと好きなのか？」

「甚だ不安だ。」

「もう一度同じことを言ってあげる。」

「この哀れで愚かなミジンコ

めに貴女様の英知をお授け下さい輝夜緋姫先生』。はい復唱」

「明らかにグレードアップしている！ ちつとも同じことじゃない

！」

「二度は言わないわよ」

「ぐっ……」

とてつもなく屈辱的だ。どんなSMプレイか。

「こ、この哀れで愚かなミジンコめに貴女様の英知をお授け下さい
輝夜緋姫先生……」

言ってしまった。

思えば、この一言を口にした時点で僕はとんでもない悪徳宗
教にハマってしまったのだらう。

「うむ。くるしゅうないわ」

「そりゃあお前は苦しくないだらうさ！ 僕は今すごく胸が苦しい
……」

「でもそうね……。綺羅衣君。綺羅衣君には微分積分は早すぎるわ。
もつと基礎から始めていかないと」

「じゃあ何から始めればいいんだよ」

「九九」

「いくらなんでもそれくらいはできる！」

「九九を馬鹿にしてはいけないわ、馬鹿衣君」

「九九は馬鹿にしてはいけなくて僕は馬鹿にしているのか!？」

「とにかく。基本は大事なのよ。いい？ これから言う私の言葉を
復唱しなさい」

「はいはい」

「はいは八十一回よ」

「お前どんだけ九九好きだよ！」

「とにかく復唱。……『淫佚が一』」

「初っ端からとんでもなく嫌な暗記の仕方だー!!」

「『淫児が二』」

「嫌だ！ そんな児童は嫌だ！」

「『淫乱が三』」

「その調子だと一の段はどこまでいっても酒池肉林じゃねえか!！」

「駄目駄目ね、綺羅衣君。九九すらできないなんて」

「確かにその九九は僕にはできないさ！ 人として間違ってるから

な！」

絶対に輝夜緋姫に教員免許を与えちゃいけないっていうことだけは身に沁みて分かったがな！

「ふう……。しょうがないわね。妥協して足し算にしましょう」

「妥協されるいわれはないが、この生き地獄から逃れるためなら僕は喜んで甘受しよう」

「例題一。

『貴方はバイクの運転手です。最初の停留所で男性が六人、女性が七人乗ってきました』」

「それって足し算じゃなく、最終的に『運転手の名前は？』って落ち着くオチのいじわる問題じゃないか？ それはそうと、とてつもなく巨大な自動二輪だな……」

「『バイクは静かに発進します。次の曲がり角を左折した際、誤って幼稚園くらいの男の子をはねてしまいました』」

「ちよつと待て!？」

「『母親と思しき女性が叫びます。『太郎!? 太郎お!!』抱き起こされる男の子。しかし彼の身体からはもう既に力が抜け、息はしていませんでした。ただただ赤い血が流れ出るだけです』」

「完全に対人事故だ！ 警察と救急車を呼べ!!」

「『『たろおおおお!!』母親は絶叫します。ですが運転手はなんだか鬱陶しかったのでスルーして先に進みました』」

「待て待て！ その運転手は絶対に僕じゃないぞ!？」

「『乗客から悲鳴が上がります。車内では静かにするよう習わなかったのでしょうか。あまりにマナーがなっていない乗客にムカつき、運転手は短機関銃を乱射して乗客を全員射殺しました』」

「その運転手には人道的モラルがなっていない!!」

「因みにこれを、カルネアデスの舟板と呼ぶわ」

「呼ばねえよ!? それは緊急避難ではなく単なる口封じだ!!」

「『絶命する瞬間に遺言を発する乗客達。『ブルータスよ、お前もか』『ローマは一日にしてならず』『イエス、アイキャン』『賽は

投げられた」』」

「古今東西の色んな偉人さんが乗車していたんだなあ!? 第四十四代米国大統領まで乗ってたんだなあ!? ついでに言うなら最初と最後の人は同一人物だろ!」

「『運転手は素知らぬ顔で運転を続けます。次の停留所の近くで、美男美女のカップルがイチャついていました。ウザかったのでとりあえず彼氏の方だけ轢き飛ばします』」

「ついに確信犯!」

「『彼氏は彼女の腕に抱かれて最期の一言を紡ぎます。』おいどんは……おいどんは、幸せだったでござす……。ただ、もう一度だけ……ちゃんこが、食べ、たか、つたで、ござ、す。』」

「明らかに力士じゃねえか! 美男っていう設定はどこに行った!」

「失礼ね綺羅衣君。美男の力士だって世の中にはいるものよ。」

続けるわよ。『次の停留所で一人の男が乗車してきます。乗車するや否や、男は懐から拳銃を取り出して運転手に突き付けてこう言います。』今すぐ会社に電話しな』あまりに突然の出来事に、乗客からは声もありません』」

「そりゃあ全員死んでるからな!」

「『ですが運転手はどこ吹く風。男は焦ります。』おい、早くしやがれ。死にてえのか』その時です。運転手は鋭利なサバイバルナイフを取り出し、風のような動きで男の心臓に突き立てます。そして一言。『情状酌量の余地はないぜ』』」

「ああっ! なんだかそこだけ第一章の僕っばい! いい台詞のはずなのに!」

「『男の目が驚愕に見開かれます。』ば、馬鹿な……。これじゃあ俺の計画が……。不治の病に冒された息子の手術費のために母親が貯めた金を、息子の振りを装って俺の口座に振り込んでもらう俺の計画がああ!」そう言い残して男は事切れます』」

「うん、確かに情状酌量の余地はないけども!」

「『バイクは次の停留所を目指して発進します。途中五、六人轢殺してしまいましたが、自分を待っている乗客のために運転手は運転を続けます。そう！自分を待っている乗客のために！』」
「いい話っぽくしても駄目だ！最早大量虐殺以外の何物でもねえ！」
「そしてそんな運転手なんて誰も待ってねえ！」
「『そうして長かった一日が終わりを告げます。さあ明日も頑張ろうと決意して家路につく運転手でした』」

さあここで問題。運転手の名前は？」

「やっぱり結局はそこに行き着くんだな！？ 僕じゃない！ それは断じて僕じゃないぞ！！」

「つまりは分からないと？ ふう……こんな簡単な例題にすら答えられないなんて、いよいよ綺羅衣君は末期的だわ」

「その例題を考え付いた人間の方が余程末期的だ！」

「自分の彼女を愚弄するの！？」

「やっぱりお前かああああ！！！」

*

「……綺羅衣君。ごめん、もういいよ。私が悪かったから。ごめんなさい。本当にそれ以上傷に塩を塗り込むような真似しなくていいから」

「うっ、うっ……」

「いいんだよ……泣いていいんだよ、甘えていいんだよ……。……つらかったんだよね」

「うっ、うわああん……！！」

僕は慟哭を抑えきれなくなってしまった。思わず音葉の胸に顔を埋めて泣き叫ぶ。音葉は優しく僕の頭を撫でてくれた。

ああ、音葉……君は僕の聖母だよ……ヴィーナスだ……。世の中には捨てる神がいれば拾う神がいるんだね……。

「でも、輝夜さんも元気になったみたいで良かった」

「嫌な方向に元気になった感が否めないけどな……」

「うっん。多分、輝夜さん昔からそんな感じだったと思うよ」

「そうなのか？」

じいちゃんばあちゃんを手にかけてしまったせいで捻くれたのだとばかり思っていたのだが。

「ほら、輝夜さんって美人じゃない？」

「そりゃあ……まあなあ」

まあ見てくれが相当いいのは否定できない。女子が同性の容姿を褒める時はなんとなく皮肉が混じっているという先入観があるけど、音葉が言つとなると嫌味を全く感じさせない。本心だというのが分かる。

「小学でも中学でも男子から何度か告白されたことあるらしいんだけど……」

……この流れで行くと、なんとなくオチが予想できてしまう。

「その男子達、悉く登校拒否になったり対人恐怖症になったりしたんだって」

「予想以上だった!」

痛いほど分かる!

逆に良かったわ!

良かったなあ一過性のトラウマで済んで!

僕はもう引き返せない領域に引き込まれてんだよ!

「とにかく、輝夜さんは元気になったんだよ。綺羅衣君のおかげでね。……これは、私じゃ絶対にできなかったこと」

「……………」

「幼馴染の友達代表として言わせてもらおうよ。ありがとう、綺羅衣君」

……………これだよ。

「うっ」ところが、そういうことを何の銜いもなく言えるところが、僕が音葉に敵わないと痛感するところだ。

《幼馴染の友達》。

きつと音葉は、塞ぎ込んでしまった輝夜のために身を粉にして努

力したことだろう。自分よりも、他人を優先。どんなに自分が傷付いても、見知らぬ他人のために命を懸けられる。あまりにありきたりで偽善めいた言葉だけど、コイツにはそんな『癒し』の能力があるのだ。

そろそろ頃合だろう。

少し昔話をすることにしよう。まだ綺羅衣翼と実川音葉が出会う前の話を。

綺羅衣翼と実川音葉の出会い方は、あまりに些細なことだったけど。

僕らが、まだ僕らとして出会う前の、これは物語。

そう。

アウト・オブ・ナンバー 『エナジードレイン』と、ナンバー24 『リジエネレイト』の出会いの物語だ。

3 - 1 . ないとめあ「僕らが、まだ僕らとして出会う前の、これは物語」(後書

この章では、音葉がメインの話になります。ようやく明かされる音葉が“例外”な理由。次章では過去に遡ります。乞うご期待！

3・2・「その両翼をなくさなければ」負けるということ（前書き）

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・半角の（ ）で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・全角の（ ）で書かれている部分は主人公の情景補足
- ・《 》で書かれている部分は傍点（強調）

3・2・「その両翼をなくさなければ」負けるといふこと

＊

「翼。喜べ。初仕事だ」

僕の携帯に所長 真田真正まなだまさただから着信があった。

「今暇か？ 暇だな？ 断っておくが、読書や勉強や睡眠や食事は暇の分類に入る。生理現象も暇だ。女と閨を共にしているとしたら、悪いがそれも暇な分類に入れる。さあどうだ。これでも尚お前はまだ忙しいと主張するか？ もっとも、電話に出たという時点でお前に拒否権はないのだがな」

「アンタは死ねばいいと思うよ」

誕生から三年後。施設での教育プログラムを終え、僕はUN事務所に入所した。《あの人》の遺言の通りに……結局僕に、自由意志はないまま。まだ入所して三日目だ。こんなに早くに仕事が来るとは正直思っていなかった。

だが、確かにこれは喜ばしい事態ではある。とにかく今の僕には敵が必要だった。闘争を求めている。闘争の中にしか、己の存在意義を見い出せないことは、不遇ではあったが不幸ではなかった。

「対象はどこにいるんだ？ 何番だ？」

「そう急くな翼。急いで事は仕損じると」

「どこにいるんだと訊いてくるんだ」

電話越しに、ふうと嘆息する声が聞こえたが、無視する。たとえ対象がブラジルにしようが、僕は喜んで参じるだろう。ファーストナンバーでさえ、僕にとって脅威ですらなかった。

僕は産まれてから一度も敗北を喫したことがない。そも、“負ける”という概念が僕の胸の中には存在しなかったのだ。

「……対象はこの町のどこかにいる。セラの波長からして、二桁の前半だろう。初仕事としては少々荷が重いかもしれんぞ」

「上等だよ。それこそ望むところだ。まずはターゲットを探して監

視。可能なら説得、不可能なら消去デリートでいいんだな？」

『そうだ。分かってはいるだろうが、生かしたまま捕らえること。最優先すべきは説得だ。排除行動に移るのは最後の手段だと心得ておくように。そして、くれぐれも犠牲者を出さないこと。いいな？』

「分かっている。《善処はするさ、極力な》」

『……………』

まだ何か言いたげな所長だったが、僕はそれを無視して通話を切った。携帯をポケットに突っ込み、コートを羽織る。首から提げた霊装ルシフェラーゼがあることを確認して、僕は外へと飛び出した。三月某日、早朝。まだ太陽は昇らず、切るような寒風が吹き荒び、空からは滔々と粉雪が舞い落ちる季節、冬。

まさに僕の心象風景を表しているようだった。

*

綺羅衣翼は笑ったことがない。

自覚はあった。それでも、どうしても口が動いてくれないのだ。別にいい、と思った。思っていた。

ただ…………ソイツを見た時、無性に気に入らなかった。

ターゲットを発見するのは、拍子抜けするほど簡単だった。今僕はセラを辿って、とある家のリビングを遠くから監視している。一家の団欒の風景が当たり前のようにそこにあった。父がいて、母がいて、娘がいた。僕が注視していたのは、専ら娘の方だ。眼鏡をかけて、黒くて長い髪の毛をピンクのリボンでサイドポニーに結った。まだ年端もいかぬ少女。母親と一緒に家事を手伝っていた。

…………あの女が、ターゲットだ。ナンバーズ。番号や能力は不明だが、僕と同じように人工的に遺伝子を組み替えられて造られた存在（なのに…………）

どうして、あの女はあれほど楽しげに笑っている？

遠目に見ているだけなので、僕の聴覚を以てしても会話の内容までは聞き取れないが、笑いながら家事をして、笑いながら食事をし

て、笑いながら会話をしている。

どうして、笑える？

《化け物のくせに》。

僕と同じ……兵器なのに。

どうして。どうして。どうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうして。どうしてどうして。

娘は朝食を終えたらしく、食器を片付けるとリビングから出ていった。少しして、二階の一室からその女が確認できた。どうやら文房具を鞆に詰めているようだ。出かけるらしい。

(……好都合だ)

しばらくすると、少女は玄関から出てきた。唇の動きを読んだ限りでは、「いつてきます」と言ったようだ。

向かう先がどこかは知らないが、うまく人気のない場所に引きずり込めば、そのまま消してやる。

行き場のない苛立ちを抱えて、僕は少女の尾行を開始した。

表札には、『実川』とあった。

なんと読むかは、僕には分からない。

運の悪いことに、少女が一人になることはなかなかなかった。

少女はこの町で一つだけの図書館に入ったきり、数時間出てこなかった。雪の舞う中、図書館から付かず離れずの距離を保ったまま、かつ不審がられないように細心の注意を払いつつ、ただ待った。寒くはあったが、それ以上に焦れたい。

結局、少女が姿を再度見せたのは、夕方の四時になってからだ。あの様子だと、別段本を借りたというわけではなさそうだ。鞆は入った時と変わっていない。ずっと読書をしていたのか、それとも勉強でもしていたのか。どちらでもいいが、昼食はどうしたのだろう。まさか図書館内で食べたわけでもないだろうに。……まあ、それこそどうでもいいが。

朝に通った道をそのまま歩いていく。帰るらしい。

その途中。少女は立ち止まった。

とある銀行の前に、人だかりができています。こんな小さな片田舎の町のどこにこれほどの人が隠れていたのかと思うくらいの大人数が犇き合っていた。地元のテレビ局のロゴが入ったカメラやトラックなども見受けられる。

その向こうでは、数台のパトカーの赤い光が見える。銀行を中心に取り囲んで、内部へと声を荒げている。

僕は気付いていたが、ずっと図書館の中にいた少女は知らなかつたらしい。結論から言うと、銀行強盗が押し入ったのだ。午後三時、窓口が閉まる寸前になって二人組の強盗が押し入り現金を要求。その時銀行内にいた一般人三名と銀行員四名を人質にして立て籠もりを続けていた。異変を察知して通りすがりの一般人が警察に通報、事件発生から僅か数十分間に、ここら一帯が所轄の警察署から警官が集まり、包囲網を完成させた。なかなかどうして、鮮やかな手際の良さだった。僕はこの手の緊急事態にも対応できるよう訓練を積みされたが、警官隊の動きは迅速で悪くなかった。恐らく犯人グループ的はもっと時間がかかると踏んでいたのだろう、逃げおせるタイミングを完全に逸してしまっていた。交渉人の手腕によって、既に人質七名のうち五名が解放されている。今は犯人側の要求は、逃げるための車を用意させている段階だ。

もっとも、僕には関係のないことだったので無視を続けていた。野次馬がそちらに殺到してくれたおかげで、僕的にはこの一時間、むしろ人避けができてありがたい程だ。

少女はしばし遠巻きに様子を眺めていたが、すぐに行動に移った。野次馬の一人に事情を尋ね、現状を把握した様子だった。そのまま野次馬の列に混ざるだろうと思っていた僕の意図は、しかし意外にも外れた。

「ちよ、ちよつとごめんなさいっ！」

そう声を荒げて野次馬を押しつけて銀行に近づく少女。思いもかけぬトラブルに、僕も近くのビルの屋上に移動して、少女の動向を

俯瞰していた。

警官側と犯人側は、膠着状態が続いていた。犯人達は、残る人質二名を逃走用の車が入るまで手放さないだろうし、警察側も警察側で、「お前達は完全に包囲されている」「人質を解放して速やかに投降しろ」的なお決まりの台詞を延々と叫び続けていた。これでは当初の手腕の良さが台無しだ。

だから。その少女がその間に介入するなど思ってもいなかっただろう。

少女は警官隊の前に躍り出て、銀行に向かって叫んだ。

「私が入質になります！ だから今の人質の人を解放して下さい！」「莫迦か、と思った。そんな要求を誰が呑むというのか。案の定、犯人側は激昂して少女に向かって叫んだ。

室内からの声はくぐもって聞き取りきれなかったが、次の少女の言葉から察するに、総合的に「武器を隠し持っているかもしれない奴などとそんな取引が出来るか」といった内容を言ったのだろう。それに対し少女は。

「……なら、私が無抵抗だと分かればいいんですね？」
そう言つて。

彼女は驚くべき行動に出た。

少女はあろうことか、衆人環視の中、鞆を落とし、身に纏っていた衣服を脱ぎ出したのだ。ダッフルコートを脱ぎ去り、パーカー、ブラウス、スカート、下着の上下。髪を結っていたリボンも、かけていた眼鏡も、靴とソックスに至るまで全て惜しげもなく脱ぎ捨て、彼女はとうとう生まれのままの姿になった。更に抵抗の意思なしと表わすように、両手を頭の上上げる。

「……これで、私が何も持っていないことを分かってもらえましたか？」

誰もが沈黙していた。この寒空の下で一糸纏わぬ姿になった少女に、誰もが反応できなかった。

僕もその光景を唾然として見つめていた。頭がおかしいとしか思

えない。どうして顔も見えない人質のためにそこまでできるのか。とことんまで理解不能だった。ただ。

寒さに震えもせず。

恐怖に怖じもせず。

凜と背筋を伸ばして立つ彼女は、どうしようもなく……美しくかった。

やがて、少女は銀行内へと入っていった。それではっと我に返る。僕の目的は、あくまであのナンバーズの排除でしかない。女性的に膨らんだ右胸の突起近くに刻印されている“24”の数字を持つ、あの少女を。

少し間があつて、銀行内から二人の女性が出てきた。残されていた人質だろう。そのおかげで、ある程度場が混乱する。

それを好機と見た僕は、すぐさま銀行内に侵入を試みる。ビルの屋上から瞬転しゅんてんを使って裏口に回り込み、当然施錠されている扉をルシフェラーゼでピッキングして潜り込む。その間、僅かに二秒。

銀行内部は、異様な静まりを見せていた。犯人の男二人と、ナンバー24の少女。少女はやはり裸のまま、縄で後ろ手に縛られていた。それをただ見据える二人の犯人。それを、死角になるデスクの陰から息を殺して監視する僕。

犯人はすっかり大人しくなっていた。さつきまでマックスだったボルテージはすっかり消え失せ、突飛な行動に名乗りを上げた少女をただ見据えているだけ。

「……どうして、こんなことをしたのか。尋ねてもいいですか？」

世間話をするように少女は口を開いた。男二人は困惑したように顔を見合わせた。

「決まっているだろう。金のためだ」

と答えた。しかし、少女は尚も食い下がる。

「どうして、そこまでしてお金が必要なんですか？」

「……嬢ちゃん、変わってるな」

「そうでもないです」

「金がいる。それだけのことだ」

「答えになっていません」

「……………」

暫時、沈黙。すると。

「娘がな」

会話が始まった。

「俺の娘が、重い心臓病を患っているのさ。手術には、アメリカの有名な医者には診せないといけないんだとき。その治療費がクソみたいに法外でな、一人の医者に診せるのに八百万もかかるんだとよ。ふざけた話だ。俺みたいないな一社会人に払える額じゃねえ。こんなことでもしねえと、娘は助けられないんだよ」

「俺はまあ、単なるダチなんだけどな。俺は会社からいきなりリストラされて、今になっちゃ、特に捨てるものもない。ならちよつとした事件でも起こしてやろうかってな。スキヤンダラスにある種の憧れがあつたつていうのもある。コイツと一蓮托生つても悪くねえかと思つたんだ」

「……………そうなんですか」

少女は納得といった様子で重々しく頷く。

ストックホルム症候群というものがある。今回のように、犯人と人質が長時間緊迫した環境下に置かれることで、双方の感情がある程度共有されてしまうというものだ。たとえば人質が、腹が減つたと訴える。人質に餓死されると困る犯人は、警察に対して食糧を要求する。逆も然り。人質はどうしても自分の命を最優先に考えるので、犯人を刺激しないように警察側の武力による強硬突破を望まない。本来はこんな短時間で築かれる関係ではないはずだが、少なくとも犯人の男二人は、少女にある種の感情移入を抱いているらしかつた。

しかし、少女はきつぱりと言った。

「ですが、それは悪です」

場の空気が凍ったのが分かった。

「娘さんの手術費が必要だと仰いましたね。では逆に訊きますが、貴方は娘さんの立場になって物事を考えたことがありますか？ 父親がそんなに手を汚してまで得たお金で命を長らえさせて、娘さんは心の底から喜べるでしょうか」

「なっ……！」

「もっと現実的な話をしましょう。恐らく貴方は、お金が手に入りさえすれば捕まっても構わないと思っただけの事件です。逃げ切れるわけがありません。貴方が捕まれば当然、世間に貴方の名前が知れ渡ります。貴方のご家族も含めてです。……そんな貴方の娘さんを、果たしてお医者さんは助けようとするでしょうか？ 百歩譲って病気は治ったとしましょう。ですがその後はいくことができるでしょうか？」

「て、てめっ」

みるみるうちに男の顔が紅潮していく。ストックホルミングに陥りかけていた状況だ、彼にしてみれば少なからず裏切られたと感じただろう。

「そっちの貴方も同じです。本当の友達だというのなら、どうして友達が悪の道に染まることを許したのです？ 本当に想っているとするならば、貴方は身体を張ってそれを阻止すべきだったのです。それに、本当に捨てるものが何もないのなら、それ以下が存在しないなら、これから先いくらでも上を目指すことができますはず。こんなに大それた真似をするだけの度胸があるのなら、それをどんな底から這い上がるための勇氣に、どうして変えなかったのですか？ 貴方がやっていることは友情でも義務感でもありません、ただの逃避です。辛い現実から目を背けたいがためにそれらしいことをでっち上げて、気が付かない振りをして逃げているだけに過ぎません」

「ぱあん！」

突如、乾いた音が響いた。

犯人が咄嗟に、拳銃で少女の肩に発砲したのだ。本当は、頭か心臓を狙ったのかもしれないが、震える指先では照準もままならず、結果的に命中したのは少女の左肩だった。

「あ、あ……」

反射的に撃ってしまったのだろう、犯人は茫然自失といった様子で銃を床に落としてしまう。

「……。ほら、凶星を指されたから最終的には暴力に訴えることしかできない。貴方達が本当に怖かったのは警察でも友達でも家族でもありません。《自分の弱い心に向き合うのが何より怖かったのでしょう》？」

「っ！ テメエ！」

いよいよ頭に血を昇らせた犯人の一人が、少女の首に向かって手を伸ばす。

そして、その瞬間僕は行動に移った。

物陰から飛び出し、襲いかかった犯人の足許をルシフェラーゼですくい取る。悲鳴を上げる隙すら与えない。逆さ吊りにされた男を一気に手繰り寄せ、そのまま僕は鳩尾に拳を叩き込む。死なない程度に手加減はしたつもりだ。男は白目を剥いて昏倒した。何が起きたかも分からなかったに違いない。

もう一人の男 さっき銃を撃った男は咄嗟のことに頭が回らなかったのか、しかし原始的な防衛反応ですぐさま銃を拾い上げ、僕を撃ち抜かんと狙いを絞る。が。

そんなものより。僕のルシフェラーゼの方が圧倒的に早い。

僕はセラの籠もった七千本の糸を袈裟懸けに《薙いだ》。研ぎ澄まされた七千の日本刀が一齐に襲い掛かったと覚えてくれればいい。全方位から振るわれる、視認不可能なほどに細く鋭い糸。逃げ道など、ない。

完全に殺すつもりだった。それが男に到達する刹那。

「だめっ！」

僕と男の間に、少女が立ちはだかった。

「なっ」

思わず糸を引き戻そうとして手首を返したが。

時既に遅し。

衣服を一切纏っていない少女の全身を、糸が引き裂いた。柔らかい肉が引き裂け、真紅の鮮血が迸る。出血多量か大量失血によるショックかは分からないが、間違いなく致命傷だ。

「う……うわあああ!!」

「……っ！」

混乱の極致に達した男が、悲鳴とともに引き金を絞る。銃弾が僕に向かって射出される。まぐれだろうが、狙いは正確に僕の眉間を捉えていた。

それをしかし僕は首を曲げて最小限の動作で回避する。耳許で、ひゅん、と空を裂く音が聞こえた。動きを止めることなく、僕は疾駆する。倒れ伏す少女を一足で飛び越え、勢いそのままに蹴撃を繰り出す。硬いローファアの爪先がこめかみにヒットし、男は苦痛の声を漏らすこともなく、ぐらんと身体を揺らせて気絶した。

「……とどめだ」

七千本の糸を一点に集中させ、男の心臓目がけて突き立てる。

だがその時。僕のズボンの裾を弱々しくも引つ張るものがあった。

「っ……だから……だめ、ですよ」

「」

少女が僕の足に手を伸ばし さっきの斬撃によって奇しくも縄も切れていたらしい 行動を止めさせていた。

「人殺しは……悪いことです」

……瀕死の重傷だったはずなのに。どうして。

さっき撃たれた肩の銃痕も、僕がスタスタに引き裂いた全身の傷も。出血は止まり、傷は瞬く間に消えていた。

そこで思い至る。

ナンバーズ。

《再生能力か》。

「……ナンバー24、『リジエネレイト』だな？」

「ナンバー24？ 『リジエネレイト』？ さあ？ なんのことでしよう？」

そう言っただけ彼女は、不敵に笑った。

その反応で確信する。

コイツは自身の能力を自覚している。自分がナンバーズだということも、自分の再生能力のことも。

すつくと立ち上がる少女。

「ともかく、人殺しは駄目です。それは悪いことです」

「……邪魔をするなら、お前から殺すぞ」

僕は目を細めて殺気を放つ。大気がぴりぴりと音を立てるほどに軋む。槍に見立てた糸を少女の喉元に向ける。だが少女は怖気づいた様子もなく、凜と立って言った。

「それは無理です。貴方に私は殺せません」

「何を根拠に……。僕は人殺しだ」

「嘘ですね」

「本当だ。僕は……人を手にかけてんだ」

《あの人》を。僕は確かに、この手で殺めたのだ。

「それは本当ですね。そして、そのことを心の底から悔やんでいる目です」

「っ」

「悔やんで、悔やんで、どうしようもなく自分を責め苛んでいる人の目です。過去に囚われて、未だに自分のことを赦しきれていない人の目です。だから、貴方には私を殺すことはできません」

「何を」

知ったような口を。

そう、続けようとした。続けたかった。

でも……続けられなかった。

僕の声が……どうしようもなく震えていたから。

「貴方は人殺しの罪の重さを知っています。命の重さを知っています。さつきまで忘れていた……いいえ、忘れたフリをして目を向けないようにしていた事実です。でも。さあどうしましょう？ 私が貴方の意識をそちらに向けさせてしまいました。目を背けていた真実を直視させてしまいました。貴方はもう自覚しています。さて、どうですか？ これでも私を殺せますか？ まだ私を殺せると虚勢を張りますか？」

「僕は……」

……どうして。

ルシフェラーゼを繰る指先が、震える。

心が 激しく震えてしまう。

どんなに力を入れようと、揺れて、震えて、ざわめいて 止まってくれない。

(翼。お前は)

封じ込めていた《あの人》の言葉が蘇る。

少女の言葉の響きが、どこか《あの人》の声と重なって 。
気が付けば。

僕はあの時と同じように 静かに頬を濡らしていた。

はじめ一滴だった涙を、いつの間にか、僕は滂沱として流していた。胸が締め付けられるように苦しい。息ができないくらいに、きつく、固く、強く縛り上げる 。

魂が、崩れる 。

「その涙が、貴方の本当の心です」

「……………」

「貴方は強い人です。強くて強くて、だけど同時にとても弱い人です。その弱さから目を背けないで下さい」

少女の言葉は、深海のように清く。天空のように高い。

「弱さがあるから強さがあるんです。強さがあるから弱さがあるんです。強さと弱さ。表と裏。光と闇。それは“翼”のようなもので

す。その両翼をなくさなければ、《どんなに兵器に近くても貴方も私も人間でしかありません》」

「っ！」

その言葉は、まるで真摯な聖女が捧げる祈りのようで。

僕は、実感するしかなかった。

（ああ、これが　　）

これが、《負けるということなんだな》、と。

僕の事は、ナンバーズを排除することだ。だから　　。

《どこにでもいる人間の少女》を排除することなど、出来ようはずがなかった。

この直後、銃声を聞き付けた警官隊が銀行内に強行突入するが、そこにいたのは縄で縛り上げられて気絶していた犯人と思しき二人の男だけだった。逮捕された犯人達が後に語った証言も、前後の記憶を喪失していたようで要領を得ず、真相は永遠に闇に葬られることとなる。

彼らの記憶を消した僕と、行方不明になった少女のみぞ知る、と
いったところだ。

その後、僕は少女を自宅まで抱いて帰った。まさか全裸の少女を天下の往來の下連れ歩くわけにもいかず、屋根から屋根へと飛び移ってである。……柔らかい胸やくびれた腰、瑞々しいヒップに直接触れるのは、僕も彼女も流石に抵抗があったが、まあ、不可抗力と
いうことにしておいて頂きたい。

彼女の両親は、ナンバーズ計画に携わっていた研究所職員だったらしい。とはいえ末端の中の末端もいいところで、研究内容はほとんど知らされていないかったようだ。割と初期に造られた彼女だったが、その能力は『再生^{リジエネレイト}』にのみ特化かつ限定されており身体的能力上昇の兆しもなかったため、研究員は戦力外と判断。代わりといたってはなんだが、セラも非常に安定しており暴走の心配もなかった

ので、処分という名目で早期に研究所から出ることを許されたという。以後は普通の人間として真つ当に両親と暮らしてきて今に至ることのこと。……当然、ある程度の誓約はつき、定期的に監視員が検証を行っているらしいが、どうやら所長もそのことまでは知らなかったようだ。

僕は携帯を取り出して、所長に電話した。

『真田真正だ』

数コールの後、所長がフルネームで出た。よくもまあ、あ行の文字を八文字も連続で噛まずに言えるものだと思なところで感心してしまった。

「わりい所長。任務失敗だわ」

僕は《不敵に笑って》言い放った。

「いや、失敗っていうのもおかしいな。そもそも、ナンバー24なんていなかったよ。そんな番号は存在しなかったんだよ。いたのはどこにでもいる女の子だけだった。ただの人間だよ。どこまでも優しく温かい、一人の人間だ。どこまでいっても人間以上でも以下でもない。それだけさ。というわけで、任務は取り消ししてことでオーケー？」

彼女と会うことはもう二度とないだろうな、と確信しつつ。 。
僕の初仕事は、ノーカウントとして記録に刻まれた。

で。およそ一ヶ月後。四月七日、白い雪に代わってピンクの桜が咲き誇る中、僕は私立相楽森学園に入学する。僕にとっては産まれてはじめての学校生活はしかし。

「「あ」

……一人の少女との出会いから幕を開けることになる。

沈黙は、ほんの一瞬。

そう。この出会いはアウト・オブ・ナンバー『エナジードレイン』と、ナンバー24『リジエネレイト』としてではなく。

「はじめまして、実川音葉です」

「はじめまして。綺羅衣翼だ。これから宜しく」
人間・綺羅衣翼と、人間・実川音葉としての出会いだった。
些細というならば、この上なく些細な出会い方である。

*

そうして出会ったのが今から二年ちよつと前。何の因果かずつと同じクラスで、友達を作るのが下手な僕の唯一にして最大の友人でいてくれたのが実川音葉という女の子だった。性格よし成績よしルックスよし。三年間通して委員長を務め続けたミス・パーフェクト。なにせ僕は彼女の全裸も目の当たりにしたことがあるため、こうして胸に顔を埋めるくらいは暗黙のうちには了解してくれている。傍目から見ればなんとも背德的な構図というか、一線を踏み越えている気がしないでもないが、勘違いしなくてもいい。これは、そこにやましい気持ちなど微塵も入る余地のない純粹な信頼関係である。いずれ音葉に彼氏ができて、もし音葉を泣かせるような軟弱な男だったら、僕はソイツのことを問答無用でぶん殴る。たとえ音葉の父親が許しても、神が許しても、僕は絶対に許さない。僕にとっての音葉はそれくらい大切な人だ。彼女の言葉のおかげで、僕は人間として生きてくることができたと言っても過言ではない。彼女は、僕の心の恩人なのだ。

(……それにしても)

音葉の胸は落ち着くなあ……、頭に血が上ってぽーっと温かくなってくる。お母さんの胸ってこんな感じなんだろうか。いや、僕にとっては女神様だね。……しかも、結構大きいんだよな、コイツ。三年前に見たときよりは明らかに大きくなっている。そりゃあまあ成長期なんだから成長はするだろうが、このサイズは一步間違えれば凶器だ。下手をすれば輝夜よりも巨乳なんじゃないだろうか。

「ところで綺羅衣君。そのまま聞いてね」

「ん？ どうした音葉あ」

「試しに“ちち”って言うってみて」

「？ 乳？」

「綺羅衣翼君。そのまままっすぐ上を向きなさい」

それが巧みな誘導尋問だと気が付いた時には、なにもかもが手遅れだった。

言われた通りゆっくり顔をあげると……。

ものすつごおくりい笑顔を浮かべた実川音葉がいた。

「綺羅衣君、今の変換だとんだかいやらしいこと考えてたよね？」

「お、音葉？」

「私ね、何事にも限度つてもものがあると思うんだ」

「あの……音葉様？」

「一体、綺羅衣君は何分間私の胸に顔を埋めているつもりかなあ？」

「え、えつと……五分くらい？」

「残念、五分三十七秒よ」

ニコニコと笑みを絶やすことなく言葉を紡ぐ音葉。

……怖い。君のその菩薩のような笑顔が、今はそこはかたく恐ろしいよ。

……すっかり忘れていた。

《実川音葉は、たとえ誰が相手であっても、正しいことは正しい、悪いことは悪いとはつきり言う女だということ》。

「更生する、と書いて蘇ると読みます」

「いいや！？ その変換では甦るとは読まないぞ!？」

「少し……頭冷やそうか」

「なのはさん!？ StrikerS 第八話のなのはさんですか!？」

実川音葉という女は、時に女神にも菩薩にもなり。

時に悪鬼にも羅刹にもなるにもなる。

音葉はすうつと大きく息を吸い込んで。

「そこに正座しなさい!!!」

本日の教訓。

『おとの胸はも五分まで』。

E P I S O D E 3 : R E G E N E R A T E - e n d .

3・2・「その両翼をなくさなければ」負けるということ（後書き）

翼と音葉の出会いのシーンです。ギャグパートは少々抑えてシリアスなお話になっています。次章からは第二章でちらっと名前だけ出てきた、シヨット・G・スカイハイが主役の話です。どうぞお楽しみ下さい。

4 - 1 残念少女「半年前の夏」(前書き)

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・半角の（ ） で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・全角の（ ） で書かれている部分は主人公の情景補足
- ・《 》 で書かれている部分は傍点(強調)

4 - 1 残念少女「半年前の夏」

「たすく翼。仕事だ」
*

この時点で嫌な予感確信へと変わった。

事の発端は八月十五日水曜日。夏期休暇も中盤を過ぎ、受験生は受験を制するかどうかの瀬戸際、アーティストは恋せよと口を揃えて歌い、甲子園を巡る高校野球選抜の盛り上がりが最高にヒートアップし（僕には興味ないが）、サラリーマンは夏のボーナスへの期待に心躍らせ、全国各地で毎夜の如く大輪の花火が打ち上げられる、とにかく世間のあちらこちらが色んな意味で熱狂する一日にかかってきた、所長こと真田まきた真正からの一本の電話が始まりだった。

所長は人に不吉を直感させる天才なんじゃないかと思う。「喜ぶ」という、ば行五段活用動詞の命令形であるところの「喜べ」の四字を口にしなかったというだけでこんなにも僕を不安にさせるとは、どこぞのごつい装飾銃を持った黒猫さんも真つ青だ。

「すまない。今回は今までの依頼とは毛色が違ってだな……、標的はナンバースではなく……いや、大局的に見てナンバース関連の事件とも呼べなくもないんだが……とにかく異例の状況なんだ。できればお前を頼りたくはなかったんだが、如何せん現状で最も適任なのはお前しかいないんだ。とりあえず、端的に結論だけ言おう」
「アンタらしくもないな……妙に奥歯に物が挟まったような言い方だけ」

例によって「端的」でもなければ「結論だけ」でもないのだが、いい加減疲れたのでスルーする。

そして。次に発せられた言葉は流石に僕も予想していなかった。

「翼。アマゾンに飛んで欲しい」

「はあああああ!!!?」

思わず素っ頓狂な声を出してしまう。電話を受けたのが自宅であった、もし屋外だったら周囲からさぞかし奇異の視線で見られていたことだろう。

「アマゾンって……南アメリカのブラジル北部に位置するアマゾン盆地を流れる、水量・流域面積ともに世界一の大河であるところのアマゾン川のアマゾン？」

「他にどのアマゾンがある？」

「……あるじゃん。本・CD・DVD、インテリアに飲食料まで売っている便利なインターネット通販サイトが。」

「知らないのか？」

「そりやまた……随分な遠征だな。しかしなんでアマゾン？」

確かに僕は過去に何度か“異能殺し”として海外に派遣されたことがあるが、流石に密林ははじめてだ。先住民の中にナンバースでもいたのだろうか？

実にミステリアスだ。

「それなんだが……、私としても言いづらいことではあるのだ。確かに部下の尻拭いは私がしなければならぬことの一つに違いないが、だからといって」

更に言い淀む所長。僕はより一層嫌な予感を募らせると同時に、所長の奥歯に挟まるような人物に一人だけ心当たりがあった。

所長は諦めたように嘆息して。

「すまん。シヨットがミスった」

僕と同僚である、シヨット・G・スカイハイ。

本人曰く、GはgoodでgreatでgorgeousのGらしいのだが……。

この際だから僕ははっきり言ってやる。

シヨット。お前のGは愚鈍のGだよ。

*

「というわけで、アマゾンに飛ぶことになりました」

僕は輝夜かくやの家を訪れていた。

目的は一応旅立ちの報告と、長期間の滞在になるかもしれない血を与えておくためだ。先月末以来、およそ一週間に一度の頻度で血を与えており三日前にも飲ませたので大丈夫だとは思うが、念のためだ。それ以外のイベントは今のところない。キスはおるかデートもまだである。それもそのはず、彼女は日中外に出たがらないのだ。第三者から見れば、なんとも冷めた出来立てカップルだろう。「アマゾン？ アマゾンっていうと、あの……」

首を傾げる輝夜。現代っ子である彼女にとってもやはり、アマゾンと聞いたら熱帯雨林ではなくAmazonを連想するのか。

「シリーズ歴代中最もグロテスクなお面を被って悪の怪人と戦う、バイクに乗ったバイオレンスな正義の味方の」

「それは四代目仮面ライダーだ！ 山本大介さんだよ！」

「怒りが頂点に達して『アー・マー・ゾーン！』と叫ぶことにより変身するのよね」

「確かに間違っではないが！！」

お前はいつの時代の女の子だ！？ 絶対に平成生まれじゃないだろう！！

「特撮ヒーローのくせに、ストーリーと戦い方があまりに猟奇的でダークだったので当時の子供達に引かれて、当初好調だった視聴率が低迷、第六話でモグラ獣人が仲間になったことをきっかけに大きく方向転換を余儀なくされたんでしたっけ」

「お前実は制作スタッフだったんじゃないだろうな！？」

説明が仔細すぎる！

「そんなわけないでしょう。この前ウィキペディアで調べたのよ」

「そこは普通の現代っ子なんだな！ ていうかお前の家パソコンなんてないのに、どこで調べたんだ！？」

「こんなこともあるうかと、学園の図書室で」

「どんな不測の事態を予想してるんだよ！ しかも昭和四十九年か

ら五十年に亘って放映された特撮テレビのことを学園のパソコンで調べる高校三年生の女子ってかなりシユールな凶柄だぞ!」

お前はニュータイプか!?

「いえ、どちらかというところコーディネイターよ」

「ついに心の声を読まれた!? しかも比較的新しい!」

三十年近くのジェネレーションギャップがある!

「ていうか仮にそうだとしても、コーディネイターは別に超能力者じゃないから心の声なんて読めないだろ!」

遺伝子操作によって優れた頭脳と肉体を持って産まれてきた人間のことだ! ああ、しかもそう考えるとナンバーズと近いものを感じる!

「ところが、私レベルになるとできるのよ。戦闘中にOSを書き換えるくらいお茶の子さいさいだわ。愛機はZGMF-X20A、ストライクフリーダムガンダムよ」

「キラ出た! デスノートじゃない方の!」

「指をパチンと鳴らすとどこからともなく飛んでくるわ」

「それは違うシリーズの設定じゃないか!?!」

「個人的にはDESTEINY第三十九話の『当たれえええ!!』が好きね」

「僅か二分で二十五機のザクとグフが全滅だと!?!」

「あとは、第三クール以降のオープニングのカガリがどうして下着姿なのか、気になってしょうがないのよね」

「それは確かに誰もが疑問に思っているだろうけども!」

「ここまで言っちゃって大丈夫か!?!
「ていうか激しく話が脱線している! 元はアマゾンネタだったはずだ!」

一体誰が熱帯雨林からガンダムを連想できるというのか。

謎だ。

「ああ、そうね。綺羅衣君がアマゾンに行くという話だったわね」

「やっとなんてきてくれたか……」

「綺羅衣君。今まで楽しかったわ。向こうに行っても私のことを忘れないでね」

「すぐに戻ってくるよ！　なに転校していくクラスメイトみたいに言っただよ！」

「月に一度はお手紙頂戴ね。中身は読まずに捨てるし返事は面倒だから書かないけど」

「お前本当に僕の彼女か！？」

「いや、彼女云々よりもクラスメイトとして、一人間としてどうなんだそれは！？」

「話を戻すぞ。とりあえず、しばらく会えないかもしれないから挨拶と、念のために血を飲ませに来た」

「べつ、別にアンタのことなんてなんとも思っただからねっ。しばらく会えないからって寂しくなんてないんだからねっ」

「いや、そんな唐突に無表情でツンデレキャラを演じられても困るんだが」

棒読みだし。

「時間がないんでな。ほら、いいからさっさと飲めよ」
「ん」

輝夜は素直に小さく頷くと、僕の首筋に口を近付けて噛み付いた。良くも悪くも、こちら辺の抵抗は最近なくなってきた。

ちう、ちう、ちう。

赤ん坊が母乳を飲むような吸血音。そこはかとなく、吸われている方の僕もくすぐりたい。

「れる」

「！」

ぞくぞくつとした。不意打ち気味に輝夜が僕の首筋を舌で舐めたのだ。ざらざらとした舌が、首という性感帯を巧みに刺激する。咄嗟に奔った電流のような快感に驚いて、僕は離れてしまう。

「何すんだよ！？」

「血が垂れていたのよ」

「だからって舐め取ることないだろう！」

「役得じゃない。気持ち良かったでしょう？」

「……………」

そう言っつて妖艶に笑う輝夜。

正直かなり気持ち良かった。

「ごちそうさま」

「もういいのか？」

今日はいつもより量が少ない気がするが。

「この間もらったばかりでしょう。いくら美味しいからって、いくらでも飲み続けられるわけじゃないわ」

「まあ、確かに」

「今回の仕事は」

また話が切り替わる。この女はいつだつて突然だ。

「危ない、の？」

「……………全く危なくないと言えば、嘘になるな」

「そう……………」

そして沈黙。

暫時。

「それじゃあ、僕は行くからな。そろそろ出ないと待ち合わせの時間に間に合わない」

「……………」

輝夜は答えない。彼女にとって“無反応”という反応が意味するところを、ここ最近で僕はなんとなく感じ取っていた。

独りにしてほしくない。

そういう無言の意思表示なのだ、これは。

彼女は、“孤独”をひどく恐れている。本人は隠しているつもりかもしれないが、別れ際に見せる切なげな表情はどんなに強気を装っても見え見えだ。

「……………ちゃんと帰ってくるから」

だから、僕が返す言葉は決まっている。

再び沈黙の帳が下りるが。

「……良かった」

と、蚊の鳴くような細かい声で彼女が呟く。

「……何が良かった、だよ。帰ってくるのは当たり前だろ」

「ええ。その台詞の後に、『その時は結婚しよう』なんて言われなくて良かったと言っているのよ」

「は？」

輝夜^{ひめ}緋姫は、その名に恥じぬよう^{あだ}婀娜っぽく笑って放言する。

「それって、完全に死亡フラグでしょう？ そんなこと口走っていたら、両足ちよん切っても絶対に行かせなかつたわ」

彼女らしいと言えば、この上なくらしい。

僕は満足して彼女の家を後にした。

*

「はー。密猟者を発見して捕獲するには成功したものの。へー。途中でうっかり“ブレット”を一発落としてしまって。ほー。それを運悪く野生動物が飲み込んでしまったのでバイオハザード発生、と。ふーん」

「う……、なにさ綺羅衣。何か含みのある言い方じゃない」

密林へ向かうUN事務所所有のジェットヘリ内。シヨットの説明を受けて僕は嫌味つたらしく復唱した。

シヨット・G・スカイハイ。輝夜が美人、音葉が美女というのなら、シヨットは美少女といったところだろう。緩くウェーブのかかったアッシュブロンドの髪をボブカットでセットし、強気そうなスライブルーの吊り目に日本人離れた高い鼻の持ち主、まるでフランス人形のような端麗な容姿を持っている。ただし人形と異なるのは、皮膚は健康的に日焼けし、いい感じに生気を溢れさせているということだ。

ただ彼女の場合……とにかく残念なのだ。外国人にしては妙にちっさい。身長は145cmしかなく、背延びをしても頭が僕の胸の

辺りまでしか届かない。第二次性徴の途中で止まってしまったような十六歳である。彼女の名誉のために敢えて多くは語らないが、輝夜や音葉おとばと違って胸も……とても残念な感じだ。

「け、結果的にターゲットである密猟者は無事捕まえることができただからっ！ その途中でちよつと失敗しちゃっただけでしょ！ 卵が先か卵焼きが先かみたいなものだよ！」

「いや、それは間違いなく卵が先だ」

「うっ……。じゃ、じゃあ卵焼きが先か目玉焼きが先か！」

「確かにそれは気紛れシェフの匙加減一つだな」

このように『 が先か××が先か』みたいな例えも、彼女の残念な一面だ。自分で言うには、『答えの出ない禅問答』の例として挙げているらしいのだが、シヨットは大抵の場合明らかに答えが出るので墓穴ばかりを掘る。一体彼女は何人分の墓穴を掘るつもりなのだろうかというくらいに掘りまくる。

僕のツッコミに対し、ぷいっといった様子でそっぽを向くシヨット。シャツの間から覗く左の鎖骨の辺りには、“410”という数字が印字されている。

そう。シヨット・G・スカイハイはナンバーズである。半年前に僕が確保して、以来同僚として一緒に仕事をしている。とはいっても、彼女はどちらかという対ナンバーズ用の人員ではなく、専らワシントン条約保護団体への派遣任務に充てられている。

今更だが、UN事務所は完全にナンバーズ対策の事務所ではない。表向きは人材派遣会社として世界中に広くネットワークを広げている。僕が捕まえた比較的安全なナンバーズや、矯正プログラムを受けた人々が様々なジャンルの業務へと派遣されており、特にシヨットは、その能力を活かしてワシントン条約を違反する密猟者の撲滅ならびに絶滅危惧種保護運動を行っている。

十一人収容できるヘリ内部には、コックピットで操舵している操縦士と副操縦士を除くと僕達二人だけだ。機内は静かで、喧しいシヨットが黙ってしまえばプロペラの回転音だけが耳につく。

シヨットはすっかりご機嫌斜めの様子だ。任務をミスしてしまった自己嫌悪も手伝って、いつでも勝気な彼女もしかし、この時ばかりは大人しい。

この際だ。少し昔話をしよう。これは暇潰しでもあり、それと同時にシヨット・G・スカイハイという人物を説明するには必要不可欠な話だ。

半年前に遡る。二月某日の話だ。《半年前の夏》の話である。ナンバー410『シヨット』との対決の話は。

綺羅衣翼にとって、ナンバー24『リジエネレイト』の事件が過去唯一の敗戦だとするならば。

ナンバー410『シヨット』の事件は、過去最大の苦戦である。

*

『翼。喜べ。仕事だ』

事の発端は二月十三日火曜日。所謂バレンタインデーのおかげで全国のチョコレート会社の売上が一年で最高に達し、男性は気になるあの子からもらえるのかと誰もがウキウキし、女性は気になる彼にあげるべく必死でチョコレートを作るのに誰もが寒い中汗を流し、来るべき決戦の時に胸を躍らせるバレンタインデー前日にかかった。所長からの電話が始まりだった。

「分かった。とりあえずすぐに事務所に向かうよ」

例によって所長の脱線話を聞かされるのはうんざりだったので、早々に先手を打って半ば強引に通話を切った。幸いにして今は下校途中。僕は踵を返して事務所へと足を進めた。

事務所の所長室をノックする。一瞬の間も置かずに「入れ」という声。

「おっ、早かったな」

所長は眼鏡を外してレンズを拭いているところだった。すぐさまかけ直して常の真田真正が完成する。

「で。今日の仕事ってというのは？」

「そう急くな翼。急いで事は仕損じると言っぞ」

そちらから一方的に呼び出しておいて相変わらざるの物言いだ、所長はわざとらしく咳払いを一つして切り出した。

「『銀の暁』という団体を知っているか？」

「？ いや、聞いたことないな」

「ふむ。まあそうだろうな。では、『ヘヴンズゲート』という組織は？」

「ああ、それなら聞いたことあるな。ひと月くらい前にロシア転覆を企てた過激派テロ組織だろ、確か」

所長は僕の確認に首肯だけで返す。合っていたようだ。

「ヘヴンズゲート」。一言で済ませれば僕が言った通り、裏の業界では有名な過激派テロ組織である。国家の要人を主なターゲットとして世界を転々としていた。大半の幹部はブラックリストに載って国際手配されており、総員数百名にも及ぶ大規模な集団だ。射殺、毒殺、爆殺などは可愛いもので、酷いものになると要人が宿泊するホテルそのものを爆破して、一般人もろとも殺害するという過激な手段も厭わない、とにかく血気溢れる連中なのだ。

しかし、その組織は先月に根絶されることになる。

「その『ヘヴンズゲート』を壊滅させたのが、『銀の暁』だ」

「は？ いや、『ヘヴンズゲート』はロシア警察が逮捕したんじゃないのか？」

「表向きはな。本当は『銀の暁』が幹部連中を無力化して未然に防いだのだ。『ヘヴンズゲート』は《目的のためならなんでもやる》連中だぞ？ 一国の警察が、犠牲者一人を出すこともなく捕らえることなど出来はすまい」

「まあ言われてみれば……。で、その『銀の暁』っていうのはなんなんだよ」

「世間一般でいうところの義賊集団だ。世界各地を転々と回っては弱きを助け強きを挫く、まあよくある義賊だよ。たった九名しかない少数精鋭の特殊部隊だ、お前が知らないのも無理はない。」

前置きが長くなつたな。今回のターゲットは、その『銀の暁』の盟主である、この少女だ」

前置きが長くなるのはいつものことなので気にしないが、ようやく本題に入ったらしい。所長は驚異的とも言える速度での打鍵でノートパソコンのデータを立ち上げた。

僕はそのディスプレイを覗き見る。映し出されていたのは、綺麗なアッシュブロンドを短く切り揃えた欧州風の外見を持った、まだ年端もいかぬ少女だった。よく出来たフランス人形だと言われれば信じてしまう程に秀麗な顔立ち。義賊集団の盟主とはとても思えない。……が、左の鎖骨付近にナンバリングされた“410”という数字がナンバーズであるなよりの証左である。

「ショット・G・スカイハイ。イギリスのウェールズで五月八日誕生。十五歳。身長145cm、体重37kg、血液型AB型のRh+。見ての通り、ナンバー410、能力名『ショット』だ。振るわれたナンバリングを隠そうともしていない」

所長が立ち上げたデータを順に読み上げていく。

「『銀の暁』自体は、犠牲者を出さないことで有名だが。この少女、実は裏で個人的に他のナンバーズを暗殺してきているらしい」

「キン・スレイヤ同族殺し、つてことか？」

「ああ」

僕が“異能殺し”なら、彼女は“同族殺し”ということか。ナンバーズ同士の争いは、別に珍しいことでもないが……。

「経歴を見ると、このショット・G・スカイハイ、少なくともこれまで四十人のナンバーズを殺してきている。理由までは分からんが……、ここまで拡大してくると流石に放任はできないのでは」

破壊された研究所から逃れられた成功体は、UN事務所でも把握しきれしていないが、およそ百人前後と言われている。そのうち半数近くを一人のナンバーズが殺してきたというのだ。そもそも、ナンバーズ計画は凶悪犯罪に対抗する特殊人間として産み出されたはずだ。徒に数が減れば計画は完全に破綻することとなる。

「四百番台……。今回の仕事、存外骨が折れるかもしれんぞ翼」

「？ 四百番台が何かあるのか？」

僕は今まで二桁も百番台、後期に産み出された六百番台とも戦闘を繰り返してきたが、どれも大した苦労もなく完遂してきた。少なくとも、ナンバー24『リジエネレイト』みのりかわ 実川音葉のような強敵は目の当たりにしたことがない。

「四百番ともなると、研究も落ち着いてセラもかなり安定してきたあたりだし、能力も高性能なものが多い。研究所が破壊されるまでにプログラムとして十分な戦闘経験も積んでいる。即ち能力と経験、双方が最もバランスがいいのが統計的に見て、四百番台なのだ。少なくとも、彼女はナンバーズとしての能力を《完全に自覚した上で》使っている。経歴から察するに天性のカリスマもあるようだし、彼女は間違いなく相当なやり手だぞ。……私の勘から言わせてもらえば、コイツは今までにない要注意人物だ」

コッソ、とディスプレイを指で弾きつつ、まあ、暴走の危険はないだろうがな、と付け加える所長。

「……肝に銘じておくよ。で、その『ショット』は今どこにいるんだ？ 各地を転々としている連中にもかかわらず僕に仕事を振るっていうことは、現在の居場所は判明しているんだろ？」

「ああ、ここだ」

所長はそう言って、懐から一枚の紙切れを取り出す。はじめ地図かと思っただが、その割には妙に小さくて細長い。それは、飛行機の手ケットだった。

……地球の南半球はオーストラリア、キャンベラ行きの。フライトは今日のナイト便になっている。

「あ、あの……所長さん？」

本当に。こついうところは。つくづく。抜け目がない。

所長は滅多に見せない笑顔を浮かべて言い放った。

「《向こうは暑いだろうからな》。気を付けて行ってこい」

そんなわけで。密かに期待していた音葉からのバレンタイン
チョコを、今年は頂けないらしい。
後ろ髪引かれる思いで、僕は日本を旅立った。

4 - 1 残念少女「半年前の夏」(後書き)

シヨット・G・スカイハイが満を持して……かどつかは微妙なところですが、登場です。翼曰く『残念な奴』ですが、どういう形で対決することになるのか。次回は彼女が八面六臂の活躍を見せることでしょう。お楽しみ下さい。

4 - 2 ・切り札対切り札「踏み切る脚は」(前書き)

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・半角の() で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・全角の() で書かれている部分は主人公の情景補足
- ・《》で書かれている部分は傍点(強調)

4 - 2 ・切り札対切り札「踏み切る脚は」

飛行機内で一晩を明かして、キャンベラに着いた。はいいものの、ここからどう行動しろというのか。僕は今更になって気が付いた。

*

確かに二月のオーストラリアは暑かった。念のため持ってきたジャケットは、おそらく使うことなく終わるだろう。

言うまでもなく、オーストラリアは広い。いくら僕でもこんな広大な島国の中から一人の人間のセラを感じ取るのは不可能だ。闇雲に探すにしてもやはり広すぎる。さしもの所長も気が回らなかったのか、あるいはわざと気付いていない振り装っていたのか。

(きつと後者だ……)

僕は責任転嫁しつつ、残暑が厳しいキャンベラ市内を当て所なく練り歩いていた。そして、それを発見したのは全くの僥倖だった。

都市中央部から若干離れた路地裏。『KEEP OUT』と書かれた黄色のテープで周囲を囲まれ、警察官が現場検証をしている場面を目撃したのは。野次馬が集まって騒ぎを起こし、警官の仕事を一層増やしている。

僕は野次馬の列には混ざらず、ビルの屋上からその光景を見物していた。血臭のするその路地裏から、殺人事件だと判断するのは容易かった。

遺体は頭部と心臓、二ヶ所に穴が空いていた。否、頭部に関して は穴というよりも、ほとんどが原型を留めておらず、脳漿が派手に吹き飛んでいるというスプラッターな状態だった。新人と思われる警官が口を押さえて道端で汚物を吐き出している。『大口径のライフルでも持ち出したのか』『被害者の身元を確認しろ』『事件発生はいつだ』、と警察官は遺体処理と現場検証に忙しなく動き回っている。

僕は、そこからセラの残滓を嗅ぎ取った。そして、被害者の腕に刻印された“567”という数字も目撃した。

『個人的に他のナンバーズを暗殺してきているらしい』
“同族殺し”。

僕はその殺人が『シヨット』による犯行だと確信した。ターゲットは近くにいる。

ナンバー567の死体の状態やセラの気配からして、殺人方法は遠距離からの狙撃。事件発生は昨夜、僕が機内で揺られている間だろう。特に計画的犯行とは思えない。セラを感じた相手をとにかく射殺するという通り魔的犯行だろう。

つまり、『シヨット』は夜に動く。

僕は夜になるのを待った。あんな事件が起こったせいで、陽が沈むと町はすっかり静かになった。好都合だ、僕にとっても、『シヨット』にとっても。

意識すれば、僕はセラを消すことができる。だが敢えて、僕はいつも通りにあるいはいつも以上にセラを垂れ流しつつ市内を闊歩した。もしかしたら囮作戦だと気付かれているかもしれないが、データで見たシヨット・G・スカイハイの顔を思い出す。数多もの戦場を駆け抜けてきた強気な吊り目、強い意志に満ちた山猫の如き双眸から、こんな千載一遇のチャンスを逃すはずがないと確信していた。

「^{アンチ}解封」

ルシフェラーゼを解除して、いつ如何なる時いつ如何なる方角からの奇襲にも対応できるよう万全の注意を払って、物静かなストリートを歩くこと一時間弱。

《それ》は、唐突に飛来した。

「ッ！」

背後から、頭部と心臓目掛けて放たれた正確無比な二発の銃弾。僕は咄嗟に糸を操って壁を作り、それを防ぐ。

(どこから　！？)

油断はなかった。セラの気配なども感じなかった。ただ感じ取ったのは襲い掛かってくる殺意の塊のみ。才能と経験と修練の黄金律で研ぎ澄まされた第六感が、僕を自然に行動に移らせていた。

襲い掛かってきたのは、間違いなく《銃弾》。実弾ではなくとも、それは紛れもない遠距離からの銃撃である。それである以上、銃弾の軌跡を辿ればそこに狙撃手がいるのは自明の理　！

そして、僕は彼女と邂逅する。

彼女は五階建てのビルの屋上に立っていた。右手を突き出して。遮蔽物は一切なく、その距離、直線にして実に八百メートル。

彼女は何の照準器もなく、ただ己の視力と第六の感覚のみを頼みに、その能力である『シヨット』を以て僕の頭部と心臓を寸分違わず撃ち抜かんとしたのだ。

（　　莫迦な！）

通常ならば、最新鋭のライフルスコープを使っても狙撃に難しい距離である。それを彼女は　。

所長をして要注意人物と言わしめた理由がここにきて明らかになった。真に恐ろしいのは能力そのものよりも、洗練された精神力。

僕が今まで屠ってきた、強力な力に感^{かま}じて暴君を気取っていた連中とは根底の部分からしてわけが違う。瞬間的に僕はナンバー410『シヨット』を過去最強の敵と見なして　。

「ナンバー410『シヨット』。貴様を……消去する！」^{デリート}

その言葉を発すると同時に、僕のエンジンに闘志という火が入る。“異能殺し”としての綺羅衣翼が、紅蓮のように燃え上がる　！

次の瞬間には、『シヨット』は右腕からセラの籠もった弾丸を乱射してきた。今度は狙いをつけてのものではない、が、それでも僕に向けられる殺気の塊であるのは変わらない。総弾数把握　五、否、六発！

弾速はとてつもなく速い。が、僕の動体視力に加え八百メートルもの長距離射撃。正面から向き合っている今となっては、ルシフェ

ラーゼによる防御をするまでもない。僕は左右や後ろにステップすることでこれを回避する。魔弾は悉く外れ、アスファルトの地面を抉り取る。

後退する僕に向けて更なる魔弾が発射される。今度は三発。一つはバックステップによる回避、残る二つはその場で左足を軸に回転することで難なく回避した。

徐々に後ずさる僕。だがそれでいい。《この距離では僕を射抜くことは不可能だと理解させる》ことさえできれば、それで。

その僅か九発の弾丸で、僕は既に弾道と弾速を完全に把握した。スピードは速いが、付与された特殊能力はなし。今の僕にとってはそれは大した脅威ではなかった。直線的な軌跡を描く弾丸は、僅かに逸らすだけでその本来の能力を発揮できなくなる。

八百メートル先にいる少女が、忌々しげに齒軋りする。アンタ、何者よ　聞こえるはずのない怨嗟の聲が僕にまで響いたような気がした。

『シヨット』は五階建てビルの屋上の鉄柵を乗り越えて、飛び降りる。最低でも十数メートルへの落下を、彼女は躊躇なく行ったのだ。流石はナンバーズ、身体能力はやはり常人のそれではない。

それと同時に僕は疾走する。ルシフェラーゼの射程距離は最大で三百メートル。このままでは防戦一方と判断しての接近、なんとしても射程内　三百メートル以内に捉えなければならない。

『シヨット』の着地はまさに鮮やかだった。膝の屈伸を最大限に利用してアスファルトの大地に舞い降りたのだ。足首をひねったりしている様子は一切ない。猫を彷彿とさせる柔軟性。成程、やはり身体能力も抜群だということか。

着地した『シヨット』と駆け付けた僕の距離は目算百メートル。ようやく僕の攻撃範囲内に入った。僕はルシフェラーゼを一本に束ねて鞭のように振るう。それはあたかも象の鼻のような極太の鞭になり、少女を襲撃する。

彼女はそれを大きくサイドステップして危なげなく躲した。行き

場のなくした鞭は固いアスファルトを容赦なく陥没させる。

サイドステップした『シヨット』もすぐさま、反撃を行う。右手を突き出しての魔弾を射出する。三発の銃弾はしかし、すぐさま攻撃から防御に移行した僕の糸によって弾かれた。

更に、僕も追撃をかける。鞭から楯に変形させた糸を今度は細く多く、錐のように変形させて『シヨット』を取り囲む。総数十七本、前後左右上下から研ぎ澄まされた錐が一斉に襲い掛かる。狙いを定めるまでもなく、逃げ道などない！

それをしかし『シヨット』はなんと、むしろ緩やかとさえ思わせる体捌きで全てを一瞬にして回避してみせる。あるものは右手先から発射した銃弾によつて弾き、あるものはしなやかな体軀を前傾にして。一切の無駄のない足運びは、まるで彼女が幻影の存在であるかのように朧な像を月下に浮かび上がらせた。

追い討ちをかけるように足許を絡め取るうと糸を操るも、それも果たして徒労に終わった。体重を感じさせないかのような華麗なバツクステップですると糸から逃れ、仕返しと言わんばかりに右手から僕目掛けて銃弾を二連続で速射する。僕とて負けじと身体を横転させて難なく回避する。

そして、暫時、膠着状態となる。僕も彼女も身じろぎ一つせず、ただお互いを見つめ合っていた。

「……アンタ、強いね」

少女 『シヨット』が呟く。賞賛の言葉とは裏腹に、憎々しげに唾棄するように言い捨てる。

「そういうお前も、なかなかどうして大したもんだよ、シヨット・G・スカイハイ。お前は間違いなく僕が相手にしてきたナンバーズの中じゃあ過去最強の敵だ」

「あたしの、あたし達のことを知ってるんだ。……じゃあ、尚更生かしておけないね」

より一層敵意を滲ませて『シヨット』 いや、シヨットは言い放つ。柳眉を逆立てて発するプレッシャーは、145cmしかない

矮軀を一回りも二回りも大きく見せた。

そして次の瞬間、その右手から六発の魔弾が乱射された。最初の奇襲とは異なり、距離は八分の一にまで縮んでいる。凄まじい弾速を誇るそれを、僕はルシフェラーゼを巨大な楯にして防御する。

その刹那の攻防にさえ、ショットは次の行動に移っていた。前方からの一直線なそれでは通用しないと見たのか、彼女は僕を飛び越える形で高々と跳躍する。更に空中からの狙撃を行い、僕を襲う。動いている間の狙撃は、一度やってみれば分かるが、思っている以上に難解高度なものだ。ましてやそれは放物線、移動の軌跡は曲線を描く。そんな状況下に於いて、彼女は間違いない僕を的として寸分違わず狙い撃っていた。なんとという練達のスナイパー。それだけを見ても彼女がどれくらいの修羅場を潜り抜けてきたことが窺えた。

だが、熟練度に関しては僕だつて引けを取らない。降り注ぐ雨のような銃撃を側転するような形で回避し、それと同時にルシフェラーゼを振るい、反撃に出る。糸を硬化させ鋭利な刃と化し、その白刃がショットを襲う。

ショットは僕の背後に着地し、迎え撃つ。とはいえ防御手段を持たない彼女は回避を選択するしかない。着地の反動をも利用した鮮やかなバツク転を披露し距離を取る。しかし、伸縮自在の僕の糸は執念深い蛇のようにそれを追尾する。着地の瞬間を狙って足の腱を切り裂くつもりで伸びた刃。

殺った、と思った瞬間、その剣尖はしかし弾かれる。とてつもない速度でのクイック・ドロウ。魔術的とさえ思える速さと正確さを併せ持った五発の銃弾は全くの同時に全くの同じ箇所を撃ち込まれ、刃が大きく逸れる。その僅かな隙にもルシフェラーゼの射程圏外に離脱するショット。息もつかせぬ攻防の末、その距離は再び大きく空き、再度膠着状態が訪れる。

「っ！ このっ！」

僕と彼女の距離はおよそ三百五十メートル、その距離を維持した

状態を打ち破ったのはやはりシヨットの方だった。シヨットは右手から一発の銃弾を撃ち出す。

僕はその銃弾を回避するでもなく、防御するでもなく、弾き飛ばすでもなく。

両断した。

「っ！？」

セラで編まれたシヨットの銃弾は実体を持たない。だがしかし、同じくセラで編まれた僕の霊装ルシフェラーゼを以てすれば、この程度のことは造作もないことである。毒を以て毒を制す、というように、魔力は魔力を以て制する。

「無駄だ。僕のルシフェラーゼは総本数七千本。硬度はダイヤモンドだつて上回る。お前の銃弾は確かに速くて威力も大したもんだし、命中精度に関しては、悔しいけど素直に負けを認めてやる。だが、僕の目はもうそのどれもが慣れた。守備に徹するにしても、一発あたり二十本程度もあれば防ぎきれぬ。言っていることが分かるか？ お前は同時に都合三百五十発を同時に撃ち出さないことには僕の守りは突破できない」

これまでの攻防で同時に撃ち出された弾数は、最大で六発。ましてやその弾丸はシヨットのセラを《外部に放出する》ことで精製されている。遠からず彼女のセラが底をつくのは明らかだった。

「……確かに。でもね、侮らないで欲しいね」

しかしシヨットは、僕の台詞に同意すると同時に反駁する。彼女はもう何度目かも分からない弾丸を右手から撃ち出した。

ただし、僕の真上に向けて。

そこには街灯があった。シヨットの一撃の直撃をもろに受けた街灯は、紙細工のような脆さで破壊された。粉々になった蛍光灯のガラスが僕の頭上から降り注ぐ。僕はそれを咄嗟に後ろにステップして回避したのだが。

シヨットは、その間を埋めるように地面を駆け抜けて僕に高速で肉薄する。降り注ぐガラス片の中に敢えて身を投じたのだ。夏とい

う季節柄、露出した肌を割れたガラスが傷付けつつ、しかし顔だけは左腕でガードしながら迷うことなく接近する。

そして、僕のバックステップが地面に着くよりも早く、華奢な彼女の身体から放たれた肘鉄が僕の鳩尾に叩き込まれた。

「がっ
！」

僅かに空中という、衝撃を和らげることも叶わない体勢での確に鳩尾に深々と叩き込まれた肘鉄。衝撃が腹を通して背中まで突き抜け、僕は思わず苦悶の声を上げる。

「お生憎様。こちらら弾撃つだけが能じゃないんだよ
！」

腕にいくつもの細かい切り傷を作っても、彼女の戦意は微塵も衰えない。むしろ彼女は好機と見て更なる連係攻撃を繰り出す。

しゃがみ込んでの鎌のような足払い。柔術などで着地の寸前に足を払われると成す術もなく倒れ落ちるように、それがまさにこの状況だった。足払いを食らった僕は、さっきの衝撃のせいもあり、防衛できずに倒れ伏す。

はずだった。

更なる連撃。彼女はしゃがみ込んだ状態から瞬間的に脚力を爆発させて、強烈なサマーソルトキックを放ったのだ。僅か40kg弱しかないはずの少女の全体重を乗せて放たれた華麗な一撃。下顎をこの上なく的確に捉え、僕はとうとう宙を舞った。

下溜め上キックから放たれたアクロバティックなサマーソルト。

……お前はガイルか。

そんなツツコミも口にできず、僕の体躯は軽々と宙を舞う。そこに、とどめと言わんばかりの第四撃が繰り出される。

サマーソルトを放ったため天地反転し僕に背中を向けた状態の彼女が、空中で体幹を捻って僕に向けて右手を伸ばしたのだ。見事というしかないボディバランス。この状態でショットの一撃を受けたら、さしもの僕もただでは済むまい。しかし、僕は顎にいい蹴りを頂いてしまったため、いくらか脳震盪に近いものを起こしており意識を繋ぎ止めるのでやっとな体だ。

だがしかし。“異能殺し”として徹底的に鍛え上げられた僕の身体は、無意識下に於いても自己防衛本能を働かせる。

ルシフェラーゼを伸ばして街灯　今シヨットが破壊したものは別の街灯である　に糸を巻き付け、一気に縮める。僕の身体はワイヤーアクション俳優よろしく《引っ張り上げられた》。

「ッ！？」

シヨットの目が驚愕に見開かれる（と言っても実際の僕はそれどころではないので、反応からそう感じ取っただけだ）。右手から放たれたシヨットは、僕の身体すれすれを掠めていった。僕は右手で操る糸によつて街灯に吊るされている状態だ。傍目から見れば相当に奇妙な格好だろう。数瞬の間を置いて、明滅していた視界が明瞭になってくる。僕は街灯に巻き付けられていた糸を解き、地面に着地する。一瞬遅れて、今の今まで僕が吊り下がっていた場所をシヨットの魔弾が通過していく。

「いつつ……。……マジで容赦ねえなテメェ」

そう口を発すると、僕は口の中に違和感を覚えた。ぺっ、と唾を吐き捨てると、どうやら口の中を切っていたらしい、血が混じっていた。

「でも今ので仕留め切れなかったのは痛かったな。今のが全力だとしたら、肉弾戦でも僕の方が上だ。ちやちな小細工は二度も通用しないぜ」

事実、シヨットの顔には焦りの表情が浮かんでいる。女子が近距離戦闘であればほどの立ち回りをやってみせたのは流石に驚かされたが、あくまで先に不意打ちありきだ。純粋なインファイトならガイルよりリュウの方が強い。

みたび、膠着状態。シヨットは右手を突き出したまま撃ち出すこともなく微動だにせず、僕もおいそれと距離を縮めるわけにはいかない。その距離、三百二十メートル弱。僕にとってはギリギリで射程外だ。

やがて、それを砕いたのはやはりシヨットの方だった。

「……仕方ないな」

諦めたように嘆息するシヨット。右腕をようやく下ろし、だが言葉とは裏腹に戦意は未だに喪失してはいなかった。

「これは使いたくなかったけど」

そう言つて、シヨットはジーンズのポケットに左手を突っ込み、ある物を取り出した。

「……“これ”、なーんだ？」

なぞなぞを出すようなあどけない子供らしい発言にそぐわない、酷薄な笑みを浮かべつつ言つて《それ》を摘み上げた。

それを見た瞬間、僕の全身が総毛立った。

それは、弾だった。普通の銃弾ではない。薬莖でもなければ雷管でもない、極めて真球に近い、直径二センチ程度の小さなまん丸で綺麗な銀色の弾。大きめのBB弾を思い浮かべてくれれば分かり易いだろうそれは、一見すれば単なる球であるが、僕はその正体を一瞬で看破した。

《とんでもなく濃密なセラが籠められた弾である》。

「その様子だと察してみたいだね。……これはね、“ブレット”っていうあたしの切り札。使い捨てタイプだから、使いたくなかったけど」

そう言つて、その弾　ブレットを左の掌に乗せて手を伸ばし、胸の高さくらいでかざす。すると、そのブレットはあたかもシヨットが超能力でも使つたかのように、自然に浮き上がって空中でふわふわと浮かぶ。

「小細工が通用しないなら、大細工で決めるしかないよね」

宙に浮かぶそれを包み込むように、シヨットは右手を構える。

「百聞は一感に如かず。……威力はその身で味わつてみて」

……その諺は微妙に間違っているが、ツツコミを入れる余裕は僕にはなかった。シヨットの右手の中に包み込まれたブレットが揺れ出して、籠められたセラが急速に胎動を始めたからだ。

次の瞬間　。

「二番　！！」

それは、銃弾というよりも光弾と称するのが相応しい速度で射出された　！

速度も威力も質量も、今まで放たれてきたショットとは雲泥の差だ。今までの銃弾がまるで水鉄砲のそれであるくらいの威力を伴った、銃というよりもそれはバズーカだった。

僕は七千本のルシフェラーゼを総動員して楯を作る。加えてそれを二つに折り曲げ、都合一万四千本の糸を完全防御に回す！　それでもなければアレは防げない。それほどまでに凝縮された一撃だった。

どおおん……！！！！

「　つつつ！！」

着弾、衝撃、激しい爆発音。この世に存在するおよそ全てのものを爆破せんと放たれたそれは、果たしてバズーカと何が違おう。

僕は楯を通してその驚異的な威力を確かに味わった。僕の人外の脚力を以て強く踏ん張っていたから吹き飛ばされこそしなかったものの、数十メートルにわたって後退させられ、履いていたアサルトブーツの踵が硬いコンクリートの地面に食い込んで見事な二本の平行線を描いていた。このアサルトブーツは特注の物で、滑りにくさが売り文句のスクリュービラムをより一層強化して、氷上でも普通の床と同様に歩けるくらいのソールを備えている。だがそれもこの一撃でおじやんだ。靴が壊れたというのが足の感触で分かる（事ここに至って、それこそ瑣末な問題だが）。まともに喰らってれば、跡形もなく消し飛ばされたらだろう。事実、爆発した僕の周囲と、そこに至るまでの一直線の轍わだちはまるでミサイルの直撃を受けたかのように灰燼に帰していた。あまりの強力無比な一撃に、僕は驚愕の声をあげる余裕さえない。これがもしも人通りの多い日中や繁華街で使用されていたかと思うと、想像するだけでぞつとする。

超絶。その一言に尽きる。

「……呆れた」

それを放った張本人 ショット・G・スカイハイは、呆れたというよりむしろ、信じられないといった表情で佇んでいた。

「まさか、ブレットを防ぎきるなんて……っ」

その超絶なまでの破壊を行ったところのブレットは、輝かしい銀の色素は失われ単なる白い球に成り下がりが、溜められていたセラは完全に喪失されていた。成程、宣言通り使い捨てタイプというわけか。しかしショット本人のセラは喪失するどころか、ますます負の方向に一方通行で増大していく。

「……ちつとも防ぎきれてねえよ。糸が指に食い込んで痛いし、靴は壊れたし、爆風は防ぎきれなかったから全身あちこちが痛い」

「減らず口をつ……！」

僕のフォローはしかし、彼女の怒気を助長させる結果にしかならなかったようだ。愛くるしい顔をますます憎々しげに歪めて、今にも眼光で僕を射殺さんばかりにきつく見据えてくる。

「因みに、ブレットは全部で十発あるわ。今ので一発使い切っちゃったけど、それでもまだ九発。今泣いて許しを請えば、楽に殺してあげるよ」

今の破壊力があと九発。それはこの綺羅衣翼をしてさえ戦慄の極致に至らしめるに十分だった。近距離・中距離・遠距離での戦闘全てに秀でた彼女はまだ、僕の予想の遙か斜め上に行く切り札、ジョーカーを隠し持っていた。

だが僕は屈するわけにはいかない。

「許しを請うって？ 馬鹿言え。僕がお前から何の恨みを買ったっていうんだ」

その言葉に、とうとうショットは灼熱の憤激を烈火として燃え滾らせた。

「っ！ 上等じゃない！ こうなったら肉片一つも残してやらないんだから……！」

そう叫ぶと、ショットは再度ポケットに手をつ込み銀色の銃弾を三つ掴み取った。先刻同様、左掌を胸の辺りでかざし、三発の銀

色のブレットは中空に浮かび上がる。

「七番！ 六番！ 重ねて十番！ ……装填完了。撃つ抜く腕ならこっちが遙かに上よ！ 全弾ぶち抜いてあげる ……！」

単純計算で先程の三倍のセラ。莫大なまでのその濃度は、一步間違えれば毒ガスに近い。普通の人間でさえ毒として中^あてられかねないそれを、間接的にはいえ操るシヨットという少女には、改めて賛辞を贈らざるを得ない。

どうやら『十番』のブレットには『重ねがけ』の能力が備わっているようだ。単体では威力を持たない代わりに、他のブレットの威力を倍加させるタイプらしい。それを『七番』と『六番』に注いだ。即ち、実際には四倍の破壊力を持った光弾が撃ち出されるということである。

そんなものがここで炸裂したらどうなるか。当然僕の命はないだろうし、それに留まらず周囲一帯は完全に地図から消え去るだろう。破壊の爪痕はそれだけでは収まらず、もしかしたら当事者であるシヨットも巻き込まれて死ぬかもしれない。もしかしたら本人はダメージを被らない何らかの魔術的要素が含まれているのかもしれないが、その可能性は極めて低いだろう。どうやら頭に血が昇り過ぎているらしい、まるで周りのことが見えていない様子のシヨットは、ある意味自身の力を持って余して暴走したナンバーズが辿る末路であるとも言える。

つまり、それだけは避けなければならない。

これまでのシヨット・G・スカイハイの言動は全体的に的を射ていると言っている。能力を無駄にすることもなく、体術も見事。戦い方一つとっても、熱^{いさ}り立ってこそいたものの今まで冷静さを欠いてはいなかった。切り札を最後まで隠し持っていたことといい、『小細工が通用しないなら大細工で決める』と言った判断力といい、『撃ち抜く腕はこちらが上』という、決して自分の力を過信しているわけではない発言といい、彼女はどれをとっても優秀だ。紛れもなくかつてない最恐の敵である。

だがシヨット。お前には一つだけ、しかし致命的な誤算がある。

お前はついぞ気付いていない。

《切り札を隠していたのは僕も同様だということに》。

撃ち抜く腕は、お前が遙かに上だが。

《踏み切る脚》は、僕が圧倒的に上だ。

「えっ!？」

シヨットが驚愕に動きを止める。否、彼女は撃ち滅ぼすべき標的を見失ったことで動きを止めざるを得なかったのだ。

さもありません。

《四百メートル近い距離を僕は一足にしてゼロに還し、彼女の背後に移動していた》のだから。

瞬転しゅんてん。僕が体得している唯一の術式にして、ジョーカー。

傍から見ている側にとって、一見すれば　　というか何度見たところで　瞬間移動にしか見えないだろうが、厳密には違う。これは僕にとって、突き詰めていけば突き詰めていくほど《単なる一歩》でしかない。

《此処》と《其処》の距離を、幾何学的要素を無視して《強引に縮める》という行為。それにより、僕の視界に移る場所へなら一歩で歩いていける。

分かり易く説明するために、僕の苦手の数学を敢えて例に用いよう。空間座標x軸、y軸、z軸における一点(a, b, c)と、もう一点(a', b', c')をノートに正確に書き表したとする。そして二点を書いたそのノートを《折り曲げる》ことによって、二点を限りなく近付ける《という作業》。そうして近接した二点を、僕は跨ぐだけなのである。

強いて挙げれば、所謂仙人と呼ばれるような人物が使えるとされる“縮地法”に限りなく似ていると言えるだろう。

僕個人の感覚的には、結局単なる一足でありそれ以上でもそれ以下でもない。但し、これには膨大な量のセラを消耗するので、一日に使えるのは精々一度きりだ。

故に、切り札。

そうして僕は、突然視界から僕が消えて慌てふためくショットの背後に回り込む。気配に気付いた彼女が振り返るが、僕にしてみればあまりにも緩慢な挙措でしかない。一瞬にしてルシフェラーゼを操り、彼女の全身を縛り上げる　！
「なっ！」

簀巻き状態にされたショット。虎の子であるブレットは三発とも行き場を失くして地面に落下し、彼女は捕縛から逃れようと悶えるが、七千本のルシフェラーゼを前にしてそれはあまりにも無力な抵抗だ。あれほどの威力を誇るブレットの直撃にすら耐え切ったこの神通無比な霊装を引き裂ける存在など、僕は寡聞にして聞いたことがない。そしておそらくは未来永劫聞くことはないであろう。

僕は縛り上げられた彼女を肩に担いで　。

「どっせえええい！！！」

気合一閃。柔道でいう一本背負いでショットを地面に叩き付けた。心技体、どれもが完璧な文句の付けようがない一本。身動きがままならない彼女は受け身の取りようもなく、全身を強打することになる。

良い子は真似すんな。

「がはっ……………！」

ショットはあまりの衝撃に、逆に気絶することさえできず、叩き付けられた激痛からか縛り上げられた羞恥からか、しばしの間もんどりを打っていたが、暴れるだけ無駄だと判断したのか　。

「……………ちくしょうっ！」

最後は小汚く安っぽい悪党のお決まりの台詞を吐き捨てて、やがて大人しくなった。

*

僕は場所を移していた。さっきまでショットと絶戦を繰り広げていた場所は、間もなくブレットによる爆発音を聞き付けた警察官達が駆け付けてきた。つい昨夜に射殺事件があったばかりだということもあり、流石に放任はできなかつただろう。僕がその場を離脱するのは大勢の警官隊が集つてきたのは、本当に僅差だった。

流石に僕もかなり困憊していたし靴も壊れていたため、一人ならまだしもショットを抱えてあまり遠くまで跳んでいくことはできなかった。今いるのは戦闘場所から歩いて二十分足らずの小さな公園だった。

かくいうショットはというと。

「……殺せっ」

と、さっきからしきりに物騒な言葉を繰り返していた。まだ敵意を隠そうともしない以上ルシフェラーゼを解くわけにもいかず、ぐるぐる巻きの状態でベンチに横たえて寝かせてある。

「そう叫ぶなよ……。僕だって好き好んでこんなことやってるわけじゃないんだからさ。……改めて確認するが、ナンバー410『ショット』だな？」

「……だつたら何さ」

「僕はな、一応お前を消去する^{デリート}ためにやってきたわけなんだけど。

お前の事情も尋ねておきたかつたんだよ。なんでナンバーズでありながら、同じナンバーズを闇雲に殺す？」

「……アンタなんかの説明する必要はない！」

「立場を弁えるよ、ショット・G・スカイハイ。お前は明らかに僕に一方的に牙を剥いて、全力で戦つた上で負けた。お前にとっては喋る必要のないことかもしれないが、僕には訊く権利があることだ。まだお前の命があるのだから、僕の気分一つで変わるんだぞ」

「……………っ」

忌々しげに舌打ちをするショット。少女のような稚い顔立ちはしかし、この場に於いて親の仇を見るような憎悪に満ちた形相に成り

変わっている。

しばらく、沈黙の帳が下りる。夏の夜気は静かに、僕とショットを包み込む。

「……………あたしは」

沈黙に耐え切れなくなったのか、とうとう重い口を開くショット。

そして、続く言葉は驚くべき内容だった。

「あたしは 『ジ・アース』を探しているんだよ」

「っ！」

『ジ・アース』。それは忌むべき名前。全てのナンバーズの、いや、全人類の敵といっても過言ではない超存在だ。

そう。『ジ・アース』は『ナンバーズ・チルドレン計画』をたつた一人で破綻させた張本人である。研究所を破壊した以降の動向は不明。UN事務所も血眼になって探し続けているナンバーズだ。『ナンバー409のこと、アンタは知ってる？』

「いや……………悪いが知らないな。お前の一つ上ということは」

「そう。ナンバー409『ブレット』はあたしの血の繋がったお姉ちゃんだよ。あたしが大好きだったお姉ちゃん。ナンバー409と410は二人で一体のナンバーズとして産み出されたんだ。『ブレット』が生成した弾を『ショット』が撃つ。……………それをアイツ、『ジ・アース』は…………っ」

過去の出来事を思い出しているのか。滲み出る負の感情はこれまで僕に対して向けていたそれとは桁違いだ。

「アイツは、あたしの目の前でお姉ちゃんを殺したんだ…………っ！」

血を吐くように告白するショット。

「しかも、アイツはあたしをむざむざ逃がしたんだっ！ まるであたしのことなんて興味ないみたいが無視して……………！ あたしはその時、あまりの恐怖に指先一つ動かさなかった！ あたしの力が……………『ショット』の力があれば後ろから撃ち殺してやることだってできたのに！ あたしは震えて震えて、ただその背中を見送るしかなかった！！」

断腸の思いで言葉を発し続ける。果たして彼女が本当に憎んでいるのは『ジ・アース』か。あるいは過去の自分自身か。

「あたしは命からがら研究所から逃げ出すことができた。十発のブレットは、お姉ちゃんの唯一の形見。でも憎しみを捨てきれなくて……、それからだよ。あたしがナンバーズを殺し始めたのは。手当たり次第に殺していけば、いずれは『ジ・アース』に辿り着けると信じて!!」

僕は、確かにアウト・オブ・ナンバーとして産み出されて、研究を崩壊させた『ジ・アース』のことは聞いていた。だが僕は彼女のように、私怨で『ジ・アース』を追っているわけではない。だから彼女の気持ちは……大切な人を殺された恨みの大きさは計り知れなかった。

「『銀の暁』を立ち上げたのは、それがもしかしたら『ジ・アース』に繋がる可能性が少しでも上がるかもしれないから。テロ組織をやっつけていたのなんて、そのついでだよ。」

……これはね、あたしにとって戦争なんだよ。あたしが死ぬのが先か、『ジ・アース』を殺すのが先か　そんな答えの出ない禅問答を、あたしは延々と繰り返してきた」

「……………」
僕は……綺羅衣翼は、“異能殺し”としてコイツを排除すべきか？　確かにコイツは何人も同族を手にかけてきた殺人者だ。それは覆りようのない事実であり、その罪は償うべきだとは思う。

だがだからといって、『罪を償う』『イコール『能力を消す』であるとは限らない。たとえナンバーズとしての能力を失ったところで彼女の『ジ・アース』に対する憎しみは消えまい。結果として挙げられる最大の未来の可能性は、無力になったコイツが野垂れ死ぬ姿だ。それは、僕が間接的に人殺しを犯すこととどう違う？

僕は知っている。人の命の重さを。人を殺すことの重みを。それは《あの人》と音葉に教えてもらった、決して曲げられない僕の矜持だ。

僕が葛藤している様子を怪訝に思ったのか、シヨットは口を開いた。

「アンタだってナンバーズなんだ。『ジ・アース』に対する憎しみだってあるんだろ」

ちよつと聞き捨てならない台詞を耳にした。

「いや、僕はナンバーズじゃないぞ?」

「へっ……?」

さつきまでの威勢の良さはどこへやら。僕のなんでもない一言に彼女は今までの凜々しさが嘘のような間の抜けた声で言った。

「え? ええ? えええ!? ちよ、ちよつと待ってよ。だって、セラが……」

「そういえば言っでなかったな。僕の名前は綺羅衣翼。アウト・オブ・ナンバー『エナジードレイン』だよ」

「まじ!?!?」

まじ。

戦闘中にもこんな大声は出さなかったぞこの女。実は本気じゃなかったのか。僕は結構本気だったんだが。ちよつと自信を失くすぞ。

「あ、あ、あ、アウト・オブ・ナンバーって、『アンチ・ナンバーズ計画』の!?!? アンチユー!?!?」

「イエス、アイアム」

何故に付加疑問文。面倒だけど分かりづらいから説明すると『aren't you?』である。アンチとaren'tがかかって無駄に高尚な駄洒落になっている。

「納得できないなら、ボディチェックでもしてみるか? 全身どこ見てもナンバーリングはされていないぞ」

「あ……、あ、え、い、う、え、お、あ、お……」

突然発声練習を始めやがった。

謎だ。

……まさかコイツ。

「お前、もしかして僕がナンバーズだと勘違いして襲ってきたのか？」

「……………」
黙りやがった。さっきの発声練習が水泡に帰した。しかし、この場に於ける沈黙は何よりも如実に雄弁に肯定を表している。

……つまり。綺羅衣翼の過去最大の苦戦は、彼女の壮大な勘違いから発生したものだっただけというわけだ。

そう、この時だ。僕がショット・G・スカイハイという女は残念なヤツだと確信したのは。

この後ショットを連れて僕は帰国する。所長に紹介してみれば、一も二もなく。

『是非我が社に欲しい逸材じゃないか』

という即決で、早速UN事務所の傘下に加わることになる。

後日ショットは語る。

『あの対決はあたしの中ではドローだからね！ それこそお風呂が先か、ご飯が先かみたいな話なんだからっ！』

明らかに僕の勝利だったはずだが、確かに二者択一は永遠に出来そうにない例えではあった。更に。

『綺羅衣が一番隊隊長なら、あたしは二番隊隊長！ 別にどっちが強いかじゃないんだよ！ 入った順番が先っただけ！ それこそ姉が先か、妹が先かみたいなもん！！』

もしも妹が先だったら、その家族にはとてもへヴィな秘密がある模様だが。言うまでもなく、僕は一番隊隊長など名乗ったことはない。しかも、さる死神さん達にとっての一番隊と二番隊の間には深刻な溝があったはず。

山本総隊長と碎蜂だぞ。
ソニイフォン

そうして、期せずしてナンバー410『ショット』こと、ショット・G・スカイハイは僕達の強力な味方になることになる。

余談だが。翌日登校した僕に、音葉からある物を手渡される。僕はそんなイベントのことなどすっかり忘れていたのだが。それは、チョコレートだった。

二日遅れで渡された、ハッピーバレンタインである。

*

回想終わり。

“現在”の僕はシヨットとバディを組み、アマゾンの密林深くへと向かうべく、旧式のジープに乗っている。危険が隣り合わせという都合上、ヘリから降りたところで運転はシヨットに交代している。ジープが道なき道をかき分けつつ車体を激しく揺らして猛進する。三半規管が弱い人にとっては地獄だろうが、これでもマシな方だ。こつこつという僻地での任務に慣れているシヨットは、車の運転が異様に上手い。

野生動物が目に見えて少ない。密林は、一種異様な空気に満ちていた。セラの気配と、血の残り香だ。気配は、近い。

「もうすぐだな……」

僕がそう呟いた瞬間。

《ある巨大な物体》がジープの前に飛び出してきた。

「シヨット！」

「分かってるよ！」

急ハンドルを切って停止するジープ。まさか野生の動物が、わざわざ車の稼働音を聞き付けて飛び出してきたとは思えない。停止するのが先か、僕が車を飛び降りたのが先かは、それこそシヨットではないが、定かではない。遅れてシヨットも駆け付けてくる。そして、その物体の正体を確認した。

サーベルタイガーだった。更新世に絶滅されたとされるネコ科の肉食獣。

……死んでいた。腹部を大きく噛み千切られ、特徴である巨大な

犬歯は片方が根元から折れている。

「穏やかじゃないな……なんで絶滅種であるサーベルタイガーがこんな密林で、死体になって飛び出してくるんだ？　なあシヨット？」
僕はわざとらしく話を振る。

「……さあね。大方、滅多にミスしないことで有名な天才スナイパーの生涯最大の汚点の可哀想な犠牲者かしら」

僕もシヨットも、とつくに気付いている。

ずしん、ずしんと、大きな足音を立てて
ずしやり、ずしやりと、草木をかき分けつつ

こちらに向けて接近してくる、セラを放つ何物かの存在を。

そして、ソレは現れる。

「ギヤオオオオオオオ！！！」

身の毛もよだつ雄叫びをあげて、現れたソレ。遠くで羽を休めていた鳥達が、木々から一斉に飛び立つ。一枚一枚が刃物のような緑色の鱗に覆われた、六メートルは優にあるうかという巨大な体躯。鋭利な爪に杭のような牙。頭には二本の角が雄々しくそそり立っている。腕はまさに丸太、短い足はしかしそれだけで僕の体積を上回る程に太い。背中から蝙蝠のような翼を生やし、二足歩行で現れたソレ。

「……なあシヨット。アレをどうしろと？」

「……うん、まあ。あたしもあそこまで急成長してるとは思わなかった」

ソレは威嚇のように、さも当たり前のように大きく裂けた口から炎のブレスを吐いた。赤い炎と緑の体色がコントラストを描く。

現代に蘇ったドラゴンだった。

To be continued...

4 - 2 ・切り札対切り札「踏み切る脚は」(後書き)

この章でシヨットの戦闘能力、並びに残念ぶりが発揮されます。次章では魔獣VS翼・シヨットのコンビ。Episode 4も終盤です。乞うご期待。

4 - 3 ・蘇る魔竜「坊やはもうおねむの時間だ」(前書き)

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・半角の（ ）で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・全角の（ ）で書かれている部分は主人公の情景補足
- ・《 》で書かれている部分は傍点(強調)

4 - 3 ・蘇る魔竜「坊やはもうおねむの時間だ」

*

最初は小さなトカゲだったらしい。それをシヨットが落としたブレット　圧縮された高濃度のセラの塊を飲み込んでしまい、見る見るうちに肥大化。それでも最初は精々がメートルほどの体長だったのが、他の野生動物を次々と食すことで今の姿　神代の時を生きると思われた伝説のドラゴンの姿に至る。どうやら弱いながらも感染力があるらしい。おそらく、さっきのサーベルタイガーも普通のライオンか虎だったのだろう。噛み付くなり引っ搔かれるなりして感染して進化（退化？）したと思われる。人外魔境の代名詞とも言えるアマゾン川周囲の熱帯雨林は、今やノンフィクションのジュラシックパークと化していた。

そうこうしているうちにも　。
ぶうん！

「うお……っ」と

丸太のような前足が振るわれ、襲い掛かる。次の瞬間、僕が立っていた地面は何十センチも大きく抉れ、岩石が落下したかのような足跡が残された。小さな石はますます微細な破片となって礫と化し、土砂が噴水のように巻き上がる。

「はっ！」

その腕を、シヨットが撃ち貫く。彼女の銃弾は貫くだけには留まらず、ドラゴンの腕は肘関節の部分から先が破碎された。

「ギヤオオオオ……！」

苦痛にか、叫びを上げるドラゴン。だがしかし　。
「っ！？」

その腕は、あっという間に再生が始まる。数秒も経てば、それは元通りの腕に直っていた。

「な、なんでっ……っ？」

「蜥蜴の尻尾切りつてところか……。それが異常なまでの速度で全身に行き渡っているんだろっ……さっ！」

僕はルシフェラーゼを振るって捕縛を試みる。七千本の極細の糸が絡み付き、動きを鈍らせる。

だが、鈍らせるだけだった。あまりに巨大な体躯全身を縛り上げることはできずに、首から上　どこからが首なのかは正確にはよく分からないが　のみを締め上げ行動を縛る。

ドラゴンは、巻き付かれた糸という異物感が不快なのか、抵抗を示す。神通無比を誇る強度のルシフェラーゼは、千切れこそしないだろうがしかし、みちみちと厭な音を立てて万力の如き力に張力の限界までに伸びる。

「ぐっ……この、馬鹿力がっ……」

だが、霊装そのものは神通無比の強度を誇っているとはいえ、それを操る僕の腕力は無限ではない。確かに人外離れした抜群の身体能力を持ってはいるものの、伝説の魔獣にはいくらなんでも匹敵しない。

そしてドラゴンは僕の糸から逃れんと、大きく下から上へと首を振るって糸ごと僕を吹き飛ばした　！

「うおおっ!？」

「綺羅衣っ!」

トランポリンで大きく弾んだかのように頭上に吹き飛ばされる。

僕を包む、何ともいわれぬ浮遊感。Gが一気に押し掛かり、思わず吐きそうになった。高々と何十メートルも宙に舞った僕へと反撃しようとして、ドラゴンは口から紅蓮の炎を吐き出す。

「ちいっ　!」

空中では回避もままならない。僕はルシフェラーゼを手繰り寄せ、即席の火避けの壁を作成してブレスを防ぐ。直撃は免れたものの、爆ぜた火の粉と熱風は防ぎようがなく、かなり熱い思いをすることになった。

シヨットは顎の上があったドラゴンの顔面を狙い撃つ。かつてアス

ファルトの地面すら穿ったそれは、しかしヤツの顔面を僅かに逸らせるだけの結果に終わった。傷一つついていない。

「な、なんて硬度してんの!? あたしのシヨットを喰らって無傷だなんて……」

その間にも僕は着地する。土でできた人工でない地面に着地するには極力注意を払わなければならない。苔などでぬかるんでいる可能性があるからだ。僕のアサルトブーツ（半年前にブレットの威力によって破壊されたのと同じ特注品）は滑って転倒するのを免れる手助けをしてくれる。

「こりゃあ……想像以上に厄介だぞ」

呟く僕を無視して、ドラゴンは尻尾を振るう。千年樹のようなそれがしなり、勢いを以て襲撃するのだ。まともに直撃すればバラバラになりかねない。僕もシヨットもまとめて薙ごうと振るわれたそれを、僕とシヨットは両者共に示し合わせたかのように跳躍して回避する。

その時はそれ以外に選択肢はなかったのだが、彼（？）にしてみれば連携技の初手に過ぎなかつたらしい。僕らに向けて野太い手を伸ばす。二人まとめて掴もうと伸びたそれを空中で避けるのは至難の業だ。

シヨットは咄嗟にその腕に銃弾を連射するが、それでも硬い鱗に覆われた怪腕は止まらない。僕はルシフェラーゼでその辺りの木の枝にでも巻き付けて縮めれば避けられただろうが。

「なっ? 綺羅衣!？」

僕が巻き付けたのは枝ではなく、シヨットの身体だった。そうして彼女を放り投げ、ドラゴンの腕から逃げさせる。

結果として、僕はその怪腕に捕らわれてしまう。

「ぐうっ!」

一トンはあるつかという凄まじい握力でぎりぎり締め上げられる。生身の人間であったなら即座に握り潰されていたことだろう。だが、僕だって一方的に握り潰されるなんてまっぴらだ。ドラゴン

の足を糸で絡め取る。彼の短足一本ならばルシフェラーゼで固定させられる。

「ふっ！」

僕はその糸を力の限り引っ張り上げる。変な方向に掬い取られたドラゴンはその巨躯のバランスを崩し、倒れ伏す。

その直前、仕返しと言わんばかりに僕を白球に見立てたかのように投擲した。

「っ！」

倒れながらの投球だったので、サイドスローとアンダースローの中間くらいで投げ出される僕。不十分な体勢だったにもかかわらず、それを補って余りある怪力、肘と手首のスナップのみで放られた僕は、時速二百キロもの速度で吹き飛ばされる。堅い樹木の幹に激突し、背筋を一気に鈍痛が走り抜ける。

直後、ずずうん……！ と大きな音を立ててドラゴンの身体が横に倒れる。既にルシフェラーゼは回収し、僕の手許に戻っている。

(好機！)

僕は痛みも顧みず接敵する。苔にまみれた樹の根を踏み切り、疾走する。

『エナジードレイン』。

ヤツがナンバーズであるショットのプレットを飲み込んだことによつて怪獣になってしまったとするならば、ナンバーズの能力のせいでトカゲからドラゴンに変貌してしまったとするならば、理論上ナンバーズの能力を悉く分解する僕の『エナジードレイン』で力を消滅させることができるはず！

一瞬の隙さえあればいい。一瞬でもヤツに触れて僕の能力が発動させることさえできれば、それで。

「綺羅衣！ 横っ！」

「ッ！」

迂闊。

僕としたことが、平時とは毛色が違うターゲット、平時とは違う

状況下に置かれたことで知らないうちに熱くなっていたらしい。正面しか見えていなかった僕は、横から強襲するドラゴンの尾に目がいかなかった。

(やば)

そう考えはしたものの、身体が思考に追い付かない。避けるためにはあまりに行動を起こすのが遅すぎた。防御するのも最早叶わない横薙ぎに払われたそれを、僕はレフトサイドからモロに喰らう。

「ぶ！」

直撃ならば五体満足ではいられなかっただろう。辛うじて右に跳んで勢いを殺すことには成功したものの、激痛に胃の中の汚物どころか胃そのものを吐き出すくらい激痛を受ける。さっきのが打球だとすれば、これはまさに打球。再び樹木に激突。するだけには留まらず、堅い幹を突き破り、遙か遠方に弾き飛ばされた。意識は保っているものの、自分の身体が大気を裂く感覚と、目まぐるしく高速で流れていく風景に眩暈を覚える。

弾き飛ばされた先には、川があった。

(まズッ)

僕はルシフェラーゼを伸ばし近くの枝に巻き付けることによって、川に落下するのを辛くも防ぐ。なんととっても、ここはアマゾン川である。川の中には肉食で有名なピラニアがうようよと泳いでいる。野生のそれは色彩鮮やかで意外にも綺麗だったが、こんなところでそんな連中の餌になるのは御免被る。

ルシフェラーゼの長さを縮め、ぐるんと逆返りして木の枝の上に着地する。

「いつ……」

身体の損傷の度合をチェックする。いくらか和らげはしたものの、尻尾による襲撃を受けた左半身はダメージがひどい。左腕が動かない。これは間違いなく折れてるな……。肋骨も、何本かイッているだろう。さっき強打した背中は大したことはない。右半身もさしたるダメージなし。幸いにも、樹を貫通したことで逆にダメージを喰

らわなかったということだろう。

「ちよつとばかり……やり過ぎだよなあ？ 爬虫類」

音しか聴こえないが、今頃シヨットは単身ドラゴンと戦闘を繰り広げているだろう。応急処置もないままに、僕は木から木へ、枝から枝へと最短距離で跳躍する。直線距離にして二キロ近く吹き飛ばされたらしい。まったく、恐ろしい破壊力だ。

数秒のうちに、シヨットの許へ辿り着く。彼女は明らかに苦戦していた。彼女の魔弾は硬い表皮に阻まれ決定的なダメージを与えてはおらず、よしんばガードを突き破ってもドラゴンはすぐに回復してしまう。音葉も真つ青の治癒力だ。

だがしかし、シヨットが通用しなくてもブレットを使用すればあの程度の守りはあつてないようなものだ。あの破壊力を以てすれば、ドラゴンの体躯ごとき容易く貫通してのけるだろう。

けれど、彼女は決して切り札を使用しない。最後の手段としてとっておいている、というわけではない。《使う意思が全くないのだ》。

「グアアアアッ！！」

怪腕が上段から振り下ろされる。シヨットはそれをサイドに大きくステップすることで回避するが、彼女の背後にあつた、僕らがここまで乗ってきたジープを直撃し、耐久力の高さで有名なジープはしかし、プラモデルの玩具のように一瞬にして見るも無残な鉄塊と化した。

魔弾を連射するシヨット。だがそれらは呆気なく弾かれ、ドラゴンは口を大きく開いてシヨットを噛み千切ろうと 否、喰らい尽くそうとする。

大きく開かれた口は、145cmしかないシヨットの矮躯を一呑みで喰らい尽くすのは容易い。獰猛なまでの牙をざらりと煌めかせ、彼女に襲い掛かる。

だが、それは最大の勝機。いくら表面が硬い鱗に覆われていても、口内は別だ。粘膜という薄布に覆われただけのウィークポイント。

シヨットの銃撃を以てすれば、それは苦もなく貫通し、頭部を破碎するだろう。どんなに優れた治療能力を有していたとしても、頭部を失っては回復の隙もなく死に至らしめるのに十分だ。そこを撃ち抜きさえすれば、ドラゴンの命を難なく奪い去ることができるのは自明の理。シヨット本人はもとより、僕でさえ瞭然の事実。

だが僕は知っている。

シヨット。お前のGは愚鈍のGで。

それとおんなじくらい、愚直のGだ。

だからこそ、自分の命が危機に瀕しているこの状況下ですら、無辜の命を奪うのを躊躇う。

ドラゴンは口を大きく開いてシヨットに迫り。

シヨットは右手を突き出したままの状態で硬直し。

僕は、ルシフェラーゼを用いてドラゴンの上顎を縛り上げてホルドする。凶悪な顎は、シヨットに至る寸前で停止する。

「ガッ……！？」

今の僕は、さぞや残酷な笑みを浮かべていることだろう。その証拠に、ほら。

「ちよつとオイタが過ぎたよなあ？ 坊や？」

剥き出しにされた僕の殺気を野性的な本能で感じ取ったドラゴンは、僕の糸を振り払うでもなく恐怖に慄き、身を震わせている。はつきりと知らしめてやらねばなるまい。

《捕食者はどちらで、被食者はどちらなのかということ》。

手負いの獣ほど恐ろしいものはいない。僕はルシフェラーゼを解き、全神経を一本一本に集中、七千本の糸は、瞬く間に全てが硬化し極鋭の凶刃と化す。

木の枝からの跳躍とともにそれらをドラゴンの胴に向けて射出し、刃は降り注ぐ流星群のように胴を串刺し、地面に縫い付ける！

「ギヤオオオオオ！！？」

大ダメージに痛みにもたうつドラゴン。もつとも、全身に無数に空いた極小の孔は身じるぎ一つ許さず、結果として叫び声を上げるだけだった。

僕はその背中に着地。背中に手を伸ばし、『エナジードレイン』を發揮させる。

「……ファンタジーは、必ず終わりが訪れるからファンタジーなんだよ」

みるみるうちに、セラが霧散し元の小さなトカゲのサイズに戻っていく。

僕は不敵に笑って言い放った。

「坊やはもうおねむの時間だ。そろそろ泡沫の夢から醒めるんだな」
数瞬後。

ドラゴンは僅か数センチ足らずのトカゲに戻り、チヨロチヨロと舌を出してチヨコマカと周囲をうろついているだけの無害な存在になった。

僕はわざとそのすぐ横に足を振り下ろす。トカゲから数ミリ単位での地面が僕のブーツの足跡を形作る。トカゲはびくつと生命の危機を察したかのように震え、そそくさと森林の奥へと逃げていった。
「ミッシェンコンプリート、つてか？」

「……………」
任務は完遂したものの、ショットの顔は優れない。なんだ？ どこか負傷している様子もないが……。若干怯えているようにも見える。

「どうした？ ショット」

「……綺羅衣。アンタ、あんな殺気も放てるんだね。あたしと戦った時は飄々としていたくせに」

「ん？ ああ……………」

確かに、さっきの僕は頭に血が昇っていたので、かなりマジギレしていた。しかし、半年前に干戈を交えたことのあることのあるショットをして怯えさせるくらいに殺気を放っていたのか……。自覚

なかった。

確かにあの戦いで、実は僕は《全力では戦っていないかった》。本気ではあったが全力ではなかったのだ。

あの時ショットは間違いなく僕を殺すつもりで襲い掛かってきたが、僕は殺すつもりは一切なかった。この精神的な差は大きい。もしも僕が彼女を殺すのを躊躇わずに戦闘を繰り広げていれば、あんな絶戦にはならなかっただろう。

そのことがお気に召さなかったらしいショットは、ぶすつと頬を膨らませて、しかし。

「……ありがと。アンタのおかげで今回も余計な命を奪わずに済んだ」

と礼を言ってきた。

そう。

彼女はここ半年間、一度も“殺し”を行っていない。野生動物やその密猟者は勿論、蛇蠍のように嫌っていたナンバーズに偶さか遭遇したとしても必ず生け捕りにしていた。これはUN事務所に入った際に僕が強制したことでもあり、以来彼女は“同族殺し”として名を馳せたショット・G・スカイハイとは別人のように丸くなっていた。……これを指摘すると本人は怒るのだが。よく分らん。今回のことだって、トカゲがブレットを飲み込んだ直後に殺してしまえば、それで万事解決だったにもかかわらず　おそらく本人としては業腹甚だしかっただろうが　僕に援助を求めた。

「あーあ！　虎の子のブレットが九発に減っちゃったよ！　せつかく半年前に使った分を補充できたっていうのに」

因みに彼女は、自分でも触媒さえあれば自力でブレットに魔力を籠めることができる。とはいえそれは艱難極まる作業で、一発のブレットを精製するのに半年はかかるとのことらしい。姉である『ブレット』ならそう時間はかからなかったのだろうが、今は亡き人物の話をしてもしようがない。

「で。この事後処理はどうするよ？　あのサーベルタイガーの死体

とか。原住民の方々が見れば卒倒もんだぞ」

僕はこの事件で犠牲になつてしまつた哀れな虎を指差す。絶滅種の死体がゴロゴロ転がっていたら、それはかなり由々しき事態だ。

「大丈夫。その辺はうちの子達にお願いしてあるから」

うちの子、というのは『銀の暁』のメンバーのことである。いや、正確には“元”『銀の暁』というべきか。

義賊集団『銀の暁』は今、『銀の黎明』と名を変えて活動内容も変わっている。盟主であるシヨットが、UN事務所に入った際に『銀の暁』を解散させたのだ。それ以後はワシントン条約保護団体『銀の黎明』と名を変えた。名称の意味こそほとんど変わっていないが、本人曰く『けじめ』だそうだ。因みに、解散に際してシヨットは他の八人の古参メンバーに暇いそを出したのだが、今現在以て誰一人として欠けることなく『銀の黎明』に携わっている。この辺りは、彼女の人望とリーダーシップの大きさの発露と言えるだろう。結成僅か半年にして『銀の黎明』なる集団はその筋では有名なグループとなり、今となつては次々に入団希望者が現れる始末だ。

ともかく、任務は終了だ。僕は所長に電話しようと思つたが、携帯を取り出した（僕の携帯は改造しており、密林だろうが北極だろうが使える超グローバル携帯である）。こちらが昼間だということで、日本は今頃夜中だろう。

数度目のコールの後、通話が繋がる。

『真田真正だ』

例によつてフルネームで通話に出る所長。ふと思つたが、彼はいつ寝ているのだろうか？ 早朝でも深夜でも、所長にかけた電話が通じなかつた試しがない。

「こちら翼たすく。現状報告。僕の仕事は終了した。ターゲットの無力化には問題なく成功」

『そうか。ご苦労、翼。あとの始末はシヨット達に任せて帰ってきていいぞ』

「了解。オーバー」

要件のみを端的に報告する事務的な会話。僕はいつも通りに通話を終えた。そうしているうちにも、シヨットも同じく携帯を耳に当てて誰かと話をしていた。恐らくは『銀の黎明』のメンバーだろう。

「……………」
僕は二つ折り携帯を閉じ……………ようとして、もう一度開いた。電話帳を開いて《とある》グループを呼び出し、そこに一つだけ登録されている番号にかける。

彼女は、まるでそのタイミングで電話がかかってくるのを見通していたかのようにワンコール目が出た。

『すぐ近くから女の人の気配がするわ』

「……………」

開口一番、とんでもない勘の冴え渡りを見せる輝夜緋姫かくやひめ 僕の携帯の電話帳、グループ名『彼女』に登録されている唯一の人物である。つまりは僕の彼女なのだが……………。

電話越しにシヨットの気配を察知しやがった。単に鎌をかけているだけなのかもしれないが……………。

コイツ、やっぱりニュータイプだろう……………！

『違うわ。私は特質系念能力者よ』

「また心の声読まれた！？ しかも今度はガンダムじゃなくてHUNTER×HUNTER！？」

パクノダさんですか！？

『私クラスの念能力者になると、半径一万キロの“円”を使いこなせるのよ』

「ネフェルピトーを超えた！！」

しかもそれが事実だとするとこの女は世界中の人間の気配を察知できることになる。

お前、その能力活かして『ジ・アース』探せや。

『ただでさえ休載が多いっていうのに、序盤に出てきた影の薄いキヤラのこととか、皆さん覚えているのかしら。レ……………レ……………リ、リオ……………リオデジャネイロでしたっけ？』

「レオリオな！ そんな壮大な名前のキャラだったら読者の皆さんも忘れねーよ！」

ただでさえキルアに一度名前を忘れられたことのある可哀想なキヤラだ！ 確かに大半の読者は覚えていないだろうが！

『私はそれよりもアレが好きよ。レベルE。バカ王子のぶっ飛び具合が素敵だわ』

「お前がバカ王子なら僕は間違いなくクラフト隊長だよな！！ 今僕は彼に激しく共感している！！」

『仕事は終わったの？』

「あ？ ……あ、ああああ。今終わったところだ。これから帰るよ」

またも唐突に話を切り替える輝夜。思わず返事が長くなってしまった。

『そう』
彼女はそう口にして、一息を置いてから。

『待ってるわ』

そう言っつて、一方的に通話を切った。

「……………」

僕だつて特に用事があつて電話したわけではないから構わないのだが、何も一方的に切らなくても……………。

彼氏に冷たい彼女だった。

「誰に電話してたの？」

と、そちらも通話を終えたのか、僕に呼びかけるシヨット。

そういえば、シヨットには輝夜のことを紹介してないな。ナンバ

ー？……………って説明するのはなんだかややこしくなりそうだし、かといって彼女だと言えばコイツに余計な笑いの種を与えることになるし……………。

「HUNTER×HUNTERとかレベルEとかの話してたみたいだけど？」

「あ、ああ……………」

「フーか知ってるのかショット・G・スカイハイ。HUNTER x HUNTERはともかく、レベルEも。結構マイナーだぞ、レベルE。」

「実はジャンプ愛読者だったのか？ 隠れ富樫信者だったのか？」

「友達だよ。これから帰るって連絡してた」

「と当たり障りのない回答で済ませた。」

「ふーん……」

「な、なんだよ？」

「僕の答えに納得がいかなかった。ようではないようだ。僕が何か重要なことを失念していることを暗喩しているかのような、揶揄しているかのような何か嫌味っただしい含みのある声と表情だった。」「うん。まあ、綺羅衣はもう用済みだし。帰ってもらって一向に構わないだけだよ……」

「用済み、という言葉にちよつとイラつとする。僕はお前の尻拭いのために地球の真裏のこんな辺境に足を運ぶ羽目になったんだぞ。まあ僕は大人なのでそれは言わぬが華というやつだろう。仕事は仕事と割り切ることにした。」

「構わないんだけどさ、で止まっていたショットの指がゆっくりとある物を指差す。」

「《あれでどうやって帰るの》？」

「僕はショットの指先をゆっくりと辿る。そして、そこにあった物を視認するや言葉を失った。」

「彼女の示した先にあった物。」

「ドラゴンの一撃で大破したジープだった。」

「そういうわけで、僕は市街地に至るまでの、車で三時間かかった道程を歩いて帰る始末になった。のだが。」

「これで貸し借りなしだからね」

「というショットの“温情”によって、駆け付けた『銀の黎明』メンバーの車でなんとか空港まで送ってもらえた。折れた左腕や負傷」

した身体も申し訳程度に応急処置をしてもらい、三角巾で首から吊るす形である。正直この負傷で歩いていくのはしんどかったので助かった。だからといって、これでプラマイゼロにするのはシヨットにとつて虫が良すぎるような気がしないでもないが……（なんといいってもシヨットは指示するだけで何もしていない）、まあいいか。

日本行き飛行機は思いの外混んでいて、キャンセル待ちだった。思い出してみれば、今は夏休みのド真ん中だったのだ。すっかり失念していた。観光客とかで空港内は賑わっている。

ようやくチケットが手に入り、日付変更線を跨いで日本の地に降り立つ。日にちは八月二十日。派出先が何分地球の真裏だったため、移動時間にかかりの時間を費やしてしまったらしい。

電車を乗り継いで、育った町へと戻ってくる。時間はちょうど正午を回ったところだ。蒼穹はどこまでも高く、空を仰げば示し合わせたかのように雲が一切なく日輪が輝いている。茹だるような暑さは眩暈すら感じさせた。熱帯雨林も暑かったが、アスファルトの照り返しがあるだけこちらの方が体感温度は高い。

僕は事務所に直行　する前に、輝夜の家に寄っていく。彼女に会っておきたかったというのもあるし（吸血鬼的な意味合いである）、単に駅から事務所への道すがらに青柳荘があるということもある。

青柳荘のボロい屋根が見えた。と、今にも崩れ落ちそうなアパートの前に　。

一輪の。日傘が咲いていた。

「　　」

僕は知らず駆け出していた。日傘に隠れて顔は見えなかったが確信があった。そしてその名前を叫ぶ。

「輝夜っ！」

「あ　　」

名前を呼ばれて顔を上げる少女。それはやはり、間違いない輝夜
緋姫その人だった。

《あの》輝夜が。

《この日差しを浴びて立っている》。

その事実だけで、僕には十二分に驚愕に値する。疲労や身体の痛
みなどどこかへと吹き飛んだ。あらん限りの力を振り絞って僕は駆
けた。

「おかえりなさい、綺羅衣君」

輝夜は口調こそいつも通りだったものの、口の中が渴き切ってい
るらしく声はかなりしわがれていた。額や頬からは汗が止め処なく
流れており、長い緋色の髪がそれを吸っている。淡いブルーだった
はずのブラウスは汗を吸い切って深い紺色に変色して肌に張り付い
ている。ブラが透けて見えたが、そんなことはどうでもいい。どん
なに暑いからといって今日の朝から立っていたというだけの発汗量
ではない。まさに滝のような汗だった。

「お前……なんでっ……！」

知らずのうちに口調が怒気を含んでいた。何をやっているのか、
という輝夜への怒りもあつたが、それ以上に自分自身への怒りもあ
つた。

何故、僕は輝夜にもっと早く連絡しなかったのか。僕は知ってい
たはずだ。《彼女が人一倍寂しがり屋だということを》。

対する輝夜は、やはり普段と変わらない口調で。いつもの人を食
ったような口調で。何を言っているのかというような口調で。

「言ったじゃない。《待ってるわ》、って」
「そう放言した。」

僕は黙った。否、絶句した。莫迦だ、愚かしい、とは当然、思っ
た。幼稚な子供ではないのだ。地球の裏側から帰ってくるにはいく
らか時間がかかることくらい分かり切っているだろう。それでも僕

は、彼女のあまりの真つ直ぐさに続けるべき言葉を完全に失っていた。ただ知らず、胸の奥から、この夏の日差しにも負けなくらいに熱い想いが込み上げてきて。

僕は。いつの間にか彼女を片手で抱き締めていた。

輝夜の手から日傘が落ちる。それと同時に、彼女が持っていた魔法瓶の水筒も一緒に落ちる。カラン、と乾いた音が響く。空だった水が入っていたであろうそれは、少なくともかなり前に底をついていたらしい。

僕は輝夜の頭を胸の中に埋めさせる。直射日光を浴びさせまいという防衛本能でもあった。日傘を取り上げてやればいいだけの話だが、この時の僕は、あるいは真つ当な思考回路を備えてはいなかった。

熱気を極限まで吸収した緋色の髪は灼けるように熱かったがしかし、汗とシャンプーの匂いがして、花のようなその香りは触覚的にも嗅覚的にも僕をくすぐる。背中に回した右腕が輝夜の服に触れてびちゃりと音を立てる。その濡れ具合は汗まみれというよりは、洗濯直後といった方が相応しい。

「……………」
輝夜は黙って僕の胸に抱かれている。熱くも温かい、輝夜の身体
「…………ごめん」

「…………何に対しての謝罪？」
くすり、という擬音が聞こえそうな、妙なる声たえが静かに耳に届く。
それがどうしようもなく

どうしようもなく、なんだろう。この胸の高鳴りの正体は。
こんな感情のこと、僕は知らない。今までに感じたことのない気持ち
ちが、僕の心臓の鼓動を、僕のことを介さず早くさせる。

「ねえ綺羅衣君。今手を放したら、それこそ許さないわよ」
「……………」

「暑いわ」

「……ああ」

頷く。

「苦しいわ」

「……ああ」

ただ、頷く。

「……寂しかったわ」

「…………ああ」

万感の想いを籠めて、頷く。

「綺羅衣君、これは命令よ。貴方に拒否権はないわ」

そう前置きをした上で、彼女は宣言した。

彼女はいつだって突然だ。

「明日、デートをしましょう」

らしいと言えは、この上なくらしい。

Episode 4 : S H O T - e n d

4・3・蘇る魔竜「坊やはもうおねむの時間だ」(後書き)

ショット編、終了です。これまでで、彼女の分だけ三章に亘ってしまいました。まあ段々登場人物も厚くなってきたので、そういうことにしておいて下さい。次章は翼と輝夜さんの初デートです。輝夜さんがどういった反応をとるのか。どうぞ、お楽しみに。

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・半角の() で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・全角の() で書かれている部分は主人公の情景補足
- ・《》で書かれている部分は傍点(強調)

八月二十一日火曜日。

*

事の発端　　は、言うまでもなく昨日の輝夜の一言である。

『明日、デートをしましょう』

その言葉であの後僕らは別れ、僕は所長に挨拶すべく事務所に向かった。今回の報酬は百二十万。所長曰く『直接的なナンバーズ絡みの事件ではないから、これでも安い方だ』とのことだが、世間的に一高校生に過ぎない僕には潤沢過ぎる高額だった。奇しくも輝夜とのデートが入ったので、その資金に充てることにする。

昨日輝夜は、『どこに行くかは綺羅衣君に任せるわ』と言っていた。とはいえ、実を言うと僕は“デート”というものがどんなものか今一つよく分かっていない。なにせ産まれてこの方六年しか経っていないのだ、知っている方がどうかしている。本や伝聞などの情報によれば公園や遊園地、映画館などが鉄板らしいのだが、デートの相手があつた輝夜である、屋外での活動は極力控えた方がいいだろうと思つて無難に映画館を選択。何を見るかは気分次第、見終わつたら商店街を散策ということにした。因みに、音葉か所長に詳しく話を訊いてみるという案も考えたが、なんといつてもこれは記念すべき初デートである。半ば意地になつて僕は独力でこのプランを組み立てた。自分でも穴だらけで行き当たりばつたり感否めないが、そこはどうかお目こぼしを願いたい。

待ち合わせは駅前に十一時。僕の服装は白いワイシャツにスラックス　　平たく言えば普通通りである（というのも、僕は他にめかし込むような洒落た服を持っていない）。強いて普段との相違点を挙げるなら、左腕を三角巾で吊っている点だ。流石の僕でも骨折を数日で治すことはできなかった。加えて言うなら、シャツの下は包帯でぐるぐる巻きである。ドラゴンにしてやられた名残だ。まあ痛

みは多少気になる程度しか残っていないので、普通に活動する分には問題ないだろう。

只今の時刻は十一時五分前。昨日と同じく日本晴れ。雲は集団でボイコットを起こし、太陽だけが一人侘しく広大な空に輝いている。正午が近付くにつれ勢力はますます増大し、じりじりと肌を焼く。彼（？）がサラリーマンだったら間違いなく労働基準法違反を犯しているに違いない。

こんな日差しの下に輝夜を連れ出すのだろうか。

彼女から望んだこととはいえ、吸血鬼である輝夜は日差しを極端に嫌う。こんな真夏の日光を浴びるなど自殺行為ではないのか。今更ながら、僕は彼氏としてこのデートを中止するべきかどうか思案した。

「綺羅衣君」

俯いてそんなことを考えていると、ふと頭上から声がかかった。

僕は応えるように顔を上げる。声だけで気付いていたが、そこにいたのは紛れもなく輝夜緋姫その人だった。緋色の髪を無造作に垂らして、凜と背筋を伸ばして立っている。

輝夜の服装は至ってシンプルなものだった。長袖白地のブラウスに濃紺のフレアスカート。だが、ブラウスは要所要所にフリルが多すぎ、多すぎなくあしらわれており、スカートもいつもより気持ちはかり短い。その代わりか、肌の露出を抑えるべく黒いニーソックスを履いている。いささか以上にレトロな感じのそれはしかし、彼女の細くしなやかな美脚を際立たせる一品でしかない。靴は若干武骨な茶色のローファーで、それがまた絶妙なミスマツチというパイプスとして彼女を彩っている。いつもの日傘も当然さしており、それを握る手にも肘まである白い手袋という、対日光における完全防備だった。

白い日傘。緋色の髪の毛。白いブラウス。紺のスカート。黒いニーソックスに茶色のローファー。それらは全て、まるで輝夜緋姫という少女のためだけに特注でオーダーされたかのようにすらあり、

芸術の域に近い麗容は、まさに現代に輪廻転生した本物のかぐや姫のようだった。

表情や顔色も、昨日のようなあえかなそれとは違い、澁澁とした瑞々しい生気に満ちている。白皙はくせきの顔にも強い意志を感じさせる双眸を併せ持った輝夜は、かえって現実味がなく、しつかり手を握っていないとどこかへ飛んでいってしまうようなほど危うく、そんな馬鹿げた錯覚を僕に抱かせた。

「……綺羅衣君？」

その声にはつと現実に引き戻される。知らないうちに忘我の境地に達してしまっていたようだ。

「あ、ああ。おはよう、輝夜」

「ええ、おはよう。私の容姿についておよそ五百文字以上にも及ぶ解説が行われていたような気がするのだけれど、気のせいかしら？」

「き、ききき気のせいだ」

……コイツにしる音楽にしる、どうして僕の周りの女性は人の心理を読むのが巧いのだろう。

改めて、輝夜の姿を見る。ぱつと見た感じでは普段通りの服装だけど、なんとなく僕には 自意識過剰だろうか おめかししてはしゃいでいるように映った。

「その……。その服、似合ってるな」

ハウツー本では、デートの時は嘘でも相手の服装を褒めるものだと書いてあった。しかし、僕はお世辞でも社交辞令でもなんでもなく、綺羅衣翼自身が本当に感じたことを口にした。

「そう。そんな綺羅衣君はいつも通りね。本当、冴えない男」

「……………」

……だがしかし、相手は誰であろう、世辞はおろかりツプサービスすら知らないらしい輝夜さん。ストレートに『冴えない』と面罵されては、地味にへこむぞ。どうやらこの吸血姫の毒舌はお天道さんの下でも衰えることなく発揮される天性のスキルらしい。

「それで？ 暑い中連れ出しておいて、私をどこに連れて行くつも

り？ まさか何も考えていなかったわけじゃないんでしょう？」

「どうやらコイツの中では僕が連れ出したことになっていているらしい。激しく事実が捏造されているが、まあ輝夜が元気ならそれで構わないと思えた。」

「えつとな、まずは一応映画館に行く予定なんだが……」

「え？ いえ、ごめんなさい、ちよつと待って……いくらなんでもはじめてで野外プレイは私にとってはハードルが高すぎるというか……」

「なに勝手にエロい妄想に突っ走ってんだ！ 普通に映画見るだけだよ！」

「まさか焦らしプレイ！？ 十八禁の映画を見せて興奮させてから行為に及ぶつもり！？ そうなのね！？」

「官能映画でもねえ！ 普通の映画を普通にポップコーンでも食べながら一緒に見るだけだよ！ 興奮もしねえし行為にも及ばねえ！」

「だいたい、こんな恰好でそんな映画のチケットを買ってたら窓口の人に補導されるわ！」

「そう、普通に映画を見るだけなのね……」

「呆れたように嘆息する輝夜さん。そして。」

「はっ、つまらないわね綺羅衣君。そんなことだから貴方は九九すら暗記できないのよ」

「これ見よがしに鼻で笑われた。」

「うっ……仕方ないだろ。昨日の今日だし、それに僕はデートなんてするの産まれてはじめてなんだから」

「それに、言うまでもなく九九は暗記している。コイツの暗記法が（人として）間違っているだけで。それを指摘しなかったのは、せっかくのデートあの生き地獄を味わいたくなかったからだ。」

「それに、映画だって……僕は見たことないけど、面白いかもしれないぞ？ お前、どんな映画が好きなんだ？」

「……そうね」

しばし目を瞑って沈思する輝夜。そして。

「考えてみたら、私も、映画なんて見たことないわ」

「……………」

「正確には、映画館のスクリーンでは、という意味だけれど。地上波でオンエアされたりレンタルで借りたものなら見たことあるけど、大画面で見たことはないわね」

「……………じゃあ、ますますつまらないかどうかなんて分からないんじゃないか？」

「それもそうね」

「損害賠償を請求する！ さっき僕のことを鼻で笑ったことを謝れ！」

はじめてなりに精一杯考えた結果だぞ！

僕の純情を返せ！

「そうね。ゴメンナサイデシター」

「すぐ心が籠ってない！ むしろ馬鹿にされてる気がする！」
逆に損した気分だ。

「煩いわね。ただでさえ暑いんだから熱くならないで頂戴。貴方みたいなのがいるから地球温暖化が進む一方なのよ」

「僕は世界の敵なのか!？」

「悔しかったら体内で葉緑体を生成して二酸化炭素吸って酸素吐き出してみなさい」

光合成を命令された。

なんて理不尽な命令だ。

「おい輝夜。あんまり言うといい加減僕も黙っていないぞ」

「ええ。すぐに『生きててごめんなさい』ということになるわ」

「誰が言うかそんな台詞！」

そう叫ぶ僕に対して、輝夜は徐に手に持っていたカバンからICレコーダーを取り出して、再生ボタンを押す。

『こ、この哀れで愚かなミジンコめに貴女様の英知をお授け下さい

輝夜緋姫先生……………』

……数日前の僕の声だった。

い、いつの間に……！？

輝夜は不穏な笑みを湛えて一言。

「何か言うことは？」

「生きててごめんなさい！！」

……言ってしまった。

人として大切な何かを一気に失った気がする。

「あの、輝夜さん……？ いえ、輝夜様。頼むからそれだけは消してくれないでしょうか……」

「え〜？ どうしよつかなあ〜？ 緋姫迷っちゃった」

「今更ぶりっ子ぶつても駄目だ！ お前の本性は第四章の時点で既に流布されているんだよ！」

相変わらず棒読みだし。とりあえずコイツに役者は向いていないことだけははつきりと分かった。輝夜は「しょうがないわね……」と不平を言いつつも、僕の恥ずかしい発言録を抹消してくれた。

……いかにいかに。この女と付き合っている以上、迂闊な発言は出来ない。コイツならネタとして平気で部屋に盗聴器でも仕掛けてきそつだ。

そんな不毛極まりない会話を繰り返していると、気が付けば時刻はもう十一時半を回っていた。なんとという無為な時間を過ごしてしまったのだらう。

僕はわざとらしく咳払いをして、気を取り直す。

「とりあえず輝夜。《暑い中立ち話もなんだから》、映画館まで行くこうぜ。面白そうな映画がなかったら、その時また考えればいい」
「そうね」

輝夜は素直に従った。流石に暑さに耐えかねたのか、それとも僕が意識して強調した部分から何か感じ取ったのか。

後者だとするならば、企図を見透かされたようで少しばかり照れる。

「ところで綺羅衣君」

「ん？」

僕の半歩後ろを歩く輝夜は、気持ち声を小さくして言った。

「……デートなんてするの、私だって、産まれてはじめてよ」

僕は肩越しに振り返る。顔の上半分を日傘で隠していたためよく見えなかったが。

「ほら、行きましょう」

言いたいことだけ言って、輝夜は僕を先導するように強めに腕を引っ張った。

僕の見間違いでも自惚れでもなければ、追い抜きざまに覗いた彼女の顔は明らかに紅潮していた。

暑さのせいだけでは、あるまい。

*

「それにしても、面白かったわね」

「……………」

只今の時刻、午後一時四十七分 から四十八分に変わったところだ。僕は映画館から移動して近くのファミレスで少し遅めの昼食をとっていた。

『その台詞、何回目だよ』とは訊かない。さつき耐え切れなくなつて訊いてみたところ、『六回目よ』と即答したからである。しっかりとカウントしていらっしやったらしい。つまり、これで七回目。自覚している分だけタッチが悪い。

輝夜は額面の通りご機嫌な様子だ。すっかり頬を綻ばせている。それに対して僕はどうしてもテンションを上げ切れない。

理由は勿論、見た映画の影響だ。この町にある唯一の映画館。三種類ほど上映していたのでその中から選んだ。選んだのは当然のように輝夜だ。それは別に問題ではない。問題なのは、そのチョイスにある。

輝夜が選んだのは、流行りの韓流純愛ストーリーでもなく。

魔法学園に通う少年が主人公の、最新鋭CG盛りだくさんのファ

ンタジー大作でもなく。

復刻版『映画・水戸黄門』だった。

どうして昭和頃に公開になった、劇場版の時代劇が、こんな寂れた片田舎の小さな映画館で放映されているのか。

本当にこの町は不思議ではない。

輝夜はこのポスターを見るや否や、新しい玩具を手に入れた子供のように、それこそ別人のように目を輝かせた。何が彼女をそんなに駆り立てるのは分からなかったが、有無を言わさぬ勢いで僕の腕を引いてチケットを二枚購入。ポップコーンを買う余裕もなく上映開始となり、およそ二時間にわたって光圀公が例によって悪代官を裁いていく類のストーリーを見させられることになった。詳細はまともに覚えていないが、寝るといふ選択肢は輝夜が許してくれなかった。きつちり十五分刻みで、僕の瞼が開いているかどうかをチェックしてきたのである。寝ようとしたら両目を指で突き刺された。輝夜が終始満悦しているその隣で、僕は軽い拷問を味わっていたというわけだ。因みに　まあ当然だろうが　僕達二人以外に観客はいなかった。

そんなこんなで、今に至る。とりあえず飯にしようと僕が提案すると、欣喜雀躍する輝夜は名残惜しげにようやくその場を後にしてくれた。

「お前、時代劇好きなのか？」

食事を終えるまで興奮冷めやらぬ様子だった輝夜が、七回目の『面白かった』を口にした時点で、僕はやっとその問いを投げ掛けることができた。偏見かもしれないが、好んで時代劇を見たがる年頃の女子など、僕はD・C・シリーズの芳乃さくらさんと朝倉音姫さんしか知らない。

「ええ、好きよ。暴れん坊將軍や銭形平次も大好き。私は見た目こそこんなだけれど、心はいつだって清く正しい大和撫子よ」

……『清く正しい』という形容詞には断固として異議を申し上げたいが、時代劇が好きだというのは本当らしい。以前に梅昆虫茶が

好きだとも言っていたし、コイツは意外と（少なくとも趣味嗜好は）古風らしい。

「懐かしいなあ……」

と。輝夜はふと遠い目をした。

「懐かしい？」

「……え？ ああ、ごめんなさい。ちょっと昔のことを思い出していたのよ」

どうやらさっきの呟きは無意識のものだったらしい。そう言ってお茶を濁した輝夜の表情に、さつきとは打って変わった影が差す。

輝夜の、昔。

(……あ)

遅ればせながら僕も気付く。今時の女子高生が純和物にハマるきっかけなど、そう多くはない。十中八九家族絡みだろう。憂いを帯びた輝夜の顔が、その仮定が正解だということを証明していた。

輝夜の両親、正確には養父母。彼女が《喰ってしまった》、育ての親。歳の離れた“おじいちゃん”と“おばあちゃん”。

「綺羅衣君は、時代劇、好きじゃないの？」

話題を切り替えているのかいないのか、輝夜が僕に尋ねてくる。

これが社交界とかなら、嘘でもイエス、あるいは無難にソーソーと答えるのだろうが、ここはそんなかしこまった場所ではないし、彼女に嘘は通用しないだろう。そんな偽りの回答を輝夜は決して望まないだろうし、更に言うなら、僕は輝夜に対して嘘をつきたくはなかった。

「……正直言つて、あんまり好きじゃない。よく知らないが、時代劇って基本、勧善懲悪だろ？ 僕はそういう考え方が嫌いなんだよ……こんな仕事している僕が言えた台詞じゃないかもしれないけど……な、光圀公一行がやってるのは、最終的には武力と権力による強制的な屈服じゃん。僕はそういうの嫌いだ。平和解決できるならそれに越したことはない。正義は少なからず悪を犯しているし、悪は悪なりの正義を持つてるよ」

「……そうね。綺羅衣君の言うことはもつともだわ。……綺羅衣君にしては、大層な持論をかざすじゃない。少し見直したわ」

「……いや、見直されておいてなんだが、今のは音葉の受け売りだ」「とても素敵な持論ね。実川みのりかわさんらしいわ。綺羅衣君のような安直極まりない凡俗には到底辿り着けない域に、あの子は達しているのね」

……あっさり掌を返しやがった。この女、僕のことを指してはつきりと『安直極まりない凡俗』と言いやがった。……まあ、毒舌を吐けるくらいに回復したと考えればあながち悪いこととも言い切れない、かな？

輝夜緋姫と交際を続ける以上、忍耐力と言葉の暴力に対しての免疫力は絶対的に必要不可欠なのだ。

言い忘れたが、音葉に輝夜のことを説明したように、輝夜にも実川音葉がナンバーズであることを説明してある。隠し事をする事に罪悪感があったというのが一つ、音葉が知っていて輝夜が知らないという一方的な情報伝達はフェアじゃないというのが一つ。……最大の理由は、隠し事をしてることがバレたら輝夜に半殺しにされそうな気がしたからなのだが。

「そう言えば綺羅衣君。この前私に電話をかけてきた時に近くにいた女の人は誰？」

今度こそ、輝夜は話を完全に切り替えた。

完全に僕の隣にシヨットがいたということを前提に質問している。その確信がどこから来るのか、本当に未恐ろしい女である。

「シヨット・G・スカイハイっていつて、僕の同僚。彼女も一応ナンバーズなんだが……まあ、何かと残念なヤツだ」

僕もやましいことは何もないので、さらっと応える。輝夜も別段深い質問でもなかつたらしく「そう」と頷いただけで引き下がった。これは、僕が信用されているということか、浮気をするような甲斐性など持っているはずがないと侮られているのか（実際ないけど）、はたまた罪には罰を以て応じるといふ無言の牽制球だろうか。

何はともあれ、さっきまでの重苦しい雰囲気は完全に霧散したよ
うなので、僕は内心安堵の息を漏らした。

漏らした途端、彼女は唐突に険悪な顔つきになる。

「綺羅衣君、そろそろ帰りましょう」

「は？」

なんでいきなり？ 知らぬ間に地雷踏んだか？ まともな計画こ
そ立てていなかったもののこれはデートで、まだ映画を一本見ただ
けで、時間も十分に残っている。

訝しがる僕を見て、焦れっただそうな どこか急いでいるような
口調で続ける。

「喉が渴いたのよ」

「それなら、ドリンクバーから飲み物でも」

まだオレンジジュースと食後の烏龍茶しか飲んでいない。梅昆布
茶がないのがそんなに気に入らないのだろうか。

そんなことを割と本気で考えてしまった僕はやはり鈍感なの
だということを、次の輝夜の一言でしみじみと味わった。

「違うわ。《そういう意味じゃない》」

「……あ」

そうか、《そっち》か。

よくよく考えてみれば、前回やったのは十五日。そして、今日は
二十一日。既に一週間弱も経過していたのだ。

「分かった、ごめん。出よう。……立てるか？」

「大丈夫」

短くそつ口にするが、意識して見れば顔色はさっきまでよりあか
らさまに悪く、足許がいくらか覚束ない。セラも目に見えて揺らい
でいる。

僕は手早く会計を済ませ、気持ち早足で輝夜の家に向かった。

いつの間にか、僕は彼女の手を握っていた。汗ばんでいて、それ
はあまりに小さかった。

（僕は……莫迦だ）

いくら面罵されても仕方ない。はじめてのデートで浮かれていた、などという理由で言い訳できるものじゃない。

頭の中で自分の顔を殴って、僕達は帰路につくのだった。

*

ちう　ちう　ちう　。

音を立てて僕の首筋に噛み付く輝夜。まだ数回しか行っていない行為だが、何度経験してもこのくすぐったい感覚は慣れることがなさそうだ。

「ちう……、ん、ぷはっ……ん、ちう……」

一度口を放して深呼吸し、また噛み付く。前回の時よりも、遙かに長い。首を晒しているだけでやることがない僕は、壁にかけられた時計の針を目で追っていたのだが、既に秒針が八回転している。ただでさえ前回は量が少なかったので、より一層長く感じられた。

「ん、くっ……、んくっ……、ぷはっ……」

八回転半ジャスト。見計らっていたかのように輝夜が離れる。必死で吸ったのか、少し息が乱れているのは　こんな時に不謹慎だが　若干色っぽい。

「……大丈夫か？」

「……ええ、大丈夫。……ごめんなさい」

いつもの高圧的な態度が一変、しおらしくなる。コイツから詫びの言葉を聞いたのは、僕の記憶が正しければこれが三回目だ。

「何についての謝罪だよ」

僕は彼女を真似て、努めて明るく口にする。だがしかし、彼女は皮肉と受け取ったようだ。

「デート……せっかくの初デート……。私が誘って、綺羅衣君が頑張って考えてくれて、映画を見て、ご飯を食べて……。まだ、時間はいっぱいあったのに……」

徐々に尻すぼみになっていく輝夜の声。いくら鈍感な僕でも、彼女の瞳の端に溜まった涙の粒には気が付いた。

「ご、ごめ……っ、ごめん、なさい。せつ、せつかくのデート、だ、い無し……っ。ごめ、ん、なさい……っ。ゆる、して……。ごめ……っ」

溜まっていた涙は次の瞬間、水の筋となって輝夜の頬を伝った。一雫、降る。二雫垂れ、三雫落ち、そこから先はもう数えようにも数えようもない“線”となっていた。

違う。こんな輝夜の顔が見たかったわけじゃない。自分の彼女の、こんな痛々しい顔が。

「……莫迦言え」

僕は耐え切れなくなつた。彼女の顔を直視できない。涙に濡れる彼女の顔を、僕は抱き寄せて頭を胸に埋めさせる。それでも、嗚咽を漏らす声は消しようがない。

「……お前、自分が言ったことも忘れたのか？」

「つく……、え……？」

だから僕は、言葉を紡ぐ。彼女の涙を止めたいから。彼女の笑顔が見たいから。ただ、それだけの願いを胸に抱いて。

「お前言っただろ。吸血鬼が血を吸う目的には、《そういう意味合い》も含まれているって。僕は今日お前とデートした。駅で待ち合わせした。罵倒された。つまらない映画も見た。ファミレスで遅い昼飯を食べた。また罵倒された。……はつきり言っぜ。僕はすげー楽しかった。お前と一緒にいるだけで、僕は理屈じゃなくて楽しかったんだ。……だから、その後、僕はお前の家に帰って《そういう行為》をした。立派なデートだ。誰にも文句は言わせない。言わせるもんか。大事な思い出だ」

「……綺羅衣君」

嗚咽が、止まる。

まるで 魔法のように。

代わりに、彼女の腕に力が籠もる。

か弱くも、力強く。

僕を 抱き締める。

「私、綺羅衣君が好き」

何の前触れもなく。予兆もなく。気配すらなく。

それでもそれは、確かな告白の台詞。この上ない、愛の囁き。

「私は綺羅衣君のことが好き。……でも、綺羅衣君は私のことを好きじゃなくてもいい。嫌いになっても構わない。ただ、許して。私が綺羅衣君のことを好きでいることを。綺羅衣君のことを想っている私を許して。」

そして、できれば。できることなら

「そこまで一気に言って、輝夜は逡巡するように口を閉ざす。僕は敢えて促したりはしなかった。」

輝夜は、数秒逡巡した後、口を開いた。

「できれば、信じて。私がどうしようもなく綺羅衣君のことが好きだということ。たとえ私が私でなくなったとしても、絶対に私は綺羅衣君が好きだから。《天地が覆ろうがこの事実は覆らないから》」

思えば。これが本当の、彼女からの本気の告白だったのかも
しれない。

僕達は　もしかしたら、今はじめて始まったのかも
しれない。

そう思った。そう思えた。そう思える魂のふるべを感じた。

僕の返事は、もう決まっている。

彼女に嘘は通用せず。

偽りの回答を輝夜は決して望まず。

僕は輝夜に対して嘘をつきたくはなかったから。

「分かった」

輝夜の頤おでこがに手をやり、上を向かせる。

涙に濡れていても、今度の涙は、ただ、美しかった。

だから 直視できる。
だからこそ、告げる言葉はたった一言。

「《信じるよ》」
僕は不敵に笑って言い放った。

*

直後、輝夜は眠りに落ちてしまった。無理もないだろう。昨日も一日中外にいたようなものだし、今日は更に気温が高い。やはり日差しの下での活動は、彼女にとって相当な負荷になっていたらしい。

だが、ベッドに横たえた彼女の寝顔は安心感で満ちていた。僕が輝夜からの求愛を正式に受け入れたわけではないにもかかわらず、しかしその寝顔はとても安らかだった。

僕は、そんな様子をなんとはなしに眺めていた。時計は回り、時刻は巡り、あつという間に陽は落ちて、しばし短い夏の夜が訪れる。
(……信じる)

僕は確かに言った。それは嘘偽りのない本音だ、そこに疑いを持つわけではない。

(でも)
これが、輝夜が僕に対して抱いている感情と同じものなのかどうか “恋”なのかどうか。その答えを、僕はまだ持っていない。確かに、胸の中には言いようのない熱い想いが燻っている。でも、この気持ちを“恋”と呼んでしまっているのか、その自信が未だに持てずにいる。

勿論、嫌いじゃない。どんなに罵詈雑言を浴びせられようと、僕が 綺羅衣翼が輝夜緋姫を嫌いになることなど未来永劫有り得ない。これは断言できる。

(でも)
僕は、僕自身に自信を持てるまで、彼女に『好き』と言ってしま

つてはいけないような気がする。それほどまでに、輝夜が僕に向けてくれる感情は大きいのだ。

あるいは、もっと早い時点で彼女をフツてしまえば良かったのかもしれない。そうすれば、僕も輝夜も余計な後腐れを持たずに済んだのかもしれない。

(でも)
それこそ後の祭りだ。どんなに手を伸ばしても、過去に手は届かない。

《あの人》を殺めてしまった僕には、それが染み入るように分かる。経験として識しっている。

この手は過去ではなく、未来に向かって伸ばすためだけにあるのだ。

すつ、と。その手を伸ばす。

彼女に、触れた。

滑らかな、輝夜の緋色の髪。

それを、そつと撫でる。

「……綺羅衣君」

閉じていた瞳を薄く開く輝夜。

「悪い、起こしたか」

「いえ。数分前から目は覚めていたから。怖い狼さんが襲ってこないか様子を見ていただけ」

お前は赤ずきんか。

……確かに、頭は赤いが。

「……身体がだるいわ」

言う通り、彼女の顔は弛緩し切っており、身体に力が入っていないのがありありと分かる。強い太陽の下でのデートがやはり、彼女の体力を大きく削っていたのだらう。

「なら、そのまま寝ちまえ」

「お言葉に甘えて、そうさせてもらおうかしら。……でも、その前に」

そう言って寝ぼけ眼から一変、やおら真剣な顔になる輝夜。
そして。

「キス、して？」

コイツはいつだって突然だ。

どうして、軽口の延長線上みたいなのに、そんな重大な台詞を恥じら
いもなく言つてのけるのだろう。

「……なんでだよ」

「《そういう行為》にはつきものでしょう？　自分が言ったことも
忘れたの？」

そして夕子の悪いことに、僕より断然頭も切れれば口も冴え
る。

相変わらず卑怯なやり方だ。絶対に僕に逃げ道を作らせてくれな
い。

更に夕子の悪いことには、僕のことを全面的に、絶対的に信
頼している。

だから　躊躇もなく目を閉じる。

「……………」

僕は迷ったが、結局のところ、ぐーがぱーに勝てないように、綺
羅衣翼では輝夜緋姫には敵わないのだ。

「……一度だけ、だからな」

そう前置きをして、僕は首を伸ばした。

そして。

はじめてのデートをした、その日のうちに。

はじめての、キスを交わした。

おでこに。

ちよん、と触れるだけ。フェザータッチならぬフェザーキスだ。

予め逃げ道を作らせてくれないのなら、自分の力で強引にでも逃
げ道を切り開くしかない。相手がぱーを出すと分かっているなら、
ちよきは出せないまでもあいこに持ち込んでやる。

輝夜は瞳を開け、非難がましいジト目で睨んできた。

「…………チキン」

だけでなく、実際に非難してきた。しかし、そこにいつもの迫力はない。髪の色に勝るとも劣らないほど、顔色が紅潮していたからだ。

「どこに、っていうリクエストは受けていなかったからな」

そう言う僕も、顔が熱くなっているのを実感していた。心臓がドキンドキン跳ね上がってやかましい。

「…………まあいいわ。…………はあっ、ふぁ…………」

諦めたように嘆息一つ。はじめ嘆息だったはずのそれは、途中でから欠伸に変わった。

「大人しく寝ろ。僕は帰る」

「好きに…………したら、いい、わ」

もう声を出すのも面倒くさいのか、途切れ途切れに発声する輝夜。そして目を瞑って。

「……………ば、か」

最後に僕を罵って　寝言か本音かは定かでないまま　そのまま穏やかな寝息を立て始めた。

らしいと言えば、この上なくらしい。

僕は立ち上がる。答えを出せない問題は、とりあえず保留にしておくよりしょうがない。立ち上がって、輝夜の家窓を覗く。

外はすっかり暗く、空には月が燦然と輝いている。

僕は扉を開け、外に出る。扉が閉まる直前、僕は彼女に向けて告げた。

「おやすみ輝夜。またな」

終焉には挨拶を。そして、約束を。

デートの締めくくりには、相応しい台詞だろう。

Episode : 4 . 5 - end

番外編、輝夜さんメインの章再び（厳密にはみたび）です。これまで完全無欠だった彼女ですが、思いもよらぬ形で“本気”を見せます。次章からはまた本筋に戻って色々やるので、楽しんで頂ければ幸いです。

5 - 1 ・「天下無双の生層会長」竜虎相搏つ（前書き）

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・半角の（ ） で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・全角の（ ） で書かれている部分は主人公の情景補足
- ・《 》 で書かれている部分は傍点（強調）

5 - 1 . 「天下無双の生層会長」竜虎相搏つ

*

「どけっ！」

「きゃぴっ！」

事の発端は九月一日土曜日。全国的な学校に於ける二学期の始まりである。蝉達のシユプレヒコールもやみ始め、ひきこもり生活を続けていた雲らもちらほらと外出を再開し、いい加減疲労困憊の体を見せ出していた太陽が『おれ、そろそろ休んでもいいんじゃない？』と言うが如く勢力を弱め始めた九月一日土曜日、相楽森学園高等部の購買部に響いた大きな怒声一つと小さく奇妙な悲鳴一つが始まりだった。

およそひと月半ぶりの購買には、多くの人が殺到していた。押し合い圧し合い我先にと、目当ての総菜パンを巡った壮絶なバトルロワイヤルが展開されていた。

……そんなに腹が減っているのなら、早く帰って近くのコンビニでも買えばいいのに、と僕は思ったが、どうやら多くの生徒は購買のおばちゃんというある種のアイドルの手売りというものに弱いらしく、長期休暇明けの購買でのこの光景はちょっとした恒例行事らしかった。

と、列から押し出されたらしく尻持ちをつく少女（さつき悲鳴をあげた主らしい）が、心底無念そうに唸り声をあげつつ、人だかりを遠巻きに見ていた。

釈迦堂唯だ。

今年から高等部に入った一年生。ショットほどではないが小柄な身体に、気弱そうな顔付きに、ちよつと天然らしい縹色はなだの巻き毛シヨートの髪の毛。見るからに横領の悪そうな女の子であり、《とある理由》から学園全体で恐らく知らない者はいないだろうという特殊な少女。

事実、僕はこの二年半の間で、彼女の良い噂を聞いたことがない。とはいっても、それは決して彼女が不良学生だということを意味しない。むしろ彼女は、廊下は走らない、授業中に私語はせず真面目に受ける、掃除当番はサボらない、目上の人間に対しては必ず敬語を使い、規律校則を正しく遵守し折目正しい、多岐多分に於いて公明正大という、品行方正を絵に描いたような、音葉おとばと同列の人畜無害な優良生徒なのである。

だが世の中、品行方正と成績優秀の二つは、必ずしもイコールでは結び付かない。黒崎さん家の一護君とかがいい例だ。

僕とは学年からして違うし接点もない彼女だが、噂に聞くとところによると、驚くべきことに彼女は定期テストで《零点以外をとったことがない》のだという。というのも、授業中は先述の通り真面目に受けているため頭は良いはずなのに、テストがあるごとに《不幸にも》突然高熱を出して病欠、あるいは出たとしても、《不幸にも》名前を書き忘れて、またあるいは《不幸にも》回答欄を一つずらして書いてしまい結果零点など、とにかく根っからの不幸体質の持ち主なのだ。当然の帰結として補習授業を受けさせられるのだが、これまた不思議なことに、その課題では満点なのである。極端に本番に弱いと言えなくもないが、いくらなんでもそこまでいくと極端すぎる。

その不幸体質は勉強に限ったことではない。何もない廊下を歩いてはつまずき、普通に階段を昇降していれば足を踏み外し落下、授業が突然移動教室になったことを知らされずに一人教室に残り欠席扱い、一歩外に出ればゲリラ豪雨に打たれ、財布を落とすこと度々、拳句の果てには、バナナの皮に頭をぶつけて一時心肺停止に陥ったという伝説まで持っている（流石にこればかりは真偽は定かではない）。この世の全ての不幸を一身に背負っているかのような当代最高の薄幸少女、それが釈迦堂唯という少女である。その珍しい名字も相成って、誰が呼んだか、ついた二つ名は『てんじょうてんげい天上天下唯が独損』。誰かが不幸になった分だけ誰かが幸せになれるという哲学的思想に

基づいて、彼女の“悪い噂”は誰かにとつての“良い噂”でしかなく、それ故に釈迦堂はちよつとしたラッキーアイテムとして扱われている。

尚、今更感があるが、説明。高等部とあるように、相楽森学園は中高一貫のエスカレーター式私立学園である。中等部と高等部の校舎は林立しており、中等部校舎と高等部校舎の間に職員室をはじめとする特別教室などの特別棟が存在し、そこを渡れば両方の校舎を自由に行き来できるという造りになっている。ちよつど『工』の字を意識してもらえば分かり易い。僕は高等部から編入したため中等部のことはよく知らないし、輝夜や音葉も中学はここではなかったはずだ。そう考えてみると、僕に中等部のことを知る手だてはないように思える。

ともかく、どうやら釈迦堂は無謀にも始業式の今日、購買に轟く生徒の中に身を投げ、呆気なく撃沈したらしい。未だに立ち上がれない釈迦堂を流石に見かねた僕は、彼女に手を差し伸べる。

「大丈夫か？」

「……はひ？」

一瞬自分に向けられた言葉だと理解できなかつたらしい。釈迦堂はきよとんと首を傾げて次の瞬間。

「は、はひっ！ 大丈夫でぶっ！」

起き上がるや否や、無事を知らせようとした釈迦堂が思いつきり舌を噛んだ。口許を手で押さえ激痛にわなわなと肩を震わせている。……本当に不幸体質なんだな。間が悪いというかなんというか。そんなやり取りをしている間にも、人垣は風船のようにどんどん膨張していく。ともかくにも彼女をここから連れ出さないと、冗談ではなく圧死するかもしれない。

僕が彼女の手を掴んで、人垣から離れようとしたまさにその時。

「どけ」

たった一言。

わずか二文字。

だが遠雷のようにドスの利いた男のその一声は、姦しいことこの上ない購買を一瞬にして鎮まり返し、人垣が真つ二つに割れる。海を割るモーセ……は使い古された嫌いがあるので、敢えてここではアバン流刀殺法海破斬という例えを用いることにしよう。

ただし、その声を発した主が放つプレッシャーたるや、海破斬と言わずアバンストラッシュと言わず、ギガストラッシュさえ通り越してドルオーラ級である。

「今から三つ数えてやる。ウチのジャリ子を突き飛ばした奴は今すぐ手を挙げるサン。もし誰も名乗りを上げなかった場合ニイ、ここにいる全員連帯責任つーことでぶっ飛ばしてやつからそのつもりで覚悟しやがれイチ」

「すつ、すすつ、すいません！ ぼ、僕です！」

男は確かに三つ数えた……発言の途中途中で。その圧倒的な迫力に耐え切れなくなつたのか、一人の男子が挙手した。線が細く華奢で、いかにも気弱そうな男子だった。察するに二年か一年だろう。相手が釈迦堂だったから、つい思わず怒声を発してしまったといったところか。

「そうかい。ようし坊主、ツラ貸しな。自分から名乗りを上げた根性に免じて二、三回半殺しにするだけで許してやんよ」

一周回って、全殺しである。男はどこまでも容赦がない。

彼の名は、トウチン轟虹色。百八十は優にあらうという長身に、ポマードでがっちり固めたオールバック。猛禽の如くあらゆるものを睥睨するような鋭い切れ目に、その名の通り轟くようなドスの利いた濁声。何より特徴的なのは、素人目にも分かるほどに発せられる超常的な重圧。野生のライオンでさえ裸足で逃げ出すくらいの（物の例えである。ライオンは常に裸足だ）オーラ。私立相楽森学園高等部三年A組の生徒にして、中一の段階から六年間通じて生徒会長を務め続けてきた、文字通り我が校の霸王である。

愛らしい名前とは裏腹に、彼はどこまでも高飛車で傲慢である。しかし、そんな彼に牙を剥く存在は今や誰一人としていない。

それも当然。轟は釈迦堂とは違った意味での“特別”なのである。というのも、『彼に齒向つた者は、ただ一人の例外もなく、破滅に追いやられる』というジnkクスがあるからである。

破滅、というのは流石に誇張が過ぎる。精々が痛い目をみる、くらないのだが、それは最早暗黙の了解として全校生徒並びに全教職員に敷衍している。

彼が入学直後に生徒会長に立候補した際、誰もが無謀だと思っただろう。それでも現に、彼は生徒会長に任命された。ジnkクスの始まりはそこからだっただろう。

あくまで噂だが、当時、轟の他に生徒会長に立候補した数名の生徒全員が悉く落選ないし出馬を急遽辞退したらしい。ある生徒は《不幸にも》放課後にアルバイトをする必要性に迫られ、またある生徒は《不幸にも》テストでカンニングが発覚し人気が急落、そのまたある生徒は、最有力候補と呼ばれていたにもかかわらず、《不幸にも》学校に持って来ていた超マニアックな工口本を《不幸にも》鞆から落としてしまい、その特殊な性癖が周囲に露見したことにより停学処分を余儀なくされたという（彼に関してのみ破滅といって違いないかもしれない）。他にも数々の『不幸』が重なり、結果的に彼は最下級生にして生徒会長という異例の昇進を成し遂げたのである。

しかしそれは、断じて強行的や絶対王政的なものではない。轟は恐るべき手腕を遺憾なく發揮し、目安箱の設置による生徒からの要望に真摯に耳を傾け、実現可能な範囲の案件は全て実行。不正に部費を底上げ・浪費していた部活には罰則を与え、逆に部員不足で廃部寸前に追い込まれていた部を存続させることに成功。体育祭や文化祭の実行委員も見事に務め上げ、学内に留まらず近隣住民への配慮やアピールその他諸々を瞬く間に平和解決させるといふ前人未到の快挙を成し遂げた。見えないところでも数々の偉業を積み上げ、気付けば轟は誰もが認める天下無双の生徒会長になっていた。まさに八面六臂といえる武勇伝の中には眉唾物の逸話も決して少なくない。

いが、それが本当だと無理矢理信じさせるような超弩級の気迫と貫録を持つているのが、轟虹色という男だ。そんな彼の二つ名は、畏敬の念を籠めて、誰が呼んだか、『天下無双の生屠会長』である。

だからといって性根の口の悪さと容赦のなさ、血の気の盛んさは変わらない。弱きは助けるだけに留まらず強くあれと啓蒙し、強きには更なる高みを目指させ、仇なす者には情を授けず、甘きに流されず、容赦遠慮手加減皆無の制裁を加える。そして今また、哀れな犠牲者が出ようとしている。

「かつ、会長っ！ 唯なら大丈夫ですからっ！ 怪我なんてしてませんからっ！ そんなにいじめないであげて下さいっ！」

と、放っておけば本当に一回半殺してしまいそうな勢いの轟を、復活した釈迦堂が制する。釈迦堂は、今任期から書記という役職で生徒会に名を連ね、轟と轡くわを並べている。どういうわけか、轟は釈迦堂に対してのみやけに甘い。本人は頑なに認めようとしなが、ともすれば暴走しがちな生徒会長へ対する抑止力、ストップパーとして、釈迦堂は大いに奮闘してくれているのだった。

「ちよつとぶつかっただけです！ それで唯が勝手に転んだだけなんです！ だから、そんなにその人のことを責めないであげて下さいっ！」

轟は早口で捲くし立てる釈迦堂を一瞥し、彼女を倒した男子を再度睨む。

「……本当だろうか？」

擬音をつけるとするならば、ギラッ、といった感じである。野生の鷹のような有無を言わさぬプレッシャーに、男子は首を縦に激しく振る。

「僕も見てたぞ。本当に軽く肩がぶつかっただけだった」

剣呑な雰囲気はごめんだったので、僕もすかさずフォローを入れる。釈迦堂を助け起こして擁護している（実際は釈迦堂が勝手に立ち上がったただけだ）僕の言葉には説得力があるはずだ。

轟はやはり僕を一瞥し、みたびその男子を見やると。

「……購買は正しく使え。ちゃんと三列に並んで順番に利用すると。割り込みはご法度だ。バアさんも迷惑してんだろが。ルールは守るためにあんだぜ。分かったか」

それは、この場にいる全員に向けての言葉だった。合唱団のように口を揃えて「分かりました！」という生徒達。

「帰るぞジャリ子。勝手にオレの側からいなくなんじゃねエ」

「も、申し訳ありませんです、会長……。ですが、会長が空腹を訴えてらっしゃったかと思って……」

「言い訳はいらねエ。とつとと来い」

「は、はひ……」

怒涛のように現れた轟虹色は、嵐のように唐突に背を向ける。そして釈迦堂を引き連れその場から立ち去る間に、「あア」と言つて肩越しに僕を見やり。

「ジャリ子が世話になったな。礼を言っぜ、綺羅衣翼きりあそび」

そう言つて、今度こそ去っていった。

ふとよぎった疑念　どうして僕の名前を知っているのか。

その問いかけをする暇もなく、彼は颯爽といなくなった。

答えは、数日後に明らかになるのだが、この時の僕には知る由もない。

*

竜虎が相打っていた。

「……………」

「……………」

「……………」

場所は近くの喫茶店に移る。

喫茶店と言つても、雑多な大手のそれではなく、田舎らしく落ち着いたレトロな感じだ。店内に席はカウンター席が八つ、四人掛けのテーブルが四つしかないという、お世辞にも広いとは言えない内装。全体的に茶色を基調とされており、耳に心地よいクラシックが

廠かに流れている。カウンター席の向こうには食器やカップ類が小多数整然と陳列した棚があり、名物のコーヒーは一杯一杯丁寧に挽かれたもので、出来上がるにつれて芳しい香りが嗅覚をくすぐつてやまない。こげ茶色の液体は視覚的にも刺激するものがあり、憎いことにおかわりが自由だというのがこの店の売りである。

そんな喫茶店のテーブル席の一つを占領している三人　即ち僕達　は、注文したコーヒーが運ばれてきても一口もつけず、ひたすらに沈黙を守っていた。

片や北の竜　もとい、悪辣毒舌吸血姫（僕がつけた）こと、ナンバー？『ヴァンパイア』の能力を持つ緋色の髪の少女、輝夜緋姫ひめ（これも僕がつけた）こと、ナンバー24『リジエネレイト』の能力を持つサイドポニーの少女、みのりかわ実川音葉。

そして、輝夜の隣に座って、この二人の二倍の沈黙を維持しているのがこの僕、アウト・オブ・ナンバー『エナジードレイン』、綺羅衣翼である。

三者三様、色んな意味での三つ巴だった。

どうしてこうなったかというところ、始まりは今日の放課後に遡る。

「実川さんと話したいわ」

始業式と二学期最初のHRを終えた放課後。トイレからの帰り際に立ち寄った購買部　そこで轟・釈迦堂と遭遇したのだが　から帰ってくる、何故か僕の席に輝夜が張り付いていた。そして戻ってきた僕を見るや、そう口にしたのである。

その発言に僕は少なからず驚いた。輝夜が誰かと進んで会話をしようとするなど　僅かひと月半の付き合いしかないが　はじめのことだった。夏休み直前に彼女と接点を持って紆余曲折あり男女交際を始めることになった僕だが、曲がりなりにも輝夜とは二年の時から同じクラスであり、ぶつちやけ彼女が誰かと話しているところなど見たことがなく、自分から話しかけるなど聞いたことすら

なく、誰かに相談をすることなど想像すらしたことがなかった。

しかも、よりによって相手は音葉である。顔もろくに覚えていないような相手ではなく、輝夜と音葉は中学以来の知り合いであるらしい。単純に話をするのなら何も僕を介さなくても良いではないか。そんな逡巡する僕を訝しんでか、輝夜が一言。

「なにキュベレイがハイメガキャノンを喰らったような顔をしているの。綺羅衣君」

「その台詞にはツッコミどころが多すぎるぞ!？」

恐らくは『鳩が豆鉄砲』という例えを用いようとしたのだろうが、まず原型を留めていない。それに、ハイメガキャノンに耐え切ったキュベレイは、その装甲の頑強さもさることながら、ハマーン・カインという超強力なニュータイプの特異能力によって展開されたフィールドのためでもあり、通常のパイロットでは直撃に耐えられなかっただろう。そもそもキュベレイはモビルスーツなんだから表情なんてないじゃないか、あれは元からああいう糸目みたいな設計だ! この際だから付け加えると、お前ガンダムネタ好きだな!

しかもそのまま史実通りにいくなら、数分後に僕撃墜されて死ぬじゃん……。

「えつと……、音葉と話がしたい?」

「ええそうよ。良かったわね綺羅衣君。聴覚だけは辛うじて生き残っているみたいよ」

「なんだか他の感覚が全滅している人みたいな言い方をするな!」

視覚・嗅覚・味覚・触覚、全て正常だわ!

「そうね、ごめんなさい。聾者の方にとっても失礼なことを言ったわ」「念のため言っておくけど、僕にもとても失礼なことを言ったからな!」

ああどうしよう。僕は今、自分の彼女を思いっきりぶん殴りたいという邪な衝動に駆られている!

「……すれば?」

その衝動を辛うじて抑えつつとりあえず提案してみると。

「綺羅衣君も同席して欲しいの」と無表情で返された。

ここにきて僕も遅ればせながら、輝夜の《無表情という表情》の裏にある感情を読み取ることができた。

緊張、しているのだ、彼女は。不安と言い換えてもいいだろう。

これまで他者との関わりを拒絶し続けてきた輝夜。話の主旨がなれど、一人で誰かと会話をするのを極端なまでに恐れているのだ。平気で毒舌を投げつけてくる僕が例外中の例外であったが故に失念していた。

そんな輝夜がそれでも、一步を踏み出そうとしている。勇気を振り絞って。養父母を手にかけてしまっただけで以来塞いでいた心の扉を、少しとはいえ開こうとしているのだ。ただ逃げているだけではなく、向き合おうとしている。輝夜緋姫にとって、これははじめ、その一里塚に違いない。

「分かった。とりあえず音葉を誘おう」

そう言っただけで僕は立ち上がり、輝夜の手を引く。柔らかい彼女の手はいつになく硬くなっていた。

大丈夫だから。

そう想いを籠めて握ってやると、その手はいくらか元の柔らかさを取り戻したように感じた。

音葉の席は、教室の真ん中の一番前。教卓の真正面だ。幸いにして、彼女はまだ帰り支度を整えているところだった。

「音葉」

後ろから呼びかけると、音葉は素直に振り返った。

「あれ？ 綺羅衣君？ ……」と、輝夜さん？

僕と、僕の後ろに隠れるように立つ輝夜を見ると、音葉は怪訝そうな顔を浮かべた。そういえば、僕と輝夜が付き合っていることは報告しても、こうして一緒にいるのを見るのははじめてだったろう。その怪訝さはすぐに鳴りを潜めて、いつもの優しい柔和なそれへ

と変わった。

「どうしたの？」

そう訊かれてもしかし、輝夜は口を開こうとしない。口を真一文字にきつく閉じ俯いている。いつもの僕に対する毒舌の数々が嘘のようだ。

僕は黙って背中を押して、輝夜を音葉に向き合わせる。口火は切った。ここから先は輝夜が自分の口から伝えなければいけないことだと思っただからだ。

「……………」

何かを言いたいけれど言えない。そんな雰囲気は輝夜の背中からひしひしと伝わってくる。音葉はそんな様子を静かに微笑んで見つめているだけだ。

暫時。沈黙が続く。いつしか他のクラスメイト達は教室から出ていき、残っているのは僕達三人だけという状況になっていた。

(頑張れ…………)

僕は心の中でエールを送る。それが届いたかのように。

輝夜は、いつだって突然だ。

「お話が、したいの」

ようやく、と言っでいいだろう。輝夜が重い口を開いた。たったの一言だけだったが、声は決して大きいものではなかったが、内容も陳腐で具体性に欠けるものだったが、それでもその言葉からは強い決意が感じられた。

「大事なお話、なのかな。輝夜さんにとっでの」

音葉はあくまで優しく、子供を諭すように返す。母性すら感じさせるその声に、輝夜は小さく頷くだけで返した。

「場所、変えようか？ 私、いいお店知ってるんだよ」

そんなわけで、喫茶店である。

成程、音葉をして確かに『いいお店』と言わしめるだけのことはある。残っている人数の少ない放課後の学校とはいえ、落ち着いた

話をするには不向きだった。この喫茶店のように静かな空間は、大事な話をするにはもってこいと言えた。なんでも音葉の父の友人がマスターをやっており、音葉はここを懇意にさせてもらっているらしい。小さな店内には僕ら以外の人はおらず、ちよつとした貸切状態だった。

さっきの発言以降、輝夜は本当に一言も発していない。注文の際にも僕が『コーヒーでいいか?』と尋ね首肯しただけだ。鉄面皮の無表情こそ崩していなかったが、やはり緊張感は拭い切れならしい。

そんなわけで輝夜は黙りこくり。

音葉は言葉を待つように微笑んでいるだけで。

仲人として立ち会っているだけの僕は、そもそも発言権を持っていない。

これが輝夜にとってのけじめであるならば、敢えて僕が先んじるのは輝夜に対する侮辱に他ならない。これは彼女が乗り越えねばならない一種の試練なのだ。

耳に痛いほどの静寂。平時の（この場合、僕にとっての平時、である）輝夜からは想像もつかないような黙り様だった。

「……異能力者^{ナンバーズ}としては」

徐に。音葉が口を開いた。その言葉に過剰に反応して、びくつ、と身体を震わせる輝夜。僕も内心驚いたが、音葉のことだ。意味もなく発言をするとは到底思えない。ひとまずは静観することにした。「はじめまして、だね。輝夜さん」

それは、“挨拶”だった。

ナンバー?とナンバー24として対峙する、はじめての邂逅。

「……………」

それに対しても、やはり輝夜は口を開けない。そんな様子を見て音葉は。

「駄目だよ、輝夜さん。挨拶はきちんとしないと。ほら、はじめまして」

「……は、はじめ、まして」

輝夜はここにきて、ようやく口にすることができた。たどたどしい、まるで始めて言葉を喋る赤子のようではあったが。「うん。よくできました」と音葉はそれこそ母親のように満面の笑顔で喜んだ。

「それから」

音葉は続ける。

「久しぶりだね。輝夜さん」

今度は、《人間として》。

その言葉の真意を、輝夜は瞬時には理解できなかったようだ。驚いたように目を見開いて後、数回瞬きすると。

「……ええ。久しぶりね実川さん。中学を卒業して以来かしら」

今度ははつきりと。音葉の言葉の裏に隠された意図をはつきりと理解した上でそう返した。その口調は、さっきとは違ってかわって凜としていた。

(……やっぱり敵わないな)

僕は内心で嘆息しつつ、数年ぶりに“再会”した少女達を眺めていた。

音葉の『癒し』能力。うまく口で表現するのは難しいが、彼女はとにかく他人の緊張を解するのが異様に巧い。多分それはきつと、音葉がその人のことを本当に気遣っているからできることだと思う。僕にはとても真似できない。

音葉はそこでようやくやく、テーブルの上のコーヒーに口をつけた。意外にも、彼女はブラックで飲むらしい。なんとなく印象としては、女の子らしく甘めが好きな感じだったのだが。

因みに、僕もブラックである。この店には初めて来たが、美味しかった。上品な苦みに、淹れたての香りが食欲をそそる。口の中に含んで、舌の上で転がすように堪能する。熱さすら心地よい。僕はコーヒーについての思い入れは皆無だけれど、これまで生きてきた中ではずば抜けてランキングトップだ。

そして輝夜の方を見ると。
ざっばざっばざっば。

……という擬音がしっくりくるくらい、テーブルに備え付けてあったシュガーポットから大さじスプーンを一杯、二杯、三杯……と延々繰り返している。見る見るうちに減っていくポット内のグラニュー糖。気が付けば最初の半分くらいまでに減っていた。

次に輝夜が手を伸ばしたのは、コーヒーと一緒に運ばれてきた三人分のミルクが入った小瓶。を。

……迷わずに全部入れた。カップは当然飽和状態になり表面張力で溢れんばかりだ。それをこぼれないよう器用にスプーンでかき混ぜて、躊躇うことなく両手で一口すすする。

「……………」

顔を顰めた。

苦いらしい。

……マジか。

「……………」

横目で睨み付けられた。

「いや……、なんでもないけど。因みに輝夜、お前ってコーヒー飲んだことある？」

「ないわ。苦いのね」

コイツが和茶好きだというのは知っていたが、ここまで極端な甘党だったとは……。常に僕の期待の斜め上に行く輝夜緋姫さんである。さしもの音葉も苦笑いしている。

だが、おかげで輝夜は大分緊張が和らいだようだ。頃合を見計らって、更に音葉が助け舟を出す。

「それで、私に話って、なになかな？」

単刀直入だった。しかしそこに厳しさは欠片も見受けられない。流石の音葉の手腕といったところか。

「ええ……………」

一度頷いて、もう一口コーヒーを飲む輝夜。やはり苦いの慣れ

ないのか、僅かに眉宇を顰める。

「……私、実川さんに謝らないといけない」と言った。

「謝る？ 輝夜さん、私に謝るようなこと何もしてないよ？」

心底心当たりがないといった疑問形で音葉は言った。

しかし輝夜も今更引きはしない。

「したわ、たくさん。はつきり言って、私は貴女に嫉妬していたわ」「嫉妬？」

「もつと言えば、邪魔だとか目障りだとか感じたこともある」

「……………」

「高校に入って変わってしまった私の事情も知らずに話し掛けてきて、何度拒絶しても貴女はにやにやと懲りずに。正直に言って、鬱陶しかった。憎たらしかった。幸せでこのうと生きてきた人に、私の気持ちなんて分かるはずがない、と勝手に思い込んでいた。でも、私の方こそ、実川さんのこと何も知らなくて、委員長という立場があるからだとしか思っていなかったけれど……………」

そこまで一気に言って輝夜は僕の方を見る。

「綺羅衣君に教わったわ。……………何も知らなかったのは私の方だと知った。知らされた。当たり前のことだけど実川さんには実川さんの事情があつて……………、いいえ、実川さんだけじゃない。誰もが誰も、自分のつらいことや苦しいことを持ちつつ生きていることなんて、知りもしなかった。知ろうともしなかった。知る努力さえしなかった。友達だった人の好意さえ無駄にして……………、つくづく自分の器の小ささを思い知らされたわ」

「輝夜さん……………」

「ごめんなさい実川さん。私はずっと貴女が妬ましくて、疎ましくて、無下にしてきた。もう遅いかもしれないけれど……………、本当に、ごめんなさい」

そう言って、輝夜は深々と頭を下げる。テーブルに額がつくくらいに、深く。緋色の髪が一房、ぱさりと垂れる。

そして、沈黙。輝夜は決して頭を上げようとはしなかった。

「輝夜さん」

そんな重い沈黙を、音葉の声が優しく破る。

「頭を上げて。輝夜さん」

諭すようにあやすように。音葉はどこまでも優しく呼びかける。

その声に反応して顔を上げる輝夜。

「もう一度言うけど、輝夜さんは私に謝るようなこと何もしてないよ」

「っ……、でも」

「私はね輝夜さん。本当に何もしてないんだよ。恩を売ろうとか、見返りを求めようとか、なーんにも考えてない。どちらかというとむしろ、自分のため。誰かが寂しそうな顔をしているのを見ているのが耐えられなかったから、私が辛かったから声をかけたの。自分の前で悲しそうな顔をしている人をただ見ているだけなのが嫌だったから、手を差し出したの。ほら、どちらかというと利己的じゃない？ そこに打算とか見返りとか求めるなんて、それこそ烏滸がましいよ」

「実川さん、それは」

屁理屈だろう。

確かに僕もそう思う。

けれど音葉は、きつと。

「人ってさ。誰でも良い部分と悪い部分、強い部分と弱い部分、綺麗なところと醜いところを持つてるんだよ。……そう、“翼”みたいに。その“翼”を受け入れてはじめて、人は人になれる」

「！」

そう、言うだろう。

音葉には、屁理屈さえも理屈に変える、偽物にすら本物以上の価値を見出すことができる、そんな不思議な魔力があるのだ。

「だから輝夜さんが、私に汚い部分ばかりを　私はそれを汚いとは思わないけど　見せていたことを申し訳なく思っているのなら、

それは筋違いってものだよ。全て輝夜さんの本当の姿なんだから、私はそれを否定したりなんかしない。……ううん、できない」

「私のこと、を……」

輝夜の声は、可哀想なくらい震えていた。

まるで　あの日の僕のように。あの日、音葉に救われた時のように。

「許して、くれる……の？」

その言葉に対し、音葉は声なき失笑を漏らす。

「だから、許すも何もないんだよ。私は最初から怒ってなんかいないんだから。もし輝夜さんが罪悪感を覚えていたとしても、それを裁く刃を私は持たないし、持ったとしても、使わないよ」

「……じゃあ」

輝夜は膝の上で握りしめた拳に、より硬く力を入れ、最後となるであろう問いを投げかける。

「私のことを、まだ、友達だと思ってくれている？」

輝夜にとって渾身の問いであったであろうそれをしかし、音葉は一瞬理解できなかつたようで、ぱちくりと瞬きをすること数回。

呆れたような顔になって。

「……はあ」

呆れたような息を吐いて。

「輝夜さん」

呆れたような声を出した。

「今度ばかりは、私も怒るよ」

「え……？」

「私、《輝夜さんが友達じゃないなんて思ったこと、一度もないんだけど》」

「」

輝夜は絶句した。

沈黙、ではなく絶句した。

二の句を継ごうとして口を開いてもすぐに閉じる。その繰り返し。

だがそれは、負の感情から来るものでは断じてない。歓喜、あるいはそれすら乗り越えて感動しているのだ。

「それとも輝夜さんは、私のこと友達だと思ってくれてないのかな」

「！ そんなことない！ でも、でもっ……」

激しく首を振り、必死に否定する。それでもまだ納得がいかないらしい輝夜に、僕はいよいよ見かねて。

「もういいだろ輝夜」

落ち着かせるように、隣に座る輝夜の肩に手をやり、声をかけた。やっと回ってきた主人公の台詞ターンである。

「実川音葉は、こういうやつだ」

「綺羅衣君……」

「音葉に常識は通用しない。自分の中で自分の常識が完成しちまつてるからな。コイツにとつて、正しいことは正しい、悪いことは悪い。で、お前のやっていたことは悪いことじゃない。そういうことだよ」

少しずつ顔に余裕を取り戻していく輝夜。音葉の方を見やると、僕に向けてウインクと、小さくサムズアップしてみせた。

「ナイスアシスト、ということが。僕はおどけたように肩を竦めて返事をした。」

「ねえ輝夜さん。一つだけ約束してくれないかな」

「約束？」

「『二度と辛いことを一人で抱え込まない』って」

「え……」

穏やかな微笑を絶やすことなく、音葉は言を紡ぐ。

「辛いこと、苦しいこと、悲しいこと、寂しいこと。自分一人ではどうしようもない時。そんな時は、絶対に一人で抱え込んで悩まないで。相談して。なにも相手は私じゃなくなつて構わない。綺羅衣君でもいいし、他の誰かでもいい。だから……ね？」

輝夜は真剣な表情で黙考して。

その言葉に、しかと頷いた。

「うん。じゃあ……はい」

音葉は右手を拳にして、小指だけ立てた状態で輝夜に突き出した。すぐさま意図を理解したようで、輝夜も同様にして手を差し出す。

二人の小指と小指が、絡まる。

目と目で合図。

声と声は、全くの同時に。

「「ゆーびきーりげーんまん、うーそつーいたーらはーりせんぼん、のーます、ゆびきった」」

小指が離れると。

音葉は屈託なく。

輝夜は少しはにかんだ様子で。

顔を見合せて、笑い合った。

二人の少女の微笑ましい再会の光景だった。

5 - 1 . 「天下無双の生層会長」竜虎相搏つ（後書き）

新・キャラ・登・場！ 満を持って生徒会長と書記である虹色と唯が登場します。果たして彼らの正体は……ってな感じで今後お送りしていきたいと思えます。本編はギャグパートが少ないのでちよつと物足りないかもしれませんが、次章では思いっきり書くつもりなので、宜しく願います。

5・2・彼らの正体」……最高の文化祭にしましょう」(前書き)

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・半角の() で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・全角の() で書かれている部分は主人公の情景補足
- ・《》で書かれている部分は傍点(強調)

5・2・彼らの正体「……最高の文化祭にしましょう」

それからしばらく、僕ら三人は雑談に興じた。

*

内容なんてあってないようなものだったが、僕はこんな風に三人で話をするのはほぼ産まれてはじめて、輝夜はずっと抱いていた懊惱が一つ解消され、音葉に至っては言わずもがな。とりとめのない雑談がどうしようもなく楽しかった。傍から見れば、僕達は普通平凡な高校生の仲良し三人組にしか見えなかっただろう。そのままラUNCHタイムに突入し、あつという間に数時間が経過していた。

「そういえば実川さん。もうすぐ文化祭だけれど」

輝夜は音葉とすっかり打ち解け、今では僕に対してと遜色なく気軽に話しかけられるようになっていた（但し、僕に対してとは違い毒舌はない。彼氏に冷たい彼女である）。

「そうなんだよね。もう週明けからでも準備始めないと間に合わないかも。まあ、出し物にもよるけど。私達の場合、そんな大掛かりな企画は無理だよな。でもやっぱり、実行委員を決めるのが一番の悩みの種かなあ」

学生生活における一大イベント、文化祭。当然のことながら我が校でも例外なく執り行われ、今年は十月二十七日土曜日、二十八日曜日の二日間、この時ばかりは中等部高等部の垣根を越え一丸となって取り組む、まさに相楽森学園の最大の恒例行事だ。

実行委員会は、生徒会を中心にして、各クラスから三名の委員が選抜されることになっている。うち一人はクラス委員長が務めるのが暗黙の了解で、残る二名の立候補を募るためのロングホームルームを二学期始業式翌日（今年はまだまたま始業式が土曜日なので、月曜）の一限目に行われるのが習わしだ。とはいえ、実行委員など所詮は裏方でしかなく、大半の生徒は舞台上が上がって遊び騒ぎたがるものだ。特に僕らは大学受験を間近に控えた三年生だ。最終的に

じ引きなどで強引に決められるだろうことは安易に予想がつく。

しかし、いつだって僕の予想の斜め上に行くのが輝夜緋姫である。

「大丈夫よ。今年の実行委員には私と綺羅衣君が立候補するから」

「はああ!?!」「えっ、本当?」

僕と音葉の声がかぶる。全くの想定外という思惑は共通しているが、こちらは当事者だ。驚きの度合いが違う。危うくコーヒーを吹き出しそうになった。

「ちよつと待て! 初耳だぞ!」

「当たり前でしょう。初口なもの」

「初口っていう単語も初耳だが、どうして僕の意志が尊重されないままに話が進んでるんだよ!?!」

「何よ綺羅衣君。その言い方だとまるで貴方に人権があるように聞こえるじゃない」

「僕には人権がないのか!?!」

「ないわ。この間私がヤフオクで三百九十八円で売ったから」

「人権って売れんの!?! ヤフオクで!?! しかも三百九十八円!

? 安ッ!?!」

「何を言っているの。さんきゅっぱよ、さんきゅっぱ」

「可愛く言い換えても駄目だ! このコーヒー一杯より安いじゃねえか!」

「でもシングルサイズのハーゲンダッツよりは高いじゃないの。私にとつて値段の高い安い基準はハーゲンダッツが買えるかどうかで決まるのよ」

「僕の人権がハーゲンダッツに負けた! これはもう一生立ち直れねえ!」

「綺羅衣君、ハーゲンダッツに失礼よ。謝りなさい」

「そう言っつお前は僕に謝れ!」

「黙って売ったのは謝るわ。今度、酢豚のパイナップルをあげるからそれでチャラよ」

「誰も欲しくないわそんなもん! 激しく理不尽な等価交換だ!」

「仕方ないわね。なら後でパパスの剣を九十九本あげるから、それでいいでしょう」

「いけない！ ついでにチートもいけない！」

「ついでにゲマを笑わせなくすることも可能よ」

「確かにあれはむかつくが、かなり意味のない行動だなあ！？」

「贅沢ね。あんまりしつこいと、次に出るモンハンのエンカウント率をゼロに設定して発売するわよ」

「狩人としての存在意義が完全に喪失した！ ゲームとして成立しないじゃねえか！ お前はカプコンを敵に回すつもりか！？」

「いい加減にして頂戴、綺羅衣君。それとも、私の携帯のアドレス帳に登録されている貴方の名前を、『綺羅衣翼（笑）』から『綺羅衣翼（爆笑）』にされたいの？」

「かつこわらい！？ お前の中で僕ってそんなキャラなの！？」

「あら、もしかして『綺羅衣翼ワラ』の方が良かった？」

「もつと嫌だよ！！」

「『綺羅衣翼 W W W』」

「普通に名前だけという選択肢はお前の中にはないのか！？」

「因みに、『W W W』といっても『World Wide Web』の略よ」

「僕が全世界に発信されている！！」

「手始めに、綺羅衣君の顔をmixiにアップすることにするわ。」

「これが私のダーリンです『って」

「やめる！ 完全な個人情報漏洩だ！！」

「大丈夫。モザイクはちゃんとかけるから」

「それはそれで嫌だな！ お前、絶対に僕のこと好きじゃないだろう！」

「何を言っているの。大好きよ」

「……………」
「さらっと爆弾発言された。」

目の前に音葉がいるっていうのに、どうしてこの女は照れもせず

……！

無茶苦茶恥ずかしいじゃねえか！

「だって、いじり甲斐があつて楽しいもの」

「僕の純情を土足で踏み荒らすなあ！！」

とことん彼氏に優しくない彼女だった。

「ふ、二人とも。それくらいに……ね？ 周りに人もいるから……」

見るに見かねて音葉がフォローを入れてくれる。確かに、喫茶店内にはランチタイムを迎えてのんびり過ごす人が数名見られる。

さつきからずっと、語尾に『！』がついている。

かなり恥ずかしい発言を大声で連発してしまった。

「とりあえず落ち着こう？ ほら綺羅衣君、深呼吸深呼吸」

「あ、ああ……。すー、はー、すー、はー……」

「ダーリン」

「ぐはっ！！」

まさか人生に於いてこんな台詞を實際口にするとは思わなかった。棒読みなのに、不覚にもドキッとしてしまった情けない僕がいた。

「集中できねえ！ 頼むから僕の邪魔をするな！」

「嫌よ。私の生き甲斐を取らないで」

「お前の生き甲斐は僕の邪魔をすることなのか！？」

「ええ。もう私は綺羅衣君にメロメロよ。綺羅衣君なしでは生きていけないわ。貴方が私に生きる価値を与えてくれたのよ綺羅衣君」

「何故だろうな！！ その台詞自体はともかっこいいと思うんだけど、どこか手放して感動できないのは！！」

「か、輝夜さん……。それくらいにしてあげて……。いくらなんでも綺羅衣君が不憫だから」

ああ……。音葉。やっぱり君は優しいね……。こんな時でも僕を気遣ってくれるなんて、それこそ輝夜に爪の垢を煎じて飲ませてやりたいよ。

「実川さんにそこまで懇願されては仕方ないわね……。まだ言い足りないけれど、実川さんに免じてこれくらいにしておいてあげるわ」

「まだ本気じゃなかったのか!？」

「まだまだよ。今の私は戦闘力が五十三万の状態だもの」

「まだあと三回変身を残しているだ!？」

「ネイルのようなナメツク星人程度が相手なら全力の十分の一も出す必要がないわ」

「またマイナーな名前出してきやがったなおい!！」

「最終的には虚化^{ホロウ}するわ」

「夢のコラボレーション!！」

結構頻繁にBLEACHネタ出したから、そろそろ久保帯人先生に怒られるぞ!！」

「いい加減にしなさい二人とも! お店にも迷惑がかかるでしょう!？」

「……ごめんなさい」

ついに音葉がキレた。正しいことは正しい、悪いところは悪いとはつきり断言する実川音葉である。流石に黙ってない。僕は平身低頭謝るしかない。輝夜でさえたじたじなのだから、ある意味では彼女は最強かもしれない。

「こほん。話を戻しましょう。綺羅衣君が実行委員なんて務められるの? あ、言い方が悪かったね。能力とか人格とかじゃなくて、お仕事と両立させられるのか、ってという意味」

そうなのだ。

実は、僕としても文化祭の実行委員をやることは吝かではない。むしろ一度裏方の苦労というものを経験してみたい気分も少なからずある。

ただ、現実問題として立ちほだかつてくる壁が二つ。

一つに、僕の間関係の薄弱さ。相楽森学園内で僕が関わりを持っている人物なんて、輝夜と音葉くらいしかない。確かに、生徒や教師とはそれなりに会話はするが、こうやって腹を割って話し合える相手がいるかどうかと訊かれてしまえば、否と即答できる。

もう一つ。どちらかというところこちらの方が難題で、放課後の空き

時間である。UN事務所に属している以上、いつ所長から仕事の呼び出しがかかるか分からないのだ。突然また海外まで遠征に行く羽目になるかもしれない。毎日のように実行委員会が開かれればそう何回も欠席するわけにはいくまい。前科として、僕は去年の学園祭は二日とも仕事で休んでいる（因みに、修学旅行も欠席している。虚しい学生生活だった）。

「そこはあまり問題じゃないでしょう。文化祭の出し物の提案を綺羅衣君ごときに求めることなどはじめから期待していないし、会議なら朝でも昼でもできるでしょう。私と綺羅衣君は頻繁に顔を合わせているのだし、委員会の内容はその時にでもできるわ」

「確かに正鵠を射た発言ではあるが、お前前半にさらっと僕にとっても失礼なこと言ったからな……」

「それに、仕事だって毎日入るわけではないでしょう。実川さんと私と綺羅衣君なら、よく知った仲だし、アイデアも出しやすいと思うの」

「成程……、それは確かに正論だね。綺羅衣君。綺羅衣君は何か反対する理由、ある？」

音葉が僕に振ってきた。

言われてみれば、この三年間で世に放たれたナンバーズのはほとんど教育してきて今はUN事務所の管轄下にあるし、余程切羽詰った用事がない限り数日間かかる任務にはならないだろう。少し所長に無理を言って少しの間なるべく僕に仕事を回さないように頼むこともできる。事務所はなにもナンバーズ対策の人員にそこまで逼迫しているほどではない。

それに、輝夜と音葉相手なら遠慮なく発言できる。普段は学校ではあまり目立たないよう積極的に意見を出すタイプではない僕だが、この二人相手ともなると話は別だ。むしろ日中に二人と行動を共にする大義名分ができるではないか。そう考えると、悪いことは一つもなさそうである。

「分かったよ。僕も異議なしだ」

「うん！ それじゃあ決定だね！ 週明けに早速ロングホームルームで立候補してくれるかな」

「分かったわ」

「りょーかい」

文字通り、とんだ貧乏くじを引かされてしまった結果となつてしまったが。

「綺羅衣君」

ふと輝夜が小声で呼びかける。僕はそれに「なんだ？」とだけ答えた。

彼女はいつもの鉄面皮を崩してはいなかったが、その向こう側には心底嬉しそうな感情が宿っているのが僕には分かった。

「……最高の文化祭にしましょう」

「……………あぁ」

僕は不敵に笑って言い放った。

「そうだな。目一杯楽しもうぜ」

輝夜と音葉と僕。

三人揃って、絶対に楽しくないわけがないのだから。

*

週明けの月曜の朝。例年通り一限目にロングホームルームが行われた。

教壇に立つのは、いつもの担任教師ではなく、クラス委員長である音葉。文化祭実行委員を決めるべく、立候補を募っているのだ。その声に反応して、真っ先に挙手した生徒がいた。

言うまでもなく、輝夜である。クラス内は決して小さくないどよめきに包まれる。なんせ、受験が差し迫ったこの時期に好き好んで裏方に徹する変わり者がいることもさることながら、それがあの『輝夜緋姫』なのだから。

だが当の本人は平然としている。土曜のあれで何かしら感じるところがあったのだらう。今の彼女に、他人に対する必要最低限以上

の緊張は見受けられない。それは、とても良いことなのだろう。僕としても同慶の至りだ。

それに続いて、僕も挙手する。これにもどよめきが巻き起こり、クラスは一時騒然となった。なにせ、《あの》綺羅衣翼だ。音葉が必死に鎮静化させようと声を荒げている。

黒板に、実川音葉・輝夜緋姫・綺羅衣翼の名前が並ぶ。「他に誰か立候補者はいませんか」そう訊ねる音葉だが、反応する者などいるはずもなく。

こうして。文化祭実行委員選出会議は異例の早さで決議したのだった。

*

放課後。

第一回相楽森学園文化祭実行委員会が執り行われる。各クラスから選ばれた実行委員三人ずつプラス生徒会役員による大所帯だ。取り仕切るのは当然、生徒会長・轟虹色。

「改めて挨拶しておこうか。オレは生徒会長の轟虹色だ。とはいえ、この文化祭でオレも任期が満了になる。その分今度の文化祭には力入れっから全員、特に新米どもはファンドシのヒモしっかり締めて大いに励め。以上」

彼らしい、豪放な宣誓だった。直接の接触はなかったが、この間の購買での事件といい今日といい、轟がどうして六年間に亘って生徒会長を務め上げてきたのが垣間見えたような気がする。

彼は、本当に学園全体のことを思いやっている。学園の、ひいてはそこに通う生徒達のことを。もしかしたら、不幸の連鎖などなくとも、最初から生徒会長になれたかもしれない。そう考えると彼は《なるべくしてなった》のだ。生来の粗雑な口調や気性の荒さなどを差し引けば、かなりの人格者たりえるのではないだろうか。

第一回の委員会は、轟が仕切り、釈迦堂が生徒会備品の大きなホワイトボードにペンを走らせ、委員達の自己紹介や大まかな流れを

伝達して、滞りなく幕を閉じた。

*

「やっぱり出店系かなあ……」

翌日の放課後。

僕達三人は教室に居残って、三年B組の文化祭での出し物について話し合っていた。

今日は正式な委員会はない。が、突発的に入る可能性がある僕の仕事を考えると、空いている時間は最大限有効に使った方がいい。幸いにして、今日は一度も携帯が着信を告げていないので僕も悠々と時間を過ごせた。

「出し物系にすると、教室も借りないとならないし、ちょっと手間ね」

「確かになあ……。そもそも、何を出すかにもよるだろ。何か展示するとか、ベタなところで行くとお化け屋敷とか」

自分でも意外なのだが、僕は真面目に積極的に発言している。言い出しつぺの輝夜や口上手な音葉ならいざ知らず、普通の学生としてのスキルを特に持ち合わせていない僕でも案外口が動くものだ。輝夜も輝夜なりに真剣に意見を出している。

「ああ、そうだわ。こういうのはどう？」

名案を思い付いたと言わんばかりの輝夜。

……言うまでもないことに、僕は嫌な予感が拭えない。

「私アーンド綺羅衣君プレゼンツ、THE・夫婦漫才」

「却下だ!!」

前言撤回、輝夜は僕で遊んでいる!

だいたい、僕らは夫婦じゃないだろう!

……恋人ではあるけどさ。

「そ、それは流石に二人だけが目立ちすぎちゃうんじゃないかな……」

「まあ実川さん、聴いて頂戴。とりあえず予行演習よ。」

ねえ綺羅衣君？ 突然だけど問題です」

「なんだ……、今度は何が始まるんだ……。問題という単語を耳にするのとあの日の悪夢が蘇るんだが……」

「問一。」

『A君は時速四kmの速さで十二km離れた目的地に向かっていきます。さて、目的地に着くのに何時間かかるでしょう？』

「あん？ なんだ、そんなの三時間に決まって」

「『注釈。A君は瞬歩しゅんぽを使えるものとします』」

「阿散井君あさいじゃねえのそれ！？」

「ブブー。正解は藍染君あいせんでしたー」

「ラスボスを君づけて、お前どれだけ偉いんだよ！ つーかBL E A C H ネタはもうお腹いっぱいだ！」

「仕方ないわね。じゃあ、問二。」

『Aさんは水泳の五十メートル自由形を二十秒フラットで泳ぎきる事ができます。では、百メートル泳ぐのに何秒かかるでしょう？』

「

「それにはスタミナの何かが絡んでくるから問題として成立しないだろう……。しかもそれ、さては蜷川なまがわあむるだろ。ケンコー全裸系水泳部ウミシヨーネタだろ。しかも2009年4月26日時点での五十メートル自由形の世界新記録は二十秒九四だから、それ記録更新してんじゃねえか。どんだけ超高校生級だよ」

「なんでこんなにも詳細な説明的なツッコミをせにやなんのだ。」

「逆に分かりづらいわ。」

「確かにあむるはすごい奴だけれども。」

「『注釈。Aさんはその後悪魔の実を食べてしまいました』」

「カナヅチになっちゃったよー！」

「ここでワンピースネタを絡めてくるか！」

「『注釈二。しかしAさんはニュータイプなので悪魔の実が通用しませんでした』」

「そっちのアムロ！？」

レイさん家のアムロさんですか!?

やっぱりこの女……侮れねえ。

「どう? 実川さん」

「どう? って自慢げに言われても……うん。とっても面白いのは分かるけど、ごめん、却下」

「そう……残念だわ」

本気で残念そうだ……。

本気で通ると思ってたのか。

前言、もう一度撤回。一応、真面目ではあるらしい。

ただし、この女の思考回路がファミコン版ドラクエのぼっけんのしよ並みにバグりやすいというだけで。

と、そこに。

びんぽんぱんぽん。

教室内に漂う微妙な空気を打ち消さんばかりに校内放送が流れ渡った。

「あ、あーあー、てす、てす。ね? あれれ? てすてす、マイクです。はれ〜? すみませ〜ん。これ、マイク入ってないですよ? って、はえ!?! 流れてる!?! ウソウソ!?! はりやりやりやりやりや……」

……実に愉快な校内放送だった。確かに喋ってる本人はマイクが入ってるかどうか分かりづらいもんじゃないが。

しかもこれ、釈迦堂の声だよな? 放送室内の様子がありありと目に浮かぶ。

ピーだの、ブーだの、ゴツンだの(多分釈迦堂がマイクに頭をぶつけた音だろう)ノイズは入ったが、校内放送は無事に再開された。『た、大変失礼を致しましたっ! ゴ、ゴホン! え、えー、気を取り直しまして……。三年B組の綺羅衣翼さん、同じくB組の輝夜緋姫さん、同じくB組の実川音葉さん。校内にいらっしやいましたら、至急生徒会室まで集まって下さい。繰り返します、三年B組の綺羅衣翼さん』

「あ？」

「？」

「え？」

三者三様、似たような驚きを示す僕達。ということは、僕一人の聞き間違えではなかったということか。

繰り返されるまでもなく、呼び出されたのは僕ら三人。しかも取りを直さず、『三年B組の文化祭実行委員の方』ではない、『綺羅衣翼と輝夜緋姫と実川音葉』の三人を名指して呼んでいる。

「なんだろう？」

音葉が首を傾げるが、答えは出ない。しょっちゅう仕事で学校を休んでいる僕や、遅刻早退の常習犯である輝夜だけなら、不良生徒に対する注意ということでもまだ分かる。だが、ミス優等生の音葉まで呼ばれているということは、どういうことか。この三人に共通していることなど

「

まさか、な。今まで一度も気配を感じたことがないんだ。単なる偶然の帰結に決まっている。

「ひとまず行ってみよう。……行けば分かる」

僕は二人を促しつつ生徒会室に向かった。

偶然、であるはずだ。

なのに、嫌な予感拭い切れない。

*

「よう、綺羅衣翼。こないだはジャリ子が世話になったな」

生徒会室にやってきた僕らを迎えたのは、相変わらずドスの利いた遠雷のような声を発する生徒会長 轟虹色だった。室内にいたのは轟と、釈迦堂の二人のみ。他の生徒会役員は既に帰宅したようだ。

「と、後ろにインのは輝夜緋姫と実川音葉だな。ようし、ちゃんと全員揃ってんじゃないか。はっは、律儀なこった」

「あつ！ すつ、すぐにお茶を入れますっ！」

忙しなく生徒会室内を走り回る釈迦堂を制して、僕は口火を切った。

「生徒会長が名指しで何の用だ？ お茶を入れるのはそれからしてもらおう」

「そう怖エ顔すんなよ綺羅衣。まるでオレが悪い奴みたいに見えるじゃねエか」

僕が急かしても、轟は飄々とした態度を崩さない。その間、僕は第六感を研ぎ澄ませていた。

やはり、ない。セラの気配は轟の身体のどこからも発せられていない。やはり僕の杞憂か？

「回りくどい男は嫌われるわよ。要件は何？」

僕の心情を酌んでか、輝夜がアシストする。

「私達、何も悪いことはしていませんけど？」

音葉も。こういう時の女性陣は実に頼りになる。

「三対一か、分が悪いな……。ま、今日呼び出したのは、ちょっとした挨拶だ」

「挨拶？」

僕の怪訝そうな声に反応して「あア」と気だるげに口を開く轟。

「ちょうど《ナンバーズが五人も揃ってる》ンでな。一言挨拶でもしとこうと思っつてよ」

「「「「！」「」」」」

僕・輝夜・音葉が声にならない驚愕を示す。

今……今、轟はなんと言った？

『ナンバーズが』

（《五人》？）

「あア、正確には一人はナンバーズじゃねエのか。まアいいだろ。回りくどいのは嫌われるンだったな。単刀直入に言うぜ」

轟は口許を歪めて放言した。

「改めまして、はじめまして、ってか。オレはナンバー13『バツ
ドラック』。コイツはナンバー100『ヴォイド』だ」
嫌な予感、どストライク。

T o b e c o n t i n u e d . . .

5 - 2 ・彼らの正体「……最高の文化祭にしましょう」（後書き）

前回抑え気味だった輝夜さんのブースターが思いつきり羽目を外します。そして、ついに明かされる虹色と唯の正体……！ もっとも、賢明な読者様は完全に予想の範囲内だったでしょうが。ありきたりですみません。ともあれ、お楽しみ下さい。

5・3・「さぞや詠いやすそつだよなア」刺されよつと打たれよつと（前書き）

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・半角の（ ）で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・全角の（ ）で書かれている部分は主人公の情景補足
- ・《 》で書かれている部分は傍点（強調）

5・3・「さぞや詠いやすそうだよなア」刺されようと打たれようと

「改めまして、はじめまして、つてか。オレはナンバー13『バツドラック』。コイツはナンバー100『ヴォイド』だ」

大事なことなので、章転換してまで二回言ったが、事態はそんな悠長なお話ではない。

腹に響くバスボイスで台詞を発したのは、私立相楽森学園に名立たる『天下無双の生屠会長』、轟虹色。ポマードでがちりと固めたオールバックヘアが、夕暮れの日差しを浴びて煌めいている。そしてその隣に立つのは『天上天下唯が独損』、釈迦堂唯。縹色の巻き毛は、ちょこちょこ動き回る彼女を象徴しているかのようだ。所は生徒会室。室内にいるのは全員で五名。生徒会役員である轟・釈迦堂に加え、校内放送で呼び出された僕達。アウト・オブ・ナンバー『エナジードレイン』、綺羅衣翼、ナンバー？『ヴァンパイア』、輝夜緋姫、ナンバー24『リジエネレイト』、実川音葉の五名のみである。

ナンバーズが五人揃っている。轟はそう言った。それは即ち僕らが異能力者であることを暗に確信していることに他ならない。

二の句を継げない僕とは裏腹に轟は上機嫌に続ける。

「本当はシカトし続けるつもりだったんだぜ？ でもよ、テメエら三人が首揃えて文化祭実行委員に名乗りを上げたときたモンだ。これも何かの縁だと思ってよ、ここらでいっちょ挨拶でもしとかねエとな」

「……笑えない冗談だな、轟生徒会長」

ようやく僕は遮るように口を開いた。本当に、笑えない冗談だ。

「冗談？ 何が冗談ってんだ？」

轟が口の片端を吊り上げつつ間髪入れずに返してきた。相変わらず放っているドルオーラ級の威圧感、こんな時でも揺るがない。

とぼけるつもりなら、こちらは鎌を掛けるまでだ。

「お前達からは一切《魔力》が感じられない。百歩譲って僕達だけなら欺けるかもしれないが、《事務所》の探索網にも引つかからなかつたくらいだ。二十年もの間隠し通せるわけがない。何より、お前達には身体に入れられている《刻印》が見当たらない。どこから仕入れたネタかは知らないが、世の中には良い冗談と悪い冗談があるんだよ」

魔力とは、つまりセラ。事務所とは僕が所属しているUN事務所のことで、刻印は当然、ナンバーズの証明であるナンバーリングのことである。全て固有名詞。誰かから若干聞きかじっただけでは答えられないものばかりだ。試しの意味合いも含めて僕は発言した。

「あア」

しかし轟はやはりどこ吹く風。右目を閉じて片手をぶらぶらとさせながら面倒くさそうに応えた。

「セラなら感じ取れなくて当たり前だ。オレが封じ込めてるからな。そりゃ無能の奇羅衣きろえや真田まんだにや見つからないだろうぜ」

「……！」

セラや博士のことまで知っている……！？　ということは、まさか本当に……？

「あと、ナンバーングな。アレなら」

そう言うと、轟はぶらぶらさせていた手を握って、指先で物を軽く摘むようにして。

「消した」

ぴん、とでこぴんのように弾いた。

「は？」

ナンバーングを……、消した？

「いや待て、それは不可能だぞ轟。ナンバーズの数字は普通の刺青みたいに簡単に消せるようなものじゃない。僕にはないけど、あれは皮膚を削ったくらいで消せるもんじゃないんだ」

実はあの数字はそのナンバーズ自身が無意識下で垂れ流している

セラの余剰分によって描かれているもので、単なる刺青ではない。その部分の皮膚を削った程度では消せないのだ。消せるとしたら、僕の『エナジードレイン』くらいだ。

「ああ、確かにその通りだったな。抉っても抉っても生えてくる皮膚に印字されてやがった。正確には隠したんだよ。本当ならこの辺に『13』って数字があつたんだけどよ」

そう言つて何も描かれていない左腕の二の腕辺りを指差し。

「その上から肌色の人工皮膚を縫い付けたのよ。つまり、この部分だけオレ自身の皮膚じゃねエってこつた。それなら理論上は可能だと思つて試したら成功したんで、だから消した。代わりに」

そう言つと、彼は更に左腕の袖を捲くり上げて肩を露出させると、そこには

「こうやつて、『??』ってタトウーを自分で入れた。こうすりゃ、『イチサン』じゃなく『サーティーン』って読めんだろ？」

確かに、そこにはギリシャ数字での『??』が刻印されていた。もうちょっと首側に移動したら、本物のトレイン・ハートネットの出来上がりである。

「だつてよー」

と。唐突に轟が机にくずおれた。座つた状態で上半身を机に預け、顔だけはこちらを向いて口をすぼめている。漫画とかだったら、口が『3』みたいになつてゐる絵面だろうか。手はだらしなく重力に従つて垂れ下げ、地団太を踏んでいる。

「ほんの三人遅れただけでファーストシリーズと違うなんて不公平じゃねエかよー。オレだつてギリシャ数字が良かったんだよー。つたく、んだよー『イチサン』って。だせーんだよー」

……あれあれ、今まで発していたプレッシャーが不意にベギラマくらいまで下がつただけだ。ぐれたつていうか駄々こねてるつていうか。なに、この普段とのギャップ。女子だったらギャップ萌えとかあるかもしれないけど男子、しかも身長が百八十もある奴がやるのは、ぶつちやけ、ウザい。

「ちょっと待ちなさい」

と。輝夜が制止の声を上げた。よくよく考えたら、この章になってから僕と轟しか喋っていない。輝夜の初台詞である。

「落ち着きなさい綺羅衣君。話が横道に逸れているわよ」

「そうそう。綺羅衣君？ 肝心なのは轟君の数字のことではないでしょ？ 轟君と釈迦堂さんが本当にナンバーズなのかどうか。違うなら、どうしてそんなに私達のことを知っているのか。本当なら、どうしてセラを感じないのかの理由を質さない」と

音葉も、僕に小声で耳打ちしてきた。流星は音葉、話の最重要課題の方に僕を誘導してくれる。輝夜も輝夜で、ナンバーズにとつての知識はないに等しいが、何より頭と口が冴える。ここぞという時には頼りがいがある僕の彼女だ。

そうだった、僕にも強力な助っ人がついていないか。言うならばメドロアとカイザーフェニックスである。

だとしたら、さっきからずっとおろおろしている釈迦堂はさしずめ……。

……メラ？

とにかく。

「轟。それに釈迦堂。訊きたいことは一つだけだ。お前達は本当にナンバーズなのか？」

僕は気を取り直して轟に向かう。その真剣な雰囲気を知ったよ、うで、彼もまた平時の気迫を取り戻したようだ。上半身を起こしてこちらを睨み付ける。

「だから最初っからそうだったってんだろ。オレが『バッドラック』。こっちのジャリ子が『ヴォイド』だ」

「ならどうしてセラを感じないんだ。さっきから僕も感覚を研ぎ澄ませているけれど、ちっとも気配を感じない」

轟は、「はアー」とつまらなげに息を細長く吐き出し。

「じゃあねエな……。ま、百聞は一見に如かずつつうしな……。ジャリ子。来い」

「は、はひっ……」

釈迦堂、第一声。とてとてと間伸びした様子で轟の許へ歩み寄る。轟は、釈迦堂の額に手を触れて。

「【釈迦堂の 不幸を全て 解き放つ】」

魔言を呟いた。その瞬間。

轟、という量のセラが轟虹色の総身から発せられた。ドルオーラを通り越して天地魔闘の構えである。密度の濃いセラの嵐に、窓も開いていない生徒会室内は風籟が吹き荒れ文化祭関連の書類が渦を巻いて宙を舞う。

ナンバー13とナンバー100顕現の瞬間だった。その圧巻なまでの光景に、僕らは咄嗟に声を出すこともできない。

「ジャリ子。『ヴォイド』を」

「はい。……空間閉塞。範囲、相楽森学園生徒会室。 発動」

普段とは打って変わって凜とした表情を見せる釈迦堂唯が、両の掌を合わせて機械的のような魔術的のような不思議な言葉を呟く。すると彼女の足許から、石を投げ込まれた泉の波紋のように、青い空間が広がっていく。世界を塗り替える、深青。瞬く間に青が世界を侵食していく様子に、僕らは成す術もなく呑み込まれるしかなかった。

実際の時間に見れば、半秒にも満たなかったであろう。あつという間に生徒会室は青く染まった。しかし、宙を舞っていたはずの書類の束はその宙空で時間が停まったかのように制止し、窓の向こう 夕陽が地平の彼方に落ちる寸前、残る命を燃やしていたはずの紅い世界は。

《無かった》。

いや、正確には、《虚無があった》というべきか。まるで小さな匣のように、閉ざされ完結した世界。

「バケモンみたいなチカラを持ったナンバーズ同士の戦いは、熾烈

を極めるだろ？ 街中でドンパチやられちゃ、被害はそれこそ百や二百じゃ収まらねエ 人だろ？金がだろ？が、な。なら、それに対抗するはずの何らかの術を、時の科学者がいくら無能でも、産み出さねエはずがねエんだ。そうして産み出されたのがコイツ、ナンバー100『ヴォイド』。空間を鎖し、小さな箱庭を作り出す超特異能力。中に這入れるのはナンバースの力を持ち、かつ『ヴォイド』が指定した者のみってわけだ。分かり易いだろ？」

「かつかと轟は笑い。」

「『ヴォイド』はどんな力を以てしても破壊できません。『ヴォイド』内では時間も経過しません。ただ一人の例外もなく『ヴォイド』の中にいる方が、唯の許可なく外に出ることは叶いません。唯がその気になれば、地球を丸ごと閉塞することもできます。但し、条件があります。この能力を発動している間はずっと、両掌を合わせている必要があるのと、唯がこの空間内に常に存在していることです。消耗するセラは、持続時間と範囲に比例しますが、この程度の範囲での発動なら、百年でも発動させていることが可能です」

「いつもとは違った毅然とした瞳で、釈迦堂は放言した。」

「確かに……外には出られないみたいだよ」

と。最初に行動に移ったのは音葉だった。生徒会室の扉を開けようとしているが、それはまるでよく出来た舞台装置のようで、ガチャガチャという音さえしない。完全に固定されている いや、そうでもない。《扉という物自体が、あるだけで、存在しないのだ》。……それで？ そういう『バッドラック』さんの能力はどういったものなのかしら。綺羅衣君が貴方達の気配を感じなかったのは一体、どういう絡繰？」

次に質問を投げかけたのは、やはりというか輝夜。青く染まった異常な世界に於いて、彼女の緋色の髪は一層映える。強気な視線で轟を射抜くように見据える。

「能力名のマンマさ。不幸。対象に不幸をもたらすのがオレの能力

だ。ただ、オレの場合はあんまり万能じゃなくてな、対象に触れながら五・七・五調で詠^{うた}わなければならねエのさ。加えて、オレの能力は一度に一つの対象にしか効力を及ぼせない。……その分、効果は絶大だぜ。『全ての不幸を背負い込め』と言やあ、当代最高の薄幸人間の完成だし、『死ぬ』と言やあマジでおつ死ぬ。つまり、オレの能力の全てをこのジャリ子に注いだ所為で、オレは全セラを委託しちまったわけだ。察知できないのも当然。ジャリ子に不幸を与えている間は、オレはセラを発していない、いや、『発することができない』んだからな」

「そして唯は、全ての不幸を背負い込んだおかげで、『不幸にも』力を使えなくなりました。だから、綺羅衣先輩達は、唯達の気配を感じる事が出来なかつたんです。これが、唯達の答えです」

辻褄は 合っていた。つまり轟は、『敢えて力を使い切る事によってセラを喪失』、釈迦堂はそれに、『敢えて身を投じる』ことでセラを強制的に抑え込まされていた』というわけか。 。
だが、一つだけ合点がいかない。

「……理屈は分かった。なら轟、どうして今になって僕達にそれを教えたんだ？ その様子だと、僕がUN事務所の傘下にいることも知っているだろう。だが、自ら投降しようとしているようにも見えない。何の意図がある？」

僕の問いに、轟は気分を害した風もなく、むしろ嬉しそうに笑った。

「はっ、お見事お見事。やっぱりそうでねエとな、オレが誘った意味がねエ」

「誘った？」

「ああ。おっと、回りくどいのは嫌われるンだったな。ま、オレもそういうのは好きじゃねエし。単刀直入に言っぜ。お前ら、オレの下につけ」

「なっ!？」 絶句する僕。

「……………」 不快そうに目を細める輝夜。

「どついう意味ですか？」問いを投げかける音葉。

三者三様の驚愕の様子を見せた中、音葉だけが常の冷静沈着さを保っていた。

「額面通りの意味さ。オレの下について『ジ・アース』の野郎をぶっ飛ばそうぜ」

「『ジ・アース』だと？ お前も『ジ・アース』を追っているのか？」

今度は僕が言葉を発した。

「『ジ・アース』を追っている？ ということは、シヨットのよう、私怨か？」

「勘違いすんなよ綺羅衣翼。オレがヤツを追ってんのは、金のためだ」

「金？」

「その様子だと、やっぱり知らされてねエみてエだな。今『ジ・アース』の首には、日本円で二兆の懸賞金がかかってンだけ」

「に　！？」

僕は思わず絶句する。20000000000000000円！？ 本当だとするならばとんでもない額である。俄かには信じがたい。

だが……相手が『ジ・アース』ともなると話は変わってくるかもしれない。ヤツは、その能力名の通り地球を支配する力を持っているのだ。

「当然、表にや出てない名前だけだな。いつまで経ってもUN事務所がヤツを捕まえないからつてんで、政府がヤケになつたらしいぜ。……ま、オレにやあ金さえ手に入ればどうでもいい話だがな。テメエの『エナジードレイン』とそこの吸血鬼の底力があれば、ヤツをとつ捕まえることもできンだろ」

吸血鬼だと？

「そのために……」

「あ？」

僕は怒気を隠そうともせず口を開いた。

「たかだか金のためだけに、UN事務所を裏切ってお前の下につけと。轟、お前はそう言うのか？」

「『たかだか金』？ おいおい、そりゃあ綺麗事が過ぎるぜ綺羅衣翼。五人で山分けしたとしても四千億だ。大の中でもとりわけ“大”の大人が一生かかってようやく稼げるかどうかの数字だ。一人のバケモンぶち殺すだけで一生遊んで暮らせる額が手に入るんだぜ？ 悪い条件じゃねエと思うがな」

ふざけるな。

「冗談じゃない。交渉決裂だ轟虹色。僕だけならまだしも、輝夜や音葉を巻き込むのは絶対に許さない。あと、訂正しろよ。輝夜は吸血鬼なんかじゃない。輝夜はれっきとした人間だ」

「綺羅衣君……」

輝夜が僕を呼ぶ。そうだと。僕はこの二人だけは絶対に巻き込んだりしない。

「残念だったな轟。お前達のことはUN事務所に報告させてもらう。その時は……もしかしたら敵同士かもな」

本心では、争い事は御免だけだな。

「ああ綺羅衣翼。そりゃ無理だ。オレは既に、テメエの弱みを握ってんだからな」

だが、轟は揺るがない。挑発的に笑って放言した。

「『かぐやひめ』に『みのりかわ』、か。二人とも五文字だ。……」

ククク、さぞや詠いやすそうだよなア

ぴし、と。轟の座っていたデスクの上の花瓶が粉々に粉碎される。

「……そろそろ言葉は選べよ、生徒会長」

僕はルシフェラーゼを巻き取って、滲み出る殺気を隠そうともせず轟を睨む。

「二度目はない、次は容赦なく当てるぞ」

めきめき、と大気が泣く。ひっ、と僕の殺気に怖気づいたか、釈

迦堂が掌を放してしまう。それと同時に、『ヴォイド』が解かれた。音もなく世界が色を取り戻し、通常空間に戻ったことで、ルシフェラーゼで粉々にされた花瓶も元に戻る。

「おオ、怖エ怖エ。おつかねエなあテムエ。流石は規格外だぜ」

アウト・オブ・ナンバー

「か、会長……すみませんです……。つい……」

「構いやしねエよ。どっちみち話は平行線でおしまいだ」

そう言つて、轟は再び釈迦堂の額に手をやり。

「【釈迦堂よ 全ての不幸を 背負い込め】」

『バッドラック』の能力を以てして、詠った。それと同時に、二人からセラの気配が消える。

「確かに、綺羅衣翼。今のは冗談だとしても、その二人がテムエのアキレス腱であることには変わりはない。事務所に報告なんてした日にゃ、オレもどんな手に出るか分からねエぜ？」

「っ」

一瞬の沈黙の後。

「輝夜。音葉。行こう」

僕は、やりきれない感情を胸に、二人を連れて生徒会室を後にした。

*

「妙なお話になっちゃったね」

僕達は、三人揃って帰途についていた。生徒会室に呼び出されるまでは文化祭の出し物について話し合っていた最中だったが、現状はそれどころではとてもない。三人で下校しているのは万が一の時の保険である。轟が輝夜や音葉に勢い余って変な気を起こさないようにするためだ。とはいえ、その危険性は限りなくゼロに近いと言つていい。轟が僕の弱みを握っているということは同時に、おいそれと行動を起こせないことを意味している（それくらいには、僕は轟のことを信用していた）。

「いきなり『下につけ』、ですものね。何様のつもりかしら。まっ

たく、いい迷惑だわ」

輝夜も、らしくもなく愚痴をこぼした。もつとも、彼女が誰かの陰口を耳にしたことはないので、先入観で物を言っている。この女は言う時は面と向かって言うタイプだ（その辺りのことは僕が一番よく知っている）。

「でも、先手を打たれたのは事実だ。これでUN事務所の組織力は頼れなくなったとみていい」

現状を鑑みるに、僕にとっては所長への報告からくるメリットよりもこの二人を危険に晒すリスクの方が余程でかい。

「そうだね。でも、轟君は嘘をついていたよ」

「え？」

意外なことに、音葉が真剣な声で口にした。

「正確には、《本当を話していない》、かな。能力のことや私達の綺羅衣君の弱点については本当だと思う。私が言っているのは

「お金」

続きを、輝夜が遮って言った。

「その『ジ・アース』とやらがどれくらいの人物なのかは私には分からないし、懸賞金がかかっているということも嘘ではないでしょうね。ここでは実際に二兆円もの大金が動いているかはさておいて……。でも、彼の本当の目的はお金じゃない。何故ならば、彼はその部分に関して《やたらと多弁だった》。本心を隠している時に咄嗟に人間がとる行動に酷似しているわ。……そうでしょう？ 実川さん」

「流石、輝夜さんだね。そういうこと。心理学的観点から見ると、嘘をつく時にはその嘘を悟られまいとするパターンが二通りあるんだよ。黙るか、逆に言葉数が多くなるか。轟君の場合は、後者つてことだね」

「はー……、成程な」

今更ながらこの女傑二人はとんでもない慧眼の持ち主であること

を再実感した。どんな時でも物事を一步下がった場所から俯瞰している。僕は目先の謎に食いつくだけで、そんなこと気にも留めなかった。

輝夜と音葉に頭脳戦で勝てるはずがない。

「勿論、お金が目的ではないというのも間違いではないでしょうね。その代わり、“一番の目的”というものが明確に存在しているはずよ。あの様子だと、私達を引き入れられるなどと本気で考えていたわけではないでしょう。本人が最初に言った様に、今日の話はあくまで『挨拶』であって、それ以上でも以下でもないものだわ」

一理も二理もある会話だった。今にして思えば、轟は敢えて口を悪くしていた節がある。従来の傲慢さ・高圧的な態度に加えて挑発的な口調だったように思える。

「どうするの？ 綺羅衣君」

音葉が僕に話を振る。

「どうする、って言われてもな……。とりあえずは放っておくのがベストなんじゃないか？ 意味もなく単独行動は考えが浅はか過ぎる……。僕にとっても、轟にとっても」

実は、これは嘘だったりする。僕の内心では既に一つの事項が決定していた。

「そう。じゃあ私から言えることは何もないよ。せめて、これまでよりも身の周りに注意するくらいかな」

Ｔ字路の曲がり角までやって来た。僕の家と輝夜の家は右、音葉の家は左側だ。音葉は「ここまででいいよ」と言って身を翻した。

「それじゃあ、今日はこれまでだね。綺羅衣君？ くれぐれも忠告しておくけれど、思い余って先走ったりしないようにね？」

内心どきりとしたが、どうにか誤魔化すことができたようだ。僕は「分かってるよ」と返事をした。

「うん。それじゃあ、また明日ね。綺羅衣君、輝夜さん」

「ええ。実川さん。また明日」

音葉は手を振りながら小走りで帰っていった。

……まったく、気を使い過ぎだったの。僕と輝夜を二人きりにさせようとしている魂胆がバレバレじゃないか。

……もっとも、音葉にとってはバレバレだと思われているということさえもバレバレなんだろうが。

「……ねえ、綺羅衣君」

輝夜が、気持ち声を小さくして僕に呼びかけた。

「私、実川さんと友達でいられて本当に良かったわ」

「そうか。そりゃ僕も良かったよ」

本当に、心の底からそう思う。

「綺羅衣君。今日、いい？」

日傘越しに目だけで僕を見上げる輝夜。

「え？ それって……例の件で？」

まだ人通りが疎らとはいえある時間帯なので、直接的な表現はお互いに避けたが、心は通じ合っているようだった。輝夜はこくりと頷いた。首の動きに合わせて日傘も揺れる。

「別に構いやしないんだけど……前の時は三十一日だけ？ 頻度が多くなってないか？」

つまり、吸血である。二十一日の初デートを教訓にして、その次は二十七日にやったし、二学期が始まる直前、つまり三十一日にも念のため飲ませてある。今日は月を跨いで九月四日だ。まだ四日しか経っていない。

「ごめんなさい。どうしてかしらね。生徒会長に『呼ばれたくない名前』を呼ばれたからかしら。どうにも気分が昂っているみたい」

吸血鬼。

轟は輝夜を指してそう口にした。それは輝夜本人にとっては『呼ばれたくない名前』であり、僕自身にとっては『呼びたくもなければ呼ばせたくもない名前』だ。

「そういう理由ならしょうがないな……。僕ん家とお前ん家、どっちがいい？」

「できれば、私の家で。まだ暑いもの。なるだけこの日差しの下は

歩きたくないわ」

九月に入ったとはいえ、まだ残暑が厳しい。僕でさえ歩いているだけで汗をかくくらいの気温だ、長袖長スカートの輝夜にとっては相当な負荷だろう。

「分かった。じゃ、行こうか」

「ええ」

そう言っつて、僕達は青柳荘へと向かった。

ちう　ちう　ちう　。

いつものように、輝夜が僕の首筋にしゃぶりついている。今更だが、血を分け与えるだけならなにも首筋じゃなくてもいいものなのだが、それをこの前指摘すると。

『駄目駄目ね綺羅衣君。ムードっていうものを分かっていないわ。まったく……これだから男子は……』

『なんだそのクラスに一人はいそうなちよつとウザい女子みたいな台詞は!?!』

という不毛な会話が繰り広げられたため（言うまでもなくこの時のトークバトルも僕の惨敗に終わっている）、以来文句を言わないようにしている。

「ん……、ぶはっ」

五分くらい経過しただろうか、輝夜が僕から離れる。

「ごちそうさま」

「おそまつさま」

意味もない会話。八月二十一日に起きたアクシデント以来、この会話はどちらからもなく定着してきつつある。

「じゃあ、用事も終わっつたし、僕は帰った方がいいか？　どうせお前この後、シャワー浴びるだろ？」

「なに貴方。どうしてそんなことまで知っているの？　もしかしてストーカー？」

「あらぬ疑いをかけるな。単に予測したまでだよ」

僕は輝夜が同じ服を二日続けて着ているのを見たことがないからだ。この時期は僕でさえ毎日シャワーくらい浴びるからな。暑さというより日差しに人一倍弱い輝夜なら、その辺りもつと敏感だろう。

それに……こんなこと本人に言うに変態扱いされそうだから言わないが、コイツの髪の毛、いつだってすげーいい香りがするんだよな。

「成程。綺羅衣君は産まれてはじめてできた彼女に興味津々浦々のね」

「いや、浦々ではない」

たった今この場ではじめて聞いた六文字熟語である。

新しい単語誕生の瞬間だった。

「ふ、ふんっ。帰りたければ帰ればいいじゃない。別にアンタのことなんてなんとも思っていないんだからねっ」

「だから演技してまでツンデレキャラを演じるなよ……」

しかもこのところ、少しずつ演技力が上達しているから始末が悪い。

「というより今更だけれど、わざわざ演じるまでもなく私はツンデレよ」

あっさりと素に戻る輝夜。前言撤回。やはり演技力は小学校の演劇発表レベルだ。

「嘘をつけ。お前がいつデレた」

いや、二度目の告白を“デレ”のカテゴリーに入れるんだとしたら確かにツンデレだけどさ。

「残念ね。私にはデレ期が明確に設定されているのよ」

「設定とか生々しいからやめろ……。じゃあ訊くけどな、お前のデレ期っていつなんだよ。いつになったらデレるんだ？」

「そっね……」

そっ言つと目を閉じて黙って真剣に考え始めた。

……この時点で明確に設定されているというのは限りなく黒に近

いグレーになった。

「……………」
眉間に皺を寄せ、マジで真剣に考えてやがる。
グレーに限りなく近い黒にランクアップした。

「……………」

「……………」

『あ』って言ったぞ、『あ』って。

コイツ、絶対たつた今閃いただろう。

最早疑いようもない黒である。

「毎月四十のつく日にデレるわ」

「新しい暦法が生み出されるまで訪れないデレ期じゃねえか!!」

「何を言っているの。綺羅衣君の四十九日にはちゃんとデレると言っているのよ」

「それは僕が死ぬまでデレないと言っているんだ！ ちつとも嬉しくない！」

しかも、なんで僕限定なんだ!?

「宮崎駿監督も言っているわ。『デレないツンデレはただのツンだ』って」

「確かに正論だが監督はそんな迷言は言っていない!!」

しかも元ネタは空飛ぶ紅い豚さんの台詞だ！ 監督本人の発言じゃない！

「ところで綺羅衣君、話変わるけど」

「勝手に変えるな！ まずお前がツンデレなのかどうか、ツンデレなのだとしたらいつデレるか！ この二点をはっきりさせてから次に移れ！」

「デレたくなったらデレるわ」

「ツッコミようがない最強の台詞キター—————!!」

「今時2ちゃん用語は古いわよ、綺羅衣君」

「……………」

やはり僕は一生コイツの尻に敷かれる運命なのかもしれない。

「前々から思っていたことなんだけれど、『(21)』って速攻で寄せ気味に書くと『ロリ』に見えない？」

「筆者が大好きなネタをこんなところで使うなあああ！！！！」

「……誰よ、筆者って」

「……………誰だろ」

僕も知らない。

もしかしたら今のは、違う次元同士が繋がり合った奇跡の瞬間だったのかもしれない。

「冗談は格安」

「やっぱり売る気だ！！」

「嘘よ。さておき」

「お前の冗談は心臓にも精神衛生上にも悪いからやめてくれ……………」

「生徒会長のことはどうするの？」

「……………」

今度こそ、話がコロツと変わった。

「去り際の綺羅衣君、もの凄い殺気放つてたわよ」

「……………いくらなんでもお前でも気付くか」

「まるで竜魔人化したダイのようだったわ」

……………物の例えまで僕と同じである。

「……………お前、やっぱり僕の心読めるだろう」

「当然じゃない。恋人だもの」

「……………」

さらっとすごいこと言われた。

すげー恥ずかしい。

「……………というのは冗談で」

「出来ればそこは本気にしておいてもらいたいんだが！」

とんだ恥ずかしがり損だ！

「綺羅衣君、考えていることがすぐに顔に出るから分かり易いのよ」

「よくあるギャルゲーの主人公の設定みたいだな……………」

「え？ 違うの？」

「違うよ！ 真顔で驚くな！」

「てつきり私はそうだとばかり思っていたのに……」

「もしそうだとしたら、僕は間違はなくお前じゃなく音葉を攻略してるよ！」

「そんな暁には、この町の名前が難見沢市っていう設定になるでしょうね」

「やめろ！ この町の名前が未だに明記されていないことを逆手にとってうまいことを言うな！ ていうか鉦！！ どころから出したそんなんもん！？」

「うふふふ……、乙女の必須道具だよ？ だよ？」

「口調まで変貌した！？ 怖えよ！ リアルに怖えよ！！」

コイツはどちらかというツンデレじゃなくヤンデレだ！！

黒は黒でも、腹黒い！！

「ていうか…… ああ、なんかお前と付き合い始めてからの僕は『ていうか』が口癖な一昔前のギャルみたくなって！ お前の必須道具は凶器ばかりじゃねえか！ さっさと仕舞え！ いや、仕舞って下さいお願いします心から！！ すいません、ふとした弾みで口走りました！ 僕は輝夜オンリーです！！」

「しょうがないわね……」

命惜しさに告白までしてしまった。

僕は実に器の小さい男である。

「本題に戻るわよ。生徒会長のことはどうするつもり？」

「あ、ああ……。とりあえずは静観するつもりだよ。少なくともお前や音葉に害を及ぼすことは絶対にしないから大丈夫だ」

良かった、ようやく本題に戻ってくれた

「いっそのこと、殺っちゃおう？」

「だからさらっと爆弾発言すんなつつうの！ せつかく本筋に返ってきた話をひぐらしネタに戻すな！ いいから鉦は仕舞え！！」

戻ってなかった！！

「でも私、彼はどうしても好きになれそうにないわ」

「まあ確かに、我が強いキャラではあるよな……」
お前も負けてないけどな。

死にたくないから口が裂けても言わないけど。

「いつそ綺羅衣君が生徒会長になり変わればいいのよ。綺羅衣君いつも言っているじゃない、『青学の柱に、おれはなる！』って」「言っていないし混ざってるし学校名からして違う……！」

相楽森学園だ……！」

「とにかく、静観するつもりなのね？」

「ああ、ひとまずはな」

「《本当に》？」

ぎく、とした。

もし僕が本当に思っていることが顔に出やすいタイプなら、僕の本音は見抜かれているということになる。

それだけは避けなければならぬ。

「本当だつて。彼氏を疑うなよ」

腹筋にありつたけの力を入れて、声が震えないようにする。

「……それもそうね」

……こんな時にはかり彼氏を名乗るなんて、虫が良すぎると自分でも思うが、どうかご寛恕願いたい。

「ああもう！ ほら、こんな話終わりにしようぜ。いい時間だしな、僕は帰るぞ」

「分かったわ。……綺羅衣君、くれぐれも早まっちゃ駄目よ」

去り際にそう残して、僕は輝夜の家を辞した。

(……ごめん、輝夜、音葉)

心中でどれだけ謝ろうが意味がないことは分かっているけど、僕は頭を下げずにはいられなかった。

輝夜に釘を刺されようと、音葉に釘を打たれようと、今の僕には確固たる決意があった。帰り道、僕はその決意を更に固める。

UN事務所の役員としてではなく、『エナジードレイン』としての義務感でもなく。

僕個人として、冗談でも輝夜や音葉に危害を加えると言った轟を見過ごすことなどできない。だから。

綺羅衣翼は、ナンバー13『バッドラック』を……消去する。デリート

5・3・「さぞや詠いやすそうだよなア」刺されようと打たれようと（後書き）

虹色と唯の正体の詳細が明らかになります。輝夜さんはこの章でもぶっ飛んで、なんとついに、乙女の必須道具その二が明らかに……！？ 実はそれほど大した内容ではない。次章から虹色を主軸に置いた展開が繰り広げられていきます。お楽しみに！

5 - 4 ・翔ける覇者と駆ける王者」

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・半角の（ ） で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・全角の（ ） で書かれている部分は主人公の情景補足
- ・《 》 で書かれている部分は傍点（強調）

5 - 4 ・翔ける覇者と駆ける王者」

九月五日水曜日。まだ日も昇らぬ早朝。黎明には数刻の猶予があり、町は静かに薄闇が支配している。

僕は、相楽森学園生徒会室を訪ねていた。

理由は言わずもがな、轟との決着をつけるためである。結果として輝夜と音葉を裏切ってしまうことになり、当然代価として後でしよつぴかれるだろうが百も承知である、僕は彼女達の《報復》よりも《喪失》を恐れた。

そして、その室内に彼らはいた。

「よう、綺羅衣翼。随分と早エご登校じゃねエか。悪い夢でも見たか？ お坊ちゃんよ」

なんとなく、いると思ったのだ。少なくとも、逆の立場だったら僕も轟と同じことをしていただろう。そういう意味では僕は彼に対し、ある種の親近感を抱いていた。

轟の挑発的な口調にもめげず、開口一番僕は言い放った。

「轟。取引だ」

「あん？ 取引？」

「ああ。僕と勝負しろ、轟虹色。……いや、ここでは敢えてナンバ113と言わせてもらおうか。勝負の内容はそっちでなんでも決めていい。もし僕が負けたら、僕はお前の言うことを何でも聞いてやる。ただし、僕が勝ったら、輝夜と音葉には今後一切の手出しをするな」

「ほオ……」

これはあくまで、単なる理由づけに過ぎない。もしこの時点での交渉が決裂していたら、僕は最終的には武力での強硬手段を取らざるを得ないのだ。

「イマイチ面白くねエ取引だな。ソイツはオレにとって、受けよう

が受けまいが何のデメリツトもねエ。第一、口約束に過ぎねエだろうが。薄っぺらい紙切れ一枚以下の約束で他人^{ひと}サマを信用できるほど、オレは出来た人間じゃねエぜ。

と言いたいところなんだが」

轟は、無言を貫いている釈迦堂の方を流し目で見やって。

「《ジャリ子にそんな物騒なモンを突き付けられてりゃあな》。オレは断ることはできねエよ」

「……そこまで気付いているなら話は早いな」

僕は《釈迦堂の喉元に突き付けていた、肉眼では視認不可能な程に鋭く研ぎ澄ませていた糸》を手繰り寄せる。

所長や輝夜のやり口。それをちよいと拝借させてもらい、予めノーと言えない状況を作り出しておいたというわけだ。轟は釈迦堂に対してやたらと甘い。僕にとってのアキレス腱が輝夜達なら、轟にとつてのアキレス腱は釈迦堂だということだ。彼女に身の危険が及べば、この交渉がうまくいかないはずがない。

……汚い小悪党みたいで、気が引けたけどな。

「約束というなら、釈迦堂が背負っている“全ての不幸”を僕が代わりになつてもいい。そうすれば、僕は好むと好まざるとに関わらずお前に従う他なくなるだろう」

「分あつた分あつた。ひとまずテメエの覚悟だけは伝わったぜ。下手に正義感振り回されるよか、よっぽど好感が持てる」

それに、と続ける轟。

「どう考えたところで、オレが負けなきゃいいだけの話だからな。

はっ、そう考えりゃあもつと断る理由がねエわな」

「……大した自信だな轟。不遜を承知で言わせてもらえれば、その慢心はいずれ身を滅ぼすぞ」

「おいおい、オレを誰だと思つてやがんだ？ 百戦無敗の生層会長だぜ？」

轟は怒気を隠そうともせず、僕に刺すような鋭い視線を飛ばしてきた。相変わらず猛禽類のオーラを放つ男である。百八十の長身と

オールバックの髪形がプレッシャーをより一層引き立てる。

「そういう台詞を言ってるうちが華だつて言ってるんだよ」

だが僕も負けてはられない。ここに立っているのは被食者ではないということを知らしめてやらねばならない。怯むことなく言い返した。

僕も以前同じようなことを思っていたから、轟の考え方は分からないでもない。だからこそ分かる。《負けを知らないということもまた無知なのだ》ということが。

「ククク……、いいね、その眼。やっぱりテメエを誘って正解だったぜ。ますますお前が気に入ったよ綺羅衣翼」

空を翔ける覇者と、地を駆ける王者。今この場にいるのはそんな名もなき君臨者だった。

「で。なんだっけか。ああ、勝負の内容な。いいんじゃない？ フツ」のガチンコバトルで」

と。空を翔ける覇者は、豪放に宣言した。

「……いいのか？ そんな簡単に決めて」

「うだうだと周りくどいのは嫌エなんだよ。真正面からぶつかるとだけでケリがつくんだからいいじゃねエか。简简单単、大いに結構結構。」

それにな、綺羅衣翼。勘違いすんなよ」

轟はここにきて、はじめて《その感情》を表に出した。すう、と切れ長の目を更に細めて僕に対して明確な《敵意》を放つ。

びき、と生徒会室の窓ガラスに罅が入る。轟が発する超常的なプレッシャーが、物理的な破壊力すら伴って渦を巻く。

「《ガチンコバトルがテメエの専売特許だと思ってたら大間違いなんだよ》」

大気の軋みに耐え切れなくなった窓ガラスが、とうとう砕け散った。こと、敵愾心という概念において、轟のそれはあまりにも圧巻だ。言うならば、闘争本能の塊。純粋な狂戦士と明確に一線を画するのは、その凄まじいまでの闘争心を自在にコントロールしていると

いうことである。コイツは、ナンバーズとしての能力を完全に自覚した上で自在に使いこなしている。自我の強さという点において、轟虹色は間違いなく“最強”だ。

事実、次の瞬間にはその重圧は収まっていた。

「あーあ、また備品を壊しちゃったぜ。つたく、今回は会計になんて言い訳すりやいいんだよ……」

憂鬱そうに一人ごちる轟。一つ息を吐き出すと、釈迦堂に目配せをして呼び寄せた。

「白黒つけんなら早エ方がいいだろ？ 綺羅衣翼。戦場は『ヴォイド』に囲まれた相楽森学園全域。ルール無用の一対一だ。いいな？」
「……いいだろう。取引を持ち出したのは僕だからな。拒否はできない」

敵意を放ったということは、少なくとも「僕が敵である」ということとを認めた証だ。こちらとしても、早々に決着がつくのは是非もない。

「オーケーオーケー。……んじゃ」

【釈迦堂の不幸を全て 解き放つ】
そう詠った。

再び顕現する、『バッドラック』と『ヴォイド』。釈迦堂はすぐさま両手を合わせ、『ヴォイド』を展開する。

「……空間閉塞。範囲、相楽森学園学内全域。対象、轟虹色、綺羅衣翼。発動」

波紋のように広がる、どこまでも透き通る深い青。今この瞬間より、相楽森学園は僕と轟の決戦の舞台として用意されたバトルフィールドと化す。そう、二人だけのコロシウムへと。

開戦だ。

「表エ、出ようぜ綺羅衣翼。こんな狭い室内じゃ思う存分暴れられねエだろ。……ジャリ子。どっかに隠れとけ」

「はい。……ご武運を、会長」

そう言つと轟はズボンのポケットに両手を突っ込んだまま立ち上

がる。セラを隠すことなく曝け出した彼の容貌は、まるで巨人のよう。二メートルにも三メートルにも錯覚させた。

そうして向かったのは出口。ではなく、割れた窓ガラスの方だった。ずかずかと大股でポケットに手をつ込んだまま。

何の躊躇いもなく。そこから外に飛び降りた。

この生徒会室は四階だが、当然着地に失敗することもなく、たとえ、と軽快な音を立てると同時にグラウンドの方に歩いていく轟。流石のナンバーズといったところか。身体能力も伊達ではない。轟に続くように、僕も窓枠を飛び越え地面に降り立つ。自然、僕は轟の背を追う形になる。

既に限定封印は解除してある。いくらでも奇襲は可能だった。僕は何も騎士道精神を振りかざすつもりは毛頭ない。背後からの奇襲戦法などいくらでも教わったし、それが最善であると判断した場合には迷わず実行に移す気でいた。

だが……。

(隙がなさすぎる)

僕が瞬時に思い浮かんだ奇襲作戦は十六手。そして、そのいずれもが《単なるプレッシャー》に打ち負けた。それほどまでに轟には隙がなく、僕は改めて痛感する。

『コイツは強い』、と。

シヨットと同等、あるいはそれ以上の激戦になるだろう。僕は確信すると同時に覚悟を決めた。

グラウンドの中程で、轟は足を止めた。僕はそれに合わせて、十メートル前後の距離を維持して止まった。

「んじゃまあ、おっぱじめっか」

コキコキと首を左右に振りつつ、轟は僕に対峙する。表情からは余裕すら見て取れた。両手はポケットに入れたままだ。

「最初の一手は譲ってやんよ。……どっからでも来な」

相変わらず大した自信だ。確かに、彼はそれに見合うだけの實力

派であることは疑いようがない。

ならば。

「……『最初の一手』？ 悪いな、《僕はもう百手打った後だが》」

綺羅衣翼は、その慢心をこそ打ち砕く！

ルシフェラーゼで編まれた、轟を取り囲む、百の刃。それはまるで檻のように。逃げ道という逃げ道を悉く封殺し、回避という術そのものを最初から選択肢から削除させる。

さあ見極めてやろう轟虹色。お前の自信が、果たして本物かどうかを。

僕は糸を手繰る指先を振り上げ。

「ナンバー13『バッドラック』。貴様を……デリート消去する！」

その言葉を待っていたかのように、ルシフェラーゼの百刃が縦横無尽、あらゆる角度から轟を襲撃する！

轟は言っていた。『バッドラック』の能力は一度に一つの対象にしか効力を及ぼせないと。その言葉を鵜呑みにしたわけではないが、ならば、このように同時に襲い掛かる百の刃を防ぎ切れないのは瞭然だ。

したがって、こういった同時攻撃への対抗策を考えていないはずがないのだ。この男は、そんな大きな隙間を空けたままにするような無能ではない。

故に、僕がまず最初にすべきは、その方法の看破。この先手の主眼は攻撃にあらず、刃による襲撃はあくまで複眼でしかない。

案の定、といった様子で、轟は迫る剣尖から目を背けることもなく手を頭上にかざし。

案の定、僕の読み通り、“対抗策”を講じた。

「【轟を 囲む大気が 壁となる】」

ガリガリガリ、と耳障りな音を立ててルシフェラーゼが逸れ、弾かれる。まるで　そう、まるで、彼の周りに見えない壁でもあるかのように。百の刃は全て余さず轟に命中することなく、無念にも青く染まったグラウンドに墓標の如く突き刺さった。

「予想していた展開ではある。主眼である『轟がどう動くか』の見極めは達成したのだし、何かしらの方法で詠うのであることは推測通りであった。第一手　否、百手は全面的に成功したと見ていいだろう。」

それでも、解せない点があるのもまた事実。

《不幸を詠っていない》。つまり、今の五・七・五の詩は《ナンバーズとしての能力ではない》ということだ。

「どうにも解せねエ、って面してるぜ、綺羅衣翼。面白エな」

「けらけらと嘲りを含んだような笑みを浮かべる轟。

「オレの見込み違いか？　テメエは敵の発言を一から十まで真に受けるようなキャラじゃねエと思っていたんだがな」

「……何が言いたい」

「要するに、だ。オレは何も、《不幸を詠うだけがオレの能力じゃない》、つつつてんだよ」

「　　」

「　　」

「　　」

「　　」

「　　」

「　　」

そう言つて、彼は自分のこめかみを指でトントンと叩く。

確かに……道理で、《本当を言っていない》わけだ。

「轟オレン家はな、五、六百年くらいか、それくらい大昔から代々続く陰陽師の家系なのよ。それも、『五・七・五調に詠う』ことに特化した、な。杖や札なんかの外的要素は一切用いず、僅か十七文字に自分の内ないき気を集約して言霊に乗せる陰陽術師。珍しいらしいぜ？

ていうか、フツーに轟家オンリーだわな。そして、《オンリーワンであるが故にナンバーワン》。今も昔もこの事実だけが最後に横たわっている。それにナンバーズとしての能力が加わつてんだ、《無敵じゃない方がおかしい》ンだよ」

つまり、詠えばそれが現実になる魔術。

轟虹色は、口を開かせれば右に出る者はおよそ存在しない、言霊の自在者だったのだ。

「それが、お前の絶対的な自信の裏付けか」

「ああ。他にどんな理由が必要だ？ 要らねエさ。五百年間負け知らず、その事実だけが唯一で不変で絶対だ。オレはこの能力を『詩ウツ霊』と呼んでいる。限定的であればあるほど効力を増す『ヴァース』に、更に“不幸”を表す言葉を重ねることで『バッドラック』が倍増させる。……テムエの糸は確かに戦業せんぎょう千手せんしゅだろつな。ならオレは戦業万手せんぎょうまんにしゅだ！ テメエの糸がオレを捉えることはできやしねエ！」

……成程な。確かに、自信を裏付けるだけの理由は持っているわけか。五百年にも亘つて綿々と受け継がれてきた“不敗”。それが大きな後ろ楯となり轟を支えている。自分に対する絶対的な信頼が、しかし轟の視野をひどく狭窄させていることに気が付いていない。盲目とはそういうものだ。

僕は『ヴァース』に対抗しうる術を既に見つけてある。

五・七・五で詠う隙すら与えないほどの超高速攻撃による一撃必殺。瞬転しゅんてんを使えば、僕にはそれが可能だ。瞬転は目には見えない。見えないものには触れられない。触れられなければ能力を発動させられない。鳩尾にでも一発ブローを喰らわせてやれば、しばらくは

声が出せないだろう。

だが轟は、僕の考えなどお見通しだと言わんばかりに口を歪め。
「綺羅衣翼。お前は今、『五・七・五で詠う隙を与えなければいい』
って考えてるだろ。ははっ、気持ちに分かるぜ。オレの力を知った
奴はみんなそう言うのさ」

そう言い放つと、轟は大きく息を吸い込んで。

「

ん!!」

「っ!?!」

一体何が起きたのか分からなかった。ただ一つ分かったのは、空
気が何重 否、何十重にも震えたということ。

あたかも、《今の一声の間に五十音全てが含まれていたかの
ような感覚》。そして、それはあながち的外れでもなかった。

「びびったか？ 今オレは、『あいうえおかきくけこさしすせそた
ちつてとなにぬねのはひふへほまみむめもやゆよりるれるわをん
って言ったンだけだな。聴き取れなかつたろ?」

「発声練習かよ!」

戦闘中だということにもかかわらず、思わず突っ込んでしまった。

「これが轟家が永年頂点に君臨し続けてきた最大の術、伝家の宝刀。
名を『即口』と呼ぶ。速読ならぬ、な。オレも例外なくコイツをマ
スターしてる。今ので分かった通り、オレは本気を出せば《普通の
人間の五十倍の速さで喋ることができる》ンだよ。こうして普通の
速度で話しているのにも、実は結構な神経使つてンだぜ？ つまり、
『ヴァース』を発動するのを物理的に遮るには、音速を超えないと
いけねエのさ。 temeエの糸がどんだけ速かろうが、音速突破は流石
に無理あんだろ?」

「……………」

コイツ……………やっぱりとんでもない奴だ。通常の五十倍のスピード

で話すって、どんなトンデモ星人だよ。

「ついでにもう一つ。テメエには瞬転とかいう切り札があるらしいな。オレの即口も大概イエローカード級だが、ソイツは完全にレッドカードだぜ。『幾何学要素を無視する』なんて大それた真似、成程、アンチ・ナンバーズを称するだけのことはある大魔術だ。そこは素直に認めてやる。」

だから、オレはソイツを早々に使い切ってもらう必要があるんだ」

そう言つて。轟は、足許のグラウンドに落ちていた硬式のテニスボールを手に取る。

「先手はくれてやったからな。代わりと言っちゃナンだが……封殺させてもらうぜ、そのジョーカー！」

更にそれに回転をかけて指の上でスピンさせると、拳で堅く握り締め大きく振りかぶつて。

「【このボール 命中すれば 即死級】！」
投げた。

と脳が認識した瞬間には、そのボールは僕の目と鼻の先にまで迫っていた。

「!?!」

信じられん、轟は何の魔術的要素もなく単なる臂力のみで、時速六百kmもの投球を試みせたというのか！

回避が間に合わないのは火を見るよりも明らか。防御を いや、このボールには『ヴァース』による魔力補正がかかっている、つまり、《防御しようがどうしようが、命中すれば例外なく即死するくらい破壊力を持っている》のだ！

(瞬転！)

刹那にも満たない間に思考を組み立て、瞬転による回避を行う。消去法で選り抜かれたたった一つの生存策。しかし、オンリーではあったがベストではなかった。僕はこの時点で唯一の切り札を使い切ってしまったからである。

僕がさつきまで立っていた場所は体育館の前。そしてその後ろ、体育館の壁にはまるで破城槌でも持ち出したかというくらい巨大な穴が開いていた。人一人は優に通れるくらいの風穴、確かに人体であるならばどこに当たろうが即死級だっただろう。破壊を行ったところのテニスボール自体も跡形もなく千々に砕け、表面を覆っていたフェルトがそこかしこに浮遊している。

……百八式波動球かっつての。

僕は苦々しく歯？みをする。『ヴァース』、そして轟の伝家の宝刀、即口を前にして、一日に一度きりの切り札の瞬転を使い切った今となつては、僕は轟に対して有効と思われる手段が思い付かない……。触れることすらままならない状態では、消去もなにもあつたものではない。

「とまあ、こんなわけだが。ククク……どうした綺羅衣翼？ 顔色が優れないぜ？」

僕とは裏腹に、轟は心底愉快げに笑みを浮かべる。それは、早くも己が勝利を確信している者の笑이었다。

だが、僕はそう簡単に屈服するわけにはいかない。僕が、アウト・オブ・ナンバーが負けるということは、《あの人》が負けるということなのだ。生涯無敵だった《あの人》への、それは冒瀆に他ならない。

(何か打つ手があるはず)

考える。現実と真実を見極める。自分にできる最大限の可能性を模索しろ。眠っていたシナプスをリンクさせて真理の対偶をも読み通せ。必ずあるはずなのだ、『バッドラック』の、本人でさえ気付いていない死角が。

だが、相手がそう悠長にシンキングタイムを待ってくれるはずもなく。

「そんじゃあ、そろそろ本格的にオレのターンだな」

轟はその場でトントンと二、三度垂直飛びを行い、膝を曲げ、飛び出す姿勢をとる。左半身を少し前、右半身を後ろに。手は顔の高

さで拳を握り、所謂ボクシングスタイルだ。心得があるとは思えない。あくまで轟のファイティングスタイルは“暴力”だと見て間違いないだろう。僕も思考を巡らせつつ同時に臨戦体勢に構える。

「ここンとこデスクワークに追われて退屈でしようがなかったんだ。ようやく思う存分暴れられる。身体能力にはさぞや自信があんだろ、『エナジードレイン』？ ……精々楽しませろよ綺羅衣翼。オレを失望させんじゃねエぞ！」

どちらからともなく飛び出す、僕と轟。

青く染まった静寂の世界に、拳と拳の激突音が轟き響いた。

To be continued…

5・4・翔ける覇者と駆ける王者」

翼と虹色のバトルが始まります。そして明かされる虹色の真骨頂、自分で設定を作っておいてなんですが、彼の能力はアレです。なんでもアリです。ぶっちゃけ反則です。さて、翼はどうやってこれを凌ぎ切るのでしょうか。乞うご期待！

5・5・「どうやら僕はお前に礼を言わなくちゃいけないらしい」無事決着……

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・半角の（ ）で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・全角の（ ）で書かれている部分は主人公の情景補足
- ・《 》で書かれている部分は傍点（強調）

*

唯一の救いは、轟虹色とじりゆせいろの体術が僕より優れていることはない、ということだった。拳撃は鋼のように硬く重く、蹴撃は烈風のように鋭く迅いが見切れないほどではない。十分に対応できるレベルだ。

ただし、それは純粹な体術に於いてのみに限られる。轟のナンバーズとしてではない方の能力、『ヴァース』はまさに戦業せんぎょ万手うまんじゆの手練手管で僕を苦しめた。

「【拳から 紅蓮の炎が 立ち上る】 ！」

轟が詠う。それに応えるように、轟の拳が火の粉爆ぜる烈火に包まれた。僕はルシフェラーゼで盾を作り、辛くもそれを防ぐ。

「ぐうっ……！」

気圧されるように足が地を滑り、後退する。負けじと糸を操り束ね、斧のように太い白刃を造り上げ斬撃を繰り出す。

が。

「【その糸は 残念ながら 弾かれる】」

難いだその戦斧は、この世に存在する物質であれば例外なく断裂するほどの切れ味を誇っていたはずだ。しかしながら、本来この世に存在しないはずの概念 『バッドラック』の能力の前にはあまにも心許無いものだった。『不幸』や『残念』という単語を詠うことにより、ナンバー13の能力は無限に増長する。轟がかざした手に触れるや否や、まるでベクトルが真逆に反転したかのように弾かれる斧の刃。凶刃は行き場を失い、グラウンドを大きく抉ってようやく静止した。

さつきから、この繰り返しだった。轟の攻撃に僕が耐え、反撃する僕の業は悉く無力化される。言ってしまうえば、将棋の千日手のようなものだ。

ただし、傍から見ていれば一進一退といったところだろうが、僕

にとつては実のところ防戦一方だ。

『ヴァース』を自在に操る轟の攻撃は、とにかく《先が読めない》。さつきなど、轟が真正面からストリートパンチを繰り出してきたところを僕が首を逸らして躲すと、『関節が自由自在にねじ曲がる』と詠った轟の拳が蛇のようにしなり、僕の後頭部を強襲した。《正面から後頭部を殴られる》という前代未聞の青天の霹靂だった。

「はっは！ どうしたあ綺羅衣翼？ 動きが鈍くなってきたんじゃねエかあ！？」

豪放に言い放つ轟に、まだ僕は一矢たりとも報いていない。対する僕は、必殺の一撃こそ食らっていないものの、ギリギリと焦がされるように削られるように体力を奪われていつていた。このままで敗北必至と、あれやこれやと試行錯誤しているのだが、如何せん結果が伴わない。歯痒ささえ覚え、僕は幾度目かになる汗を拭った。轟は、更に地を蹴り僕に襲い掛かる。ワンステップで五、六メートルを埋める接敵。オリンピックに出れば金メダルを通り越してダイヤモンドメダル（なんだそりゃ）でも獲得できそうである。

「ふっ！」

短い掛け声とともに、上段回し蹴りを放つ轟。びゅん、と大きく空を切つて僕の側頭部を狙う。

まともに食らえば、首から上を喪失してしまいそうな怪物じみた脚力。体幹の捻りをも加えたそれを、僕は腕を壁にして直撃を避ける。更にルシフェラーゼを腕に巻き付けて、手甲のようにすることで鉄壁の防御を造り上げる。

だがしかし。

「【この蹴りで 遙か彼方に 吹き飛びな】」

もう何度目かになる魔言『ヴァース』の発動。直接的な攻撃力の増幅ではないのは、轟が半ば戦闘を遊び感覚で楽しんでいるところだろうか。僕という敵を見つけた闘争本能の塊・轟虹色は生かさず

殺さず、僕を翻弄する。

蹴り自体はダメージなく防げた。だが、『ヴァース』による魔力補正のせいで、僕はまるでサッカーボールのように吹っ飛ばされる結果となった。あたかも、『横に重力がかかっているかのように』。本当に、果てしなく遠くまで吹き飛ばされそうな感覚。しかし、戦場は『ヴォイド』による閉塞空間で、相楽森学園内に限定されている。僕は『ヴォイド』の端、『何も無い空中にある見えない壁』に激突しそうになるも、ルシフェラーゼでクッションを作り、辛うじて事なきを得た。

地面に着地すると同時に、膠着状態になる。僕は次にどんな奇襲が迫ってくるかを予想しつつ　とはいえ、その予想は的中率が果てしなく低いものだが　どんな奇襲にも対応できるだけの体勢を維持しながら思った。

(せめて、瞬転しゅんてんが使えれば……)

ないものねだりをしたところで詮無いことは百も承知で、僕は内心毒づいた。切り札である瞬転　幾何学的要素を一切無視して距離を縮める術式　は、轟の姦計により早くも使い切ってしまった。おかげで、僕は純粋な体術とルシフェラーゼでの戦闘を余儀なくされてしまったのである。僕にとって、体得してからこれまで、瞬転は本当に唯一の切り札だった。使えばその時点で勝敗が決する。故に、その後の戦略など考えたこともなかった。しかも、『純粋な体術とルシフェラーゼでの戦闘』に於いて僕の右に出る者はいないと自負している。だがそれはあくまで『敵に触れられる』場合に限られる。轟はそれすら許してくれないのだ。こうなれば、轟がセラを使い切るまでねばるしか

(……?)

待てよ。

……『セラ』?

なんだか、『いつもより瞬転を使った感覚がしなくないか』?

瞬転は、僕の全セラの大半を消耗する。使用した後はしばらく、

かなり疲弊した状態が続くはずなのだが、今はどうだろう。まだ使
つてから十数分程度しか経過していないから、普段ならまだ疲労度
が濃いはずだ。ところが、体力がその分減っていつているので気が
付かなかつたが、セラはいつも以上に残っている。

(……違う)

残っているのではない、《戻っているのだ》。いつにないハイス
ピードで消費した分のセラが回復している。もう一度瞬転をさせる
ほどでは、流石にいくらなんでもないが、とにかく回復速度がいつ
もより速いのは疑いようがない。

(何故だ……)

コンディションの問題か。いや、体調は良くも悪くもいつもと変
わらない。内的要因ではない。だとすると、外的要因しか考えられ
ない。

戦闘を繰り広げているのは、僕が通っている私立相楽森学園の構
内全域を、しゃかどうゆい 釈迦堂唯 ナンバー100 『ヴォイド』の力で閉塞し
ている鎖かぎされた世界。青く染まった箱庭パフェクトワールド。完結し密閉した小さなコ
ロシアム。

《密閉した》？

(……！)

そうか、そういうことか！

これで轟に一矢報いる方法は見つかった。一筋の光明が射した。

それは、十分に勝算に値する一手。だが、その結果に至る経路を見
つけ出さなければいけない。パズルのピースは、まだ足りていない
。

「……なあにぼけっと」

と、目の前から轟の苛立った声。ドスの利いた遠雷のような濁声
に、僕ははっと意識をそちらに向ける。

「突っ立ってやがんだよ　！！」

しかし、意識を向けた時には遅かった。高速のステップで肉薄し
た轟が、勢いをつけた垂直の蹴り上げで僕を襲撃したのだ。さなが

ら、下から上へと流れる瀑布。鳩尾を狙って放たれた蹴り上げに、反射的にバックステップして幾らか勢いを殺しはしたものの、僕はそのまま高々と宙を舞った。

追撃といわんばかりに轟も僕に次いで跳躍する。流石はナンバーズだとか、跳躍力が人間離れしているだとか、そういうレベルではない。本当に今にも万有引力の環から抜け出して空を自由に舞いそうな勢いである。自然と空中戦になり、足場がない以上、攻撃を回避することはほぼ不可能。一撃が必中すれば、最悪決着がつかねない。薄氷を踏むような攻防が繰り広げられる。

僕は大幅りな攻めは避け、小刻みなジャブで牽制する。しかし、対する相手は誰あろう、天下無双の生屠会長・轟虹色。猛禽類を彷彿とさせる彼は、戦い方もまた、鷹や鷲に通ずるものがある。空を翔ける覇者はその名に恥じず、豪快かつ、強烈な連撃を繰り出し続ける。

上昇を続けつつ、今度こそ一進一退の攻防を繰り広げる僕ら。そして位置エネルギーが頂点に達したまさにその瞬間。

身体を丸めて。ぐるんと空中で旋回してみせた。

なんて出鱈目な体術。足場も何もあつたものではない空中で、轟はまるで野球の変化球のように縦に一回転してみせたのだ。

そして、丸まった状態から片足のみを垂直に伸ばし、回転の勢いにプラス運動エネルギーの増加に合わせて、それを力の限り叩き付けた！

空中での踵落とし。僕は格ゲーの空中コンボのフィニッシュくらいでしか見たことがない。まさかこんな形でお目にかかる日が訪れようとは。本当にこの世の中は色々なことがあつて退屈しない。

などと呑気なことを考えている暇はない。僕はすぐさま両腕を頭の上でクロスさせて防御を図る。

しかし。轟の猛攻は留まることを知らない。ここにきて、更に異能力『ヴァース』を発動させ威力を増幅させる。

「【この蹴りは、そう簡単に、防げない】」

なんとという英断。ただでさえ大振りの一撃、外せばボディがガラ空きになるのは理の当然。しかもそこに加えて一度に一つの対象にしか効力を及ぼせない『ヴァース』を発動させるとは。この男、“好機”というものを完全に見透かしていやがる。

狂戦士ならぬ。

《凶》戦士。

ガードに回した両腕に、凄まじい重圧。人間の踵というよりも、一トンの鉄塊が降ってきたかのよう。骨が折れるんじゃないかと思うくらい、楔ぎのような蹴撃だった。『そう簡単に防げない』と言った通り、そう簡単に防げるものではなく、僕のガードは呆気なく突破され、そのまま墜落する。正確には、突破されたというよりも、自分から諦めて弾かれた。もし闇雲にガードを続けていれば、本当に骨がイカしていただろう。この判断は色んな観点から見ても善だったとみていい。

「ぐっ！」

だがしかし、全身に重くのしかかるGは筆舌に尽くし難い苦痛だ。生身の身体ならそれだけで碎けそうな凄絶な圧迫感。あまりの風圧に受け身をとることはできなかった。幸か不幸か、墜落したのは体育倉庫の上だった。屋根を突き破り、荒れに荒れた倉庫内に叩き付けられる。

「い……つつう……」

体育用具、野球やサッカーのボールなどで鮫詰めになった倉庫内では、身を起こすのも一苦勞だった。押し退けては崩れてくるボールの山に辟易しつつ、なんとか五体満足で立ち上がる。一筋の光明が射したはいいものの、決定的な一打をまだ打開できずにいる。どうしたものかと考えあぐねている僕の目に。

倉庫内に埋もれていた、どこにでもある《ある物》が映る。

(これなら！)

幸か不幸か、ではない。紛れもない“幸”。さもありません。何故なら、《“不幸”はあちらが全て操っているのだから》！

パズルのピースが、ついに揃った。僕はそれをルシフェラーゼで轟にばれないように覆い隠し、外側から施錠されていた体育倉庫の扉を蹴りで力任せにこじ開けて外に出た。

「ようやくお戻りか、綺羅衣翼。安心したぜ、あれくらいでくたばられちゃ楽しめるもんも楽しめねエからな」

「かつかと笑う轟。しかし、僕にはもうそれが勝者の笑いには見えなかった。

僕は不敵に笑って言い放った。

「期待に添えずに残念だな轟虹色。お前が楽しめる時間はもうおしまいみたいだぜ」

「あん……?」

僕の態度の豹変に、轟の顔から笑みが消える。

「どういう意味だ? そりゃあ」

「すぐに分かるさ。……はあっ!」

気合一閃。僕はルシフェラーゼを一本の棍のように束ねる。七千の糸が真っ直ぐに伸び、硬化する。

そして、完成したそれを全力で振るう。

「必殺! アルティメット綺羅衣スイィング!」

……このネーミングはどうかと後で自分でも忸怩たる思いに駆られるのだが、とにかくこの時の僕は轟の意識を逸らすことしか考えていなかったなので、あまり深く考えないでもらいたい。

棍のように束ねた糸が轟のレフトサイドから襲い掛かる。巨大なバットが超スピードで振るわれたと考えるとすればいい。当たればそりゃあもう痛いだろう。

「はっ。思わせ振りの発言しとけばオレが惑わされるとでも思ったのか!? 笑わせんじゃねエ!」

僕の主眼を知る由もない彼は、期待外れといわんばかりに詠う。

「【その糸は 残念ながら 弾かれる】」

『ヴァース』の能力は限定的であればあるほど効力を増す。

そして、そこに『バッドラック』としての能力が上乘せされるのだ

から、それはどんな攻撃をも通さぬ障壁となることだろう。

僕も轟も予想の通り。確かに、糸は弾かれた。

そう、糸は。《糸だけは》。

「ッ!？」

だから。《その中に隠されていたある物》は弾かれることなく轟に襲い掛かる。

「なッ!？ バットだと!？」

棍の中で糸に覆われて隠されていたバット さっき僕が体育倉庫内で入手した普通の金属バットだ はそのまま速度を減退させることなく振るわれる。メジャーリーガーのそれを倍する速度で振るわれる金属バット。人造の物ではあるが、それほどまでの速度を誇るそれが凶器にならないはずがない。

『ヴァース』で防ぐか？ 不可能だろう。何故なら、今『ヴァース』も『バッドラック』も《僕の糸だけ》を弾くことに使用している

！

直撃

！

「ぐああっ !？」

轟の左上腕を、バットが思いつきり殴打する。直撃を放ったバットは、その威力に耐え切れずにへし折れた。

激突の衝撃に耐え切れずにへし折れるほどの速さで振るわれた金属バットによる殴打。

……自分でやっておいてなんだが、すげー痛そう。

僕は食らいたくないな。絶対。

「ぐ、づう……っ! 綺羅衣、翼うっ……!」

激痛に悶絶しつつ、それでも僕の名を叫びつつ睨み付ける轟。流石は王者の貫録、といったところか。

「形勢逆転、つてところだな、轟」

「な、めんじゃねエ……。こんなもんで、オレが屈するとも思っ
てんのかよ……! 同じ手は二度も食らわねエぞ! 腕の一本ぐれ
エで勝った気でいやがんなよ!」

激昂して叫ぶ轟。同じ手は二度通じない。分かっているさ。

だから、これはあくまでも過程にすぎない。必殺の勝機への。これで轟の動きを鈍らせることができれば、その時点でこの作戦は成功も同然なのだ。

僕は唐突に切り出した。

「轟。どうやら僕はお前に礼を言わなくちゃいけないらしい」

「礼、だと……!?」

「お前のおかげで、これから先随分と戦略の幅が増えそうだ。お前には感謝してもし足りない」

「意味、分かんねエぞ……、どういうこつた!？」

僕は拳を突き出して、人差し指と中指を立てた。

「二つ。お前はミスを犯した。一つは、《僕に早い段階で瞬転を使わせたこと》。二つは、《『ヴォイド』をこの学園内に限定したことだ》」

「どういう」

僕は轟の声を遮るように、その場で静かに深く腰を落とす。脇の下まで拳を引き、開けば掌が天を向くように。空手に於ける正拳突きセッの構えだ。

「魔力セッだって体力と同じだ。消耗しても、時間が経てばある程度は回復する」

RPGに於けるMPみたいなものだ。

「『ヴォイド』の中では完全に空気が停滞している。だから、《大気中に流れるセラを逃がすことなく集めることができたよ》」

通常の空間でも、セラは大気に混じって流れている。ただしそれは微々たるもので、戦闘中に回復などするはずがないレベルだ。しかもそれは留まることなく流動し、掴み取ることがままならない。だから、普段はそんなこと気にしたことなかった。

だが、この鎖された空間内ではそれが留まっている。ましてや、この空間は『ヴォイド』。ナンバーズの能力によって形成されている。そのため、大気中にはセラが普通では考えられないほど満ちて

いる。『エナジードレイン』である綺羅衣翼は、それを無意識に体内に吸収していたのだ。それが、先刻僕が感じ取った違和感の正体である。

「おかげで、それなりに回復したよ。……《瞬転を限定的に使えるくらいには》、な」

そう言つて、僕は深く落とした腰を入れつつ、拳を百八十度螺旋回転させながら真つ直ぐに正拳突きを放つた。

《その場で》。

その瞬間。轟が吹つ飛んだ。

「がっ……！！？」

何が起こつたのかまるで分からないだろう。痛みよりも困惑の表情を浮かべつつ、轟は地を転がる。鳩尾に的確に入った。しばらくは満足に声を出せまい。大の字に転がる轟にすぐさま僕は駆け寄り、馬乗りになつて右手を首にかける。

「勝負あり、だな。轟虹色」

「……っ、……っ、ッ……」

声にならぬ声で悶える轟。対して僕はいつ如何なる時でも『エナジードレイン』を発動させられる状態だ。万が一即口そくでも使う素振りを見せようものなら、僕は容赦なく“異能殺し”として能力を発動させる。

「テ、メエ……、な、に、しやが、った……」

「へえ。もう喋れるんだな。大した根性だ」

一応、形式だけの贅辞を呈し、僕は説明する。

「瞬転だよ」

「どう、いう……」

「瞬転を、限定的に使つたのさ。全身で使うのは無理だつたからな、ある一部分だけ。例えば、一瞬生じた《拳圧だけ》を瞬転させることくらい、できると思つたのさ。そうだな……瞬拳しゅんけん、とでも名付けようか」

全身で使うから、消費するセラも大きい。局地的に使用すれば、

自ずとセラの消費を抑えることができる。

「お前が早いうちにセラを使い切らせてくれなかったら、多分一生気付かなかつただろうな。本当、感謝するぜ。」

それとな。お前は一つ勘違いしている。」

僕は轟の首には右手をかけたまま、地面に左手で触れる。

「『ヴォイド』はどんな力を以てしても破壊できないと言っていたな。だが僕は“異能殺し”として、あらゆるナンバーズに対応できるように産み出された『エナジードレイン』だ。……《どんな力を以てしても破壊できない『ヴォイド』だって例外じゃない。言ってみれば、この僕こそがたった一つの例外だ》」

そう言つて、左手にのみ念を籠める。そして。

ぱりん、という乾いた音を一つ立て、鎖された箱庭は容易く崩壊した。

「は、はわわっ」

釈迦堂が慌てたように声を上げる。場所はグラウンドから生徒会室に移っていた。僕と轟の位置関係も、『ヴォイド』を展開した直後と同じく離れていた。展開前に割れた窓ガラスはそのままだが。

「成程な。『ヴォイド』が解けると内部にいた人間も元いた場所に還るのか。よくできてるもんだな」

けほけほと咳き込む轟を尻目に、僕は率直な感想を述べる。釈迦堂が「だ、大丈夫ですかっ、会長っ」とすぐさま駆け寄る。

僕は改めて宣言する。

「僕の勝ちだ。ナンバー13」

「……………」

苦々しげに顔を歪める轟。声はまだ出せないのか、それとも出さないのか。黙ったままだ。ただ僕を睨み付けてくるだけ。

釈迦堂は、轟の背中をさすりつつ、僕と轟の顔を交互に見やるだけ。何も言わない。

暫時、沈黙が室内を支配する。窓の向こうで、ようやく太陽が顔を出し始めたところだった。

「……オレの負けだ」

ぼつり、と。しかしはつきりと。轟は呟いた。顔は不機嫌そうに歪んだままだったが、空の覇者は、産まれてはじめて喫した敗北をようやく受け入れたようだった。

「約束だったな。輝夜^{かくや}緋姫^{ひめ}と実川^{みのりかわ}音葉^{おとは}には手を出さねエって。ま、別に、ハナっから手エ出すつもりなんざなかつたがな。一応約束しといてやる。オレのナンバーズとしての能力も、消去^{デリート}すんだろ。しろよ。……ただし、条件　いや、頼みがある」

「頼み？」

「ジャリ子の能力は消すな」

「か、会長っ!？」

「悪い話じゃあ、ねエはずだぜ?　今後いずれ『ジ・アース』との対決が控えている以上、『ヴォイド』の能力は絶対に役に立つ、テメエらにとつてもな」

「……そうだな」

僕は少しの間考えて　否、考える振りをして。

「いいよ。それに轟、お前の能力も消さない」

「な、に……?」

驚愕に目を丸める轟。

「僕は別に、任務や義務感でお前と対決したわけじゃない。ただ、輝夜と音葉に危害を加える危険があったから戦ったまでだ。それに、お前には『バッドラック』だけでなく、『ヴァース』としての力がある。僕の『エナジードレイン』じゃそっちの能力は消せないからな。どちらにせよ、お前にそのつもりがないなら、とりあえず放っておいてやる」

「……口約束かもしれねエぜ?」

その発言に対して僕は「いや」とかぶりを振る。

「お前は傲慢な奴だが、性格は真つ当だ。拳を交えてよく分かった。一度交わした約束を破るようなことはしないだろう。それに、ここで僕がお前の能力を消さないことで、お前は僕に借りができる。》

いずれは返してもらわないといけなくらい大きな》、な」

「轟はますます顔を歪めたが。」

「ちっ。やっぱりテメエはオレが見込んだ男だな。まんまと丸め込まれちゃあくれねエか」

ほう、と今までの疲れを吐き出すように大きく嘆息した。

これで、この戦いは決着だ。少なくとも、ナンバー13とナンバー1000の二人が今後敵に回ることはまずないと断言していいだろう。……まあ、素直にUN事務所に従うタマでもないだろうが。

「轟。代わりに教える。どうしてお前達は『ジ・アース』を追っている？」

「昨日言っただろうが。二兆の金のためだ」

「それは嘘、いや、嘘じゃないが本当でもないな。正直に話してくれ。あるいは、UN事務所として手を貸せるかもしれない」

「……」
轟は不愉快そうだ。腹を見抜かれたのが気に食わないのか、逡巡するような顔を浮かべる。

僕は更に発言を促す。

「『ジ・アース』は僕らにとっての共通の怨敵だろう。UN事務所の組織力は結構なものだぜ？ お前の目的に共感できたなら、僕が所長を説得して手を貸そう。これは、事務所の総意と受け取ってもらっても構わない」

「……」

更に黙る轟。

やがて観念したように舌打ちをして重い口を開く。

「ジャリ子。席外せ」

唐突に釈迦堂に命令した。

「は、はひっ？ で、でも……」

「デモもテロもねエ。外せ」

「は、はひ……」

頷くと、釈迦堂は言われた通り生徒会室から出ていった。それを見計らって口を開く。

「釈迦堂がいると、まずい話なのか？」

轟は僕の問いには答えず。

「《唯》は……」

釈迦堂のことを、『ジャリ子』ではなく名前で呼んだ。

「唯は、オレの妹だ」

「妹……？」

「別に珍しくもねエ話だろ。研究員の子供が二人いりゃ、二人ともチルドレン計画に巻き込まれんのは必定だ」

「でも、釈迦堂の方はそんな素振り見せたことないじゃないか」

「そりゃそうだ。オレが記憶を封じ込めたからな。アイツには四年以上過去の記憶がない。……《不幸にも、バナナの皮に頭をぶつけたシヨックで》」

「は……？」

僕は一瞬唾然としてしまう。そういえば釈迦堂の伝説の中に、そんな眉唾物の逸話もあったっけ……。

「まあそれはさておき……。どうしてそんな？」

どうして、そんな真似を？

そして、どうしてこのタイミングでそんな話を？

二重の意味を籠めて、僕は問いかけた。

「『ジ・アース』が研究所を沈めた時、オレと唯は離ればなれになった。……再会したのは四年前だ。その時には『ジ・アース』の野郎に洗脳されかかってたからな。自分が自分だと判別もつかなくかつくれエだ。見るに見かねたオレが、無理矢理記憶を削除した」

「『ジ・アース』に……洗脳、つて。まさか」

「ああ。それまで唯は、『ヴォイド』として『ジ・アース』の下にいた」

「……………」

『ジ・アース』に繋がる人間が、こんな近くにいたなんて。僕

は決して少なくない驚きを覚えていた。

「研究所が破壊されて以来、オレはずっと唯を探していた。そしてようやく四年前に見つけた時には奴の配下だった。オレはなんとか隙を見て、唯を連れ出すことには成功したが……奴の毒気にすつかり侵されきつていてな。あと少し見つけるのが、唯の人格は完全に壊れていただろうよ。あの野郎は唯の能力をいたく気に入っていたらしくてな。再びアイツの魔手に墮ちることだけは避けなきゃならねエ。だからといって、『ヴォイド』を消すわけにはいかねエ。奴は人の命を奪うことを呼吸と同じくらい自然にするぶつ飛んだ破壊者だ。用済みになったと分かりや、唯は間違いなく殺される。だからオレは、『ジ・アース』を許せねエのさ。

……気をつけるよ綺羅衣翼。いずれ、奴は現れるぞ。奴の最終的な目的は――

それは預言だった。近い未来訪れるであろう、世界終末の危機の「七大陸、つまり世界の沈没。奴はイカれたことに、本気で地球を滅ぼすつもりでいやがる。『ジ・アース』のナンバーは813番。奴が現れた時、史上最大の戦争が勃発するだろうぜ」

釈迦堂には今の話を決して口外しないことを約束して。誇り高き鷹との決戦は、幕を引いたのだった。

*

「綺・羅・衣」

「くん」

……忘れてた……。

誇り高き鷹を退けた後には、最恐の竜虎が待ち受けているのだということを。

教室に入った僕を待ち受けていたのは、神々しいまでの笑みを浮かべる輝夜緋姫と実川音葉の二人だった。

「……二人とも落ち着こう。話せば分かる」

「綺羅衣君。なにか勘違いしていない？」

「そうだよ。今の綺羅衣君には人権も発言権も拒否権も黙秘権も呼吸権もアキレス腱もないんだよ？」

……超怖い。間違いなく怒っている。ラッキーマンが激吉になるくらい怒っている。神々しい笑みといっても、神は神でも邪神の類だこれは。あるいは神罰を下すゼウスとかだこれは。呼吸権もないのは正直つらいな……いやでもアキレス腱は間違いなくあるけどさ……。

「ねえ実川さん。どうしましょう？」

「ええ輝夜さん。どうしましょうねえ？」

につこり笑顔のまま、僕へのおしおきを考えるご両人。僕は蛇に睨まれた蛙よろしく、縮こまってぶるぶると身を震わせつつ待つことしかできなかった。

「私達二人ともとの約束を破るなんて、ありえないよねえ輝夜さん？ アラレちゃんのパンチ力くらいありえないよねえ？」

「そうね実川さん。どれくらいありえないかっていうと、龍虎の拳ワンからツーにかけてのユリ・サカザキの豹変ぶりくらいありえないわ」

……そんなにか、そんなにありえないのか。

「でもまあとりあえずは……ね？ 実川さん」

「そうだね。輝夜さん」

二人はずい、と顔を近付けてきて同時に僕の名を呼んだ。

「「綺羅衣君」」

「正」

「座」

この後の展開は、推して知るべしである。

Episode 5 : BAD LUCK & VOID - end

辛くも虹色を退けた翼。次にはまたギャグがメインのパートになります。多くは語りませんが、輝夜さんが思う存分暴走するということだけここでは述べておきましょう。私的には八章目（この投稿の仕方は一章を二分割にしているので、十五〜十六章目）というのは個人的に転機の章でありまして、その分力を入れて書かせて頂いているつもりです。というわけで、楽しんで下されば幸いです。

6 - 1 ・「月夜」暴走（前書き）

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・半角の（ ） で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・全角の（ ） で書かれている部分は主人公の情景補足
- ・《 》 で書かれている部分は傍点（強調）

「突然ですが問題です。九月二十三日はなんの日でしょう？」

事の発端は九月九日曜日。吹く風々は秋のそれへと静かに移ろい始め、あれ程までに職務熱心だった太陽さんが「わて、もう十分がんばったき……」と言わんが如く日差しを柔らかいものに変えつつ（何故土佐弁なのかは不明である）、かつて栄華を誇っていた蝉達は、盛者必衰の理に吞まれ尽くし物言わぬ亡骸と化し、読書勉強食欲運動芸術等々、秋も夏と負けず劣らず誰もが日々に追われていくのではないかと僕がふとした疑念を抱き始めていた時に、クラスメイトであり恋人である輝夜緋姫の口から発せられた一言が始まりだった。

本当に唐突に発せられた一言に、僕は思わず身構える。何故ならば、彼女からの質問は今までまともなものだった試しがなかったからだ。

そんな僕の微かな気構えを敏感に察知して、輝夜は続けて口を開く。

「どうしたの？ 九月二十三日はなんの日か、と訊いているのよ、犬」

「……秋分の日ではないのでございましょうか」

先日の背信行為 輝夜と音葉、二人ともの言いつけを破った罰（僕はこれを暫定的に『轟事件』と呼んでいる）のせいで、僕は現状完全に彼女達の奴隷以下の扱いに成り下がっている。二人称は『犬』。最早これはいじめとしか思えない。先生、泣いてもいいですか。

……まあ、究極的には二人のことを想つての行為だったので、心の根底から僕を赦していないわけではないと信じたい。その証拠として、音葉は以前と変わらぬ菩薩のような態度で接してくれて

いる。一つ、ちょっとした借りを作ってしまったようなものだ。

ただ輝夜の場合、一つでも借りを作ると瞬時に二つ三つ四つとネズミ算式に増加させていくので、これを返済しない限り僕はどこまで行っても『犬』のままなのだ。

因みにというと、現在の時刻は十六時、場所は輝夜の家である。

今日は日曜日なので学校も当たり前に休み。そして、これまで言う機会もなければ必要もなかったので言わなかったが、彼女は休日夕方近くまで寝ているタイプだ。単にだらけているだけなのか、それとも日光が苦手なため極力浴びないように試行錯誤した結果なのか（僕は前者だと勝手に邪推している）。

解説が長くなったが、僕の返答に対して、ちゅちゅちゅ、といった様子で指を左右に揺らす輝夜。

「半分正解半分間違い。いえ、むしろ三割正解六割間違いと言った方がいいかしら」

あと一割どこいった。

謎の言葉を口にして謎のまま放置すると、徐に立ち上がり、机の引き出しから一通の封筒を取り出した。それを僕に向けて差し出してくる。

「ヒントはこれよ」

その言葉に対し、僕は手を伸ばして受け取るうとする。

……が、輝夜はそれをひょいと取り上げてしまう。

「待ての一つも満足に出来ないの？ この犬」

「理不尽だ！」

「駄犬。なに、その口の利き方は。今の貴方の人権はテイルズ・オブ・DESTINY 1-2 に於けるスタン・エルロンの扱い並みに軽いよ。その辺りちゃんと承知しているのかしら」

「……口が過ぎましたごめんなさい猛省しております輝夜様でも理不尽です」

以前『ヤフオクで売った』と言っていた僕の人権は、軽いながらももしかしないと返ってきたようだ。本人曰く『出品者都合で削除』

させてもらつたらしい。

「はい、よし」

再び封筒を差し出すご主人様　もとい輝夜。ようやく僕はそれを受け取り、既に切られていた封を開いて中身を確認する。……完全に犬と同列に扱われているのは気にしないことにする（この辺りは慣れだ）。

中身は　。

「チケット？」

薄つぺらい細長の紙切れが三枚、中には入っていた。『第　回響きょうわかい和会文化祭コンサート』と書かれている。

「響和会、って何　ですか？」

「中高年を中心とした和太鼓の会よ。地元だとそこそ有名な老舗グループなのだけれど、知らない？　あと、気持ち悪いからそろそろ敬語は止めていいわ」

「へえ」

知らないのも無理はない。僕は産まれてこの方六年だし、この町にやってきたのは今年で三年目だ。邦楽や郷土芸能になど興味を持つ余裕なんてあるはずがない。

輝夜は、ふと昔を懐かしむような表情になる。

「……おじいちゃんが所属していたのよ」

「……………」

「おじいちゃんがいなくなつてからも、こうして毎年送られてくるの。おじいちゃんと、おばあちゃんと、私の三人分が」

輝夜が《喰つた》、養父母。

その話題に自分から積極的に触れるのは、僕の記憶が正しければこれがはじめてだ。

「おじいちゃんを……手にかけてからは、顔を見せたこともないわ。独りで行くのは怖かつたから。……でも今なら、綺羅衣君と一緒に今なら、行けるような気がするの」

俯いていた視線を上げ、真っ直ぐに僕を見つめてくる輝夜。いつ

も強気な瞳が、今は不安に震えていた。

「一緒に、行つてくれる？」

遅ればせながら、察する。

デートに誘われているのだ、これは。そしておそらく、前回の雪辱戦^{ベンジ}。彼女は素直じゃないからそう言えないだけで。

チケツトに目を落とす。公演日は成程、九月二十三日（日）と書かれている。年頃のカップルのデート場所としては若干そぐわれないが、和風好きの彼女らしいといえば、この上なくらしい。

僕は一つ嘆息して。

「それが、さっきの質問の回答つてわけか」

迂遠な物言いを多用するコイツらしい。そもそも、公演はおろか会の存在すら知らなかったのだ。そんなこと僕に分かるわけじゃないか

「半分不正解半分間違いよ、綺羅衣君」

「百二十パーセント誤答だつて言つてんだよそりゃあー!!」

一気に正答率が暴落した!

なんのためのヒントだつたんだ!? 本末転倒甚だしい!

「頭の回転鈍いわね、この墮犬。ありえないわ。どれくらいありえないかというと、たかだかカードゲームにすぐ命を懸けようとするデュエリストくらいありえないわ」

「そんなにありえなくはないだろうこの流れ! あと、子供達の夢をぶち壊しにするような発言すんな!」

あと、犬度がランクアップしてる! 音声では認識できないけども!

「そんなミドリムシにポーナスヒント」

「犬ですらなくなつたあああ!?!?」

「いいじゃない、ミドリムシ。知ってる? 属名は『ユーグレナ』
つていうのよ、なんだかかっこいいじゃない。しかも『美しい眼点』

という意味なのよ、ユーグレナって」

「う……確かにかつこいいかもしれない……けど！ 結局単細胞生物なことには変わりない！ せめて犬にしてくれ！」

いや、せめて犬にしてくれ、と懇願するのも相当おかしな話だが。「なによ、ミドリムシが不満なの？ 良かったじゃない、これで光合成ができるようになったわ。てへ、見返されちゃった」

「だから今更かわい子ぶんな！ どんな厚毛の猫の皮をかぶっても僕は絶対惑わされないからな！ あと、元ネタが分からない読者は今すぐ第十章を見直すように！」

きらえたすくは さりげないせんでんに せいこうした。

……謎のメッセージが脳内を過ぎっていった。

もしかしたら、また異次元との通信に成功したのかもしれない。

「とにかく、ボーナスヒントよ。……九月二十三日は『かぐやひめのたんじょ』で始まって『うび』で終わるわ」

「……くそう！ 気の利いたツッコミ返しを必死で考えたけど思い浮かばない！」

完敗だった。

「えっと……、お前の誕生日？」

「ぴんぽんぴんぽんだいせいかい。正解した綺羅衣君には、提供会社であるいつものあそこから例のあれがプレゼントされまーす」

「提供会社なんてあんの！？」

初耳だ！

ていうか一介の高校三年生である輝夜に、何を何処が何のために提供しているんだ！？

しかも、ものすごい曖昧なニュアンスでしかものを言っていないから、何ももらえなかったとしても文句が言えない！

……別に何かもらいたいわけじゃないけどさ。

どちらかというと、輝夜の誕生日情報をゲットできたから十分だ。「もつとも、正確には『子供の頃にいた施設に引き取られた日』だ

けれど」

「そういうことはもっと早くに言えばよな……。で、その公演を見に行きたいわけだ」

「違うわ。見に行きたいんじゃない、《見に行かせてもらいたいのよ》」

「それ、どちらが」

うんだ、と続けようとしたところで、気が付いた。

今の今までのいつも通りな表情でもなく。

さっきの昔を懐かしむような愛おしげな表情でもなく。

輝夜が、とても寂しそうな表情をしていることに。

僕は、そんな輝夜の顔を見たくはなかった。だから考える。

『見に行かせてもらいたい』

受動態だ。

(成程ね……)

「輝夜。その公演、一緒に見に行かないか？」

前回は輝夜から。

だから、順番的には、《今度は僕がデートに誘う番》だったのだ。確かに、『デートに誘って』などとは、いくらコイツでも面と向かって言えないだろう。

(いや)

僕はその考えを恥じた。

輝夜緋姫だからこそ、言えなかったのかもしれない。これまで、普通では考えられないくらいに他者との接触を避けてきた輝夜だからこそ。

輝夜だって、普通の女の子なんだ。

僕はそう言って輝夜をデートに誘って。

「喜んで」

輝夜は蕾が開いたような、美しい微笑を浮かべて応えた。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」何か言いなさい、犬」

「輝夜、顔真っ赤」

「なっ」

絶句して、勢いよく背中を向ける輝夜。ご主人様口調がここにきて地雷を踏んだ。沈黙に耐え切れなくなった輝夜が上から目線で口を開いたものの、その顔は夕暮れ時の太陽のように赤かったからだ。迫力など一欠片たりともありはしなかった。

………もつとも、僕の顔も甲乙つけ難いくらい赤く染まっているのだろうか。

………デートのエスコートって、難しいもんなんだな。

綺羅衣翼、六年目の新発見だった。

暫時　　といつても、実際の時間にしてみれば数十秒だったのだろうが、この時の僕にとっては途方もないくらいに長かった。沈黙する。でも、不思議と居心地は悪くなかった。どうしてだろう、こんなにも顔が熱いのには。

やっぱりこれが、《そういう感情》なのだろうか。

「綺羅衣君」

呼ばれてはつとなる。つい自分の世界に没頭してしまっていた。

僕の名を呼んだ輝夜の顔色は、もうすっかり元の色に戻っていた。相変わらぬ切り替えの早い女だ。日差しを浴びてこなかったせいで、雪や綿のような白皙の肌の色。あと三ヶ月もすれば冬だ。僕が研究所を出ていった、寒かったあの季節。

もしかしたら輝夜は、僕の前に現われてくれた雪の妖精なのかもしれない。

（…って何を妄想しているんだ僕は！！）

とても人様に説明できないポエチックな妄想してしまった自分を振り払うべく、首をぶるぶると振る。

「どうしたの綺羅衣君？ 本当に犬みたいよ？」

「い、いや……にやんでもない」

猫だった！

男の僕が猫語を話したところで萌え要素は微塵もない。

ギャグでもなんでもなく、肝心なところで思わず噛んでしまった自分が心底大嫌いだ。

「なに、馬鹿にしてるの？」

攻撃的な口調ではあったものの、しかし輝夜はくすくすと楽しげに笑っている。

(……結果オーライ、だな)

「で、なんだって？」

当初の目的を聴いていなかったはずなので、問い返す。ところが、輝夜は口ごもってしまう。

「だから……その……、今日私の家まで来たのは……そういうことじゃ、ない……の？」

「あ

すっかり失念していた。

今日、僕は定期的に与えている血を輝夜に飲ませに来たのだった。顔を見るや否や、問題を出されてその後散々振り回されたおかげで、すっかりしていた。そりゃ、自分からは切り出せないよな。なんといつても、コイツは三年もの間、自分の腕を喰って我慢していたよな奴だ。彼氏である僕に対してだからこそ辛うじて言えるが、何も知らない一般人に『血が飲みたい』なんて口走った矢先には即、心のお医者さんを紹介されてしまうことになるだろう。事実、そういう病気もあるらしいし。

そんなことよりどんなことより。

「悪い、喉渴いてたか」

「あ、いえ、そういう意味で言ったつもりじゃないの。ただ、そろそろ一週間経つから、そうかなって、勝手に思ってしまっただけ。ごめんなさい」

いつになく殊勝な態度で頭を下げる輝夜。

だから、僕も思わず慌ててしまう。

「いや、僕の方が悪かったんだ。こちらとしても、最初からそのつもりで来たんだし」

「そう。なら、いいのだけれど」

そう言っただけで頭を上げた輝夜に、首を曝け出す。彼女は、すぐさまそこに歯を食い込ませた。

《一切の躊躇もなく》、である。

「……………」

「つく…………、んつ…………、く、んつ…………」

人ならざる者、ナンバーズ。その中でもとりわけ、最初に産み出された十人、一番から十番のことは“ファーストナンバー”と呼ばれている。その最後の一人、ナンバー？^{テン}となるのが異能『ヴァンパイア』を持つこの少女、輝夜緋姫。彼女には、普通の人間とは違う点が三つある。

一つに、日差しを浴びると極端な日焼けを起こす。

一つに、傷を負っても瞬く間に癒える。

一つに、理性とは裏腹に血を欲する。

これまで、輝夜はどんなに慣れたとはいってもヒトとしての最低の道徳は守ってきた。僕に対する暴言の数々は例外として、他者を傷付けたくはないとは絶対に考えていたのだ。それは、人間ではない僕とて例外ではない。少なからず、他人を傷付けるという行為に抵抗感、もっと言うなら嫌悪感、更に言うなら罪悪感を抱いていたはずだ。

しかし。今日に限って全く躊躇をしなかった。

それは、小さな　しかし決定的な異変。

いつもなら、僕が言い出さない限り、輝夜は絶対に血を要求したりしない。なのに今日は　遠回しな言い方ではあったにせよ口火を切ったのは彼女の方だ。

(待て…………)

更に遡ること五日。九月四日　先週轟に“挨拶”を受けた日の話である。輝夜はこう言った。

『ごめんなさい。どうしてかしらね。生徒会長に『呼ばれたくない名前』を呼ばれたからかしら。どうにも気分が昂っているみたい』
呼ばれたくない名前、『吸血鬼』という単語に反応して彼女は血を求めた。それは、確かに嘘ではないだろう。

だが、それは《本当に本当か》？

一つの仮説が浮かび上がる。

ひよっとしたら、そう、あくまでもひよっとしたらだ。その台詞は言い訳に過ぎず、輝夜は《ただ単純に血が飲みたかっただけなのではないだろうか》？

「ん、くっ……ふはっ」

そんなことを考えているうちに、輝夜が僕の首筋から離れる。それと同時に、僕は壁にかけてあるアナログ時計を見る。

七分が経過していた。

「ごちそうさま」

「……………」

「……………綺羅衣君？」

はっとして輝夜を見る。また自分の世界に没入していたらしい。反して輝夜は飄々とした顔をしている。

「あ、ああ。なに？」

「なに……………って。だから、ごちそうさま、って」

「あ、ああ、おそまつさま」

いつからか定番となった会話だ。それすら忘れるくらい、僕は深く考え事をしていたのか。

「もう、しっかりして頂戴」

「悪い悪い。ちよっと考え事を、な」

「……………まさか、女のこと？」

非難の色を混ぜたジト目で睨み付けてくる輝夜。やはりいつも通りだ。僕の杞憂だろう。

「まさか。そんなこと」

「ない、と言おうとしたが、考えていたのは『輝夜のこと』であり、輝夜はれっきとした女である。」

彼女に嘘は通用しない。

「も、あるかも……」

だから、僕はそう正直に告白した。

「ふっ！」

輝夜が掌同士を合わせて、それを滑らせるように僕に振るってきた。

「痛っ！　なんか刺さ……ってない！？　輝夜、お前今何した！？」

感覚としては、鋭い刃の切っ先が突き刺さった感じだったのだが

……。

「空手裏剣。乙女の必須道具よ」

「ついに実体を持たなくなりやがった！？　ていうか相変わらず凶

器ばかりだな、お前の必須道具は！」

「人呼んで、子忍ねにんの風助ふうすけとは私のことよ」

「嘘っけ！　お前のどこに風助的要素がある！？」

「信じられないなら、今この場で勝身煙かちみけむりくらい上げるわよ」

「これまでのどっかに本気になるきっかけがあつた！？　ていうか

忍空にんくうは古いだろ！　今忍者ものといえはナルトじゃね！？」

「私は何故かナルトが好きになれないのよ。それにね綺羅衣君。名作に古いも新しいもないのよ……にやり」

「もつたいない！　最後の『にやり』さえなければ結構名台詞だったのに！！」

コイツ、狙ってたな！？

「さて、何の話だったかしら。ああ、そう。どうして昔の紙幣に描かれている偉人さん達にはよく髭が生えているのかという議題だったわね」

「そんな議題は一切していない！　因みに、それは偽造紙幣防止のためだ！」

今ではそうでもないが、その昔は、日本銀行券のほとんどには髭が生えた偉人が描かれていたのだが、それは髭という特徴がとてもし偽札を作る時に難しい特徴だったがためにわざとそうしていたのである。当時は高性能なコピー機もなかったため全て手描き、手描きであの美髯を正確に表現するのは不可能に近かったのだ。現在ではそれらを全て補える程の高品質なコピー機が製作されてきたため、諭吉や一葉など髭が生えていない人物も紙幣の絵柄には採用されているという経緯がある。以上、解説終わり！

「じゃあ今度の議題は、『学問のすゝめ』の文頭の『天は人の上に人を作らず人の下に人を作らず』ってあるけれど、あれって実はアメリカ合衆国の独立宣言からの引用なのよ、という議題よ」

「ていうかいつからこの会話が会議になったんだ？　そしてその後には『されども今広くこの人間世界を見渡すに、賢き人あり、愚かなる人あり、貧しきもあり、富めるもあり、貴人もあり、下人もありて、その有様雲と泥との相違あるに似たるは何ぞや』と続くんだろう！　今日現在そこまで知っている人はそうそういないだろうけどな！」

良い子のみんな、勉強になったか！

「そうだわ、思い出した。綺羅衣君？　私との逢瀬の時に他の女のことを夢想するなんてどういっつもり？　場合によつては42731番にダイヤルすることも検討するわよ」

「死になさい！？　デスダイヤルがグレードアップした！」

「因みに、かけると427.31秒後に綺羅衣君が死ぬわ」

「僅かに0.31秒しか延長されていない！」

「安心して頂戴。万が一の時の保険にちゃんとデスレイザーは用意してあるわ」

「ありましたねえ、読み切り版限定でそんなマジックアイテムが！

大体なあ、僕が考えてた女のことってそもそもお前のことなんだよ！」

「えっ　！？」

思わず顔を逸らす輝夜。一瞬にして顔が沸騰していた。

あれ？

勢い任せに喋ってしまったが……今の台詞、額面通りに捉えるなら、僕は完全に輝夜のことが好きだってことにならないか？

うあああああ！

「違う！ 違うんだ輝夜！ 落ち着け！」

最も落ち着いてない人物が言ったところで、説得力はまるでない。

「いや、だからさ、いつもより血を飲んでる時間が長いな、って思ってたただけだよ！」

嘘はついていない。

「そ、そうかしら……。私としては別にそんな感覚はしなかったけれど……」

因みに、彼女はまだ顔を背けたままだ。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

……………うわあ。

なにこの空気。

さっきあんなに心地良かった沈黙が、今では途轍もなく耳に痛い。今度耐え切れなくなったのは僕の方だった。

「じゃ、じゃあ僕、そろそろ帰るから……。時間も遅いし、いい頃合だよな」

「そ、そうね……………」

三十六計逃げるに如かず。そう、これは戦術的撤退であって、逃走では、断じて、ない。そそくさと帰る支度を整える（この光景はきつと、唐笠模様の風呂敷をかぶった泥棒とかの類だ）。

「そ、それじゃあまた明日な、輝夜」

「え、ええ。また明日、学校で……………」

扉を閉める。輝夜は、最後まで顔を背けたままだった。青柳荘を離れて、十分に距離をとってから大きく細長い息を吐き出す。

(マジで焦った……)

いや、元凶は僕本人なだけどさ……。

(しかし)

すっ、と思考が切り替わる。人間である綺羅衣翼から、“異能殺し”である綺羅衣翼へと。

輝夜緋姫が、否、《ナンバー？》が少しずつ、だが確実に変わりつつある。僕が相手とはいえ、他人から血を吸うことに 他人を傷付けることに躊躇しなくなったということは、危険な状態だ。最悪、彼女は『ヴァンパイア』として、近い将来危険因子として僕に牙を剥く可能性がある。まるで彼女の浮気を疑う男のようだが、ことはそんな些事を気にしている場合ではない。相手は曲がりなりにもファーストナンバー。用心と覚悟は、しておくに越したことはないし、どんなにしたとしても足りないということはないだろう。でももしも。

輝夜が、僕と敵対する側になったとしたら。 。
その時、僕は 。

(本当に、『エナジードレイン』として、輝夜緋姫を消去できるのか)
()

*

「これ、渡しておくわ」

そう言っって輝夜が手渡してきたのは一枚の紙切れだった。

「ああ……明日の」

それはチケットだった。地元の和太鼓グループが出演するコンサートの。

本日九月二十二日土曜日。学校での授業を終えると、僕と輝夜はそのままその足で輝夜の家に来ていた。勿論、吸血が目的で

ある。実のところ昨日にもあげたばかりなのだが。

『前回の二の轍を踏みたくはないの。万全を期しておきたいから』
と言われてしまえば、僕は無下に断ることができない。僕だって
二回目のデートを楽しみにしていないといえれば嘘になるからだ。

尚、九日の次は十四日。その次は四日後の十八日。そのまた次が
三日後の二十一日、即ち昨日だ。

頻度が増えているのは明白だった。今日だって、すっかり七
分間、僕の首筋に歯を立てっぱなしだった。

でも、僕は言及はしなかった。否、できなかったというのが正しい。彼女を敵に回すというのが、どうしようもなく怖かったのである。その危険性を孕んでいると思うと、僕は怖くて口が開けなかった。

こんなにも恐怖を感じるのはいつ以来だろう。あるいは、産まれ
てはじめてか……。そして、《こんなにも恐怖を感じるのは何故だ
ろう》。

僕は早々に青柳荘を辞した。このところ、段々と輝夜の顔を直視
できなくなってきたつがある。

空には満月が輝いていた。

家に帰り着くや否や、布団に手足を広げて寝転がる。あまり深く
考えたくはなかった。色々なことを。今はただ、明日のデートで失
敗しないことさえ考えればいい。

鞆のポケットにしまっておいたチケットを取り出し、蛍光灯にか
ざす。

当然ながら何も起きない。こんな単なる紙切れ一枚で、何か
が起こるはずがないのだ。

「ふう……」

知らず、ため息が出ていた。

その瞬間。地鳴りが轟いた。

「ッ！！」

僕は反射的に飛び起きる。チケットは乱雑にポケットに放り込み、それと同時に携帯のバイブレーションが作動した。二つ折りの携帯のディスプレイをしかし、見る余裕もなければ必要もない。そこに表示されているのは『所長』の二文字と既に丸暗記した十一文字の数字の羅列に決まっているのだから。

感じたものは、膨大な量のセラの爆発。場所はここから直線距離にしてしまえば五百メートルもないほどの近隣。青柳荘。顔面から、さあつ、と血の気が引く感覚を味わった。

嫌な予感ほど、よく的中するものである。

空には煌々と満月が光っていた。
月夜。

ナンバー？の暴走だ。

Episode 6 : VAMPIRE returns - to be
continued...

6 - 1 . 「月夜」暴走（後書き）

前章でも申しました通り、八章目（このサイトに投稿している分では十五（十六章）というのは、個人的にとても転機なわけです。という前口上を並べたうえで、輝夜さんメインの話が……これで通算四度目になりますか。今回は彼女が本気で文字通り『暴走』します。今後の展開を楽しみにして頂ければ幸い至極です。

6 - 2 ・決意「僕は戦いに行くんじゃない。助けに行くんだ」(前書き)

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・半角の（ ）で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・全角の（ ）で書かれている部分は主人公の情景補足
- ・《 》で書かれている部分は傍点(強調)

6-2・決意「僕は戦いに行くんじゃない。助けに行くんだ」

*

UN事務所、正式名称『アンチ・ナンバーズ事務所』は、決して繁華街とも田舎とも呼べない中途半端な場所に位置するこの町の文字通り中央に存在する地上三階建てのビルであり、具体的な活動内容については世界中に広くネットワークを広げあらゆる分野に人材を派遣している会社である。

届け出上は。実際には、あるはずのない地下部分と記されていない活動内容が存在する。地下部分の敷地は町の地下面積全てを網羅した圧倒的なまでの広大さを誇り、何層にも分かれた施設の全てを合算すれば東京二十三区をも軽く凌駕する。そこではこれまでに確保したナンバーズおよび元ナンバーズの教育プログラム施設や医療施設、実戦を想定して行われる格闘場のようなスペース、ならびに、『ジ・アース』を筆頭とする未だに捕捉し切れていないナンバーズを探知したり、暴走を防ぐべく既に確保に成功したナンバーズのセラの波長を診断したりする『探知機』^{サーチャー}と呼ばれる巨大機器が備え付けられている。教育施設は大手国立大学、医療施設は大学病院、格闘場はどこかしらのドーム。そして、サーチャーが設置されているのは空港の管制塔。それぞれがそれぞれの数十倍の面積を占めていると考えるともらえれば分かり易いだろう。

「アナリシス。現時刻でのナンバー^{テン}の状況説明を。簡潔にな」

UN事務所長にして現最高司令官、真田真正^{まなただま}が問う。

ナンバー121『アナリシス』。能力名が示す通り、事象の分析・解析を担当している。その点に関しては、彼女は他の追隨を許さない。

彼女は今は亡き真田正長博士^{ただなが}とともに破壊された研究所から逃げ延びたナンバーズのうち一人で、人道的道徳もセラのコントロールも十分に行き渡っている。サーチャーを管理する最高責任者という、

ある意味での最重要任務を一任されているのだ。

「はい！^{フタサンヨハチ}二十三時四十八分現在ナンバー？は休眠状態を維持しています！ セラは依然として不安定、いつ暴走を再開するかも特定できません！ 現在はポイントSにて監視続行中です！」

彼女は何故か、声量が異様に大きい。というよりも、最小値が異様に高く、発せられるほとんどの報告は怒鳴り声に近いというのが玉に瑕だ。もつとも、それくらいでなければサーチャーの管理者というとしては心許無いが。

「結界師の配置準備はどうなっている？」

「およそ四百二十秒前に、東西南北四方全て配置完了しています！
いつでも結界発動可です！」

結界師とは、UN事務所に所属している、『結界を張る』ことに特化した魔術師達の総称である。特に今回配置された四人の者達は、ナンバーズとしての異能力こそ持っていないものの、長年積み重ねてきた修練によって洗練された極めて高い魔力を自在に練り上げ、一人当たり核ミサイルでも持ち出さない限り破壊不可能と言わしめるほどの強力な結界を展開可能な実力派揃いである。それが四人も揃っているのだ、現実空間から一時的に隔離することさえ可能だろう。

そしてポイントSとは、この町の地上で最も広く、かつ戦闘による被害を最小限に抑え込めることができるという理由で急遽設定された場所。

そこがなんと、私立相楽森学園全域なのだ。事務所の手回しにより宿直の教員や警備員も既に立ち去り、今は無人の状態である。たった今『アナリシス』が報告した通り、四方に準備万端で整い、来るべき決戦の時を待っている。

「よし。引き続きナンバー？の監視を続行。少しでも活動の再開を始める気配を見せたら即座に結界を発動させる手筈を万端に整えておけ。……もつとも、腕利きの結界師四人がかりでも、暴走したファーストナンバーズを前にしては時間稼ぎくらいにしかならないだ

ろうがな。……アナリシス。私は上がる。もし何かしらの動きがあれば、どんなに小さなことでもすぐに内線で通信を」

「はい！ 了解しました！ 総帥！」

そう言うと真田真正は振り返り。

「さて、こんなところでは落ち着いて話も出来ん。三階に上がるぞ、翼」

そう、呆然と立ち竦む僕の肩を叩くのだった。

*

所長室の扉を開くと、意外な人物がいた。

「音葉……」

「あ、綺羅衣君……」

所長が呼んだのだらう。こんな真夜中にもかかわらず友達の輝夜緋姫のために駆け付けたのか。音葉らしいといふかなんといふか。

所長はデスクチェアに腰を落ち着けると、らしくもなくため息を吐き出した。

「やれやれ……困ったことになったものだな」

本当に困ったような顔付きで僕の方を見やる。

「ナンバー？ 『ヴァンパイア』の暴走による衝撃で青柳荘は全壊。

負傷者は数名いたものの、死人が出なかっただけでも奇跡だ。ひとまずは老朽化による建物の崩壊という形でマスコミ各所には話を通してあるが……どうしたものかな。頭が痛いよ。

まあそれはさておき、翼。確認なのだが、お前は輝夜緋姫に血を与えるという義務はしっかり果たしていたのだな？」

「それは……勿論だ」

「ふむ……。ならば、ここ最近で輝夜緋姫が何らかの異変を訴えていなかったか？ どんな些細なことでもいい」

「そつえば」

ここ二週間くらいのことを思い出せ。彼女は《積極的に》僕の血

を求めていた。出会った当初では考えられないくらいに。

そのことを所長に説明すると。

「……………それだな」

長い沈黙の後、そう呟いた。

「それ……………って、どれだよ。僕にはさっぱり分からないぞ」

「翼。お前は人によって、アンチ・ナンバーズとして産み出された存在だ。普通の人間としての波動を持ち合わせていない。つまり、お前の身体の中に流れるセラは、言うなれば『不純物の混じっていない純粋なセラ』だ。……………それを飲み続けていれば、輝夜緋姫の中に宿るナンバーズとしての本性　吸血鬼性も表に出やすくなるのだらうよ」

「僕が、輝夜に血を与えていたのがいけないってということなのか！？」

思わず大声を発してしまう。そうになると、そうになると……………。

全て、僕の責任じゃないか。

最悪のケースを引き起こさないよう、最善の努力をしていると思っていたのは、結局は僕の独り相撲に過ぎなかったのか。

「確かに……………お前が早期に輝夜緋姫を『ヴァンパイア』として消去デリートしていれば、こんな惨事にはならなかっただらうな。……………さて、翼。どう責任をとるつもりだ？」

「責任、って……………。僕は」

「輝夜緋姫を助けたかったか。その気持ちはよく分かる。だが、現実問題として一つの建造物が全壊、少なからず犠牲者が出ているのだぞ」

「……………っ」

「真田さんっ。輝夜さんの暴走を止める手立ては……………何かないんですかっ？」

音葉の声も悲痛だ。無理もない。つい先日友達として分かり合っただばかりだというのに。

しかし所長は。

「輝夜緋姫の暴走を止める方法なら、ある」

あつげらんと言つてのけた。

「どんな方法だ！？ 教える！ 所長！」

「そう急くな翼。急いでは」

「急かずにいられるかよ！ 事を仕損じてもいい！ 輝夜が……再び輝夜が暴走し始めるか分からないんだろ！？」

僕は所長の胸倉を掴み上げんばかりの勢いで身を乗り出した。

僕がナンバー？の暴走を感じ取った後、取る物も取り敢えず青柳荘に直行した。そこにいたのは逃げ惑う青柳荘の住人と、木造の瓦礫に埋もれて意識を失っている輝夜だった。おそらくは慣れないセラの放出によつて一時的に意識を失ってしまったのだらう。事務所の職員もすぐさま駆け付け、セラの安定剤を投与。そうして所長の指示を仰いで相楽森学園へと運んでいったというわけだ。

「まあ、綺羅衣翼は『エナジードレイン』としてこれまで数々の実績を上げてきた。だから、二次災害は事務所で負担しよう。つまり、残る現実問題は『輝夜緋姫をどうするか』、という一点に集約されるのだよ」

「どうする、つて言われても……」

「至極簡単な話だ。お前がアウト・オブ・ナンバー『エナジードレイン』として、ナンバー？『ヴァンパイア』を消去すればいい。それで万事解決だ。少なくとも、『それで暴走は止まる』」

いつもの平坦な口調で、所長は宣言した。

「幸いなことに、まだ輝夜緋姫は目覚める様子を見せない。お前の力があればいとも容易い話だらう」

「でも……でもっ！ そうしたら輝夜がっ！」

輝夜が、消えてしまっじゃないか。

輝夜緋姫の吸血鬼性は、輝夜緋姫の人間性という大樹に根を張り巡らせた疫病のようなものだ。吸血鬼性を消すためには、樹そのものを伐採するより他に手段がない。

もしも奇跡が起こって今回は無事に理性を取り戻せたとしても、本

能のレベルで血を欲する輝夜が再び暴走するであろうことは目に見えている。そして、その時は今回よりも大規模な災害が発生するだろう。

「そうだろうな。輝夜緋姫に関しては、『能力を消す』と『手にかける』はイコールで繋がっていると考えていいだろう。……だがな」
所長が試すように口を開く。

「翼。落ち着いて考える。お前は人を助けるために産み出された人造人間であり、ひいては救世主だ。その救世主が、『たった一人の少女を助けるために世界の平和を犠牲にするのか』？」

「……」

「たった一人の少女を助けるために世界を犠牲にするか。それとも、世界のためにその少女を『殺す』のか」

所長が おそらく敢えて “デリート消去” ではなく“殺す” という言葉と言った。

結局…… そういう究極の二択しか道は残されていないのか。

輝夜の命を奪わない代価に、世界の平和を贖とするか。

世界の平和を護る代価に、輝夜の命を奪うのか。

普通に考えれば、後者を選択するであろうことは分かっている。

百人に訊けば百人ともが同じ答えを返すだろう。そのくらいは分かっているんだ。

でも。それでも僕は、輝夜を。

「綺羅衣君……」

音葉が声を呼ぶが、それに応じる精神的余裕は残っていないかった。自分の頭の中が迷路と化したようにぐるぐると思考が右往左往する。所長は椅子に座り直して。

「まあ、お前がそうして悩み悶えるのは目に見えていたからな。お前ができないというのなら、別に適任を呼び寄せてある」

「適任……？」

やはりこういうところは抜け目がない。だが、僕と同等の適任など存在するのだろうか。

そこに、狙いすませたかのように扉を開くがちゃりという音。おそらくこの会話は外まで聴こえていただろうから、実際狙いすませていたのだろう。

そして姿を見せたのは。

「……ごめん、あたし」

そこに立っていたのは、アッシュブロンドの髪の毛をボブカットで合わせ山猫を思わせるような勝気な目を携えた、僕が知る限り地上最小の十六歳。

ナンバー410『シヨット』こと、シヨット・G・スカイハイだった。

「シヨットの総合的能力なら、まだ完全覚醒前の輝夜緋姫なら殺すことができるだろう。不殺の誓約は、今回特例として見過ごすことにする」

「と、ちよつと待てよ所長！」

話がトントン拍子で進み過ぎている。確かに、シヨットの能力は伊達ではない。無抵抗の相手なら何の苦もなく始末してのけるだろう。

でも。

「綺羅衣。聞いたよ。アンタの彼女なんだってね、その輝夜緋姫とかいう『ヴァンパイア』は」

「……」

僕は何も言えなかった。黙って深い深い思案の海に潜り込んでいくだけ。

「アンタ、それでいいのかよ。自分の彼女なんだろ？ その子のこと好きなんだろ？ 何にも手を打たないまま終わっていいのかよ」

「シヨット。口が過ぎるぞ。今回のお前はあくまでも抹殺者^{イレイザー}として呼ばれたのだ。余計な口は慎め」

「所長さん……、でもさっ」

何かを言い返そうとしたシヨットをしかしし。

「……シヨット。もういいよ」

僕が遮った。

「翼？」所長

「綺羅衣君？」音葉。

「綺羅衣？」シヨット。

もう……決めた。

シヨットに……僕でない他の誰かに任せるくらいなら。

「僕が……^{デリート}消去する」

僕が、この手で幕を引いてやる。

「……」

「世界と天秤にかけるには、輝夜の存在はあまりに小さい。今こゝで僕が^{デリート}消去すれば、それで全てが丸く収まるんだろ」

「……まあ、とりあえずはな」

と所長。

「なら……それで、いいよ」

輝夜の命を《諦める》。それが現状での最善策であり、『エナジードレイン』として辿るべき道だ。

「殺すのか？」これも所長だ。

「ああ」僕の返事。

「決めたのか？」所長。

「ああ」僕。

所長はしばし黙考して、こう言った。

「そうしてまた……《俺に戻るのか》？」

「ッ！？」

「“俺”……？」

その言葉、その単語に、僕は敏感に反応してしまう。やはり、心のどこかで迷いがあったのだらう。怪訝そうにオウム返しをする音葉に気を配る余裕もない。

それでも、僕は。

「……ああ、殺すよ」

腹筋にありつたけの力を籠めて、確かにそう口にした。

「綺羅衣……」

シヨットは僕を睨み付けてくる。かと思えば、僕の方に接近してきた。息と息がかかるくらいの至近距離で、シヨットは僕に鋭い眼光を飛ばしてくる。僕は注視しきれず、顔を俯けた。

「綺羅衣……アンタ、それでいいのかよ。自分の彼女を殺しといて、それで後悔しないのかよっ」

いつになく熱の籠もったシヨットの言葉。だけど、僕の心は既に決まってしまうている。

「後悔は……するだろうさ。でも、他に方法がないんだ。僕は人間を助けるために産み出された。だから、たかだか一人の女の子の命と引き換えにしてまで、世界を危機に晒したくはない」

「……本気で言ってるの」

「本気も何もないさ。でも、それしか方法がないんだから仕方ないじゃないか」

「っ、綺羅衣っ！」

突如大声を上げたシヨットに驚いて顔を上げた時には、僕は胸倉を掴まれていた。

「アンタ……いつからそんなに女々しくなったのさ！ 『他にない』それしかない』って決めつけて！ なんてそんな消去法で好きな女を手にかけるようなんで思えるんだよっ！」

「……分からないんだ」

「え？」

「僕は輝夜のこと……好きなのかどうか。自分でも分からないんだよ」

「ばきいっ！」

僕の台詞終わりが先か、衝撃が先か。シヨットのような答えの出来ない問答。

シヨットの右拳が、僕の下顎を捉えていた。彼女は上背がないので、頬を殴るにも届かず、結果として顎を狙い打たれた。シヨットの矮躯を以てしても、顎を打ち抜かれれば脳震盪に近いものくらい

起こす。

眩暈が止まらないうちに、更にシヨットは僕の胸倉を再度掴み上げる。

「いつつ……。何しやがる!？」

「女々しい男を見てると虫唾が走るんだよ！ あたしの知ってる綺羅衣はそんな男じゃない！」

「んだと？ お前が僕の何を知ってるって言うんだよ！」

「知ってるよ！ まだ半年の付き合いだけど……アンタのことは知ってる！ ずっと見てきたから！ アンタは知っているんだろ!? 人の命の重さを、人を殺すことの重みを！ アンタがあたしに教えてくれたんじゃないかつ！」

「ああ知ってるさ。でもな！ 少女一人の命の重さと、六十億の人の重さ。どっちが重いかなんて分かり切ってることじゃないか！」

「また消去法でものを言ってる！ もっと考えろよ！ きつと何か方法があるはずだろ！」

「考えたさ！ でも時間がないんだ！ 僕だって輝夜を殺したくないかない！」

「そうだろ!? やっぱり本心では殺したくないんじゃないか！ なら自分の気持ちに正直になれよ！ 好きなら好きって、はっきり伝えてやればいいじゃないか！」

「『殺したくない』って気持ちと『好き』って気持ちは別物だろ！ だからって、今輝夜を殺さないと『ヴァンパイア』が世界中に解き放たれるんだぞ!? 世界を救うには他に方法なんてないじゃないか！」

「また……他に方法がないから』って……！」

憤怒と失望にわなわなと震えるシヨット。そして激昂して叫んだ。「あたしはそんな綺羅衣に惚れたんじゃない!!」

「だつたらなあ……!!」

……あれ?

ちよつと待て。

今……シヨットはなんと言った？

「待った、シヨット。こんな非常時に確認することじゃないかもしれないけど、聞き逃したみたいだから、今の台詞もう一回言ってくれるか？」

「……あたしはそんな綺羅衣翼に惚れたんじゃない、って言った」

「……さっきより文字数、増えてないか？」

「煩いな、しつかり聴こえてんじゃんか」

そう言ったシヨットの顔は、僅かに頬を染めていたものの真剣そのもので。

とても、冗談を言っているようではなかった。

その時。

ビービービーという、喧しい電子音が所長室内に響いた。

内線通話。それにすぐさま応じる所長。

「真田真正だ」

『こちらアナリス！』『ヴァンパイア』が活動を再開しました！
結界は既に展開中ですが、対象の力がその、凄まじく……。先程のアパートを倒壊させた時の、概算で六倍のセラ！今も尚、セラは増長中！結界師四人でも、外部に危険を及ぼさないよう抑えていられるのは、もって数分だとのことです！』

確かに、学園側からとんでもない質量を伴ったセラの嵐がここまですべて雪崩れ込んでくるのを感じた。音葉とシヨットも例外ではなく察知しているようだった。結界で四方を張り巡らせて尚この量。化け物以上に化け物じみているとしか言いようがない。

「数分か……思った以上に短いな。とにかく分かった。こちらで対処する」

そう言って、所長は内線通話を切った。

「……と、いうことだが」

「……」

沈黙が支配する所長室内。まだ何も考えが結論にまで至っていない。

そんな中、やがて。

「あたし、行く」

シヨットが名乗りを上げた。

「私から呼び出しておいてなんだが、相手は暴走中のファーストナンバーズだぞ？ 勝ち目はあるのか？」

「ないよ。そもそもあたしは勝つつもりなんてない」

そう言っつてシヨットは僕を一瞥すると、身を翻して背を向けた。

静かに、しかし力強く「綺羅衣」と呼びかける。

「時間ならあたしが稼いでやる。死ぬ気で探せ。絶対諦めんな。《きつとアンタにできること》があるはずだろ」

言葉を返す間もなく、シヨットは室内を出ていった。

「……………」

僕は、頭がおかしくなりそうだった。様々な感情が頭の中で渦を巻いて一向にまとまる気配を見せない。

きつと……………僕にできること。

そんなことが あるのだろうか。

僕にしかできない……………何かが。

「綺羅衣君」

そんな僕に、音葉がそつと声をかける。優しくも、厳しい声音で。

「本当に、綺羅衣君はそれでいいの？」

「……………」

「あんなにも、真つ直ぐに気持ちをつづけてくれる子がいるんだよ？ それでも、綺羅衣君は『そうする他ない』って言って決められた線路を歩くだけなの？ そうやって、飾り物の強さで本当の弱さを隠すの？ “翼”を失った鳥は、もう飛ぶことすらできないんだよ？」

「それでも」

僕はまだ迷っていた。輝夜を取るか、世界を取るか。この二者択

一は、本当にどうしようもないのか？

輝夜。

『私、綺羅衣君が好き』

「ッ！」

ふと、かつての輝夜の言葉が思い浮かんだ。そして、その後の言葉も。

『できれば』

あの日の言葉。もしかしたら輝夜は、自分でもいつかこんな日が来るのではないかと、どこかで予感していたのではないか？

「翼」

そこに、所長が声を投げかけてきた。いつの間にか、その手には一枚の封筒があり、人差し指と中指で挟んで弄んでいる。

「……それは？」

「奇羅衣博士の遺言状だ。中身は私も見ていない。『翼がどうしようもなく悩み苦しんでいる時になったらこれを渡すように』、と言われて預かっていた物だ」

「《あの人》の！？」

一瞬興奮したが、すぐに治まった。

今になって、《あの人》に教わることなんか……ない。

「受け取らないか？ この場で破り捨てても私としては構わないんだがな」

……教わることなんか、ないはずだった。

でも。

（翼。お前は）

そう遺して、《あの人》は逝った。それだけを残して、逝ってしまった。

もし……その遺言に、その続きが書いてあるのだとしたら。それでも、躊躇ってしまう。

「……でもっ。今は時間も残り限られてるし、そんなのに目を通している時間は」

僕のその言葉を待っていたように。

輝夜とシヨットのセラが、忽然と消えた。

「……!?」「」

流石の所長も焦ったらしく、すぐさまアナリスに内線で「どういうことだ?」と確認をとっている。だが肝心のアナリスも原因が掴めていないらしく困惑の声を　相変わらず大声で言っていた。その時、僕のポケットの中で携帯が着信を告げる。

(誰だ、こんな時に　!?)

内心毒づいて二つ折りの携帯を開くと……。

(未登録?)

電話帳に登録されていない番号だった。当然ながら、十一桁の番号にも見覚えがない。しばし逡巡したが、ままよ、とばかりに応答ボタンを押す。

「もしもし!?!」

こちらも如何せん余裕がないので、第一声から大声で応答してしまふ。

しかし電話越しに伝わってくるのは、まるで危機感を感じさせないドスの利いた声。

『……耳許でキンキンキン、うるセンだよ』

どうして、いつの間に僕の携帯番号を入手したのか。呑気にもそんな疑問ばかりが思い浮かぶ。しかし、彼らが手を貸してくれるとなると、これ以上に心強いものはおよそ存在しない。

『とりあえず厄介なことになってるみたいだな。輝夜緋姫とあと一人、ちつこいガキは『ヴォイド』に放り込んだいたぜ』

まさかのときの強敵、轟虹色だった。

轟の話によると、既にこの町全土は『ヴォイド』に覆われているらしい。あとは轟の(厳密には釈迦堂の)許可さえ得られれば中は這入れるらしい。

『これで貸し借りはなしだぜ』

と豪快に放言する轟が、この時ばかりはありがたい。期せずして僕は、ある程度まとまった時間的余裕がとれるようになったのだ。とはいえ、悠長にはしてられない。『ヴォイド』内部では暴走した『ヴァンパイア』とシヨットが死闘を繰り広げているはずだ。現実時間では経過せずとも、あまり時間をかけすぎるとシヨットの命が危うい。

「まったく……、お前も人が悪いな翼。存在を認知しておきながらナンバーズを二人も報告せずに黙っているなんて」

「別に黙っていたわけじゃない。言うタイミングがなかっただけだ」

「ふん、まあいい。……それで、この遺言はどうする？ 読むのか？」

僕はやはり黙考して……。

「……読む」

頷いた。

せつかくシヨットと轟と釈迦堂が用意してくれた時間だ。ここで読まなければ彼らの厚意を無にしてしまうことになる。

それに……どうしてか、読まなければいけない気がしたのだ。

「そう言ってくれると信じていたよ。奇羅衣博士も喜んでいることだろう」

「そいつは中身次第だな」

はつきり言つて、僕は《あの人》のことが最後まで嫌いだった。むしろ憎んでいたといっても過言ではない。

それでも、読まなければならぬ気がしたのだ。

所長から手渡される封筒。封はしたままで折り目一つ汚れ一つついていない。所長が大切に保管していたおかげだろう。表にも裏にも何も書いていない、白い無地の封筒。

《あの人》らしい、と思った。僕は封を開け、中身を確認する。中には数枚重なった便箋と、一枚だけの便箋の二種類が入っていた。

「ああ。まずは量が多い方を先に読むように言われていたな、そう

「いえば」

と所長が思い出したように付け加える。僕は言われた通り、重なっている便箋を開いた。

翼へ。

そんな書き出しでその文章は始まっていた。便箋は思った以上に多く、寡黙なああの人のイメージとは少し違った。

僕はそれにゆっくり目を通していく。ずっと嫌悪感を抱いていたはずの人からの手紙なのに、それはどうしてか胸が締め付けられるように苦しかった。戯言。片付けようと思えばその一言に片付けられるはずなのに……。

下へ下へと読み進めていくうちに。

翼。お前は。

「……僕は」

「綺羅衣君……？」

音葉が隣で訝しげな声を上げる。

その時。便箋に何か透明な雫が落ちた。

それは。

紛れもなく。

誤魔化しようもなく。

僕の瞳からこぼれ落ちた、涙だった。

本当に、たったひとしずく。でも、僕はそれで何かを赦された気がした。

「僕は……人を好きになっても……良かったのか……」

僕はきつとどこかで、知らずのうちに自分を縛っていたんだと思っ

った。こんな僕に、人を好きになる資格などない、と。

でもそれは間違いだった。僕の勝手な思い込みに過ぎなかったのだ。

僕はちゃんと……誰かを愛することができたんだ。

「翼。お前が産まれる時、『アンチ・ナンバーズ計画』を立ち上げ

る時、奇羅衣博士が政府から何も言われなかったと思うのか？」

「え……？」

「当時は、政府から激しいバッシングを浴びせられていたのだよ、奇羅衣博士は。ただでさえ『ナンバーズ・チルドレン計画』という途方もない大プロジェクトを失敗させた第一人者の一人。その彼が、更にそれすらも上回る人外の人造人間を造ることに対して。批判の声はどうしても強かった」

「……………」

「それでも、奇羅衣博士はお前を産み出した。……産み出したかったんだよ」

それは。

「翼。お前は奇羅衣博士に愛されていたのだよ。愛され、産まれるべくして産まれたのだ。人を助けるべく。そして 人を愛するべく」

所長の言葉は、涙が出そうになるくらい父性に溢れていて。

どこか。《あの人》の声に似ているように聴こえた。

僕の心は……今度こそ、もう決まった。

「所長。音葉。決めたよ」

僕は涙を拭くと二人にちゃんと向き合って宣言する。

「僕は……どっちも捨てない。輝夜の命も、世界の平和も。どんなに見苦しくあがいても、絶対に両方とも手に入れてみせる。どうやら自分で思ってた以上に貪欲だったらしい。僕は助ける。輝夜を助ける。世界も助ける。そして、手に入れたものは二度と手放したりはしない。どんな過酷にも負けるもんか。二者択一？ 知ったことか。僕はどっちも手に入れてやる。これはもう決定事項だ。天秤にかけているってんなら、天秤ごと奪い去ってやるよ。僕は命を懸けてでも手に入れてみせる。絶対の絶対だ。これが僕にできること。僕にしかできないことだ」

それが、今の僕の 本当の僕の答え。

「翼……………」

「綺羅衣君……」

二人が僕の名をそれぞれ呼ぶ。どこか安心したような気配がするのは気のせいだろうか。

「ふっ、ようやく常のお前らしい潔さが戻ってきたな。……いいだろう。お前がそうと決めたのなら、私も全力を以てお前をサポートする。お前は死なせないよ」

そう言っつて所長は満足げに頷き立ち上がると、僕の肩をぽんと叩いた。

「綺羅衣君」

音葉は、短く僕を呼んだ。かと思うと、彼女は所長の方に向き直り、深々と頭を下げた。

「ごめんなさい所長さんみのかわつ。実川音葉、これより禁則事項を破ります！」

「なに……？」

まさかというような顔で呟く所長。僕は意味も分からず静観するだけだ。

そう言っつて頭を上げると、今度はもう一度僕に向き直る。

「綺羅衣翼君。今から貴方に私のナンバーズとしての能力『リジエネライト』の全てを委託します」

「『リジエネライト』を……委託？ そんなことが……」

「可能です。そもそも『リジエネライト』の能力は、大怪我を負った人を助けるために、救急用に造られた能力なんだよ。……本当なら、一部分を委託するだけだけど。その間本人は能力を喪失するし、セラが乱れて暴走の恐れがあるから、無断での使用は禁じられていることだけだ」

両手を出して、という音葉の声に反応して、僕は手を差し出す。音葉はそれを包み込むようにして握ると。

（！？）

セラが……流れ込んでくる？ 温かい……。これは音葉のナンバー24『リジエネライト』のセラなのか？

「はい、おしまい」

ほとんど一瞬の出来事だった。しかし、僕の中には確かに音葉のセラの気配が漂っている。

「全開の『リジエネレイト』の能力はね。骨折しようが全身ずたずたになるうが手足のどれか一本がもげようが、十秒もあれば回復するよ。致命傷を受けてもすぐ回復するから死ぬことはない」

勿論、とんでもなく痛いけどね、と付け加える音葉。

「ただし弱点が二ヶ所。脳と心臓。この二ヶ所だけは負傷しても回復しないからね。そこだけ気を付けて」

「……分かった。肝に銘じておくよ。ありがとう音葉」

「お礼なんていらないよ。当然、綺羅衣君の無事を思っていることでもあるんだけど、実を言うと、一番の理由は別」

「それは？」

「私ね、怒ってるんだよ。輝夜さんに対して。だって、私との約束破ったもの。『自分一人ではどうしようもなくなった時、誰かに相談して』って指きりまでしたのに」

いつもの彼女らしからぬ、本当に怒っているような顔。これは彼女にとつて……“悪いこと”なのだろう。

「だから……お願い。必ず連れて帰ってきて。輝夜さんを……《緋姫ちゃん》を」

その言葉に、僕は背中を押されて。

「任せとけ」

どんと、胸を叩いて応え、所長室を飛び出した。

*

轟は、相楽森学園の正門前にいた。

「すつきりしたいいい顔になってるぜ、綺羅衣翼」

「そいつはどうも」

轟は正門を親指で指差して。

「こっから中に這入れる。中はひでエ有様になってっかな。覚悟

しとけよ」

「ああ、分かつてる」

僕は止まることなく歩を進める。

「言つとくが、オレが案内できるのはここまでだ。オレは勝ち目のねエ博打はしねエ主義なんだ。あの女、マジでバケモンだぜ。中にいるちつこい嬢ちゃんも相当頑張っちゃいるが……そろそろ限界だろ。もしも唯にまで危害が及ぶようなことがあったら、容赦なく『ヴォイド』も解いてとんずらと決め込むからな」

それを耳にしても、僕の胸には一切の曇りがない。決意は決して揺るがない。

「これだけしてくれば十分だよ。感謝してる」

「よせよ。テメエにこれ以上借りを作りたくなかっただけだ」

そう言つて僕は更に一步を踏み出す。その背中に。

「武運くらいは、祈つてやってもいいンだぜ？」

という、彼にしては珍しい配慮の声がかかった。

だが僕はそれをやんわりと拒絶する。

「いらないよ。」

僕は戦いに行くんじゃない。助けに行くんだ」

僕は懐旧する。

あの人と

奇羅衣要博士と過ごした三年間の日々を。

Episode 6 : VAMPIRE returns - end

6・2・決意「僕は戦いに行くんじゃない。助けに行くんだ」(後書き)

輝夜が暴走し、起承転結でいうと一回目の『転』にあたります。そしてようやく明かされる《あの人》の名前と、翼の知られざる過去。次章からは過去編に飛び、翼の昔が明らかになります。どうぞご期待ください

0 - 1 過去(前篇) 「卒業祝い、というやつかな」 (前書き)

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・ 半角の() で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・ 全角の() で書かれている部分は主人公の情景補足
- ・ 《》で書かれている部分は傍点(強調)

0 - 1 過去（前篇） 「卒業祝い、というやつかな」

「翼。今日のミッションは以上だ」

*

要がいつものように、《俺》を見下しきった高圧的な態度で鍛錬の終了を告げる。ここ数年まともな食事を摂取していなかったからだろう、痩せぎすの身体に於いてもその両の瞳は強く輝いている。

「自室に戻れ。あとは彼女に勉強を教わるといい」

「……分かってる」

俺は訓練機から身を起こす。

全身がズキズキと痛む。今日のミッションはいつになくハードだった。無理もない、実戦を想定しての鍛錬を三連続でこなしたのだから。

そんな俺の機微を見越したかのように。

「どうした翼？ あれくらいミッションで音を上げるとは、なんとも情けないことだな。そんなことで『ジ・アース』に対抗できると思っっているのか？ 僕はそんな軟弱に育てた覚えはないんだがな」
「うるせえな……」

そんな厳しい鍛錬を行わせたところの要の声もまた、厳しい。これもいつものことだった。

俺は、要の口から劳いの言葉を聞いた試しがない。『お疲れ』も『ご苦労』も『頑張ったな』も、何一つ要は口にしない。

別に、それでもいい。俺と要は、こうした距離感が普通なのだとこの三年間で重々承知している。

自室へと繋がる扉へと向かう。

それを、要が呼び止めた。

「待て翼。挨拶がまだだ。いつも言っているだろう、終焉には挨拶を」

「そして、約束を、だろ。分かってるよ要。……また明日な」
本当は明日にだって会いたくない相手なのだが、これは俺達の間でたった一つの固い契約となっている。

終焉には挨拶を。そして、約束を。

その誓いだけは、俺は一度たりとして破ったことがない。

「ああ。また明日だ、翼」

要の言葉を背に、俺は扉を閉めた。

ベッドに寝転がる。ぎし、とスプリングが跳ねる。この天井も見慣れたもので、できた染みの数さえも記憶しているくらいだ。

「ふう……」

俺は知らずため息をつく。一日のスケジュールは決まっている。朝六時に起床、朝食をとったらすぐに鍛錬が始まる。鍛錬は十時間休憩なしで行われ、こうして部屋に戻ってくる時はいつだって満身創痍だ。

この施設での鍛錬。

それは、特殊な機器で脳に直接催眠電波を送り、要が設定した仮想の戦場で仮想の相手と戦う。言ってみればイメージトレーニングだ。

イメージトレーニングといっても疎かにはできない。脳に送られてくる電波は極めて強力なもので、実際に戦闘で負傷すれば現実での俺も同じように負傷しているといったものである。深い催眠状態にある人間が、ただの棒を焼き鏝こてと勘違いして蚯蚓腫れみみずを起こすようなものだ。この辺の例えは、要本人ではなく教育担当に教わった。俺は、この施設で産み出されこの施設で育った。この三年間、一度も外の世界に出たことはない。なんでも、この施設は富士の樹海とかいうところの地下に存在するらしい。

「ふう……」

もう一度ため息をつく。そうすると意識が徐々に混濁していく。強がりにはしたがやはり今日のトレーニングはかなりハードだった。

全身に傷がいくつもできている。疲労の色合いも濃い。

彼女が来るまで、まだ若干時間がある。俺はしばしの間、心地良いまどろみに身を委ねることにした。

最初の敵は、獰猛な熊だった。

鋭い牙と爪に、厚く覆われた体毛。猪突猛進を絵に描いたような野生動物。普通の人間を凌駕する身体能力を誇る俺は、それを難なく排除する。だが、皮を貫き肉を貫き心臓を潰した、あの厭な感触は今でも腕に残留している。

その次の敵は猛毒を持った蠍の群れだった。一針でも刺されれば致命傷。回避を最優先にしつつも一匹一匹を確実に駆逐していった。だが途中で惜しくも猛毒の針がかすり、しばらくは三十八度台の高熱にうなされることになった。

三度目で、銃を持たされた。

そして、相手はいよいよ生身の人間だった。鋭利なナイフを手に、理性を失ったバーサーカー。こちらに与えられたカートリッジは銃弾十発が詰まった一っただけ。弾数制限のある状況下で、俺は初となる対人間の戦いに戸惑った。

銃の扱い方は一通り教わっていたし、想像もしていた。それでも、実際に動局的に当てるのは困難だった。いや、それ以上に俺の手を震わせたのは、《人間を殺す》という事実。いくら実在しない人間とはいえ、俺にとっては現実とそう大差はない。九発を外し、残り一発となったところを男の凶刃が襲った。頸動脈を寸分違わず狙い澄ました白刃。俺は両手で銃をしっかりと構え、銃口を男の顔面に向けて引き金を引いた。

即死だった。血が迸り、脳を貫通して風穴の空いた男の顔。その光景は未だに忘れられない。男の熱い血液が俺に容赦なく降り注ぎ、今でもたまにその血がこびりついているような錯覚を覚えることがある。

俺は震えた。そして、《これが人を殺すということなのだ》とい

うことを体感した。

次も人間だった。一人ではない。しかも今度はただのバーサーカーではなく、洗練された軍人として訓練を積んだベテランコンビだった。二人とも拳銃を所持しており、リロードの間隔をずらすことで銃火はやむことがない。前回のトラウマもあり、前回以上に苦戦した。それでも最終的には震える手でそれらを殺した。右の手刀で首を刎ね、左の掌底で頭蓋を粉碎した。

手が震えなくなったのはいつからだろう。その次かもしれないし、更にその次からかもしれない。いつしか俺は、命を奪うことに何も感じない、人を殺すことに特化した殺戮兵器へと姿を変えていた。

やがて、ミッションも様々な趣向のものへと変わっていった。爆弾の解体、遠距離からの射殺、姿を見せることなく気配を悟られることなく命を奪う暗殺術、要人のボディガード、大陸間弾道弾ミサイルの発射阻止。ありとあらゆる毒物に対する知識と免疫をつけ、どんな過酷な拷問にも決して口を割らない胆力をつけられもした。千人の命を救うために、百人の命を切り捨てなければならぬという冷血な選択に迫られたこともある。一挺の銃も一本のナイフも味方もなし、文字通りの徒手空拳単身で一個軍隊を殲滅させよ、などというふざけたものまであった。その時だ、幾何学的要素を無視して距離を縮める超能力 術式・瞬転しゅんてんを編み出したのは。そんな過酷な非日常が三年間千九十五日に亘って続いてきたのだ。いつそ自決も考えたことなど、それこそ枚挙に遑がない。

それでも俺は、三年間正気を保っていられた。もっとも、この精神状態を“正気”と呼ぶのなら、だが。

俺は要を諸悪の根源とすることで理性を保っていられた。全てのミッションは要が考案したものだ。そんな過酷な任務を思いつく要こそが正気の沙汰ではない、と決めつけることで、俺は辛うじて正気を維持し続けた。

そして、もう一つ。

く　　すく。

遠くから、優しい声がする。

……ああ、彼女の声だ。

俺は、まどろんでいた意識を覚醒させる。

「翼、大丈夫ですか？」

そう言つて、柔和な笑みを浮かべる女性の顔が視界いっぱいに映る。

「悪い、寝てたな」

「いえ、それはいいんですよ。ただ、こんな季節に毛布もかけないで寝ていたら、風邪をひきますよ」

「大丈夫だよ。俺はそんなやわな身体じゃない」

「ふふっ、それもそうでしたね」

そう言つて、母性溢れる笑みを浮かべる女性。

彼女の名はナツメ。俺の教育担当係だ。この施設には、俺と要とナツメ。この三人のみが生活している。

ナツメも、俺と同じ人造人間だ。俺 プロトタイプ 奇羅衣翼という存在を造

り出すために実験体として開発された試作品。言ってみれば、ナツメは俺の姉に当たるといふわけだ。

だが、ナツメにはれっきとした素体が存在する。彼女はその人物の遺伝子を元にして作成されたのだ。

奇羅衣翼 なつめ 『ナンバーズ・チルドレン計画』に参加していた十三人の博士のうち唯一の女性。名字で分かる通り、彼女は要の妻だった。

そう、《だった》。

奇羅衣翼博士は『ジ・アース』による研究所破壊の際に逃げ遅れ、島と運命を共にしたという。その奇羅衣翼博士の遺髪から採取した遺伝子を元にして、ナツメは産み出されたのだ。そう考えると、真性の人造人間というよりもクローンに近い。翼博士の顔を俺は知らないが、きつとナツメに似て柔和で優しくたおやかな女性だったの

だろう。

「それじゃあ、疲れているところも済みませんが、今日もお勉強を
始めましょうか」

「そうだな」

この施設に於いて、ナツメの存在は俺にとってとても大きい。
彼女がいてくれるから、彼女が笑顔でいてくれるから、俺はこの三
年間の鍛錬に耐えられたと言っても過言ではない。彼女との時間は、
一日に数時間しかとれないけれど、俺にとってその時間は紛れもな
い憩いの時間だった。

勉強時間は二時間と決まっている。ナツメは色々なことを教えて
くれた。単純な足し算引き算、漢字の読み書きから、知らなくても
生きていけるような雑学まで。そして、外の世界のことも。彼女が
何年生きているのかを俺は知らないが（女性に体重や年齢を尋ねる
のはとても失礼なことなのだ）と叱られたことがある）、彼女は俺に
とって厳しい師であり、楽しい姉であり、優しい母だった。

勉強が終わった後は、二人で夕食を食べる。食糧の調達もままな
らないここでの食事は、大抵はレトルト食品だ。この施設で水は貴
重なものであり、飲料水として以外の用途は滅多にない。

「ごちそうさまでした。美味しかったですか？ 翼」

「ああ、美味しかったよ。ありがとうな、ナツメ」

「うふふ、ありがとうございます。といっても、私が加工して作っ
たわけではないんですけどね」

「そんなことない。今日の料理は本当に旨かった」

今日のメニューはカレーだった（勿論これもルーもライスもレト
ルトである）。だが、おそらくはなにかしらスパイスを利かせたに
違いない。辛さの中にもマイルドな旨味が詰まっており、上品で濃
厚な味わいに仕上がっていた。外の世界を知らない俺は本場のカレ
ーがどういったものなのかを知る由もないが、これより美味しいカ
レーがあるなら大枚はたいてでも食してみたいものだ。

「お褒めに与り光栄です。……それじゃあ食器、片付けちゃいますね」

ナツメよりもとっくに早く食べ終わっていた俺の分とナツメの分の食器を重ねていく。こうした炊事洗濯などの家事全般の雑用も彼女の仕事の一つだという。一度だけ手伝おうとしたところ。

「女の城に土足で立ち入らないで下さい、よよよ……」

と泣いて懇願されたので（あの時の涙が本物だったかどうかは今でも疑問に思っている）、敢えて任せている。

「ふんふんふーん」

上機嫌に食器を片付け、トレーに乗せて立ち上がるナツメ。

その時。

「きゃっ」

「え」

ガシャン。

俺は咄嗟に手を伸ばして彼女の身体を支える。

立ち上がるうとしたナツメが、立ちくらみでも起こしたように足をもつれさせたのだ。そのせいでトレーも手から落ち、トレーに乗っていた食器も床に落ちて割れてしまった。いくら残っていたカリーのルーが床にこぼれて染みを作っている。

「お、おいナツメ。大丈夫か？ お前の方こそ疲れてるんじゃないのか？」

「あ、あはは……。ちょっと立ちくらみがただけですよ。大丈夫です。……ああどうしましょう、せつかくの食器が……」

「いいよ。割れた破片は危ないから俺が片付ける。ナツメは今のうちに雑巾を持ってきておいてくれ」

「あ、そうですね。ごめんなさい翼。ちょっと取ってきます」

そう言っただけでナツメは小走りで部屋を出ていった。俺は割れた破片で指を切らないよう注意しつつ、ふと不審に思った。

（ナツメがこんなつまらないミスをするのははじめて見たな……）
俺という時は敢えて話題に触れないようにしているが、ナツメは

要の食事や体調管理も請け負っている。気丈に振る舞ってはいるものの、やはり疲労度は濃いのだろう。

とはいっても、俺はナツメに何もしてやれない。精々無駄な仕事を増やさないように努力するだけだ。

しばらくして、息を切らせたナツメが戻ってくる。そんなに急がなくてもいいのに、と思いつつ、二人で片付けを済ませる。

「こんなところか」

「そうですね。……すみませんでした翼。余計な手間をとらせてしまった」

「いいんだよ。気にするな。……じゃあ、今日はこれくらいか？」

彼女とまた一日会えないのは名残惜しいが、時間もいい頃合だ。

俺はそう切り出した。

「そうですね。……それじゃあ、翼。また明日。おやすみなさい」

「ああ。おやすみナツメ。また明日」

そう言って、俺とナツメは別れた。

俺は自室に戻ってベッドに寝転がる。ナツメに言われたからというわけでもないが、毛布はしっかりかぶる。施設内では温度は一定に保たれているものの、外の季節は冬だ。冬という季節は寒いものだという。だから、温かくして寝るようにナツメに耳にタコができるくらいに教えられた。

今日の食事は美味しかった。ナツメのカレーを、いつかまた食べたいものだ。

そう思っただけ目を閉じる。眠りはすぐに訪れた。

この時は、想像もしていなかった。

ナツメに勉強を教わることも、ナツメと一緒に食事をとることも、二度とやってこないことに。

朝食は自室で一人で食べる。朝食といっても、焼いたトースト一枚にマーガリンを申し分程度に塗って食べるのが精々だ。実に質素なものだが、俺はミツシヨンで一ヶ月間の断食にも耐え切ったこと

があるので、少しでも食べられるだけで天国だ。

数分で平らげ食器を下げると、俺は嫌々ながらも研究室へと向かう。

要は既にいた。この六年間、外界から隔離されたこの施設に閉じ籠もっていたせいだろう、痩せぎすの顔に、しかし俺を見下しきつた高圧的な態度は変わらない。すっかりくたびれてあちこちが茶ばんでいる白衣を身に纏って俺を待っていた。

「おはよう翼。気分はどうだ？」

「おはよう。アンタの顔を見るまでは良かったよ」

「そうか。ならいつも通りだな」

俺の嫌味も華麗にスルーして、要はパソコンの前に座る。

と思いきや、俺に背中を向けて歩き出した。

「どこへ行く？ 今日の鍛練はなしなのか？」

「いや。ついてこい翼。お前に渡したいものがある」

「渡したいもの？ なんだ？」

「来れば分かる。黙ってついてこい」

そう言って、要は地下（ここも地下だが、更に下）へと続く階段を下りていく。今までは使ったことのない階段。俺も存在は知っていたが、下に降りたことはない。言われるままに後ろについて歩いていく。

地下は真つ暗だった。文字通り一筋の光も差し込まない、暗黒。

「ちよつと待て」

要の声。それと同時にぱちん、という音がする。電気のスイッチの音だろう。明滅する蛍光灯の数々。暗黒の世界から一気に眩しさに染まる世界に放り出されたことにより一瞬目を細めて、案内されたそこを見る。

二百メートル四方くらいの大きさの、何も無い広場だった。学校の体育館を 実際は目の当たりにしたことはないのだからないが 広くしたようなスペース。壁の素材は……ただのコンクリートじゃないな。衝撃を吸収する特殊な素材でできているようで二十

センチほどの厚み、この壁は流石の俺でも貫けそうもない。

「翼」

その広い空間の中程で要は立ち止まり振り返る。それに合わせて対峙するように、俺もそこで止まる。

そして、唐突に衝撃の発言をする。

「今日で、僕がお前に与えるミッションはおしまいだ」

「なに……!?!」

俺は決して少くない　むしろかつてないほどの驚愕を覚える。

今日が、最後だと　？

「お前はこれまで、ありとあらゆるミッションをクリアしてきた。

多くの命を救い、それと同時に多くの命を殺してきたらう。だが、実際に人を殺した経験はない。お前自身、よく分かっているな？

完成されたキリングマシーンとなるには、最後のピースが足りていない」

「……………」

そうだとするならば、まさか、最後のミッションというのは

……………。

俺の最悪の予想を、要は呆気なく口にする。

「翼。最後のミッションだ。僕を殺せ」

「ッ！」

要を……人を、殺す。架空の人間ではない、この世に受肉した人間を、だ。

「そんな、そんなこと……………」

……………できない？

本当に？

俺は思っていたはずだ。全て要が悪い。要が諸悪の根源なのだ。

《要なんていなくなってしまうばいいと》。

だが……思いとは裏腹に、腕が、震える　。

……………どうして

懊悩する俺を尻目に、要は徐にポケットから“それ”を取り出し

た。

「卒業祝い、というやつかな」

そう言つて、それを手渡してくる要。

銀色の……十字架状のネックレスを。

「銀麗ぎんれいし糸ルシフェラーゼ。お前のセラにに応じて編まれた、自由自在に姿を変える七千本の糸。使い方は……これから身体で覚えてもらう」

不意に声を低くしてそう言う。

要は、ポケットから一錠のカプセルと一本の試験管を取り出す。

試験管の中には、水が入っておりコルクで封がされている。

そのカプセルを口にし、試験管の口を開けて一気に嚥下した。

「……僕は、お前を『エナジードレイン』として産み出した。ナンバーズとしての特殊能力を悉く消去する唯一無二の存在。……だけど、僕は同時に開発してしまった、それがこの薬、《『エナジードレイン』でも消すことができないナンバーズを後天的に産み出す薬》。名を『ジャバウオック』、と、名付け、た」

？ なんだ？ 要の様子がおかしい。突然呼吸が荒くなり、

額に大粒の汗をかいている。そして。

《普通の人間であるはずの要が、セラを放ち始めた》。

「ナツメに、聞いた、ことくらい、は、あるだろう……。ルイス、キャロル、の、寓話に出て、くる、魔獣……。ジャ、バウオ、ック……。飲んだ者、の、理性を、粉々……。に、打ち砕き、文字通りの……。化け物と、変化させ、る……。野性、本能を……。百二十、パーセント、引き出し、破壊の権化へ、と、その姿、を、変える。どう、なつてし、まうか、は……。僕にも、分から、ない」

ぼごっ、と不気味な音を立てて、要の右腕が風船のように膨張した。それを境に、どんどんと要が、《ヒトとしての姿を喪失していく》。まるで現実離れたその光景に俺は吞まれ、金縛りにあつたかのように動けず、ただただ瞠目して要が変わっていくのを眺めていることしかできなかった。

要が、最後に残ったありつたけの理性を総動員して叫ぶ。否、既に人語でさえなかつたのかも知れないが、俺にはそう聴こえた。

『 さあどうする翼！？ ここで僕を殺さなければ、僕は外の世界に解き放たれて多くの無辜の人々を、本能の赴くままに殺し始めるぞ！ 僕を殺せ！ アウト・オブ・ナンバー！！』

その言葉を発するのを待っていたかのように、加速度的に変貌を遂げていく要。

身体がみるみるうちにぼこぼこ音を立てて膨張していき、白衣が破け、顔の形が変わっていく。手足はまるで虎のように鋭利な爪を持ち獣毛に覆われた四肢。否、次の瞬間には《四肢ではなくなつた》。腹部から五本目、六本目となる腕が次々に生えてくる。頭は猿のそれに類似し、胸はまるで狸のようにずんぐりと巨大化、尻から蛇のような三つ又の尾を、背中から蝙蝠のような巨大な一對の羽を、それぞれ生やし、その容貌はまさしく伝説の魔獣に相応しい。

「オロロロロロロロロロロロオオオオオオン！！！」

身の毛もよだつ雄叫びを上げるそれ。それは最早、奇羅衣要でもなければナンバーズでもなく、人間ですらなかつた。

頭は猿。胸は狸。尾は蛇。手足は虎。ただし、手足は六本、尾は三つ又に分かれ、背には蝙蝠のような羽を生やし、体長は三メートルを優に超える巨体。声はトラッグミなどとは言わず、その姿はまさしく魔獣。

ジャハウオック
鳩。

T o b e c o n t i n u e d . . .

0 - 1 ・過去（前篇） 「卒業祝い、というやつかな」（後書き）

過去編（といっても、ぶつちやけると二章だけですが）、まずは前半です。翼の過去、要という男、そしてもう一人、なんだか新キヤラが出てきました。ついに明かされる翼の昔。そして、今に至るまでの物語です。次章、過去編後半を乞うご期待

0 - 2 ・過去（後篇） 「僕は……綺羅衣翼だ」（前書き）

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・半角の（ ） で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・全角の（ ） で書かれている部分は主人公の情景補足
- ・《 》 で書かれている部分は傍点（強調）

「ヲヲヲヲヲ！！」

*

文字では表わしきれないような奇声を上げ、鵜が虎のような鋭い爪を持つ怪腕を振るう。六本の手足のうち二本で地を踏みしめ、残る四本の腕を文字通り振り回す。秩序もなにもあったものではない。まさしく、本能の塊。

四本の腕は、まるでそれぞれ独立した思考回路も持っているかのように、縦横無尽から俺に襲い掛かる。

「くっ　　！！」

リーチが倍以上違う俺には、それをすり抜けることなどできない。サイドに大きく回り込み反撃を試みる。

が。

「がっ……！！？」

三つに分かたれた蛇のような尾の一本が、俺の反撃を阻むべく死角から薙がれる。蛇といっても、キングゴブラの太さと硬さだ。鞭のようにしなるその襲撃を浴び、俺の口からは自然と苦悶の声が漏れる。

薙がれた勢いそのままに、壁に叩き付けられる。衝撃を吸収する特殊素材でできているはずのその壁はしかし、べっこりと大きくへこんで俺を受け止める。

「……ぐふっ」

振るわれた尾でのダメージと壁に叩き付けられたダメージ。二重の衝撃で俺の内臓は一気にズタズタだ。今朝食ったトーストが災いして、俺は口から汚物を吐き出した。

「けほっ、えほっ……」

咳き込む俺の都合など知ったことかと、鵜が迫る。さっきまで二本足で立っていたが、今度は四本足に変えて力強く地を踏み切り疾

走する。まさしく獣王である獅子。しかも、腕は未だに二本余っている！

獅子でありながら四肢ならぬ六肢。純粹かつ圧倒的な暴力の権化。その二本の腕で両拳を作り強烈な拳撃を放つ。助走の速度そのままに繰り出される出鱈目なストリートパンチ。まるでカタパルトから射出されたジェット機のような速度で俺を狙い撃つ。

後ろは壁。横に逃げれば蛇の尾が襲ってくる。俺は上に跳躍して回避する。

ばきいっ！

俺でさえ貫けないと思つた壁は、まるで俺の見込み違いだったかのように圧壊する。空いた風穴は巨大な拳の形のみ。必要以外の無駄な破壊を起こさないその痕跡が威力の凄まじさの程度を物語っている。まるでロケットランチャー！。

俺は空中で壁を蹴り、即座に鵜の背後に跳躍する。めり込んだ拳のせいで、鵜はまだこちらに満足に反応を起こせないはず！
だが、俺の予想はまたも外れる。

「っ！？」

鵜は、首だけを百八十度回転させて俺をその視界に捉える。猿の顔をしているくせに、梟のように回る首だ。常識を悉く覆す、怪物。俺を視認した鵜は、三本の尾を三方向から振りかぶる。やはり尾も、腕同様に独立した感覚を持っているように鎌首をもたげる。だがそれも、俺にとっては正面から相対すればそれほどの脅威ではない。迫り来る一本を素手で掴み取り、二本を確実に躲しきることに成功すると。

「ふんっ！」

気合一閃。俺は鵜の尾を根元から引き千切った。それを放り投げると同時に更に接敵し、さっきのお返しとばかりにガラ空きの背中に手刀による貫手を繰り出した。

どしゅっ、と音を立てて俺の前腕中程くらいまでが鵜の身体に埋没する。肉を突き貫く、何度経験しても慣れそうにない厭な感触。

すぐさま顔を顰めつつ引き抜く。

「!?!」

しかし、いくら引き抜こうとしても抜けない。力を籠めても、硬く硬く、逆に締め付けるような肉のせいで抜けないのだ。

はっとして気が付く。さっき引き千切ったはずの尾が、瞬く間に再生を始めている。数瞬、四半秒ほどでそれは元の長さにまで完治し、それで勘付く。

(超速再生　!)

手が抜けないのも、断裂した組織がすぐさま繋がり合おうとしているせいだ。言うなれば、俺の手は冷水に手を突っ込んだ状態で凍結してしまったようなものである。

「くそっ！　抜けるおっ！」

叫んだところでどうなるものでもない。ようやく壁から手を抜くことに成功した鵜は、鬱陶しいとばかりに身体を独楽のように回転させる。自ずと、そこから繋がったままの俺も螺旋を描いて振り回されることになる。当然、さっきまで鵜が突っ込んでいた壁に擦られる結果になった。

がりがりがり、と肩から壁に衝突し、そのまま引きずり回される。肩が外れるのではないかというほどの衝撃に加え、火がつくのではないかというほどの摩擦。何の防衛的加工も魔術的加工も加えていない俺のシャツはあっという間に肩口から破れ、直接皮膚が擦れて激しい擦過傷を負う。

回転を続ける鵜。壁地獄から解放されたかと思うと、今度は三本の尾が俺の胴に絡み付く。まるで野獣の牙のように、喰らい付いたら二度と放すまいというが如く締め付ける絶大な捕縛力。

「ぐうっ！」

息もできないほどに圧迫される身体。いくら頑丈にできているとはいえ、生身の肉体であることには変わりはない。臓腑を握り潰さなばかりの万力。それを以て、俺の身体を引っこ抜き、ようやく俺の拳は鵜の身体から解放された。

だがその後も、尾による締め付けは続く。ぎりぎり、自分の骨格が軋む音が聞こえた。かは、と吐き出したのは息にならぬ息。

鵜は、俺を空中でぐるりと上下反転させたかと思うと。 。
力の限り、頭から俺を地面に叩き付けた！

「 ! 」

頭頂部に凄まじい激痛。俺の頭は特殊素材製の床を陥没させる勢いで叩き付けられた。悲鳴を上げようにも、呼吸が封じられている以上それすら叶わない。

痛みを堪える余裕も与えず、再び尾を同じ高さまで振り上げ、振り下ろす。がすがすがす、と連続して頭頂部に与えられる鈍痛の嵐杵をつく木槌の気分を味わった。何度目かから裂傷を起こしていたのだらう、ぬめつとした感触からかなりの出血を起こしていることは想像に難くなかった。

呼吸困難も手伝って、意識が朦朧とし始め、痛みの感覚すら鈍くなってくるのにそう時間はかからなかった。それでも、ここで気を失うわけにはいかない。俺はわざと肩や頭の傷を意識して、意識を繋ぎ止めるのに精神を駆使する。

もう何度叩き付けられたか分からない。鵜は、飽きたように俺を放り投げる。まるで一つの玩具で遊ぶのに飽きた子供のようにだ。

不様にうつ伏せに地を転がる。ようやく酸素を摂取することに成功する。口で酸素を取り入れ、鼻では自分の頭から流れる血溜まりの匂いを取り入れていた。言うまでもなく、後者は強制的である。

全身くまなくスタボロだ。まさしく満身創痍。生きていることの方が不自然だとさえ思わせる重傷だった。

それでも指先に力を入れる。まだ、動いた。砂利を握り締め、痛む全身に鞭打って立ち上がる。ぼたり、と赤い雫が落ちる。髪の毛から垂れた血だった。気が付けば、肩口からもだらだらと止め処なく血が流れている。立ち上がると、ふらついた。視界が不明瞭だ。血を流し過ぎた。これ以上は命に関わる。動いているので死体とは見えないまでも、死霊くらいには見えるだらう。

それでも、前を見据える。異形はまだそこに確と存在し、傷一つついていない。

そんな俺の重傷に情けをかけず、鵂は追撃に打って出る。蝙蝠のような双翼をはためかせ、二十メートルばかり宙を浮く。重力法則無視も甚だしい。本来、あんなにも巨躯の鵂があ程度の羽で空を飛べるはずがないのだ。

鵂は狸のような胸の肺部分を大きく膨らませたかと思うと。

「バアアアア!!!」

大きく裂けた猿のような口から、何かを吐き出した。

視界が不明瞭な状態からは、何を吐き出したのかまでは分からない。が、それが“攻撃”であることに疑いようはない。生命的な危機を感じ取った俺は、後方にバツク転をすることで回避する。……だが、負傷のせいで足に満足に力が入らず着地にはみつともなく失敗し、再び地面を舐めることになった。

次の瞬間、今の今まで俺がいた場所は、じゅわあ、という音と鼻をつく強烈な腐臭を残して溶解した。

強酸。浴びていれば全身が爛れて見るも無残な原型も残さぬ肉塊へと変わり果てていただろう。回避に成功しただけでも御の字といったところだ。

鵂は、ずん、と音を立てて四肢ならぬ六肢で着地する。俺もそれに合わせ、激痛に苛まれる全身に鞭打って立ち上がった。

いっそ、諦めてしまえば良かった。俺がここで死ねば、鵂は外の世界へと飛び出し魔獣として思うがままに猛威を振るうだろう。けれど、俺は外の世界は知らない。知らない何かのために、誰かのために、どうして俺が命を懸けなければならないのか。

もうやめよう。こんな下らない任務になんか付き合っていないか。そこにある出口から外に出て逃げ出そう。勿論、ナツメも一緒だ。そうして二人で幸せに暮らすんだ。それ以外の世界のことなんか知ったことか。俺にとっての世界とは即ち、この施設ではない。外界のことなど全て擲って、諦めてしまえば。想像する

だけで、なんと気楽なことか。

それがいい。そうしよう。

「……ふざけやがって」
翼。たすく

俺の仕事であり、助く者。たす

俺の自由意思とは無関係に、そんな勝手な名前つけやがって……！

「諦めるなんて……できるかよ！！」

俺が、奇羅衣翼きろいよくが諦めるということは、奇羅衣要かなめに屈するという
ことなのだ。冗談じゃない。誰があんな奴に負けるものか！

知らず、腕が胸を撫でていた。その指先に、硬質の何かが触れる。

銀に光る、十字架状のネックレス。

銀麗系ぎんれいしルシフェラーゼ。

ついさっき渡された、要からの卒業祝い。

そう、これはミツシオンなのだ。要が俺に課した、最後のミツシ
ヨン。

ああ、やってやろうじゃないか。俺がこの程度で膝をつかな
いということを示して、要を見返してやるのだ。

見ているがいい、奇羅衣要、その異形の双眸で。俺がもう、巢で
餌をねだるだけの雛鳥ではないことを証明してやる。

「モドリリース
霊装解除。銀麗系」

その言葉は、自然と俺の口をついて出た。その瞬間。
ざあつ。

寄せては返すさざ波のような音を立て、《それ》は解き放たれた。
美しい、銀の系。オーロラのように輝かしく光を放つ、七千本の
系。

俺は直感する。

『この系は、俺以外には使いこなせない』

基質特異性という単語を聞いたことがある。科学の勉強の時、ナ
ツメに教わったものだ。ある酵素反応が特定の基質構造を識別し、
その基質にのみしか化学反応を起こさないといいものだ。

(判る)

この糸は、俺のセラに対してしか反応しない。

(判る)

この糸は、俺のセラに応じて、硬くも柔らかくも、長くも短くもなる。

(判る)

この糸は、俺に糾われるままに、剣にも、槍にも、鞭にも、楯にもなる。

(判る！)

この糸なら 勝てる！

「…………『ジャバウオック』。貴様を…………消去する」デリート

魔獣が迫る。再び四足で突進してきて、二本の腕で打撃を繰り出す。両サイドから挟み潰すような怪腕が唸る。四肢ならぬ六肢は戦業の幅を大きく広げ、千手ともいえる様々な猛攻を繰り出す。

イメージ想像する。その猛攻を防ぎ得るに足る鉄壁の防御を。

俺は、ルシフェラーゼを手繰って二つの楯を造り出す。《俺のイメージ通りに操られ硬質化した糸は》、その拳撃を難なく防ぎ切る。あれ程までの破壊を行った拳撃を容易く防ぐ、神通無比の霊装。

イメージ更に想像する。防御から攻撃へと移るに足る強靱な刃を。

次なる俺の手。糸を束ね、《糸が俺のイメージ通りの形の刃を成し硬質化する》。それはダイヤモンドさえ切り裂く視認不能なほどの鋭利な剣尖。しゃらん、という鈴が鳴るような綺麗な音を立てたそれを以て、俺は鵜の腕を両断する！

舞う血風。血霞の向こうに、俺は更なる追撃を放つ。青龍刀のような“物体を分断する”ことに特化させた刃。それを袈裟掛けに薙いだ。

狸のような鵜の胴体に、痛々しい剣刃の軌跡が残る。すぐさま回復しようが、それは確かに報いた矢二つ。痛みを感じているのかどうかは分からないが、堪らずといった様子で、鵜は大きく後ろに飛び退き叫ぶ。

「オロロロロロオオオン!!!」

瞬く間に癒える、斬り落とした腕と胴の傷。奴を仕留めるには、必殺の一撃を与える他にない。

だがまだだ。俺はまだルシフェラーゼを使いこなせていない。俺がこれを完全にものにするのが先か。それとも奴の一撃が俺に届くのが先か。綱渡りのような死闘が繰り広げられた。

いいだろう。俺はいくらでも受けて立とう。奇羅衣要が命を投じて敢行したラストミッション、こちらとしてもそう簡単に決着がつかんざ、思っちゃいなさいさ！

鵜が地を蹴る。

どれくらい時間が経っただろう。少なくとも、二十四時間は経過しただろう。

俺と鵜は、未だに決定打に結び付かないまま決闘を繰り広げている。俺は糸を繰り、鵜に無数の切り傷を作っていくも、それはすぐに癒え、命にまでは届かない。対する鵜もまた、ルシフェラーゼという鉄壁の守りを手に入れた今の俺へ、攻撃を届かせることができていなかった。百日手、千日手、万日手。延々とそんなことを繰り返していた。

俺の能力 『エナジードレイン』で、『ジャバウオック』を消せないかどうか、何度か試してはみたのだ。しかし、どれも徒労に終わった。要本人が言っていたように、『ジャバウオック』は『エナジードレイン』でも消せないのだろう。奇羅衣要は、あれでいて研究ということに関しては紛れもない天才だ。プロフェッショナルその彼をして不可能だというのなら、それは本当に不可能なのだろう。

「ヲヲヲヲ!!!」

迫る鵜。俺はそれを後ろに跳躍して回避すると同時に、糸の洗礼を浴びせる。降り注ぐ糸に、鵜の全身に無数の切り傷ができる。

ずっと疎ましかった。

「はあっ!!!」

更なる連撃。長く伸びた糸が鵜の全身に絡み付く。ルシフェラーゼの最伸範囲は把握した、その距離、三百メートル　！

「おおおおああああ！！！」

號の雄叫びとともに、俺は力の限りそれを振り回した。壁に激突する鵜。優に三メートルを超える鵜の胴の形に壁がべっこりと陥没する。口の端から、赤い筋が流れていた。

ずっと妬ましかった。

「ウヲヲヲヲヲ！！！」

文字通り啼血の咆哮を上げ、鵜はすぐさま糸の呪縛から逃れるべく暴走する。腕力では叶わない俺は、すぐさまルシフェラーゼを解いて次手を講じる。

既に二百メートル四方のこの空間内に、損傷のない箇所は微塵も残されていない。壁という壁に爪痕や血痕が残り、床は何十ヶ所も陥没。高い天井にさえ破壊の痕跡が刻み付けられていた。

ずっと。

「憎かったっ！！！」

俺は叫ぶと同時に鵜を囲むように刃の雨を降らし、それを浴びた鵜の全身には無数の孔が開く。腕は六本中二本が千切れ飛び、しかしすぐさま再生を始める。

あの鵜は、奇羅衣要だ。俺がずっと疎ましく、妬ましく、憎んでいた存在。いなくなってしまうばいいと思いつけていた、俺にとっての絶対悪。その渴望が、もうすぐ叶おうとしている。なのに。

(……………痛い)

鵜の身体を切りつける度に。

(……………痛い)

鵜が恐ろしい雄叫びを上げる度に。

(……………心が)

どうしようもなく、痛い。

どうして……………涙が頬を伝う　？

気が付いてはいた。鵠の放つセラが少しずつ減少していくことに。そして、それに呼応するように、傷の再生速度が遅くなっていったことに。今ではもう、六肢のうち一本が千切れ再生しないまま放置されていた。

『ジャバウオック』は……完全系ではなかったのだ。

「うあああああ！！」

俺は葛藤を振り払うように叫び、鵠の手足と三本の尾に向けてルシフェラーゼを伸ばす。合計八本の足と尾が七千本もの糸に縛られ、まるで磔刑に処されたかのように動きを完膚なきまでに封殺する。腕力が劣っているのは火を見るよりも明らか。鵠は苦肉の策で、再び口から強酸を吐き出すかもしれない。だからこそ、俺は動きを封じ込めた一瞬のうちに決着をつけなければならぬ。

即ち、絶対の好機であり、勝機。

今こそ使う瞬間がきた。

ずっと温存しておいた、切り札。

「瞬間――！」

どしゅっ！

肉を貫く、厭な感触。

幾何学的要素を無視した一歩で、俺は鵠に肉薄し。

俺の拳が、鵠の胸を貫通していた。

再生は……ついにしなかった。糸を解いても、異形の怪物は身動きをせず、身の毛もよだつ叫び声も、上げることはなかった。ただ、猿のような口から、ごぼ、と大量の血液を吐き出し。

「……《よくやった》。翼」

《要の声で、俺を労った》。

はじめて、俺を労ったのだ。

俺は半ば放心状態で、今や見る影もない要を見上げる。

「要……、お前……」

まさか……最後の最期で、理性を取り戻したのか？

「ミッシヨンコンプリートだ。よくぞルシフェラーゼを使いこなすことに成功した……。僕がお前に教えられることは、もう、何も残っていない……」

それとも……それとも、まさか。

最初から、《理性を失ってなどいなかったのか》？

「間もなく、この施設は、破壊される。その前に、ここを、出る。そして、東へ、真っ直ぐ進め。後のことは、UN事務所に、任せてある……」

「かな、め……」

異形の腕が、そつと優しく伸びる。そして。

俺を、包み込むように抱いた。

要が、俺を、はじめて抱いたのだ。

その身体が、塵へと化していく……。

それは一瞬で。はじめから存在しなかったかのように。

「翼。お前は」

そんな、言いかけの言葉を残して、奇羅衣要は塵へと還っていったのだった。

あとに残されたのは、胸を貫いた状態のまま固まる俺と、抱き締められた一瞬の温もりだけ。

「……………つ。『お前は』、なんだよ」

終焉には挨拶を。そして、約束を。

そう、誓ったんじゃない……なかつたのか！

……………ふざけるな。

こんな最期、あつてたまるか……！

「『お前は』……なんなんだよ……！ 答えろ、要ええ……！！」

俺の慟哭が虚しく室内に木霊する中。

施設が、崩壊を始めるべく震動を始めた。

「ナツメっ……」

ナツメは自室にいた。続く地鳴りを気にした様子もなく、ベッドに腰を落ち着けたまま、ただいつものように俺に笑いかける。

「あ、お疲れ様です。翼。どうしたんですか？ 血相を変えて」

「ナツメ。ここを出よう。もうすぐこの施設は破壊される。このままだと生き埋めになるぞ！」

取り乱した俺を宥めるように、ナツメは静かに首を振る。

「知っていますよ。だって、その起爆装置を押ししたのは、私ですから」

「えっ………？」

「要博士を、手にかけてのしょう？」

「っ………」

要を……人を、手にかけて。

改めて言われると、その事実が俺の背中に重く押し掛かってくる。

「翼。貴方は行って下さい。そして、多くの人達を助けてあげて下さい。それが、それだけが、あの人と私の願いです。……そして、私はこの施設と運命を共にする。これは、最初から決まっていたことなんです」

「いやだ……、いやだいやだ！ 要がいなくなつて、ナツメまでいなくなるなんて、独りぼっちだなんて、俺には耐えられない！！ そんな世界で生きていくなんて、絶対いやだ！！」

俺は……産まれてはじめて弱音を言った。わがママを言った。まるで親の言いつけを守らない子供のように、みっともなく首を激しく振る。

だが、ナツメはやはり首を振る。

「大丈夫ですよ、翼。貴方にはきっと見つかる。大切な人が。護るべき大事な人が。それを、見つけに行つて下さい。私達の代わりに」

「そんなのいやだ！ ナツメ！ お願いだから一緒に……」

「もう、無理ですよ。……だって、私の足は、《もう動かないんですから》」

「えっ！？」

「私は、翼を造り出すために造り出されたプロトタイプです。……活動限界は、もって五年だと、造り出されてすぐに聞かされました。ここ数日間であつという間に衰弱して……今の私は、指先を動かすことすら満足にできないんです。私は、もう十分生きました。……貴方を育てていた三年間、とつても楽しかった」

「……この前の食事の事を思い出せ。彼女らしくない、つまらないミスをして食器を割っていた。あれは、足がもつれたのではなく、思ったように足が動かなかったのではないか？」

それに、雑巾を取ってきた時のナツメはあんなにも息を切らせていた。急いだのではなく、単純に歩くだけの体力も残っていなかったのでは？

「そんな……」

俺は何も言えなかった。否、何も考えられなかった。そんな俺に喝を入れるように、ナツメははじめて見せる険しい顔を作る。

「貴方は、奇羅衣要博士のご遺志を無にするつもりですか!？」

「……………!」

「行きなさい。そして、生きなさい、『エナジードレイン』。それが、貴方の宿命。貴方にできること、貴方にしかできないことです。暫時、沈黙。施設は瓦解を続け、地響きはどんどん大きくなる。そして。

「……ナツメ。ありがとう。俺は、行くよ。ナツメのこと、絶対に忘れない」

断腸の思いで紡いだ俺の言葉に、しかと頷き、いつもの笑顔が浮かべた。

「それで、いいんですよ。頑張つて下さい、翼。これからも……。いつてらっしゃい。……私の、可愛い翼」

母性溢れるその笑顔を背に。

俺は、施設を産まれ育った我が家を後にした。

はじめて見る外の世界。密林に覆われ、鬱蒼と茂る木々や草花。

真円を描く満月が空に輝いている。

これが月。

これが空。

これが風。

これが大地。

これが……世界。

俺が……護るべきもの。

俺は走る。体力はとうに限界を超えていたが、それでも決して足を止めることなくひたすらに走る。一度足を止めてしまえば、背後から迫ってくる闇に呑み込まれてしまいそうだったから。過去という鎖に縛られて、身動きがとれなくなってしまうそうだったから。

だから、ただ走る。足を止めずに走り続ける。我武者羅遮二無二無我夢中、足がもつれようと絶対には転びはせず、足を前へ前へと伸ばす。

一際大きい地鳴りが生じる。

それは、断末魔のようでもあり、同時に産声のようでもあった。

森を駆け抜けること数時間、ようやく俺は樹海を抜ける。

そこに一人の男が立っていた。紺地のスーツにネクタイ、装飾のないコートを纏って眼鏡をかけた三十代半ばと思しき男性だ。

男は開口一番名乗った。

「UN事務所所長、真田真正だ」
さなだまさとた

男はそう言っただけで中指で眼鏡をくいと上げる。

「アウト・オブ・ナンバー『エナジードレイン』、奇羅衣翼だな？」

「、俺は……」

奇羅衣翼。

俺の名前。

でも、それを名乗り続けるのにはあまりにも重くて。要を手にかけた今、俺にその名を名乗る資格はなかった。

「……違う」

だから俺は、思わず否定の言葉を口にしていった。

そつと胸に手をやる。
指先に、ネックレスが触れる。
銀色の、十字架状のネックレス。
《あの人》の、形見。
美しい……七千本の糸。
そうだ、俺は糸になろう。
全てを縛る、糸に。

「《僕》は……綺羅衣きろえだ」

Episode 0 : J A B B E R W O C K 俺が僕になった日
nd

0・2・過去（後篇） 「僕は……綺羅衣翼だ」（後書き）

過去編後半、如何だったでしょうか？ 『綺羅衣翼』から『綺羅衣翼』へと、そして『俺』から『僕』へと至るきっかけ、そして次章でいよいよ明らかになる（なんだか最近こればかり言っています）、要の不器用すぎる深い愛情。本編に戻り、翼は『ヴァンパイア』にどう対抗するのか。お楽しみ下さい。

7・死闘「この、どうしようもない感情を」(前書き)

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・半角の() で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・全角の() で書かれている部分は主人公の情景補足
- ・《》で書かれている部分は傍点(強調)

7・死闘「この、どうしようもない感情を」

翼へ。

*

お前がこれを読んでいるということは、僕はもうこの世にいないのだらう。

こんなありきたりな書き出しになってしまったことを、まずは許してほしい。研究一筋で生きてきた僕は、自分の想いをどうすれば伝えられるか、そういったものがよく分からない（この辺りのことは、生前妻である棗にもよく指摘されていた）。ただ、ここに書かれていることは、僕の嘘偽りのない本心であるということは信じてくれ。

自分で言うのは卑怯だと思うが、僕は生来の口下手な男だ。だからきつと、お前に対しては何一つ気の利いた言葉をかけてやれなかったと思う。面と向かって言うのに抵抗があったというのもあるし、何より、僕はお前にとって憎んでも憎み切れない悪だったのだろうか。

少し話が逸れるが、故人の戯言ということ付き合っしてほしい。僕の妻、奇羅衣棗は、知っての通り『ジ・アース』による研究所破壊によって命を落とした。しかし、その時に失われた命は、棗だけのもものではなかった。

そう、棗のお腹の中には、僕と棗の子供が宿っていたのだ。出産までは、あとひと月ばかりだった。産声を上げることさえ許してやれなかった子だ。名前は決めてあった。『翼』。男の子なら『たすく』、女の子なら『つばさ』と名付けようと二人で決めた。皮肉にも、その命が棗の足を遅らせた。

だから、僕は棗と子供、二人の命を奪った『ジ・アース』がどうしても許せない。周囲からの厳しい非難の声も無視して、僕は真田ただなが正長博士と共に『アンチ・ナンバーズ計画』を発起した。『アンチ・

ナンバーズ』、などと言えば聞こえはいいが、結局のところは僕にとって『ジ・アース』を捕らえるための計画だった。真田博士にはUN事務所を委ね、僕は富士の樹海の地下で研究に勤しんだ。そう、全ては復讐のために。

だが、そうして産まれたお前は、何も復讐心の塊ではない。試験管の中で産まれたお前。徐々に大きくなっていくお前を日がな一日見続けていくのが僕のたった一つの楽しみだった。

正直に告白しよう。僕は一度だけお前に殺意を抱いたことがある。どうして、お前が産まれてきて、本来産まれてくるはずだった『翼』は産まれてこられなかったのか。ふつふつと湧いてくる負の感情に、お前のいる試験管へと繋がる生命維持装置のラインを止めてしまおうかと思った。

結局、未遂に終わった。お前と、本来産まれてくるはずだった『翼』。その二人を別人と考えることがどうしてもできなかつたからだ。

だから、お前は紛れもない僕の息子だ。血が繋がっていなくとも、歪な関係ではあっても、愛すべき、大切な、たった一人のかけがえない息子だ。

翼。僕はお前を愛している。

でも、僕はやはり口下手で、救いようのないくらい天邪鬼だ。だから、産まれてきたお前にどうしても優しい言葉をかけてやれなかつた。

本当なら、頭を撫でてやりたかつた。

震えるその身体を、そっと抱いてやりたかつた。

鍛錬に傷ついたお前に、よく頑張ったな、と労いの言葉をかけてやりたかつた。

お前が瞬間を編み出した瞬間など、それこそ飛び上がりそうになるくらいに嬉しかったものだ。

その感情は悉く裏目に出て、僕の口からは全て皮肉として変換されて発せられた。

翼。お前はさぞや僕を憎んでいるだろう。使命のためとはいえ、復讐のためとはいえ、僕はお前に数え切れないくらいの過酷を味わせてきた。それは、傍から見ているだけの僕には、お前の苦勞も苦惱も分らない。

だから僕は、お前が生きやすいように悪であり続けようと決めた。お前が潰れてしまわないように。そうすれば、お前は辛いこと、苦しいこと、悲しいこと、悪いことは全て僕のせいに行ける。自分一人で背負い込まなくて済む。そう考えたからだ。

お前に幸せあらば見守ろう。お前に憎しみあらば受け取ろう。お前に苦しみあらば支えよう。お前に門出あらば見送ろう。

どうだろうか？ 僕の考えは間違っていただろうか？ お前はこれを読んで、単なる苦し紛れの言い訳としか捉えることができないだろうか？

それでも、僕はお前に生きてほしかったのだ。生きて、僕と同じ感情を胸に抱いてほしかったのだ。愛しい、というどうしようもないこの感情を。

僕は結局『ジ・アース』を許せていない。だから彼を許す役目を、勝手ながらお前に託す。

繰り返すが、僕は口下手だから、最後の最期までこの言葉を言えないかもしれない。だからこうして、今この場で改めて言おう。

翼。お前は人を愛せ。使命ではなく、お前として生きる。『エナジードレイン』としてではなく、奇羅衣翼として。

翼。お前は人を愛するべく、愛されるべく、愛されて産まれてきたのだ。そのことだけを、どうしても伝えなかった。愛する息子よ。愚かな父からの歪んだ愛情を、どうか受け取ってくれるだろうか。

僕は、きつと今頃地獄で責め苦しに耐えていることだろう。僕が犯した罰は重い。それは甘んじて受け入れよう。

だが翼。お前は違う。罪の意識も、罰の重みも、今全てここに置いて、これから先前へ進め。お前はお前らしく、その名の示す通り自由に羽ばたいてくれ。いっそのこと、自分が思うままに生きても

いい。『ジ・アース』のことも、自分が『エナジードレイン』であるということも全て忘れて、普通の人間として生きてくれても構わない。使命にも復讐にも縛られず、自由に。それが僕の最期の願いだ。

同封したもう一枚の便箋は、できれば読まずに捨ててもらいたい。それが使われる日が訪れないことを切に願っている。

最後にもう一度だけ。

翼。僕はお前を愛している。

そして、お前も人を愛せ。

息子へ

親馬鹿な父・奇羅衣要より

*

(翼。お前は)

あの後によく言葉は、『人を助ける』だと、僕はずっと勘違いしていた。使命に殉じた彼らしく、最後まで僕を『エナジードレイン』としてしか見なかった彼らしく。

でも、違ったのだ。僕は愛されていた。僕は僕として、人として生きても良かったのだ。

人を愛しても……良かったのだ。

捨てる必要などない。手に入るものは全て手に入れる。許せるものは全て許す。救えるものは全て救う。それが僕の生き方だ。

《要》。

見ているだろうか？

僕は、紛れもない貴方の息子らしい。

ようやく僕は、貴方と同じ視点に立てた。

輝夜^{かくや}。

今からお前を助けるぞ。

『ヴォイド』内は、惨憺たる有様だった。廃墟と呼ぶにも生ぬるい。町全体は最早見る影もなく崩壊し、今や更地に瓦礫の山が投棄されているようにしか見えない。町全体がゴミ山と化しているのだ。そして、異常な量、そして異常な密度のセラに満ちている。それはさながら、巨大なセラの炉だった。

「綺羅衣先輩……」

ナンバー100『ヴォイド』、釈迦堂唯しゃかどうゆい。彼女の周りにだけ境界が張られ（轟とどろが『ヴァース』の力で張ったのだろう）、彼女は無傷で済んでいる。

「釈迦堂、ありがとう。……すぐ終わらせるから」

そう言っつて、僕は歩を進める。場所なら分かっている。この膨大な量のセラを垂れ流している発信地に向かえばいい。そこに彼女がいる。

「……ばか。遅いよ、綺羅衣」

瓦礫の山から声がした。

かと思えば、そこにショットが横たわっていた。否、倒れていた。見るからに満身創痍、最早息も絶え絶え、目を開いているのもやつとな様子で、僕を呼び止める。

「悪い」

僕は、短く返事をするだけだ。

「あの女。本当に化け物だよ。あたしの銃弾を喰らってもあつという間に再生する。ブレットを使う余裕もなかったよ」

「そうか」

「……だから、思いつきりぶん殴っても大丈夫だよ。目、しっかり覚まさせてやんな」

「分かった」

「ねえ、綺羅衣」

「ああ」

「……アンタにできること、見つかった？」

僕は、すうと息を吸い込んで。

「ああ！」

力の限り、万感の想いを籠めて応と頷いた。
シヨットはその返事に満足したようで。

「そっか……。なら……。頑、張ん……。な」

そう言っつて、静かに意識を失った。息はある。気絶してしまったのだ。

「釈迦堂！ シヨットはもういい！ ここから出してやってくれ！」
「は、はいっ」

そう釈迦堂が返事をする、何事か呟き、次の瞬間シヨットの姿は消えていた。

舞台は整った。役者は既に上がっている。

僕と。

僕に相對する形で君臨する、輝夜緋姫ひめの二人だけの舞台。

垂れ流されるセラの波に揺蕩うように波打つ長い緋色の髪。まるで神話のメドウーサのようだ。白いブラウスと濃紺のフレアスカートはそこかしこが破け、単なる襠褌ほつ切れを身体に巻いているようにしか見えない。

そして、その顔は、僕の知っているどの輝夜のものでもなかった。正確には、輝夜の顔ではなかった。

より厳密に言うなら、《顔がなかった》。

まるでその部分だけ光が射していないように暗く、黒く、完全なる闇に染まっている。鼻も口もなく、あるのは。

赤く妖しく光る二つの。

目。

まさしく、伝説の魔物、怪異の王、吸血鬼そのものだった。

「……お前はひどい奴だよ、輝夜」

僕は話しかけた。勿論、言葉による説得が可能だなどと呑気なことを考えているわけではない。

「お前はひどい奴だ。養父母を殺し、町を壊し、音葉おしはを裏切り、シ

ヨットを傷付けて。本当に、ひどい女だよ、お前は。……だから、僕は、お前を許さない」

そう。綺羅衣翼は、輝夜緋姫を許さない。

「絶対に許さない。その代わり、罰も与えない。傷も与えない。だから……お前は耐える。今抱えている傷に耐え、耐え続けて生きてゆけ。それが、僕がお前に与える宿命だ」

僕はルシフェラーゼを解除する。

「この糸は、お前を傷付けない。縛りもしない。だから、お前は前として痛みを耐え続けて生きる」

ルシフェラーゼで、自分の全身を覆う。それは薄い膜のようになり、さながら鉄甲冑の如く僕を鎧う。

僕は宣言する。

「ナンバー？『ヴァンパイア』。僕は貴様を……消去しない。助ける」

輝夜は返事をする代わりに、足を少し浮かせ
威嚇するように、それを振り下ろした。瞬間

ばん！！

音が《二つ》、鳴った。

一つは勿論、振り下ろした足が大地を踏む音。

もう一つは、その振り下ろした足が《音速を突破した衝撃》で生じた音。

純粋な肉弾戦に於いてさえ、僕は今の輝夜緋姫には劣っているのだ。

だから僕は、想いの強さで『ヴァンパイア』を打倒する！

僕がするのは、『ヴァンパイア』を殺すことではない。ナンバー？『ヴァンパイア』ではなく、《輝夜緋姫としての人間性》を表に引きずり出す。無理矢理だろうが無茶苦茶だろうが、瀬戸際だろうが往生際だろうが、やってみせる！

それこそが、きつと僕にできること。僕にしかできないこと。

「ぶっ！」

先手必勝、僕はいきなり拳を突き出し瞬拳しゅんけんを行う。瞬転の縮尺版、見えない拳が輝夜を襲う。

だが、輝夜はなんとこれを呆気なく《回避》してみせた。そして、気が付けば僕の目の前で迫っていた。何の魔術的能力もなしに、である。ずば抜けた動体視力を持つ僕でさえ捉えきれない超高速。ここまで来るとギャグとしか思えない、それほどまでの人外魔境としかいいようがない身体能力だった。

反撃といわんばかりに、輝夜は拳撃を繰り出す。音速突破 所謂『音の壁』を越えた時に発生する振動バフエッティングによる巨大音を立てて僕を襲撃する。

条件反射とは恐ろしいもので、“異能殺し”として徹底的に鍛え抜かれた僕は、咄嗟に顔面に向けて放たれたその直撃を首を反らせて躲していた。しかし、バフエッティングによる空を裂く衝撃は躲しようがなくて。

《放たれた拳圧だけで》、僕の顎関節が粉碎された。

音葉から委ねられた『リジエネライト』の能力のおかげですぐ回復するはずだが、それでもルシフェラーゼの防護を越えての一撃に僕は驚々愕々する。音にならぬ声を上げ、吹っ飛ぶ。ついでにその吹っ飛ぶ衝撃だけで、脛骨も一緒になってイカれた。危うく首が干切れそうになった。頸動脈が断裂を起こし、致命傷級の出血を起こす。

しかし輝夜はそんな僕の様子を露知らず、更に身体を回転させて回り蹴りを繰り出す。さっきのダメージから回復すらしていない状態の僕は、それを甘んじて受けるしかない。右脇腹にヒットするとまるで体内に仕込んでおいた爆弾が作動したかのように十二本の肋骨全てが粉碎骨折を起こし、破片が肺に刺さり、肺胞は全滅するという大惨事だった。これが逆側だったら、心臓をも破壊されていたかもしれない。心臓は『リジエネライト』では再生しないと聞いている。そう考えるとまさしく不幸中の幸いである。ルシフェラーゼ

で防御壁を造ってさえこれなのだ、不用意に向かつていったら胴体を両断されて即死に違いない。

瞬拳発動からここまでで、ようやく一瞬、時間にすれば僅かにコソマ三秒。こんな相手を前に、よくもまあシヨットは善戦したものだ。

とにかく、顎、首、肺をほぼ一瞬のうちに破壊された僕は惨めにも瓦礫の山に突っ込んでようやく静止する。早くも全身血みどろである。その状態でおよそ二秒、折れた骨が繋がりがけていたその間にも、輝夜は容赦なく迫ってくる。僕に迫り更なる追撃を放とうと拳を握り締め、今にもそれが射出されそうな勢いだ。

(許せよ！)

顎が破壊されているので声が出せない 出せたところで無意味だろうが 心の中で謝罪すると同時に、僕はカウンターを狙う。

背中に踏み切るための瓦礫の壁があつたから良かった、僕は辛うじて無傷の足で肉薄した輝夜を思いつき蹴飛ばした。純粹な脚力のみで、だ。手刀ならぬ足刀 否、足刀ならぬ足斧とでも呼ぶべきか 鍛え上げられた脚の筋力にプラス輝夜が接近した高速のスピードが威力を上乗せする、僕の蹴りは鎌鼬のように輝夜の右腕を両断。加えて腹部を抉り取る。

さしもの吸血鬼性を以てしても、それほどのダメージが通用しないわけがない。隻腕となつた輝夜はその場で踏鞴を踏み、隙ができる。いくら瀕死の状態とはいえ、そんな隙を見逃すほど、僕は間抜けじゃない。

残る右足で腹部に前蹴りを放つ。これはダメージを期待してのものではない。後方に吹き飛ばすことで、骨の完治を待つ時間を稼ぐためだ。

思惑通り、まるでスパイダーマンの糸か何かで突然引っ張られたかのようにぐんぐんと吹き飛ぶ輝夜。そのまま僕同様、鉄屑の山にガラガラと激しい音を立てて埋没する。

戦闘開始からここまで、通算で六秒弱。一進一退、まさに一挙手

一投足が明暗を分ける大接戦だった。

「ぐえっ、げはっ……！」

やっと首の骨が繋がった。肺も少しずつ治癒していき、体内に残っていた不純物を吐き出す。吐き出した吐瀉物の中にはとても映像でお見せできないものが混じっていた。顎も治り、なんとか声帯も元に戻る。再生した直後の第一声が見苦しく聞き苦しいものになっ
てしまったのは、勘弁してもらいたいものだ。

……凄まじいな、『リジエネリート』。実は音葉はとんでもない潜在能力の持ち主だったようだ。

瓦礫に埋まった輝夜はというと、一気にセラを放出し、ただでさえ屑々だった自分の周りにあつた瓦礫を更に粉微塵に分解させて巻き上げる。まるで雪崩のような量のセラに、僕は思わず目が眩んだ。再び姿を見せた輝夜は五体満足だった。さっき切断した腕も元に戻っている。こっちは“再生”だが、あっちは吸血鬼としての“不
死性”。どんなダメージを喰らったところで、今の輝夜緋姫は《絶
対に死なない》のだ。

『ヴァンパイア』としての能力。

強いでもない。最強でも尚弱い。

速いでもない。最速でも尚遅い。

あれは、ただ単に《あらゆる理論と法則を覆す》だけ。因果律・万有引力・質量保存・相対性理論。それらが一切『ヴァンパイア』には通用しない。昔の科学者や哲学者達を例外なく敵に回している、あらゆる理を突破する超越者であり、霸王。

改めて痛感する。とんだ化け物と果たし合っているようだ、僕は
(まったく……。とんだ猟奇的な彼女を持ってしまったもんだ)

そして、次の瞬間には輝夜は地を蹴っていた。大きく跳躍し、僕までの距離百メートルを一瞬でゼロに還した。それが神速でなくてなんだというのか。そしてそのまま、脳天唐竹割よろしく手刀を放つ。

それでもこの距離でなら、十分に回避できる。僕はサイドステッ

プでそれを躲す。刹那の一閃、輝夜の手刀は超音波すら放って《飛ぶ》。圧縮された高圧のセラが大地を断裂させ、その破壊の爪痕は底が見えないほどに深い。

着地と同時に、次いで波状攻撃に移行する輝夜。今度の攻撃は、あるうことが手足ですらない。メドウーサのように波打っていた髪の毛を辮髪のように束ね、何十本にもして四方八方から襲撃する。あるものは太く鞭のように、あるものは細く針のように、またあるものは薄く刃のように。ルシフェラーゼも真つ青だ。本当に、吸血鬼ってのはなんでもアリだな……。

逃げ道を失った僕は、纏ったルシフェラーゼにセラを送り込み、防御力を高める。鎌首をもたげて襲い掛かる辮髪を悉く弾き返す。ルシフェラーゼで全身を鎧って防御を固めた今の僕にとって、それは大した攻撃力ではない。

弾き返すことには成功した。だが、弾き返すことには成功しても、全体的には失敗だ。決して《やった》のではない、むしろ《やってしまった》のだ。

しまった、と思った時には遅かった。

十のマイナス二十四乗、涅槃ねはんやくじょう寂静にすら満たない間に輝夜の足は既に蹴られ、僕の懐に入り込んでいる。今の攻撃は、ダメージを被つても回避を選択するのがベストだったのだ。どうせ今の僕は『リジエネレイト』の能力で回復する。

至近に入り込んだ輝夜が、寸勁すんけいにも似た掌底で僕の腹を打撲する。ただし、力もあれば勁もあるという反則技だ。今の僕はルシフェラーゼという外骨格を持っているカブト虫のようなもので、外がいくら硬くとも衝撃が内部を貫けば内臓は当然、ただでは済まない。事ここに至って、筋肉や鎧などは意味を成さない。言うなれば防御力無視の会心の一撃だった。

「ぶつ」

一撃では飽き足らず、それを二度三度四度と繰り返す輝夜。高橋名人もびつくりの連打にこれでもかというくらいに嗜血する。人体

の血液量は体重のおよそ七〜八%と言われているが、そうだとしたら僕の体重は今三百キロくらいないと辻褄が合わない。メインの造血器官である腸骨が一気に破裂し、再生する側から破壊されていくのだから、さもありませんと言おうと思えば言える。それくらいに非常識な事態だった。『リジエネライト』がなければ、この一撃ことで三回ずつは死んでいる。

輝夜が僕の血を浴び、赤く染まる。その血雨の向こう、更にストリートパンチを繰り出さんと拳を構えるのが視認できた。

僕はそれを防ぐことも躲すこともままならない。僕の腕に狙いを定め、ぼん！ という音を立てたバフエツティングと共に放たれた拳で。

僕の右腕が、ルシフェラーゼの鎧を突破して《もげた》。

「あ、がああああああ！！！」

筆舌に尽くし難い激痛。否、激痛と呼ぶことすら生ぬるい。痛みという概念すら越えたそれをなんと呼称すればいいものか。喪失感。それが一番しつくりくるだろうか。本来あるべきものが唐突に失われたことで襲ってくる不安と寂寥感。全身の血液は口からこぼれているにもかかわらずの、大量出血が起こっている、《はず》。そんなことを確認する余裕も、また、ない。

鉄壁の鎧を砕けないまでも、衝撃だけはその鎧を貫き、僕の腕はルシフェラーゼの膜の中で分断された形になっている。装甲は貫通ではなく無視。これも『リジエネライト』で回復するのだろうか……。音葉、確かにこれはとんでもなく痛いよ……。

とにもかくにも、僕がそんな喪失感に苛まれているのを構いなしに、輝夜は再び拳を握る。それを以て僕の顎を突き上げようとする。

(まず)

今の状態で顎を狙い打ちされたら、頭部がまるまる吹っ飛ぶ。ルシフェラーゼの護りなどあつてないようなものだ。『リジエネライト』の能力にとって脳は致命的な弱点。当たれば即死は免れないだ

ろう。

しかし、体勢を立て直すには色々なものが足りな過ぎた。時間と余裕と、思考力。身体中の血液が口から溢れ出したのだ、脳に供給されるべき血も一緒にこぼれてしまった。最早逃れようのない必殺が、すぐ眼前に迫っている。

そして、その“必殺”の拳撃は。

どこからか飛来した、幾重もの銃幕に遮断された。

「！？」

僕は目を見開く。“それ”は本当に一瞬の出来事。僕の顎を狙い過たず打ち抜かれた輝夜のアッパーは、どこからか発射された銃弾によって弾かれたのだ。一発ではない。《全くの等間隔で、全くの同じ箇所、十発の銃弾が命中した》のである。銃痕で大きく穴が開く輝夜の腕。

銃幕は止むことがない。どころか、拳を弾かれた輝夜が後退しても、まるで誘導路でもあるかのように、銃弾が《曲がった》のだ。つまり、その銃幕は輝夜の拳のみにしか命中していないということだ。

（ どういうことだ ！？ ）

輝夜が退いたおかげで、辛くも延命に成功した僕だが、目の前で繰り広げられる光景に思考回路が追いつかない。とりあえず血液は即座に生成されて全身に行き渡り、痛みは残っているものの、腸骨と右腕も再生を開始し出したのは間違いないが……。

と。

『……く、……すく。き……か、た……』

どこか 僕のすぐ周囲から、ノイズ混じりのくぐもった何かが聴こえる。

（なんだ……？）

『……すく。ひ、りポ……ット』

左ポケット？

辛うじて聴き取れた（合っているかどうかは怪しい）のは、左ポ

ケットという単語。咄嗟にスラックスのポケットに手を突っ込む。指先に何かが触れた。

取り出す。

『翼、翼。ふむ、その様子だとまだラインは生きていようだな。安心した。私だ。真田真正だ』

「所長!？」

いつの間に仕込んだのか。

さつき肩を叩いた、あの時か　！

超小型のイヤマイクが入っていた。こちらの声は届かないが、発信源からの声は届く一方通行型だ。

そして、聴こえたのは紛れもなく所長の声。されど姿は見えない。当然だ。所長が『ヴォイド』の中に這入れるはずがない。

だが、どうして通信は流れている？ 『ヴォイド』は完全に鎖とされた密閉空間。通常の次元からの通信などできるはずが……。

『右方十時方向七百メートル』

訝しがりながらも言われた方向を見る。そこには　。

(ブローニングM2!?)

半壊したビル　　そういえば、あそこはUN事務所のビルだ

の屋上。そこには巨大なマシンガンが横たわっていた。総重量およそ四十キロ、銃身一メートルを超える巨大なそれは、ブローニングM2重機関銃。第二次世界大戦で開発されて以来、現在でもトータル面で他の機種を凌駕する性能を誇る著名なマシンガン。愛称として『メドゥーサ』や『ビッグママ』とも呼ばれている。そんなものは問題ではない。問題なのは、その横に存在する人物。

ブローニングM2の横に座してこちらを見ているのは、UN事務所長真田真正その人。何度も言うが自慢に聞こえてしまうかもしれないが、僕の視力は人間のそれと比べて圧倒的に上回っている。たとえば七百メートルだろうが一キロだろうが、その姿を　　残暑もあるというのにきつちりとした紺地のスーツにネクタイ、眼鏡をかけた、クールビズとはおよそ程遠いその特徴的な姿を見間違えるこ

となどあるはずがなかった。常の涼しげな雰囲気を醸し出しつつ、確かに小型のトランシーバー片手にブローニングM2の隣に鎮座ましましてやがる。

どうして、《所長が『ヴオイド』の中にいる》？

『やれやれ、思った通りに苦戦しているようだな。思った以上、と言つべきか？ とにかくUN事務所所長真田真正。これよりアウト・オブ・ナンバー』『エナジードレイン』『綺羅衣翼の全面援護に回る』『いや、そんなことより！ どうしてアンタが『ヴオイド』の中にいるんだよ！？』

『すまんが翼。お前の声は私にまでは届かないのだ。だが、言いたいことは分かる。どうして私がこの密閉空間の内部にいるのか訝しんでいるのだろう？』

所長は僕の動揺などどこ吹く風。全て想定範囲内の様子で、何をか言わんやと告げる。

『言つただろう。私が全力を以てお前をサポートすると。私の
ナンバー？』『ロックオン』の全力を以てしてな。

「！？」

啞然とする僕を尻目に、それだけ言つて、イヤマイクはぶつりと音源が切れる。それを待っていたかのように、銃弾の雨が輝夜目掛けて降り注ぐ。

狙いは彼女の眉間のみ集中している。輝夜がどう逃げようが、『ロックオン』の手から放たれた魔弾は初速853m/sを維持しつつ執念深く輝夜を狙い続ける。ただでさえ、一分間に最大で六百発もの発射速度。《発射されるより前に命中する場所が確定している以上》、逃げれば逃げるほど泥沼化していくのは自明と言えた。防御すら無意味。弾こうが弾こうが、銃弾は軌道を変え、決して狙い過つことなくただ一ヶ所 輝夜の眉間のみを捉える。『狙い撃つ』。ナンバー？の能力とはそういうものなのだと、僕はとりあえず理解しておくことにした。

ただ、所長がナンバーズである、という一点のみ想定外だった。

この点に関しては後で納得のいく回答を求めねば。

銃火は弱まることを知らない。一帯百十発のベルト給弾が何束もくくりつけられているのだ。一分間で六帯近く消耗する激しい銃弾の雨。いよいよ回避し切れなくなった輝夜の額に12.7mm弾（おそらくは徹甲弾だ）が次々に命中して、輝夜の顔でなく顔がない顔面は抉られ風穴が空き、原型を失った。もともと、それすら一瞬のうちに元に戻るのだが。『リジエネレート』では十秒前後かかる再生を、『ヴァンパイア』は一瞬でやってのける。さもあるう。『リジエネレート』と『ヴァンパイア』は、そもそもその分野が違っただけだから。

僕は、もういい、という意味合いを籠めて所長に掌を向ける。それと同時にぴたりとやむ銃幕。

僕の窮地を救ってくれたとはいえ、輝夜を傷付けるのはいくら所長でも許さない。輝夜緋姫を傷付けて良いのは三千世界に綺羅衣翼ただ一人であり、その特権を譲るつもりは毛頭ない。それにどちらにせよ、いくら眉間に銃弾を受けようが輝夜は死なない。精々時間を止めるのが関の山だ。

僕は、ある賭けに臨もうとしていた。さっき小型イヤマイクを取り出すときに突っ込んだ左ポケット。そこに入っていることを思い出した《それ》に賭けてみようと思ったのだ。

ナンバー？が、まだ本当に《輝夜緋姫を残しているのなら》、この賭けは絶対に負けることはない。

「輝夜！」

銃弾に追われていた輝夜の意識がこちらを向く。それに応じて銃弾の雨が輝夜の眉間に命中するのだが、今はそこにセラを集中させて防御力を高めているらしい。『狙い撃つ』以外に何の魔力補正もかかっていない弾丸は、眉間に命中すると頭を少しのけ反らせるだけで粉々になってしまう。対戦車用の徹甲弾ですらそれなのだ、あらゆる現代科学は『ヴァンパイア』の前には全くの無力といえた。

僕は、ポケットに左手を突っ込んだまま言い放つ。

「……来いよ」

それに応えたのかどうかは今の状態からは分かりかねるが、一足で僕目掛けて飛び掛かってくる輝夜。勢いそのままに鋭い爪を振り下ろす。まるで空間そのものを六分割するかのような、茫然たる破壊力を伴った一撃だった。あるいはそれなら、神通無比を誇るルシフェラーゼすら引き裂けるかもしれない。そんなことをふと思つた。僕は太博打に打つて出る。文字通り命懸けの大博打。外せば即死ぬ。ポケットから取り出したある物を、頭の上にかかげる。たったそれだけの行為。

たったそれだけの行為で。輝夜の猛攻はぴたりと止まった。

僕はほうと安堵する。自分の命が助かったことに対して、ではない。輝夜がまだ輝夜としての意識を保っていたことに対して、だ。

「……やっぱりお前は輝夜だよ。賭けは僕の勝ちだ」

まったく、笑ってしまう。こんなちっぽけな物でも、何かの役に立つだなんてな。

それは、何も起こるはずのない、一枚の単なる紙切れ。

《今日のデートで一緒に行く予定だった、コンサートのチケットだった》。

「お前に、切り裂けや……しないよなあ？」

ふるふると震える輝夜の手。行き場を失くした爪は拳へ形を変え、僕のボディを横払いに殴打する。

「ごっつー！」

さつきから、腹ばかり殴られている。まったく、この女は本当に加減を知らない。遙か右後方に何十メートルも吹き飛ばされる。

だが、先刻よりも威力が落ちているのも、また事実。

「まったく……、このツンデレめ……。本当、いつになったらデレるのやら……」

弾き飛ばされた僕は、血を吐き出しつつも、口の端を歪めてぼやく。嬉しくてしょうがない。輝夜は今、狭間で揺らいでいる。まだ人間性を保っていてくれたのだ。決着をつけるとしたら、今以上の好機を置いて他にない。

僕は一気に畳み掛ける。

「でも僕は信じてるぞ」

「できれば、信じて。私がどうしようもなく綺羅衣君のことが好きだということを。たとえ私が私でなくなつたとしても、絶対に私は綺羅衣君が好きだから」

いつかの言葉。

「《天地が覆ろうが覆らない事実》、なんだろ？」

輝夜が、完全に硬直する。『ヴァンパイア』ではなく、輝夜緋姫としての本性が表に出つつあるのだ。

それこそ、唯一にして最大の勝機。

「お前の『好き』はこんなことで揺らぐちつぽけなもんだつたのか？ お前の本気はそんな生半可なもんだつたのか？ あの日、僕に告白した時の気持ちは、そんなに軟弱なもんだつたのかよ？」

音葉も怒つてたぞ。お前、音葉との約束破つたもんな。『二度と辛いことを一人で抱え込まない』って指きりまでしたのにさ。音葉がな、禁則事項を破つたんだ。あの音葉がだぞ？ お前はそれだけ想われているんだよ。それなのに、お前は裏切つたままで一方的に終わらせるつもりなのか？

シヨットもな。僕を叱咤してくれたよ。あんなに小さい身体で僕を殴つて。お前があんなにボロボロにさせたシヨットはな、きつと僕にできることがあるって僕を信じてくれたんだ。それを考える時間を稼いでくれたから、僕はこうしてここにいるんだ。

轟と釈迦堂だつて助けてくれてる。実際の世界でこんなに町を壊されちゃたまつたもんじゃないからな。本当に感謝してるよ。今度改めて礼を言いに行くからな、その時はお前も一緒だ。

所長だつて、ああして援護してくれた。所長がナンバーズだつてことは僕にも隠していたけれど、それすら惜しまず僕とお前のためを力を使ってくれている。……お前は、こんなに多くの人に助けられているんだ。

まだまだ言うぞ、耐えろよ。僕はお前を許さない。理性をなくし

てのうのうと生きていくことも許さないし、こんなところで野垂れ死ぬことさえ許してやるもんか。そうだよ。僕はお前を許さないし、諦めない。捨てないし、失くさない。だからお前は一生痛みを抱えて生きていくんだ。簡単な死に逃げることなんて絶対に許さない。あがいて。叫んで。苦しんで。それでも耐える。お前は独りじゃない。僕が側で支えてやる。いつまでだって、お前が生涯を終えるその時まで、お前のすぐ隣で支え続けてやる。童話のかぐや姫みたいに月に逃がしたりはしない。ここにいる竹取の翁はな、そんなに諦めのいい男じゃないんだよ。お前はこの地上で、ずっと僕に許されないまま、諦められないまま、支えられたまま生きてゆけ。

もう一度だけ言うぞ輝夜緋姫。よく聴け。綺羅衣翼がこれからとびつきり惚れ直す台詞を言っただけよ。」

そう前置きをして僕は息を吸い込む。そして。

「お前は人間だ。僕は人間の味方だ。だから僕はお前の味方だ。天地が覆ろうがこの事実を覆らない。」

だから、お前が人間を捨てるというのなら、僕はお前の敵だ。

……《でも》」

敵とか味方とか。

打算とか見返りとか。

そういった下らないもの、一切合切抜きにして。

「僕はお前のことが……どうしようもなく好きだ」

僕は不敵に笑って言い放った。

異形が、沈黙する。

二つの瞳だけが光を放ち続ける、その中で。

赤い、雫が流れ出ていた。

それは、涙。

文字通りの、滂沱と流す輝夜の血の涙だった。

輝夜が叫んでいる。

(き)

(ら)

(え)

(くん)

僕を呼ぶ、輝夜の魂の慟哭。必死で救いの手を求めている。

ああ、届いてるとも輝夜。お前の魂の声は、僕まではずきりとな！
だから、助ける！

僕は、最後の最後にとっておいたド根性と切り札ジョーカーを使って輝夜の
間合いに入り込む　！

「瞬転！！」

そうして輝夜の首に手をかけ押し倒し、『エナジードレイン』を
最大まで励起させる。流れ込んでくる、怒濤のようなセラ。かつて
ないほどのフィードバックに腕の腱が、ぶちぶちぶち、と音を立て
て断裂を起こす。

輝夜のナンバーズとしての能力のみを消す。

可能だとは思わない。

されど不可能のはずがない。

何故ならこの身は“異能殺し”。《異能を殺すことのみの特
化した、例外なしという例外》　！

ならば、これは賭けだ。

輝夜緋姫の、ナンバーズとしての“吸血鬼性”が勝つか。

輝夜緋姫の、人間としての“人間性”が勝つか。

どちらが勝るか、確信はまるでない。ナンバーズとしての“吸血
鬼性”が勝てば、輝夜の存在そのものが消え去る。まさに一か八か、
一か零かの賭け。一世一代の大博打。

でも僕は信じてる。

だって、お前は僕の　！

「僕の、女だからな!!」
その瞬間。

鎖された世界に、津波のようなセラが飽和する。

。

*

曙光が眩しい。

僕は相楽森学園校舎の屋上から、遠く地平線の彼方から顔を出す太陽を眺めていた。

膝の上には、輝夜が横たわっている。目を閉じて、夢も見えていないように昏々と眠り続ける輝夜。

……それでも、呼吸はしている。静かに、定期的なリズムを刻んで上下する胸。

そして温かい。

ああ、生きているのだ。

何度目か、もう数え切れないほどの安堵で、僕の心はいっぱいっぱいになる。

傍らには、日傘が寝かせてある。輝夜に直接日差しを浴びさせないために、と音葉が持ってきてくれたものだ。

「……ん」

輝夜が身じろぎを一つする。うっすらと開かれる瞼。長い睫毛が揺れて、それだけで僕は胸がときめく。

いつからだろう。こんなにも、輝夜緋姫に心惹かれるようになっていたのは。

眠り姫のお目覚めだ。

「……よう、輝夜」

「……綺羅衣、君」

まだ視界と意識がはっきりしないのか、それでも輝夜緋姫が、輝

夜緋姫の声で、輝夜緋姫として僕を認識する。

僕を呼ぶ、輝夜の妙たえなる声。

不意に、彼女が呟く。この女はいつだって突然だ。

「……名前」

「え？」

「……ずるいわ」

輝夜は無表情のまま、今の彼女にできる精一杯で僕を非難する。

「みのりかわ実川さんやシヨットさんは名前で呼んでいるのに、どうして私はいつまで経っても『輝夜』なの？」

「……」

「貴方がそんなだから、私もいつまで経っても貴方のことを『翼』
って呼べないのよ」

「……」

「嫌いよ。……大嫌い」

どこまでいっても素直になれないコイツが、今では理屈もなく、理由もなく。どうしようもなく愛おしい。

要。見ているだろうか。僕は今、貴方と同じ感情を胸に抱い

ているよ。この、どうしようもない感情を。

「なあ、緋姫」

「……なによ、翼」

「僕は好きだぞ」

「……そう。……本当は、私も好き」

「なあ」

「なに？」

「キス、していいか？」

「どこに？」

「唇」

「私に拒否権は？」

「ない」

「そう……。なら、仕方ないわね」

そう言っ、何の躊躇もなく、僕を信じ切っ、目を閉じる緋姫。
そして。

はじめて想いを通わせ合っ、その日のうちに。

はじめての、キスを交わした。

今度こそ 唇と唇で。深く。

緋姫の瞳から、涙の粒が流れこぼれる。頬を伝っ、僕のズボン
に垂れた。

しばしのキス。どちらからともなく離れ。

「緋姫。大好きだよ」

僕は満面に笑っ、言い放っ。

Episode 7 : LOVE - end

7・死闘「この、どうしようもない感情を」（後書き）

輝夜緋姫編、完結です。仲間も一人増え、個人的にずっと書きたかった場面なので、無事に終えることができ良かったです。次章は二章分まとめて長編の幕間劇になります。尚、綺羅衣パーティーはこれで全員集合の予定です。あと出てくるのは敵ばかりという殺伐とした小説になってしまうのですが、どうか皆様、長らくご愛顧を願います。

8 ・番外その式「全うしてみせるとも」（前書き）

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・半角の（ ） で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・全角の（ ） で書かれている部分は主人公の情景補足
- ・《 》 で書かれている部分は傍点（強調）

8・番外その貳「全うしてみせるとも」

＊

事の終幕は九月二十三日日曜日　いや、終幕と呼ぶにはまだいささか気が早すぎるかもしれないが、とりあえずまあ世界的な平和を取り戻したということの意味するのであれば暫定的にそう呼称することにしよう　僕こと綺羅衣翼が恋人である輝夜緋姫のことを『緋姫』と名前で呼ぶようになり、緋姫もまた僕のことを『綺羅衣君』から『翼』と呼び方を変えたことでひとまずの幕を下ろした。名字に君付けから、一気に名前で呼び捨てというまさしく二階級特進である。……野暮な話になるが、唇と唇でのキスを済ませたことも一応終幕の一部分を担っていると言えるだろう。

まあ何はともあれ、輝夜……じゃない、緋姫（呼び方にまだ慣れない）の暴走は僕の『エナジードレイン』を以てひとまず鎮まった。……結論だけ簡潔に述べると、緋姫は、ナンバー？『ヴァンパイア』としての吸血鬼性を完全に失くしたわけではない。緋姫の吸血鬼性はやはり存在性の根底に渦を巻いているので、どんな一か八かの賭けに勝ったとしても、一か零かの賭けには勝てなかった。どちらか片方だけを都合良く消すことはできなかったということである。結果として緋姫はナンバー？『ヴァンパイア』の異能、吸血衝動や日光に対する弱みを完全には失うことがなく、これからも緋姫に血を与えていかなければならない使命はまだ僕が背負っているというわけだ。

現在、僕はUN事務所地下に存在する検査室の前で待っている。今回の暴走事件で、さしもの所長も放任はできなくなったようで、定期的にサーチャーで緋姫のセラの安定具合を診断する義務が発生したのだ。というわけで、今日は早速第一回目となる診断の最中なのである。

「翼。お待ちせ」

検査室の前から出てくる緋姫。緋色の髪を無造作に垂れ下げ、相変わらぬいつもの飄々とした表情をしている。服は、ズタボロになったブラウスとフレアスカートは捨て、僕が家から持ってきたワイシャツとジャージを着せている。女子にしては長身の緋姫だが、流石に僕の服は合わないのでかなりダボダボしている。

恋人に自分の服を着させる。

なんていうか……あれだ。

ロマンだ。

男の。

僕、グッジョブ。

「いや、別に待ってないよ。こっちもかなり検査に追われてたからな」

ナンバー24『リジエネライト』こと実川音葉みのりかわおとほから委託された再生能力の賜物で、あれだけ緋姫にポッコポコにされた僕は、身体的負傷はなかった（もし『リジエネライト』がなければ軽く百回は死んでいる）ものの、『リジエネライト』発動および全身全霊を懸けた『エナジードレイン』のせいで急激にセラを消耗し、ほぼ枯渇状態になっていた。そのため、僕も念のため検査を受けていたというわけだ。おかげで現時刻は深夜。つまり今日のデートはお流れ、結局今年も緋姫は、養父が参加していた和太鼓のコンサートを見に行くことはできなかったのが残念と言えば残念だ。

とはいえ、来年も再来年もあるのだ、僕にも。そして緋姫にも。

その事実を確認する度に、僕は顔がにやけるのが止まらない。

「なに翼。にやにやして。気持ち悪いわ」

「この章、第二声にして自分の彼氏を気持ち悪い呼ばわりかよ……。お前、本当に僕のこと好きなのか？」

「当たり前じゃない。大好きよ」

「そうかよ……。僕も大好きだよ」

「嬉しいわ」

「同じく」

以前とほとんど変わらない　でもちよつとだけ　あるいは大分　変わった二人の関係。変わったのはなにも、呼び方だけではないということだ。

「さて……行こうか」

「ええ」

僕と緋姫は自然と手を繋ぐ。大学病院のようになっている事務所地下を歩いて、まずはある場所に向かう。

今回の事件で起きた二次災害　軋轢が生じかかっている人間関係を、きっちり清算するために。

まるは一人目　UN事務所地下に入院（厳密には病院ではないが、さておく）している、シヨット・G・スカイハイの見舞いだ。

*

「綺羅衣。アンタ、女難の相でもあるんじゃないの？」

開口一番、シヨットはそう言った。

時刻は日付を跨いで二十四日の深夜の一時。にもかかわらず、シヨットはまだ起きていた。

というか、ついさつきまで眠っていて、起きたばかりらしい。暴走した緋姫を相手に単身かなりの時間を稼いだ彼女は、相応で相応な重傷を負っていた。頭や腕中包帯だらけ、左腕は三角巾で吊るし、点滴（おそらくは普通の栄養剤ではあるまい）を刺されてベッドで半身を起こしている。

病室は本物の病室のようで、白い壁に白いベッド。ここは一人部屋だが、仕切りのレールカーテンもしっかりある。僕と緋姫は傍らに積んであったパイプ椅子に座っている。

「お前がそれを言うか？」

僕に惚れてたくせに……。

「……………」

あ。赤くなつた。

本当に自ら墓穴を掘るヤツだ。

相変わらず残念なヤツめ。

「シヨットさん、でいいんですよね」

と、緋姫が緊張な面持ちで話しかけた。初対面だからか、自分が重傷を負わせてしまった憂き目からか　おそろくどっちもが正解だろう　丁寧語だ。

「この度は…… 本当にすみませんでした」

パイプ椅子から立ち上がって、深々と頭を下げた。彼女がこんなにも真摯に頭を下げるのは、僕が知る限り三人目で三度目。僕と、音葉と、シヨットだけだ。

そして、こういう時の緋姫は、絶対に自分から頭を上げない。

「……輝夜緋姫、って言ったっけ。アンタ」

「はい」

頭を下げたまま、シヨットの言葉に応じる緋姫。

シヨットはその問いかけをしたまま黙りこくった。緋姫はまだ頭を上げない。僕はひとまずは状況を静観するしかできない。

しばしの間、そのまま膠着状態になる。やがてシヨットは呆れたかのように。諦めたかのように。

「……はあー」

と、細長い息を吐き出した。

「とりあえず、頭上げなよ。あたしがいじめてるみたいじゃん」

「いじめたのは、私の方です」

「そういう揚げ足取りは、この際アンタのためにならないよ」

「私のことは構いません。シヨットさんの気が済むようにして下さい」

「そ。なら命令。まずは頭を上げな」

言われるがままに、ゆっくりと顔を上げる。

「座りな」

これまた言われるがままに着席する緋姫。

「とりあえず輝夜、って呼んでおこうか。輝夜、今回のことであたしが言えることは三つしかない」

「ぐくり、と唾を呑む緋姫と、それを見守る僕。

「一つ。二度とあんな真似すんな。あんな厄介事は二度とごめんだよ」

「……はい、誓います。絶対に、もうあんなことにはしません」

緋姫は重々しく頷く。今回の事件での、ある意味での最大の被害者はシヨットだ、そんな申し出を出すのも無理からぬことだろう。

「二つ。謝んな。アンタは故意にやったわけでも仕方なくやったわけでもないんだろ？」

「……はい」

確かに、今回の緋姫の　ナンバー？『ヴァンパイア』の暴走は誰が悪いでもなく、誰がやったでもない。言ってみれば、自然災害に近いものだ。釈迦堂唯しゃかどうゆいことナンバー100『ヴォイド』の助力がなければ、果たして一体どれほどの被害が出ていたことか。想像するだけでぞつとする。

……僕が緋姫に血を与えていたことがきつかけとなるのなら、僕に責任の一端があるということにはなるのだろうか。

「そして三つ目」

シヨットは言う。緋姫は再び喉を鳴らして、次に発せられる言葉に身構えた。

しかしながら。唐突さでいうのなら、シヨットも緋姫も似たり寄ったりだ。

「幸せになりな」

「……」

「アンタは綺羅衣に許されないまま、諦められないまま、縛られながら生きていくんだらうけど……UN事務所だってアンタを野放図にすることはないだらうから、決して少くない制約はつくんだらうけど……。それでも、幸せにはなれるはずだろ。だから……幸せになりな」

「……」

緋姫は……頷かなかった。

シヨットもそれ以上……何も言わなかった。

僕は……何も言えなかった。

要約するに、今の言葉は 『幸せになれ』 という言葉は そうですね。僕に惚れていたはずのシヨットがそういうことを言うということは。

「誤解のないように言っておくけど。あたしは別に何も、綺羅衣を諦めたわけじゃないよ。……ただ、あたしよりも輝夜の方が、よっぽど綺羅衣に相応しい。……そんな気がするんだ」

「……………」

それでも……緋姫は頷かない。緋姫もシヨットも、僕を好いてくれているということを僕自身よく分かっているし、また、当人達も僕に向けてくれる想いはどうしようもなく強い。

愛おしい、という気持ちは複雑なのだ。今回の件で、それも僕は知った。

「綺羅衣はしつかりしているようで危なっかしいからね。なにせ産まれてこの方六年の殺戮兵器だ。……だから、危なっかしいコイツのこと、あたしに代わって見守っていてくれないかな」

もっとも、あたしは結局何もできなかったけどさ、と付け加えるシヨット。そして。

「誓って……くれないかな？」

と言った。

重々しい、厳粛な沈黙。場面が場面なら、これは新郎新婦と神父の会話にも値するのだ。そう簡単に答えが出るものではない。

だがそれは決して、緋姫に迷いが 僕に対する想いの迷いが、あるというわけではない。それを問う神父もまた、新婦となっていたかもしれない別の未来が存在していた可能性があるからだ。

だから、緋姫は簡単に頷けない。

それでも、いつだって僕の予想の斜め上に行くのが輝夜緋姫だ。だから。

「……………はい。誓います。幸せに……………なります」

暫時の沈黙の後、確と首を縦に振って宣告した。

シヨットは、そっか、とだけ口にする、盛大にため息を吐き出した。

「は……、確かになあ……。こりゃあたしには敵わないわ」
いくら自他共に認める鈍感な僕でも、これには気付いた。

シヨットは、緋姫に負けたのだ。バトルは言うまでもなく、想いの丈でも。

「シヨット……ありがとうな。それから……ごめん」
「綺羅衣」

ぴしゃり、と。短くも、これまでで一番厳しい声音でシヨットが僕の名を呼ぶ。

「謝らないでよ……。あたしが……惨めになるだけだ」

「……そう、そうだな、そうだったな。……悪い」

こういう時、男はつくづく不利だと思う。謝ることさえ許してもらえないのは、時に何にも勝る苦痛なのだ。

僕も……^{かなめ}要に、謝礼も謝罪も、口にできなかった。

「シヨットさん」

不意に。緋姫が口を開いた。

「もしシヨットさんが……私よりも早く翼に想いを告げていたら

「言っな」

再び、ぴしゃり。さっきよりも尚鋭い声で 敵意すら伴って

緋姫の言葉を遮る。

「それ以上の発言は あたしに対する侮辱と見做すよ」

「……………」

緋姫は黙り。

「はい」

己の失言を恥じ、そうとだけ言った。

謝る、という選択肢が最初から削がれている以上（本人がよく理解しているということだろう）、緋姫はそうとしか言えないのだ。

緋姫が言おうとしたこと。

あるいは、翼の隣に立っていたのは貴女の方だったのかもしれない

それは確かに ショットに対しての冒瀆にも等しいだろう。緋姫は頭が賢いのがから、そんなこと分かっていたはずがない。それが分かっているにもかかわらずにはいらなかった緋姫の葛藤。彼女のことを誰よりも理解して然るべきであり、実際に誰よりも理解しているとは自負する彼氏である僕にはそれがよく分かった。

「ねえ、輝夜」

今度は、ショットが緋姫に話しかけた。緋姫はそれに、はい、と返答する。

「あたし達、友達になれないかな？」

「え……」

それは緋姫にとっても僕にとっても、思いもよらぬ発言だった。ショットは仕事柄、徒党を組むことが多いが、こんな風に積極的な、しかも仕事とは無関係の人間に、そんな台詞を言うとは思わなかった。

盟友、ならばまだ分かる。

友達、とショットは言った。

しかも相手は……恋敵である。

「敬語もやめてさ。友達になれない？ さっきの言葉を引き合いに出すのは卑怯だと思うけど……、まあ、そのお詫びも兼ねてってことでさ」

「私でいいんで……、いいの？」

咄嗟に丁寧語を使おうとしたのだろう。緋姫は不安げに言い直した。

ショットはしかしその言葉に対し、首を振って更正する。

「アンタ《で》いいんじゃない、アンタ《が》いいんだ」

「私、が……」

女同士の友情というものも、また、ある。女同士だからこそ

の、友情というものが。

……男の僕には計り知れないものだが。

それに、シヨットのことだ。勝気な女子であるところのシヨットもまた、ご多聞に漏れず『強敵』と書いて『とも』と読むのが好きなタイプでもあるのだろう。

「……私も」

緋姫が、返事をする。声は小さく、いつもの鉄面皮の向こう側に隠れた不安そうな感情は、誰が見ても見え見えだったが。

「私も、貴女と友達になりたい」

「そ、良かった。じゃあ、握手」

そう言って右手 三角巾で吊るしていない方の手を差し出し握手を求める。流石は欧米生まれ、この辺りには照れがない。

緋姫はゆっくりと右手を持ち上げ。

その掌を。しっかりと握り締めた。

輝夜緋姫十八歳、二人目の友人誕生の瞬間だった。

「ねえ輝夜。訊きたいことがあるんだけど」

握手が終わるや否や、シヨットが緋姫に質問を投げかけた。

「なあに？」

「 안타さ、この朴念仁のどこに惚れたの？」

「全部よ」

「ぶっ
「!!」

因みに、最後の発言は僕のためから間違えないように。

そんな質問に、あっけらかんと即答で返すな！

「ぜ、全部……？ 本当に、全部？」

流石のシヨットも面食らったようで、戸惑いながら確認する。それに対して緋姫は。

「ええ、全部よ」

と何の銜もなく言っただけだ。

「本当に 本当の本当に、全部？ だってコイツ、バカだよ？
間抜けだよ？ 鈍感だよ？」

「ちょっと待てシヨット。気持ちは分からないでもないが、全部僕の悪口になってるぞ」

「戦闘オタクだし、家狭いし、まだ六歳だし……あと、あとは……」
僕のツツコミ、シヨット・G・スカイハイ、華麗にスルー。意外だ、コイツがそんな高等テクニクを身に付けていたなんて。

因みに、戦闘オタクというのは言い過ぎだ。僕はそもそも対ナン^おバーズ^{まえら}に産み出された存在だし、家が狭いというのは金がないからではなく所長の指示だ。あと、恋愛に年齢は関係ないとよく言われているように、僕がたとえ実質六歳でも、精神年齢はお前よりは少なくとも上だぞ、シヨット。

指折り、僕の欠点ばかりを数えていくシヨット。それに対し緋姫は笑みを 邪悪な笑みを 浮かべて切り返す。

「そういうシヨットさんは、翼のどこに惚れたの？」

「へっ!? あ、あたし!?!」

緋姫のS属性、発動^{オン}。完全にシヨットをいじり甲斐のあるターゲットとしてロックオンしたらしい。

「あ、あた、あたしは……その……、背が、高いとか……」

シヨットより身長が低い男子がいるものなら是非見てみたい。

シヨット・G・スカイハイ、身長145cm。

「そ、それにやっぱ……強いし……」

さっき僕を指して戦闘オタクと称していたのはどこのどいつだ。

「え、エナジーがドレインだし……」

理由になっていない以前に日本語になっていない。

実は本当のツンデレは緋姫ではなくシヨットだったのかもしれない。

緋姫は 相変わらず 邪悪な笑みを浮かべたまま、「それから?」と促し続ける。

「私は翼の全てが好きよ。確かに翼は九九もできない馬鹿だけれど、私はそこも含めて愛おしいと思うわ。シヨットさんは、そうは思わないの?」

「え……あ……う……」

「ここでもまた自ら墓穴を掘るシヨット。自分が考え付かないなら、そもそも訊かなければいいのに。つくづく残念な奴め。」

そして緋姫。愛おしいと言ってくれたのは心底嬉しいと思うが、九九はできる。

お前の暗記法が人として間違っているだけだ。

「あ……！　なんかあたし急に眠たくなってきたなあ……！

綺羅衣、輝夜、悪いんだけどそろそろ帰ってくれないかなあ!？」

とりあえずシヨットが、救いようがないほどに誤魔化し方が下手なのは痛いほど伝わっただろう。

声も無駄に大きい。

あからさまに逃げの姿勢だ。

そろそろ僕が助け舟を出してやらないと、シヨットの頭から煙が出始めるかもしれない。それに、もう遅いし、当初の目的は果たした。いい頃合だ。

「緋姫。シヨットも疲れているだから、そろそろお暇しようぜ」

「それもそうね」

まさかシヨットの言葉を信じたわけではあるまいが、多少なりとも引け目は感じているだろう、僕に対しての時よりは毒舌が発揮されない。僕に促されるままに引き下がった。

二人揃ってパイプ椅子から立ち上がる。こんな時にまで　シヨットの前でまで手を繋ごうとするほど、僕も緋姫も神経が図太くはない。

それに　もしかしたら、緋姫が意図的にそうしたのかもしれないが　立ち去るにつき後腐れがない。僕はジレンマに悩まされることなく、緋姫は諦めることなく、シヨットもまた、恋敵と友達になれた。

まずは一人目、万事ではないにせよ、解決。

「それじゃあなシヨット。ゆっくり休んで早く良くなれよ」

「またね、シヨットさん。今度お茶を奢らせて頂戴」

流石に頭の冴える緋姫は、謝罪の言葉を禁じられているので、うまいことを言って別れの挨拶に変えた。

「え、あ、うん。また……」

今にも顔面から湯気が出そうなくらい赤面した、半ば放心状態のシヨットの病室を、僕らは出た。ともあれ、彼女にも休息が必要なのは間違いない。ゆっくり休んでもらうとしよう。

「ねえ翼」

病室を出ると、開口一番緋姫が神妙な面持ちで話しかけてきた。

「今からでも……遅くないわよ」

「……………」

その言葉の真意には……いくらなんでも気付く。

「同性の私から見てもシヨットさんは魅力的な人だと思う。幸せになるとは誓ったけど……『翼を諦める』とは言われていないわ。だから」

「緋姫」

「あふっ……………」

咄嗟の行動に、緋姫がよく分からない喘ぎ声を出す。

まあ単純に、耳許で名前を呼んだだけなのだが。

「あんまり喋ると……その口塞いじまうぞ」

かあっ、と赤くなる緋姫の顔。元の肌色が白いので、余計に目立つ。

「…………それは困るわね、あふっ…………。人目も憚らないバカップルだと思われたら屈辱だわ、ふあ…………っ、そ、それはそうと、耳許で喋るのはやめ…………」

施設内には、深夜でも疎らに人がいる。そんな往来でキスでもした日には、僕は勿論、緋姫も当然通うことになるのだし、居づらくなるだろう。

というか、緋姫はどうやら耳が性感帯らしい。

弱点ゲット。

「行こうぜ」

僕は自然と緋姫の手を取って歩き出す。彼女も 類は赤らめたままだったが、それに従って歩き出した。

次は地上に出る。彼はおそらく三階にいるだろう。

ナンバー？^{ワシ}『ロックオン』こと真田真正さなだまさとたには、しっかりと事情を説明してもらわなければ気が済まない。

*

「ひとまずはご苦労、とっておこう」

深夜二時。草木も眠る丑三つ時である。相変わらずいつ睡眠をとっているか未だに不明な所長は、あくまで常の飄々とした態度だった。申し訳なさそうだったり悪びれたりしている様子は微塵もない。

緋姫の暴走を食い止めた後（正確にはキスした後）、僕と緋姫は UN事務所の役員に「真田所長の指示です」と言われて地下の医療検査室へと直行した。なので、直接顔を合わせたのは、ブローニング M2 を乱射している場面を除けば、この所長室を出ていったきりである。つまり、所長がナンバーズであることを知ってからはこれが初の対面となるわけだ。

冷やかかとさえとれる所長の態度に、僕はいくらか苛立ちを感じていた。ほぼ全幅の信頼を置いていた人間に少なからず裏切られたのだ、当然ともいえよう。

「……所長。質問は一つだ。どうしてナンバーズであることを隠していた？」

僕の問いかけに対しても、所長はやはり態度を改めない。むしろ失笑して。

「ふっ。これは異なることを言うな翼。『隠していた』？ 馬鹿を言え。《いつどこで私がナンバーズではないなどと言った》？」

「……っ」

確かに……、この三年間、《自分はナンバーズではない》、という否定の単語を聞いた記憶はない。それでも記憶力には自信がある、ナツメに教わった英語のテキストに載っている例文を全て丸暗記し

ているくらいの自信は。

つまり、その点に関してだけは、少なくとも《嘘はついていない》のだ。

だが……解せない。

「おかしいだろう。『ナンバーズ・チルドレン計画』が始まったのが今から二十年前。ということは、その頃のアンタは十歳は過ぎていたってことだろう。ナンバーズの条件としては当てはまらない」
ナンバーズを造り出すにあたって、研究者達が子供達を選んだ理由はある。未来が長いことと、変に成熟している十歳や二十歳くらいの人間だと、ナンバーズの力 言い換えれば、“毒” に中てられてしまう危険性があったのだ。異能力者は異能力者として、完成された人格でなければならぬ。ならば、下手な大人よりも、精神が未発達の子供を最初から、《一から教育することにより》、暴走の危険を抑えたのだ。その結果、皮肉にも『ジ・アース』という存在を産み出してしまったことになったのだが。

僕の発言に対し、やれやれといった素振り顔で顔を振る所長。

「翼。やはりお前は人生経験が足りないな……もつとも、生後六年しか経過していないのだから無理はないことではあるのだが」

「……何が言いたい？」

「《人を見かけで判断するな》、ということだよ」

そう言つて。

所長は徐に、ネクタイを緩めた。彼が服装を崩すというのも、僕にとつては初見だ。更にワイシャツの一番上のボタンを外して咽喉部を曝け出す。

その中心には、ナンバーズの とりわけファーストナンバーズの証左であるギリシャ数字の“？”が刻印されていた。言うまでもなく……はじめて見る。

「改めて自己紹介しよう。UN事務所長兼ナンバー？『ロックオン』、真田真正だ。こう見えて、私はまだ二十一歳なのだよ」

「な……なに？」

所長が……二十一歳？

去年成人式を迎えたばかりだと？

となると……、逆算すると、僕とはじめて会った時には十八歳、
緋姫や音葉と同じ年ということになるが……とてもそうは見えない。
せめて二十五、六なら「多少老けている」と言っただけ誤魔化せるかも
しれないが……。

その上、この三年間セラを全く感じていない。轟達とどろきの時とは異なり、
彼はサーチャーの担当もしているから、そちらの方面での期待
はできない。

「ファーストナンバーズは、時の科学者達は特に躍起になって取り
組んでいたからな、とにかく完成体を造り出すのに必死だった。必
死であったが故に焦りがあったのだらう、ナンバー？」「ヴァンパイ
ア」が破棄されたように、どこかしらでミスは生じやすくなる……
《とりわけ、最初の一体に関してはな》」

「《構造的欠陥が生じた》、ということですか」
そう言ったのは緋姫だ。自分が破棄された、という言い方につい
ては特に気にしていない様子だ。

「私はな、遺伝子を操作した関係上テロメアが短くなってしまった
のだよ。つまり、普通の人間と比べて成長の速度が著しく早い」

テロメア……確か、ギリシャ語で『末端』を意味する染色体だっ
たか……（これも勿論ナツメに習った）。当初UN事務所を立ち上
げた真田正長博士は遺伝子研究の権威だったはずだ。現在では明ら
かになつていないテロメアと老化の関連性について何かしら察して
いても不思議ではない。

『末端』を意味する単語と、『一番』という単語は、全く当
て擦りにも程があるが。

「おまけにセラも安定していなくな……、いつ暴走してもおかし
くないほどに波長が乱れている。そのため、毎日特殊な安定薬を六
種類も飲まなければならぬのだよ」

憂鬱そうに一人ごちる所長。ごちつつデスクの引き出しから取り

出したのは多種多様な錠剤やカプセル。

「これは父　真田博士が私専用に開発したセラと老化の安定剤だ。安定剤、というよりは一時的な除去剤だな。これが作用している間は、平たく言って私はナンバーズでありながらセラを発しない。だが、万事が万事うまくいくはずがなくてな、これを服用すると私は深い睡眠状態に陥ることができなくなる」

つまり、その薬のせいで彼はセラを発することができなくなり。

副作用として、いつ如何なる時でも電話応対ができるようになったということか。

「……アンタは本当は、真田博士の弟ではなく」

「ああ、息子だ。その点に関してのみ、私はお前に嘘をついていたということになるな。そこは謝ろう……すまなかつた」

そう言つて所長は、デスクに額がつくくらいまで頭を下げる。

「な……、やめてくれよ所長。アンタに頭を下げられるなんて、いくらなんでも違和感ありすぎだ。……ともあれ、僕が訊きたいのは《どうしてアンタがナンバーズであることをひた隠しにしていたか》、つてことなんだよ」

最も枢機となる点はそこだ。今は亡き真田正長の弟と身分を偽つてまで、自分がナンバーズであることを隠していた理由。

所長は静かに頭を上げる。その表情は、少し笑みを湛えていた。昔を懐かしむような……緋姫もたまに見せる、寂しげな笑顔。

「父の、真田博士の遺言だ。『いずれ誕生するアウト・オブ・ナンバーに《余計な先入観を与えないように》』、とな」

「余計な……先入観？」

「ああ。つまり、私は無理矢理抑え込まれているから安定しているように見えるが、ナンバーズは基本的に特殊能力を有した危険な人間だ。そのナンバーズが、私のように《無害なものである》と勘違いされないように、と。これは奇羅衣博士と相談して決定されたもの……だ、そうだ」

成程。筋は通っている。

僕是要から「基本的にナンバーズは危険なものである」と教わった。しかし、まず真つ先に遭遇するのが所長　ナンバー？のような人格者であつたなら少なからず油断していただろう。『エナジードレイン』は代えが利かない唯一無二の存在。小さな油断に足を掬われて敵にやられては話にならない。

「……話は分かったよ。……僕こそ疑つて悪かった」

「お前なら分かつてくれると思つていたよ、翼。ありがとう」

これで、所長との軋轢は解決だ。裏切られていたわけではなかったことに、僕は安堵する。

「ところで、『ロックオン』っていうのはどういう能力なんだ？

緋姫との戦いの時に少し見させてもらったが……」

「そのままさ。『ロックオン』が意志を持つて放つた物は例外なく、寸分違わず確実に標的を打ち抜く』。その一言に尽きる。百発百中千発千中万発万中だ。誇張でもなんでもなく“必中”。たとえ直線しか描き得ない銃弾さえもベクトルを変え曲がつて放たれる。

この辺りは、見た通りだ」

「なんか宝くじとかに使うと大儲けしそつだな……」

自由的に当てられるなら、自分の好きな番号を選べる。一攫千金億万長者街道一直線間違いなした。

「ああ。UN事務所の主な活動資金はそれだ。毎度毎回ジャンボ宝くじの発売開始日が待ち遠しくてしょうがない」

「それつて明らかに悪用だよなあ!？」

間違いなく使用の仕方を間違つている!

僕の報酬とか、どこから出してるのかと思つていたら、そんな闇金だつたのか!？」

国のため人のため、このナンバーズは消去デリートした方がいいのではないですか!？」

「冗談は切惜き」

「微妙に漢字が違うぞ!？」

「嘘だ。扱さて措ちき」

ていうか、このやり口、流行ってるのか!?

僕が実はブームに乗り切れていないのか!?

「所長さん、待って下さい」

と、今までほとんど口を開いていなかった緋姫が所長に喋りかける。

そうだ、言つてやれ……、冗談も程々にしておけと。

「どうしてくれるんですか。次に使う予定だったネタを一から考えないといけなくなりました」

「次使う気だつたんかい!」

一瞬でもお前を頼つた僕が間違つてたよ!

僕の一人称で物語が進んでいるはずなのに、なんだろうこのアウエーな感覚は!

「まあ落ち着け翼。今のは本当に冗談だ。『ロックオン』の能力は、あくまでも《意志を持って》使用しなければ全くの無力だ。実際に宝くじの数字を決める側でもなし、そんな悪用の仕方はできないさ」

「それを聞いて安心したよ……。もし悪用するようなことがあったら、いくら上司でも消去デリートせざるを得なくなる」

「大丈夫だとも。精々がビジネスキーボード認定試験で首位を獲つたくらいだ」

「ナンバー? 『ロックオン』。貴様を……消去デリートする」

……まさか主人公の決め台詞をこんなふざけた場面で使用する羽目になるとは思わなかったがな。

所長。なんだかんだで今まで楽しかったぜ。

「待て待て。そう急くな翼。急いで仕事を仕損じると言うぞ。試験の時は能力を使わずちゃんと実力で首位を獲つたから安心しろ。そもそも私の能力の発動は薬に影響されるから徒に使用できない」

「覚えとけ所長。誤解が解けた後の冗談は一番タチが悪いんだよ」
現に今、確実に“異能殺し”としてのスイッチが入った。

緋姫といい所長といい、ファーストナンバーズはばかばかりだ。

「ともかく。確認するが、アンタはファーストナンバーズ、ナンバー？」「ロックオン」であることに間違いはないんだな？　もし変な真似するようなことがあれば、UN事務所長といえど容赦しないからな」

「ああ。いいな翼、実に頼もしい。心強いぞ」

これで、所長の問題も無事解決だ。

「さてお前達。翼はともかく緋姫は明日　いや、もう今日か、学校があるだろう。もう深夜だ、そろそろ帰った方がいい」

……なんだか自分の彼女を初対面に近い他人に名前で呼び捨てにされるとするのは、彼氏としてちよつと遺憾だ。

まあ所長の場合、基本的に人の名前はファーストネームで呼ぶのが当たり前だからな（音葉の時もそうだった）、特別に見逃してやるらう。

「ええ。そうしたいのは山々なんですけど……」

と、緋姫が不意に声を落として心底言いつらそうに口を開く。らしくもない、彼女は言いたいことははっきりと言うタイプなのに。

が、次に発せられた言葉で、その理由が判明するとともに、忘れていた事項を思い出させた。「あ」、とかぶる僕と所長の声。

「……《私、家を破壊してしまったので》」

*

九月二十四日月曜日、早朝。早秋らしく、朝陽はまだ昇っていない。空気は僅かにひんやりとし、いつの間にか少しずつ季節が変わっていつていることを実感させられる今日この頃この時間。

僕は目を覚ましていた。

というか。

実は寝ていない。

人間、極度に疲れている時はあつという間に泥のように眠ってしまいが、極限まで疲れているとその疲れが逆に枷となり、むしろ眠

りにつくこと自体ができなくなるものだ。

僕も、昨日の緋姫の一戦でセラを使い果たし、極限まで疲労が達していたので逆に目が冴えて眠れなかった 《のではない》。

大事なことなので傍点を付けてまで言ったが、念のためもう一回言おうと思う。

極限まで疲れきっていたので寝付けなかったのではない。

というのも……。

部屋の真ん中に目をやる。

「すう……すう……すう……」

《安らかな寝息を立てつつ、僕の布団を我が物顔で占領している輝夜緋姫の姿がそこにあつた》。

本日の深夜二時。所長室で、すっかり失念していた青柳荘の倒壊を思い出した僕と所長は思わず顔を見合わせた。実際ならばいくらかオンボロとはいえ、一つの建造物が全壊するという大惨事。しかしながら僕らは『ヴァンパイア』という巨大な存在が目の前に立ち塞がったせいで、その事実を目をやる余裕がなくなっていたのだった。そんなわけで、緋姫は寝る場所はおるか暮らす空間も失ってしまったのだ。僕はどうするのかと悩んでいたが、大人である所長（実際は二十一歳、緋姫と大差ない）がきつぱりと言い切った。

『翼の家に泊まればいいだろう』

確かに、この家は所長が保護責任者になったことで借りているマンションの一室であり、即ち家長は所長だということになる。なので、その家長の言うことには逆らえないのだが、年頃の男女を一つ屋根の下で生活させるのはどうかと僕としては思うわけだ。ひとまずUN事務所で寝泊まりさせてもらえないかと提案してもにべもな

く。

『事務所は居住地ではない』

とまあ至極もつともな返答が返ってきた。じゃあ野宿はどうかと提案すると、今度は緋姫から。

『最低。若い美少女をこの寒空の下に放り出すの？ 最低』

厳密に言つとまだ寒空という季節でもないのだが、確かに治安の良いこの町とはいえ女の子に野宿させるわけにはいかないという判断が下った（余談だが、この後、『最低』という言葉を僅か三分間で十一回耳にした）。なので、当面は緋姫は僕の家で生活することが僕の意味を無視して 決まった。『わけあつて両親がおらず、一人暮らしをしている高校三年生の男の子』から『わけあつて両親がいないにもかかわらず、恋人と同棲をしている（緋姫はここに『最低な』と付け加えた）高校三年生の男の子』という位置付けに変わったのだった。

この家には予備の布団はおるか座布団もない。そもそも一人暮らしをすることを前提にこれまで三年間生活していたのだから、必要ないだろうと思つて買わなかった。来客らしい来客といえば、二ヶ月前の緋姫がはじめてということになる。

で。僕にとつての最大の難所はこれからだつた。

やらしい本やらDVDこそ持つていなかったものの、まさか同じ布団で寝るわけにもいくまい 僕だつて男だ、それがどういう意味合いを持つかくらいは知っている。彼氏彼女の間柄で、接吻まで済ませた仲ではあるが、そこに踏み込む領域にはまだ達していない。なのでどちらかに布団を譲らねばならず、同性だつたらまた話は変わってくるのだろうが、相手は女子である、レディーファーストなのは一般常識の範囲内といえよう。加えて言うなら、もし僕が布団を頑として譲らなかつた場合の『最低』頻度は記録を大きく更新していたであろう。

そこまでならまだいい。が、実際の場面を想定して考えてほしい。産まれてはじめてできた大好きな彼女が、手を伸ばせば届く距離で、無防備な姿を曝け出して、自分が普段使っている布団にくるまって眠っているのである。平常心でいるという方が無理な相談だ。特に緋姫は……その……発育がとても良いので、僕のシャツを着せると胸の辺りがダボダボになってしまうのだ。少し寝返りを打っただけでシャツがはだけ、胸の谷間やら腰のくびれやらがちらほらと

不可抗力で見えてしまうのである（しかも、今彼女は下着を着用していない。戦闘でボロボロになって着衣として機能しなくなってしまうからだ）。意識というやつは厄介で、しないようにすればするほど、意識してしまうもので、軽くもぞもぞ、と動いただけでも条件反射でびくつとなってしまう。そんな時間を三時間以上続けられるのだ。拷問としか思えない。いつそ僕が外で寝る、という案もあつたのだが。

『それで翼に風邪でもひかれたりしたら、私はどう償えばいいの？』
という、彼女にしては珍しい配慮の言葉がかかり、しかし僕はそんなやわな身体じゃないと諭したところで聞く耳持たず、強制的に室内で寝かされた。緋姫がすうすうと寝息を立てれば立てるほど僕は悶々とし（かくいう緋姫は早々に眠ってしまった。純粹に疲れていたのでろう）、眠れぬまま朝を迎えてしまったという次第だ。

「だああああ！！ ええい、朝だぞ緋姫！ 起きろ！」

まだ太陽は昇っていないが、ひとまずは朝と呼んでいい時間帯である。耐え切れなくなつて僕は緋姫を叩き起こした。

「ううん……、あと前方後円墳……」

「何の夢を見ているんだお前は！？」

「それと便座力バー……」

「マジで何の夢見てんだよ！！ いいからとつと起きろつづの！！！」

「なによ……朝っぱらから煩いわね……。せつかく春原すのはらが一人で頑張つて古墳を作つていた最中だつたのに……」

「本当にそんな夢だつたんだな！？ すげー頑張つてんじゃん春原！ とにかく起きろ！ そして着換える！ その間に僕は朝食を用意しておいてやるから！！！」

「もう……分かつたわよ……。分かつたから怒鳴らないで頂戴。ただでさえ寝不足なのに、頭に響くわ」

せつかく仁徳天皇が……、などとわけのわからない台詞を発しつつ上体を起こす緋姫。言うまでもなく寝巻代わりのＴシャツは着崩

れているので、僕は反射的に目を背け、そのまま台所に向かって朝食の準備を始める。相楽森学園は制服の決まりがないのがこの際助かる。少し大きいが僕のシャツとズボンを着せればいいだろうと思つて予め用意しておいた。

それでも、この家は狭いので、台所に立っていても、しゅっ、しゅっ、と衣擦れの音が僅かに聞こえる。その、僅かに、という部分が逆に劣情を誘い、僕の精神を更に騁る。おかげでトーストを焦がしてしまい、緋姫に。

「苦いわ」

と言われる始末。

……僕は一体どうすれば良かったのだろうか。

といった感じで（僕にとっての）波乱万丈な時間が終わり、登校することにする。とはいえ、時間はまだかなり早い。きつと三年B組に行つたとしても誰一人いないだろう。

それでも、僕が緋姫を連れてきたのには意味がある。

「こんな早い時間に学校へ行つて、どうするつもり？ プレイ？」

「……そっち方面の暴走も治れば最高だったんだけどな。挨拶しときたい連中がいるんだよ」

因みに日傘はないので、僕の黒い雨傘で代用だ。

「挨拶しておきたい人？ 誰よ」

別段隠しておく必要もないし、数分後にはバレるので、言っておく。

「轟虹色と釈迦堂唯」

「はっ、町を壊したバケモンに、町を救った英雄サマのお出ましか。オレ個人としては、両者共倒れ、つてのが一番理想的だったんだがな」

開口一番ひどいことを言ってくれるナンバー13『バッドラック』

、轟。前者はともかく、後者は本心ではないはずなんだが。

ツンデレがここにもいた。

もしこの物語が小説だとしたら、筆者はツンデレ好きに違いない。

「おつ、お疲れ様です、綺羅衣先輩、かぎゅや先輩」

……噛んでいた。

かなり無理がある噛み方だと思っただが、どうだろう。

「とにかく、だ。轟、釈迦堂。今回は世話になった。感謝してる。

……ほら」

僕は、背中に隠れるように立っていた緋姫にも発言を促す。

「……この度は、ありがとうございました。それから……申し訳ありませんでした」

「よせよせ。オレは綺羅衣翼に借りを作りっぱなしつてのが気に食わなかったただけだ。それに、ほつときゃ『ジ・アース』級に暴れただろうからな。あんなのはぜってえ御免だぜ」

轟は『ジ・アース』のこともある程度知っているだろうから、言葉には重みがあるが……。

「ほつときゃ、つてことは、『ジ・アース』はもつとひどい破壊を行う奴なのか？」

「あ？ あー……」

そう言つて、失敗したという表情を浮かべつつちらりと流し目で釈迦堂を見やる。そういえば、この四人の中で轟と釈迦堂の関係を知っているのは、轟と僕だけということになる。釈迦堂本人は、当時『ジ・アース』の下についていた以前の記憶を轟の能力によって失っているのだ。当の釈迦堂はきよんとしているが。

「ま、ケースバイケースだよな」

轟は気まずそうに、その一言で半ば強引に片付けた。

「ともかく、お前達のおかげで助かった。そのせいでUN事務所に存在が知られたことはすまないと思っただが……。事務所を代表して謝礼を言わせてもらいに来た。立場上、何らかの報奨を与える権限は僕にはないが……」

「あー分あった分あった。これで貸し借りはなしつてことでいいんだろ？ テメエも助かって、輝夜緋姫も助かって、実質被害者ゼロ。

万々歳じゃねエか。やめようぜ、仰々しい礼やら詫びやらってのは、それでいいだろ？」

面倒臭くなつたのか、実は照れ隠しなのかは分からないが、妥協点としては妥当だろう。

「さて、つと。こつちは文化祭の準備で忙しいんだ。そろそろ他の役員達も来る。用がないなら帰れ帰れ」

つつけんどんな物言いの轟と。

「あ、ま、また良かったら、またいらっしやってくだしゃい。はりやりやりや……また噛んじやった……」

どこまでも間の悪い釈迦堂との清算も、これで終了。

あとは、最後にして最硬の居城を落とすのみである。

*

竜虎が再び、相打っていた。

「……………」
「……………」
「……………」

片や北の竜 もとい、悪辣毒舌吸血姫こと、ナンバー？『ヴァンパイア』の能力を持つ緋色の髪の少女、輝夜緋姫が沈黙を維持している。

片や南の虎 もとい、神すらひれ伏すクイーン・オブ・委員長こと、ナンバー24『リジエネレイト』の能力を持つサイドポニーの少女、実川音葉は、緋姫の二倍の沈黙を維持している。

そして、緋姫の隣に座って、その音葉の更に二倍の沈黙を維持しているのがこの僕、アウト・オブ・ナンバー『エナジードレイン』、綺羅衣翼である。

場所は……何故か僕の家だった。

経緯は以下の通りである。

「放課後になつたら言いたいことがあるから」

僕は教室に一番乗りだったが、その次にやってきたのが音葉だった。なんととってもクラス委員長である、誰よりも早く来ようという意気込みは素晴らしいものがあるが、ここではそこに触れるだけの余裕がない。僕達を　というよりは緋姫を視認すると、真っ直線に歩いてきて端的にそう言ったのだ。それだけ言って、放課後になるまで本当に一言も話しかけてこなかった。

その表情は、いつもの菩薩のような温かなものではなかった。僕はかつて一度だけ見たことがある、銀行強盗の人質になった時に犯人二人に向けたような、真剣な表情だった。

正しいことは正しい、悪いことは悪いと言う実川音葉である。そんな常識が自身の内で完成している彼女にとっての本当に“悪いこと”を、緋姫はしてしまったのだ。いったいどんなことを言われるのか、あるいはされるのか。僕でさえ想像もつかないし、実際怖い。当人である緋姫にとってはどれだけ戦々恐々としていていることが、その心中はとも量り知れたものではない。

いつもの六時間授業が、二倍どころか二乗くらいに長く感じられた。

そして　待ちわびた放課後。僕はHRが終わるや否や緋姫の席へと向かった。クラスメイト達が早々に帰り支度を始める中、彼女だけ外界と隔離されたかのように着席して固まったままだった。

いよいよこの時が来てしまった　そう言っているようにも見えた。

僕はそつと肩に手をやる。

びくつ、と反応を示した。あたかも、目の前にいる僕のことさえ視界に入っていなかったかのように。

「緋姫、落ち着けよ、な？　音葉のことだ、きつと許してくれるさ。お前がそんな態度じゃ、音葉もいい気分じゃないと思うぜ？　いつも通りにしていればきつと大丈夫、うまくいくよ」

僕は捲くし立てるように言った。しかし緋姫は、やはり心ここにあらずといった様子で茫然としていた。

さてどうしたものかと考慮していると。

「綺羅衣君、輝夜さん」

気が付けば、音葉は僕の背後にまで立ち寄ってきていた。いつも柔和な笑顔を絶やさない彼女が、やはり今ばかりは無表情だ。仮面をかぶったかのような、全く感情を表に出さない鉄面皮。この前の轟事件の時、僕に向けた笑顔みたく、見るからに怒っていると分かる表情をしてくれていた方がまだいい。

「朝話した通り、言いたいことがあります」

真剣な顔で、音葉はそう宣言した。緋姫の唇が真一文字にきつく閉ざされる。

「ここだと少し騒がしいので、もっと落ち着いたところで話をしましょう」

「落ち着いた……っていうと、この間の喫茶店か？」

この調子だと、緋姫はいつまで経っても黙ったままだろうから、僕が代わりに相槌を打つ。

だが、音葉は首を振る。

「うん。もっと落ち着いたところ　もっと腰を据えて話ができる場所。私達以外他に誰もいないような場所」

訥々と言葉を紡ぐ音葉。一種の冷たさすら感じさせる。まるで普段の彼女とは別人のようだ。

「輝夜さんのその格好だと、輝夜さんは昨晚綺羅衣君の家に泊まったんだよね」

流石の慧眼、緋姫の服装の変化にも気が付いている。昨日は僕が所長室を飛び出した後、所長の指示ですぐに家に帰ったらしいが。「そこなら思う存分、腰を据えて話ができるよね。そこにしましゅう」

有無を言わさぬ迫力に、僕は頷くしかなかった。

よって、僕の家である。三人寄らば姦しいというが、僕は女ではないのでその限りではない。だが、仮に僕が女だったとしても、こ

の場は決して姦しくはならなかつただろう。

まるで裁判所だ。言い得て妙である。“悪いこと”をした人間がいて、“悪いこと”と判断した人間がいる。お誂え向きなことに、僕という陪審員までいる。もっともこの場合、発言権は一切ないが。

そういうわけで、延々と三十分もの間、誰も何も言わず、沈黙だけが室内を支配していた。

緋姫は傍目から見ても緊張しているのがありありと分かる。

音葉は一貫して無表情だ。

僕は……ぶつちやけどうしたらいいのか分からない。ただ緋姫の隣に座つてことの成り行きを見守るだけである。

唐突に、とうとう。音葉が重い口を開いた。

その発言内容は。

「輝夜さん。目を瞑つて歯を食いしばつて」

およそ考え得る、最悪の類の内容だった。

緋姫はいよいよ産まれたての小鹿のように震えつつ、しかし音葉の言つがままに目と口をきつく閉じた。緋姫にしてみれば、ずっと直視し続けるよりはマシかもしれないが……それでも、これから先起こるだろうことを予想すれば内心は嵐のようにざわめいているだろう。

「綺羅衣君は、少し離れていて」

音葉は、僕にも命令した。拒絶する意味も権限もないので、僕は言われるがまま、距離をとることしかできない。僕は居間の端にまで移動して、二人の動作を観察する以外できることがなかつた。

緋姫にゆっくりとにじり寄る音葉。その緩慢な速度がかえって焦らしを煽り、僕は内心とても穏やかではいられない。当の本人である緋姫は、もっと穏やかではいられないはずだ。それはおそらく、音葉の目論見通りに違いない。

そして。

音葉は緋姫の真正面、手を伸ばせば届く距離にまで近付いて。

右手を。
大きく振りかぶり。
思いつきり。
緋姫を。
抱き締めた。

「……………良かったよう、輝夜さん……………」
離れたところから見ている僕でさえ、何が起こったのか分からなかった。当事者の緋姫にしてみれば、混乱も極致といった状態か。気が付けば……………。

音葉は 泣いていた。
緋姫をしっかりと腕の中に抱き締めたまま、嗚咽を隠すこともなく頬を濡らしていた。

「み、のりかわ……………さん？」
何が起こったか分からず目を見開いて、まさしく茫然自失といった声色で、緋姫が音葉の名前を呼ぶ。

「……………つく、輝夜さん……………良かった……………無事で……………帰ってきてくれて……………、本当に……………良かったあ……………。」
ようやく、分かった。

音葉は ずっと心配していたのだ。緋姫が元の人格を取り戻しているのかどうか。あの無表情は、それを必死で隠すための、まさしく仮面だったのだ。

そして、安堵した。ずっと張り詰めていた緊張の糸が解けた。そして涙を流した。それは、《友達が戻ってきてくれたことに対しての感謝の涙だった》。

確かに緋姫は、取り返しをつかないくらいに“悪いこと”をした。それは今となっては覆りようのない事実であり、実川音葉はそれを絶対に許すまい。

然りで、しかしである。

実川音葉は、完全に清濁併せ呑む粹にはまりきった、それこそ機

械のようなタイプではない。

人としての感情を持っている。

“悪いこと”よりも “嬉しいこと” が勝つたのだ。

「輝夜さん…… 緋姫ちゃん……っ、緋姫ちゃん……っ」

「実川、さん」

音葉は泣く。喜びに泣く。子供のように、泣きじゃくる。

そして、緋姫もいつしか頬を涙が伝っていた。静かに一条。そこから先は堰を切ったように止め処なく溢れ出る。

「実川さんっ……、音葉さんっ……！」

緋姫もまた、歡喜に噎びつつ音葉を抱き締める。親友が親友を想い親友のために泣く。どんな言葉よりも代え難い、どんな美辞麗句でも語り尽くせない、二人の女の友情の抱擁だった。

事ここに至って、言葉など要らない。ただ二人は泣き、噎び、涙を流す。恥も外聞も関係なく、ただただ嗚咽だけが止まらない。

誰がそれを、不様と笑えよう。

誰がそれを、無恥と嘲られよう。

二人の涙は かくも美しい。

如何なる宝石にも勝る、涙の結晶が、次から次へと床に染みを作っていく。

「あはは……。綺羅衣君には、みっともないところ見せちゃったかな」

彼女にしては珍しく、恥じらいを含んだ笑みを浮かべる。本当に珍しい。なんせ衆人環視の中で全裸になったような少女だ。

「みっともないなんて……とんでもないよ。はっきり言って感動してた」

嘘ではない。遠巻きに見ていた僕でも涙が滲んだのは、ここだけの秘密だ。

確かに……近くに僕がいてはやりづらかっただろう。

「緋姫ちゃん」

音葉は、緋姫を指してそう呼んだ。

「……って、呼んでもいいのかな？」

「私の方こそ……そんな、勿体ない……。実川さん、ありがとう……本当に……っ」

因みに、緋姫はまだ涙が止まらないらしく、言葉は途切れ途切れだ。

「それじゃあ……今から緋姫ちゃんで。そういう緋姫ちゃんこそ、私のこと名前で呼んでよ。さっき一度だけ呼んでくれたじゃない」

「うん……うん……！ 音葉、さん……。っ。音葉さん……。っ」

よしよし、と赤子をあやすように緋姫の緋色の髪を撫でる音葉。

本当に、音葉はとんでもない女だと思う。普通なら誰かのために傷付くことも、誰かのために怒ることも、ましてや誰かのために泣くことなど、できまい。

緋姫と音葉の友情は、中学時代で一度終わり、三年後に復活して再び分かれたようとしたが……。それでもやはり絆は固かった。

その絆はきつと 未来永劫離れることはないのだろう。

きつと、今度こそ。

「綺羅衣君も、ありがとうね。緋姫ちゃんを助けてくれて」

緋姫の髪を撫でつつ、僕にも礼を言う音葉。

「僕の方こそ、礼を言わせてくれよ。いくら頭を下げても足りないくらいだ……。っていうか、一生下げ続けても足りないだろうな」

「そんなことないよ。私は結局、自分のことしか考えてないから」「それこそ、そんなことない、だ。自分のことしか考えない人間が、どうして涙を流せよう。どうして笑えよう。」

そう考えると、誰も彼も、自分のことしか考えない人間っていうのはいないんだろうな。

ふとそんなことを思っただけど口にしなかった。

そんなことを言われれば、音葉はきつと嫌がる。

だから。

「音葉は、今のままが一番輝いてるよ。だから……。その輝きを失く

さないでくれよな」

僕は不敵に笑って言い放って。

「ぶいっ！」

音葉は、どこまでも無敵に笑ってピースサインを作りつつ、言い放った。

そのまま暫時、黙る。ただ緋姫の嗚咽だけが時折響く中。

「綺羅衣君はさ」

徐に、音葉が僕に語りかけてきた。

「私とはじめて会った時のこと、覚えてる？」

「……ああ、忘れるわけないだろう？」

僕が、音葉に救ってもらった時。要の鍛練を三年間受け続けた直後のエピソードだ。

「あの時綺羅衣君は、自分のことを『人殺し』だと言ったよね」

「……ああ。まあ、な」

「それに対して、私は『それは嘘』だと言った。……あれ、ちょっと間違い。本当は“嘘”じゃなく“裏”だったんじゃないかな」

「……？ それは、どういう意味だ？」

「私ね、思うんだ。《殺人鬼とは、誰よりも命の尊さを知っている者だ》、って」

「……？」

「人の命は、何にも勝る貴重品でしょう？ それと同じ。人の命の尊さを知っているからこそ奪いたがる。貴重品は誰しも大切に扱って欲したがるよね？ 言うなれば、それと同じだよ」

「まあ……一理あるかもしれんが」

「だから、人は人を殺すんだよ。尊いものを篡奪したいがために。

それが歓喜に行き着くのか、懺悔に行き着くのかは、その人次第だけ。前者が殺人鬼という悪。後者は、人の命を護る善。……

勿論極端に極論で、万事が万事そうとは限らないだろうけれど」

「……」

「綺羅衣君は、後悔、したでしょう？」

人を 要を殺めて。

「……ああ。後悔したよ。他に方法があったんじゃないか、もつとうまくやれる未来が存在したんじゃないか、つてさ。今でも後悔してる」

「うん。だから、綺羅衣君には人の命の重みが分かるんだよ。綺羅衣君が手にかけた経緯は私には分からないけど……その人はきつとそれを身を以て学ばせたかったんだと、私は勝手に思うんだ。同じ過ちを繰り返させないように、つてさ」

「人の命の……重み」

「あの頃の綺羅衣君は、その本当の意図をまるつきり履き違えていたみたいだけれど……。今は、そんなことないでしょ？」

要、そうなのか？

完成されたキリングマシーンには、命の価値を知るのが何より大切だと。命を擲つてまで僕に教えたのか？

今となつては知る術もないが……。

もしそうだとするのなら、天邪鬼な要のことだから、そうなのかも、しれない。

「そうだな、そうかもしれない。音葉が僕を導いてくれなかったら、僕は人を殺すことに何の躊躇も抱かない、本物の殺戮兵器になつていたかもしれない」

目を背けていた《人を殺すという行為》。それが本当は どういう意味合いを持つのか。

要は……僕を愛してくれていた要は、それを身を以て体感させたのだろう。

「音葉があの時救ってくれなかったら……どうなつてたんだろうな……。たられば話をしたところで仕方ないことだけど……。音葉、ありがとう」

「うん。どういたしまして。……それでさ、綺羅衣君。綺羅衣君にだからこそ、緋姫ちゃんを任せることができるんだよ。これまでもそしてこれからも。その経験を、真に正しく理解している綺羅衣君

にだからこそ」

緋姫もまた、人殺しだ。養父母を殺め、喰った。

人殺しを本当に理解できるのは……同じ人殺しだけだ。

音葉は僕に向き直り。

「これからも緋姫ちゃんを……お願いね。人の命の重みを知っている綺羅衣君になら……後顧の憂いなく任せられるよ」

僕はその言葉に対して、かけるべき返事はただ一つのみ。

「……ああ、任せとけ。緋姫も世界も……どっちも捨てたりなんかしない。これからも。いつまでも」

僕には、こんなにも仲間がいる。気が付かないうちに、僕はこんなにも仲間にも恵まれていたんだ。

ナツメ。君の言う通りだったよ。僕には大切な人、護るべき大事な人が、見つかったよ。

要。僕はこれからも、この人達を護っていく。
助けていく。

世界を救う。

それが僕の仕事タスク、なんだろう？

全うしてみせるとも。貴方の遺志を……受け継いで。

Episode 8 : NUMBERS - end

8・番外その貳「全うしてみせるとも」(後書き)

三度目の幕間劇、今回は一章まるまる使って綺羅衣パーティーの面々が勢揃いです。前章でも言ったように、ここから先は敵しか出てこない(予定)ため、頑張って書いていきたいと思います。

9 - 1 竜虎にまつわるえとせとら「決め台詞」(前書き)

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・半角の() で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・全角の() で書かれている部分は主人公の情景補足
- ・《》で書かれている部分は傍点(強調)

9 - 1 ・竜虎にまつわるえとせとら「決め台詞」

*

「というわけで、いくつか決まり事を決めようと思うの」

事の発端は九月二十五日火曜日。私立相楽森学園に於けるクラスメイトであり僕の恋人である緋姫（ひめ）との暫定的な同棲生活が始まった二日目の朝。僕が用意した朝食を平らげ台所で食器洗いをしているところに背中からかけられた一言が始まりだった。

「は？ 決まり事？」

僕は水を一端止め、肩越しに振り返る。というわけで、も何もない、この会話はそこから唐突に始まったのだから（いつものことである）。

そういう緋姫の格好は、僕のダボダボシャツでもジャージでもなく、いつもの白地長袖のブラウスに濃紺のフレアスカート。彼女にとつてのスタンダードな私服である。いつまでも僕の服を着せているのはまずいだらうと、昨日和解した音葉（おとば）に連れられて服や下着、当座の生活用品その他諸々を買い出しに行った。らしい。僕は同伴させてもらえなかった。まあそれも当然ではあるだろう。男子である僕がランジェリー売り場などにずかずかと入り込むわけにはいかないし、個人的にもまっぴらごめんだ。帰ってきた時には、お前達はいつたい何を買ってきたんだと問いを投げかけたくなくなるくらいの大荷物だった。基本的に中身は衣服関係だらうからそれほど重くはないのだろうが、荷物持ちくらいなら僕も手伝ったのに。

ロマンが一つ潰えたのは、致し方ないことだろう。

「ええ。これから一緒に一つ屋根の下で暮らしていくに際して、いくつかの最低限の決まりは必要でしょう？ そういうところがしつかりしていないから、同棲を始めても喧嘩別れするパターンが多いと思うの」

「まあ……ある程度の規則は設けるべきではあるだろうけど……」

僕は食器を清潔なタオルで乾拭きしつつ、そう答えた。尚、和食派の彼女に合わせて朝食を和風にしてみた。おかげでいつもよりも時間がかかってしまったが。

「というかこの女、完全にしばらくは僕の家に住座る心構えでいやる。自分で生活空間を確保するという選択肢はないのだろうか。

……ないんだろうなあ。

「そういうわけだから、こんなこともあるつかと私から翼たすくとの同棲生活にあたっての決まり事をいくつか箇条書きにしたものがここにあるわ」

そう言っ取り出したのはA4サイズのルーズリーフ。相変わらず行動が突飛で用意周到すぎる。

台所での炊事を終えた僕は、卓袱台を挟んで緋姫に向き合って腰かける。

「……それで。その決まり事とやらはどんなものなんだ？」

言うまでもなく僕は嫌な予感をひしひしと感じている。

「まあ必要最低限のモラルばかりを書き連ねたものだけねど、綺羅きり衣家えでどうしても譲れない箇所があったら指摘してくれていいわ。

私だって、無理に決めつけようというつもりはないのだから」

「まあ分かったから。とりあえず読み上げてみるよ」

ルーズリーフは向かい合って座っている僕側は白紙なので内容は見えないが、その裏にはびっしりといくつもの項目が書いてあるのだけは分かる。

「じゃあとりあえず読んでいくわね。」

基本的に炊事は翼、掃除洗濯は私がすること。

食事は毎日三食とること。

お風呂は毎日沸かすこと。

お風呂に入るのは基本的に翼が先であること。

朝起きた時の挨拶は『トウス！』とすること」

「うん、ちよっと待とうか」

免疫がついてきたのか、今では比較的緋姫の下らないボケに対し

ても冷静にツッコむことができるようになってきている。

慣れとは恐ろしい。

「四つ目まではまともだったよ、確かに。でも最後のは駄目だ。僕の家がどうこうとかいう以前に某人気芸人のパクリでしかない」

掃除はともかく、洗濯となると、緋姫の下着まで洗わないといけなくなるからな……。僕としてはとてもじゃ……。あるけど、正気ではいられない。

「なんですって。私が寝る間も惜しんで必死に考え抜いた拳句に思い付いた超ナイスなアイデアだと思っていたのに」

「嘘だろ？ 知ってただろ？ 絶対確信犯だろ？」

「彼女を疑うの？」

「疑う疑わない以前の問題だって言ってるんだよ」

大体、朝起きた時に開口一番そんなことを胸張って叫ばれたら、びびる。

というか、普通に引く。

そんな彼女は嫌すぎる。

「仕方ないわね……。これは削除、と」

本当に残念そうな顔を浮かべつつ、緋姫はその箇所にはツッコミを付ける。

「それじゃあ次いくわね。」

夜寝る時の挨拶は『代打バース！』とすること

「うん、ちよっと待とうか」

早速だが、ツッコミどころが多すぎる。

「それ、とあるゲームに実際出てきたネタだから。それに、その言葉は『おはようございます』に聞こえるべきなので、夜の挨拶としてはまるつきり正反対の単語だ。夜寝る時にそんな挨拶されたら、気になって眠れない」

「なんですって。私が寝る間も惜しんで必死に考え抜いた拳句に思い付いた超ナイスなアイデアだと思っていたのに」

「嘘だろ？ 知ってただろ？ 春原知^{すのはら}つてて恭介^{たけひこ}知らないわけない

よな？」

「妥協点として、『おれ斉藤っす！』も考えたのだけれど、これも駄目？」

「だめ。それ真人まことが考えたネタだから」

「仕方ないわね……。まったく、注文の多い男だわ」

注文が多いんじゃないじゃなくってお前の発想がありえないだけだ。緋姫は仕方なくその項目にもバツ印をつけた。

「じゃあ次いくわよ。」

朝の起床時間は七時半とすること。

登校は必ず一緒にすること。

テレビのチャンネル争いはご法度とすること。

女の子の日には性行為はなしとすること

「うん、ちよっと待とうか」

毎日のように行為に及んでいるような言い方をしないでほしい。

極めて健全なお付き合いをさせて頂いているつもりだ、少なくとも僕は。

そもそも、女の子の日、などというあからさまな発言は慎むように。

「仕方ないわね……。これもバツ、と」

そう言っつてルーズリーフにボールペンを走らせる緋姫。

「女の子の日でも性行為はしてよいとすること、と」

「そろそろキレてもいいと思うんだ!!」

むしろこれまで粘ってきた自分を褒めてやりたい。

基本的に反復技法は三度までと相場が決まっているのだ。

「冗談は倍額」

「増えた!？」

「嘘よ。さておき」

「そのやりとり、実は密かにブームになっているだろう……」

「所長さんが私のネタをパクるからいけないのよ」

「もついい……。僕が流れに乗れないということと勘弁してお

く

「続けていいかしら？」

「好きにしてくれ……」

「じゃあ次。」

血を吸うのは、五日に一度とすること」

今度は思ったより普通だった。ナンバー？^{テン}『ヴァンパイア』の輝^カ夜^{キョウ}緋姫の吸血衝動を抑えるためには、僕の血液供給が必要不可欠なのだから。

「これに関しては、異論はない？」

「ああ、ないよ。その代わりに、また暴走されたりしたらたまったもんじゃないから、ある程度にまで控えておくこと。これが第一条件だ」

「分かったわ。それじゃあ次ね。」

一の倍数と一の数字が付く日には綺羅衣翼がアホになること」

「うん、ちよっと待とうか。それ、毎日だよ？ 僕、毎日アホにならないといけないってことだよ？」

「翼は元からアホだから、こんな項目あってないようなものだけだ」
「ど」

「僕はお前にそんな目で見られていたのか！？」

「なによ。不満？」

「不満たらたらだ！」

「一応理由を話しておくわね。私が楽しいからよ」

「なんの捻りもねえ！ 却下、却下だよ！」

「ちっ……分かったわよ……」

これ見よがしに舌打ちをしつつ、緋姫はその項目にみたびバツ印をつける。

「それじゃあ次。これが最後よ。」

輝夜緋姫の決め台詞を決めること」

「……ぱーどうん？」

「決め台詞よ、決め台詞。あるじゃない、主人公とかヒロインとか

には、ここぞという場面でビシッと決まる決め台詞が。私の場合、これまで名台詞はたくさん残してきたつもりだけど、決め台詞はまだないわ」

「お前の場合、名台詞というよりは迷台詞だよ……」

「とにかく。翼の場合はあるじゃない。『貴様を……消去する』とか、『僕は不敵に笑って言い放った』とか。もつとも、後者は正確には地の文だから、厳密には台詞ではないけれど」

「地の文って……。まるでこの世界が小説の出来事みたいな言い方するな。違うだろ」

「……多分な。」

「この手のネタは、三回がお約束なのである。」

「これもいくつか候補を考えてきたから、この中から決めることにするわ」

「因みに、これは却下できないのか？」

「まず一つ目」

「できないらしい。」

拒否権を与えてくれることすらなく、強引に進める緋姫様。コホン、とわざとらしく咳払いをして、彼女はやおら真剣な顔で言い放つ。

「『じつちゃんの名にかけて！』」

「やっぱパクリだ！ しかもお前がそれを言ったところで、説得力は欠片もない！」

「自分で殺したくせに。」

「僕は知ったこっちゃないが、お前本気でそれを決め台詞にすると、後で絶対後悔するぞ」

「……確かに。それじゃあ、候補その二」

「再び大きく息を吸い込む緋姫。」

「『真実はいつも一つ！』」

「それもパクリだよ！ どうかから引用してきたら二番煎じにしかならないだろうが！」

「なんなの翼。さつきから私の言うこと成すこと全否定してばっかりで。私のこと嫌いななの？」

「いや、好きだけどさ……」

「好きなら好きって言って頂戴。さもなくば……撃つわよ」

そう言つて、緋姫は徐に銃を取り出した。

「って銃！？ どっから出したそんなもん！？ しかもなんでそんなもん持つてるんだ！？」

「ああ、安心して。これは腕時計よ」

「そんな奇抜な形をした腕時計があつてたまるか！」

「翼。貴方はまだ人生経験が浅いから分からないのも無理はないわ。でもね、世の中には秘密結社に謎の薬を飲まされて身体が縮み、実家の隣に住んでいる博士に色々な秘密道具を發明してもらう高校生探偵もいるものよ。というわけで、麻酔銃型腕時計、乙女の必須道具よ」

「逆！ やつと凶器じゃなくなったと思つたのに、形状はやつぱり凶器！ ていうか、そんなもん持ち歩いてる見た目小学生は真つ先に黒の組織に消されるよ！ ついでにそんな發明した博士も消されるよ！」

「コナン君も、そろそろ元の身体に戻るの、諦めたらいいのに……」

「だめ！ それだけは絶対に言つちゃだめ！ 子供達の夢をぶち壊しにするような発言しちゃだめ！」

「蘭ちゃんに至つては角まで生えてるし……」

「角じゃないよ！ あれはああいう髪形なの！！」

「小五郎のおつちゃんに至つては、中の人まで変わつちゃうし……」
「仕方ないんだよ！ 元祖中の人はキン肉バスター使つたりトマホークブルーメラン投げたり世紀末を救世する主やつたりして色々頑張つたんだよ！」

「というよりそんなことはどうでもいいのよ。好きなら好きってばつきり……って。え？ 好きなの？」

「長えよ！ そして遅えよ！」

ノるのが。そしてツツコむのが。
かつてない壮大なノリツツコミである。

「そう。翼は産まれてはじめてできた彼女に五里霧中なのね」

「いや。迷ってはいるし漢字も違うから」

「やれやれ……、候補その二も却下されてしまったわ……しょんぼり」

「お前のボキャブラリーの中に『しょんぼり』なんていう殊勝な言葉があったことに僕はびっくりだよ……」

「仕方ないわ。候補その三。これには自信があるのよ」

「僕は不安でいっぱいだけど……。一応言ってみる」

「ええ。……コホン」

気を取り直すように咳払いをすると、緋姫はかっと目を見開いて叫んだ。

「『じつちゃんはいつも独り!』」

「寂しい! それだけはやめてあげて! なんなら僕が付きつきり看病するから! 悲しすぎるよ!」

「えー」

「えー、じゃない! そんな発言を決め台詞にしたら、孤独死するじいちゃんがいっぱいになるだろ!」

「これは会心の自信作だったのに……どうしてもだめ?」

「だめ」

「はあ……。ものの見事に空振りばかりね……。こうなったら、候補その四を出すしかないようね」

「まだあるのか……僕は朝っぱらから疲労困憊なんだが……」

「因みに、これはかなりの自信作よ。ちょっと長いのが玉に瑕だけれど」

「お前の自信は、常に僕を不安にしてやまないんだが……。まあいい、言ってみる」

「『私の反応は二百を超えているから……一ターンに二回行動が可能なんだぜ』」

「昔のスパロボかよ！ 今の十代の子供は多分ほとんど分かんねえぞ！ しかも口調が変わってんじゃねえか！」

えーとな、意味が分からない人のために説明。昔のスーパーロボット大戦シリーズ、厳密に言うと までなんだが、パイロットのステータスに『反応』という数値があったのである。これは命中率や回避率に影響する重要なパラメーターであると同時に、この数値が二百を超えると、なんと毎ターン二回行動できるようになるのだ。

精神コマンド『覚醒』を使ったのと同じで、所謂リアルロボットのパイロット ガンダムとか魔装機神まそうきしんとかはこの上昇率が高いからかなり重宝されたものだ。流石にゲームバランスが壊されかねないと判断されたのか、外伝になると同時に『防御』というパラメーターに変わって、今度は装甲の厚いスーパーロボット系の機体に重きを置かれるようになったという次第だ。以上、解説終わり！

おそらく、スパロボについてここまで熱を籠めて語った主人公は僕だけだ！

なんで第一章からの登場人物であるところの音葉の人物紹介と同じくらいの文字数使わないといけないんだ！

満足かこの野郎！

「つまり却下ということ？」

「当たり前だ！」

「ちっ……、やはり長いのが足を引っ張ったわね……」
そういう問題じゃない。

というより、決め台詞を言っている時はどんな悪人も手出しできないのがお約束だから、そこはあまり問題じゃない。

「それじゃあ、候補その五。これは叫ぶタイプのものじゃないわ。不敵な笑みを浮かべつつ口にするのがベストよ」

「分かった分かった。乗りかかった船だ、最後まで付き合っ
てやるよ」

「『聴かせて頂戴。貴方はどんな断末魔を上げるのかしら？』」

「」

「……………」

「……怖えよ！」

リアルで身が震えた。

平坦な口調で言うもんだから、一層重みがある。

乗りかかった船が、タイタニックだったような気分だ。

「どう？ 個人的には、不敵な笑みを浮かべつつやるのは翼とかぶるから、あまりオススメできないのだけれど」

「……いや、確かに減点方式でいくなら、今までの中では断突で一番なんだが……」

「本当にこんなのでいいの？ もっとえげつない自信作をまだあと百三個は考えているのだけれど」

「是非それにして下さい！」

お前の煩惱は全て決め台詞でできているのか！？

こんな下らないやりとりを百回以上も続けられては堪らない。

どうせ、使う機会なんてまずないだろう決め台詞だろうしな。ここらで引き際をということにしよう。

「決まりね。私の決め台詞は『聴かせて頂戴。貴方はどんな断末魔を上げるのかしら？』に決定。どんどんぱふぱふ」

一人テンションが高い緋姫の煽りを僕は盛大に無視して。

「ところで緋姫。僕も今気が付いたんだが、残念なお知らせがある」「なに？」

僕はちらりと壁にかかっていたアナログ時計（電波時計）に目をやる。

八時十五分。

学校の始業時間は、八時二十分だ。

ここから学校まで、どんなに急いでも十分はかかる（言うまでもなく限定解除すればその限りではないが、今の僕はそこまで回復していない）。

僕はため息を吐きつつ言った。

「遅刻確定だ」

実川音葉にまつわる伝説を、ここでもう一つ付け加えなければなるまい。

今日の昼休み。僕と緋姫と音葉は、文化祭の実行委員会関係のままとまりがてら　もつと言うなら、今朝の二人揃つての遅刻に対する、パーフェクト委員長からのありがたいお説教がてら　教室で昼食をとっていたのだが、そこで僕はふとある疑問を思い出した。「そっぴや音葉。お前この間、『リジエネライト』は元々救急用に産み出された能力だ、って言つてたよな？」

他のクラスメイトにナンバース関連の情報を漏らすのは非常に宜しくないことなので、僕は気持ち声を小さくして質問した。

「言つたけど、それがどうかしたの？」

因みにだが、委託された『リジエネライト』自体は、既に　正確に言うなら、『ヴァンパイア』の暴走を食い止めた後で『ヴォイド』を解き、音葉が緋姫用の日傘を持つて相楽森学園に駆け付けた時点で　返還してある。

「だったらさ、当時の科学者達がむざむざ手放すのはおかしくないか？　いくらそれしか成長が見受けられなかったからって……、あんな致命傷すら即座に完治させる再生能力、医療の現場に持つていけばほとんどの問題が一瞬にして解決するぞ」

禁則事項、ナンバー24『リジエネライト』の委託。それがなかつたら僕は今頃閻魔様とフレンドリーな間柄を築いていたことだろう。それほどまでに、凄まじい回復能力。

たとえ身体能力の発展がなかったとしても　例えば、RPGで攻撃力も防御力もないけど、回復魔法のおかげで重宝される僧侶のように　、『ナンバース・チルドレン計画』の重要なポジションにいたとしてもおかしくはない。実際、彼女は二十四番とかなり早期に造られている。要や真田正長博士が（轟は『無能』と蔑んでいたが）手放す理由はどこにもない。

そう思つて指摘したのだが。

「……綺羅衣君、ちよつと顔貸して」

……音葉に喧嘩を売られた。

何故正気を保つていられよう。

綺羅衣翼六歳、生涯最大の汚点である。

「緋姫ちゃん、ちよつとここで待つていてくれる？」

「え？ ええ……構わないけれど……」

茫然自失とする僕には目もくれず緋姫に一言断ると、音葉は本当に席を立ち教室を出ていつてしまった。

僕は夢遊病者のような足取りで後を追うしかない。

この後、僕が正気を取り戻すまでに六分と三十八秒を要するのだが、割愛（そんなこんななやりとりがあつたと思つてくれればいい）。

「綺羅衣君。君は私を死なせたいのかな？」

「はい？」

正気を取り戻した矢先、僕はそんな意味不明な言葉を浴びせられる。

まだ完全に正気ではなかつた わけではないらしい。

「……まあ、私の言葉不足もあつたのかもしれないけど。もう少し思考を巡らせてほしかったな」

「そりゃ、お前みたいに十ヶ国語もマスターしてる頭と同列に語られたら僕の思考能力は残念だろうけどさ……」

「十ヶ国は言い過ぎだよ。何を指して『マスターする』というのかは分からないけど、ネイティブの人と対等に会話することができるのは精々が七ヶ国、四ヶ国が日常会話レベルかな」

……十分と言わず、十二分と言わず、十五分くらいに凄い。

「言つたでしょう？ 他人に委託している間は本人のセラが喪失する、って。セラってとどのつまり、精神力でしょう？ 精神力とは、即ち生命力だよ。それが全部喪失したらどうなると思う？ 綺羅衣君の『エナジードレイン』みたいな特殊能力でも使わない限り、《

全セラの喪失とは極論、死亡に等しい意味合いを持つんだよ」

「あ……」

そついう……ことか。

《つまり音葉は》。

「お前……、まさか、死ぬつもりだったのか？」

今の言葉を紐解くに、コイツは僕に命を譲り渡したということに他ならない。

「それこそ、まさか、だよ。自殺は殺人と同罪だよ。殺人は悪いことだもの。私がするはずないでしょう？ 《命懸けの博打ならまだしも》、ね」

「……っていうことは、お前はナンバーズとしての能力を、故意に暴走させた、ってことなのか？」

「平たく言えば、そついうこと」

……一か八かの勝負に挑んでいたのは 音葉も同じだったのだ。僕と、緋姫だけではなく。

この女は……本当に、比喻でも誇張でもなんでもなく、《他人のために命を懸けられるのか》。

真性の おひとよし。

「尋ねられたから言うけど 恩着せがましいとか思わないですよ？ 本当に綱渡りだったよ。綱、っていうより、ここは綺羅衣君に因んで糸、かな。糸渡り。うん。そんな感じ」

ただし、その糸は、僕の糸とは似て非なる物であるよういで、実のところ似ても似つかない。

いつ途切れるかは誰にも分からない、細く、か細く、か弱い糸くずだ。

「こうして言うのもなんだか面映ゆいよ……。緋姫ちゃんの前でなんか言えるわけがないでしょう？ 絶対に引け目を感じるに決まってるじゃない」

「そつか……、そつだよな……」

僕の恩人は、実川音葉であり。

緋姫の恩人は、ナンバー24なのだ。

「ごめん……、興味本意で訊いていいことじゃなかった」

「……反省してくれているのなら、別にいいよ」

気まずい雰囲気が出る。

昼休みの騒々しい廊下の雑踏から、異空間へと迷い込んでしまったようだ。

それを打ち破ったのは やはりと言うべきか、意外にも言うべきかは判断に迷うところではあるが 音葉の方だった。

「じゃあ、私も一つ質問していい？」

「一つでも二つでもいくつでも。好きなだけしてくれ」

「綺羅衣君のお父さんって……、奇羅衣要博士？」

「え……？」

どうして……音葉がその名前を知っている？

「奇羅衣の『奇』は綺羅衣君の『綺』じゃなくて、糸編がついていない方。奇跡の『奇』で、合ってる？」

「合ってる……けど」

「はじめて名前を聞いた時から、疑問には思っていたんだよ。……

でも、綺羅衣君はこれまで敢えてその名前を出そうとしなかったから、それが分かったから。そして、私自身、ちよつと記憶が曖昧だったから、訊けなかったけど。昨日の夜、お父さんとお母さんにも確認したから間違いない」

そこで一度、音葉はしつかり言葉を切る。

「正しいことは正しい、悪いことは悪い。《その言葉を私に教えてくれたのが、奇羅衣要博士だった》」

音葉の両親は 末端とはいえ、『ナンバーズ・チルドレン計画』の関係者だ。最も中枢にいた要と面識があったとは思えないが、権威的学者として、そして、《自らの娘の教育責任者として》、要のことを知っていたというのは想像に難くない。

音葉の矜持、否、根底。否々、全てと言っても過言ではない

概念。

それを教えたのが……要だったのだ。

なんと数奇な巡り合わせか。

僕の恩人が、音葉であり。

音葉の恩人が、要であり。

要が、僕の

……だが。

「……“お父さん”、って考えたことは、なかったな」

確かに、僕は要の息子だろう。

だが、《僕の父が要であるとは考えたことがない》。

甚だおかしく矛盾した話ではあるが、実際そうだ。

「そう……そっか……。奇羅衣博士は 亡くなったんだね」

憂いを帯びた顔で、音葉は口にして。

「ああ。僕が……殺した」

震える心を堪えつつ、僕は口にした。

「これも、怒るか？」

そう問うた僕に対し、音葉は首を振る。重々しくも、厳しさを感じさせない顔で。

「確かに人殺しは悪いことだけど

それを裁くのは私じゃないか

ら。その罪は、綺羅衣君自身がよく理解して、反省して後悔してい

るでしょう？ だから、私には怒れない」

その言葉は。

ある意味、何にも勝る罰 だったのかもしれない。

「そろそろ教室に戻ろう？ 緋姫ちゃんが心配しちゃうよ」

「……ああ。そうだな」

先導して歩き出す音葉と。

黙ってそれにつき従う僕。

だが、一步を踏み出したその時 不意に音葉は立ち止まって、

「でもね」と背中越しに呟く。

本当に僕に向けた言葉だったのかどうかは、分からないが。

「奇羅衣博士は……間違いなく綺羅衣君のお父さんなんだよ。綺羅衣君の中に……奇羅衣博士は生きているもの」

9 - 1 竜虎にまつわるえとせとら「決め台詞」(後書き)

久々に かどうかはちょっと微妙ですが、日常シーンです。前半で緋姫との絡み、後半では音葉の伝説が追加されます。次章ではまたコロツと変わってバトルを予定しています。今の翼は疲弊しているので、どう乗り切るのでしょうか……、案外、思いもよらぬ増援が登場するかも、しれませんよ？

9・2・「物は試し、というもので」強襲（前書き）

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・半角の（ ）で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・全角の（ ）で書かれている部分は主人公の情景補足
- ・《 》で書かれている部分は傍点（強調）

9 - 2 ・ 「物は試し、というもので」強襲

＊
物は試し、というもので。

物語を構成する上で重要となる四文字熟語、『起承転結』の『転』と『結』を入れ替えてみた。

そのバチが当たったというわけでもないのだろうか。
僕は今、とんでもなく危機に瀕している。
ネタではない。

動物的に、生命的に、非常に危ぶまれた状況下に陥っている。
やはり過程を省いてはいけないということなのだろうか。それは
それとして、どうしてこうなったのかは、少なくとも記述しておか
ねばなるまい。

昼休みの音葉との会話を終え、午後の授業もHRも滞りなく終了し、放課後になった。今日九月二十五日火曜日の放課後には、来月末に行われる私立相楽森学園文化祭実行委員会の会議がある。高等部三年B組実行委員の一人である僕も、参加する。のが当たり前なのだが。

実は、一人帰途についている僕がいた。

堂々のサボタージユ、などではない、念のため。音葉の手前、そんなことをやらかすほど、僕は命知らずでも怖いもの知らずでもない。かといって 第一章冒頭ではないが 突然入った急用で事務所に呼び出されたわけでもない。……もっとも、行き先がUN事務所であるということは、奇しくも一致しているのだが。

今日は、サーチャーでの二度目の定期診断の日なのだった。一昨日に第一回目をやり、その二日後というのは慎重を期しすぎている気がしないでもないが、『アナリシス』曰く、こういうものは、まずは高頻度で診断を行いつつ回復を見計らい、徐々に間隔を伸ばし

ていくもの　なのだそうだ。相変わらず無駄に声大きい彼女の言う発言は、やけに威圧感があつて逆らいがたい迫力がある。

「……ふむ」

診断も終わり、報告書（この場合はカルテというべきか）を所長に提出すると、彼は良くも悪くもないといった雰囲気で頷いた。

「……実際どうなんだ？　僕としてはこんな状態はじめてだからさ、自分でもよく分からない。確かにセラが足りていないような感覚はあるんだけどさ」

「確かに、今のお前の体内を流れているセラは、全開時の一パーセントにも届いていないな。封印するまでもない。いつそのこと、無い、と言つてしまつても構わんくらいだ。こんな状態のお前に仕事を持ちかけるのは、事実上不可能だな。戦闘行為に関しては論外だ。ナンバーズはおるか、下手をすればそこら辺を歩いている通行人Aにも負けるぞ」

「マジで？　普通に身体を動かす分には……確かに若干重たい感じもするけど、普通にできるぜ？」

現に、学校からここまでいつもと変わらず三十分前後で着いた。

「それは、お前が常日頃からかけている限定封印のせいだろうな。確かに、身体能力そのものは成人男性と大差はない。しかしだな翼私も知らなかったことではあるのだが、お前の場合、どうやら普通のナンバーズの身体能力とは性質タイプからして違うらしい。通常のナンバーズの身体能力は“底上げ”することによってそれを増加させているが、お前の場合は“上乘せ”をすることによって強化させている」

「“底上げ”と“上乘せ”？　どう違うんだ、それ」

「通常のナンバーズ　ここで言う『通常』とは、私や音葉のように身体能力向上がうまくいかなかった失敗作ではなく、成功体のことだ。それらは《純粹に》身体能力が高い。逆説的に言えば、手加減できる最低ラインが高い　それこそ、ギネスブックに載るとしたら前人未到の快拳を成し遂げることができてしまうくらいに。冗

談半分で相手を小突いたら誤って殺してしまいかねないくらいに。

お前が今まで消去^{デリート}してきた暴走ナンバーズは、ほとんどがこの手の力に呑み込まれてしまった連中だろうな。……本当の成功体、良い例がシヨットだが、あの辺りはそういう匙加減がうまくできている」「えつと……、ちよつと待てよ……」

長々と説明されたが、要約すればそれは。

「『通常』のナンバーズは《手加減ができない》。できたとしてもそれは常人を遙かに超えた力であり、それを無理にコントロールしようとするから暴走する、っていうことか？」

「ああ、その解釈で間違っていないだろう。そういった意味での“底上げ”だ。

ところが、お前の場合は、さつきも言ったように“上乘せ”。おそらく奇羅衣博士のことだ、そういったところが問題点であると気付いていたのだろう。翼、お前の持つ、本当の意味での《純粋な身体能力》は成人男性のそれと大差ない。そこに、お前に流れる膨大な量のセラが上乘せしてくるから、絶倫なものになっているというだけであって、決して身体能力そのものがずば抜けているわけではないのだ。即ち「

「《暴走の心配がない》、ということか」

『エナジードレイン』の暴走。

それは、《あの手紙に書かれていたケース》しかあり得ないということだ。

「故の、限定封印というわけだ。必要な場面に於いてのみ必要な分だけのセラの封印を解除し、肉体機能を強化して戦闘に備える。暴走を抑えるための処世術としては、この上ない上策だよ」

「成程ねえ……。……って、ちよつと待った所長。今の僕は限定封印するだけのセラすらないんだろ？ 僕も乗っかつちやつたから突っ込めなかつたけど、話がかなり脱線してんじゃねえか」

「む。言われてみればそうだな。すまんすまん」

UN事務所所長、真田真正^{さなだまこと}。仕事もできて理解もある上司。今

にして思えば、理解があるのは当然。彼自身ナンバーズ、ナンバー？『ロックオン』なのだから。思い込みが激しく、すぐに会話が脱線するのが玉に瑕というのがこの男の公式設定だった。すっかり忘れていた。

「当面は　まあアナリシスからも直接聞いてはいるだろうが、自然回復を待つのが長い目で見れば最善策だ。私もお前に仕事を振らないようにするから、しばらくの間休暇をとって安静にしているといい。そうだな、ひと月もすれば全快するだろうから、それまでの辛抱といったところだな」

「結局、待つことしかできないのか……。待つのって、苦手なんだよな」

何故ならば、産まれてこの方、ほとんど“待つ”という動作をしたことがなかったから。誕生から三年間は鍛錬に明け暮れていたし、施設を出てからはUN事務所に入って三日目で初仕事　『リジエネレイト』と邂逅していたからだ。

「確かに、お前の出自を考えると、待機という状態は最もストレスがかかる場所かもしれないが、頑張つて耐えてくれとしか言えん。まあ、当分は平穩無事な学園生活というものでも満喫するといい」

そう言われて、家路につく。秋らしく夕暮れが短い、外に出る頃にはすっかり陽は落ちて、町の灯りがぼつぼつと灯り始めていた。これからどんどん寒くなっていくのだろう。僕の正確な誕生日は知らない　というか、定かではない。僕が自発呼吸を始めたのが最初か、綺羅衣翼　否、当分はまだ奇羅衣翼か　という個体が試験管の中で完成したのが最初か、はたまた細胞の一つが完成したのが最初か。その辺りの具体的な線引きが不明瞭だからだ　が、そろそろ丸六年目にはなるのだろう。

まだ六年、か。

もう六年、か。

どちらでもあるといえよう。普通の人間なら、小学生になる年齢

である。そう考えると、僕という存在がとことん異常であるのが分かる。

「……父親、か」

昼、音葉に言われたことを思い出す。

僕は、要のことをどう思っているのだろうか。

つい先日までは、憎むべき対象、綺羅衣翼にとつての絶対悪であったはずだ。ところが、要の遺言状により、その価値観が一変してしまった。勿論、あの遺言状を一から十まで額面通りに受け取ることはできるのかと問われれば、そんなことはないだろう。だがあれを、所詮は故人の戯言、と切り捨て破り捨てることができぬのもまた事実だ。少なくとも、僕にとつて唯一にして絶対的の悪であったはずの奇羅衣要は、相対的なそれへと意味合いを変えたのだった。僕の対人関係は、決して多くない。

音葉は恩人。

シヨットは同僚。

轟と釈迦堂は……なんだろう、まあ、広義では仲間とっていいだろう。

所長はあくまでも所長だし。

ナツメは師であり、母であり、姉だ。

そして、緋姫は、僕がはじめて好きになった人だ。

だが、要は。

「……ん？」

緋姫？

そういえば、僕はとても大切なことを忘れていたような気がしてきた。

もう夜だ。会議はとくに終わって、緋姫も家に　僕の家に戻っているだろう。

今朝、遅刻が確定したからというわけではないが、習慣として家の施錠は完璧にしたのははつきり覚えている。

そして、緋姫が僕の家を鍵を持っているはずがない　同棲二日

目にして持っている方がおかしい。

結論。

綺羅衣翼は輝夜緋姫を、家の前で待たせている。

……もしかして いや、もしかしなくても。

「僕……ピンチか？」

緋姫のことだ、待ちぼうけを食らったともなれば、それはもう喜々として鬼の首を獲ったように僕を責めることだろう。次につく呼称は、犬か、ミジンコか、ミドリムシか。どうしよう、せつかくちやんと好きになったのに、名実ともに産まれてはじめてできた恋人にそんな呼び方されたら、六歳という未発達な心に生涯消えることのない傷が刻み込まれるかもしれない。

と、いうわけで。僕が次にとった行動は。

……。

……。

「……ダッシュー！」

走る走るただ走る。メロスも真つ青なくらいに、マリオがスターを取った時くらいに走る。成人男性と同等の身体能力だろうがなんだろうが知ったことか。そんなもん根性でなんとでもしてやる！ 潜在能力なめんなコノヤロー！ よく思い出せ、孫悟飯そんごはんには生まれながらにして父親すらも圧倒する力を秘めていたではないか！

そうして折れた曲がり角の先。

ソイツは、悪魔のように立っていた。

「」

何を驚くことが、と人は思うだろう。どんな優れた視力を以てしても（そういえば、感覚器はセラによる補正を受けられないらしい。純粹に人間離れしている）曲がり角の向こう側を見通せるわけでもないし、今立っているこの道路だって、何も僕専用の道というわけでもないのだ。今はたまたま通行人がいないというだけで、普段なら

誰がいてもおかしくはない。強いておかしいところをあげるとすれば、ソイツ　女性の容姿が少しおかしい。全身にフィットしたタイツのようなぴっちりとした服装、そのためそのスレンダーな体型がはつきりと分かる。足は何故か足袋、そして、額には鉢巻が巻かれている。新体操か何かの練習の帰りで、これはその衣装だと言われれば信じられそうな、極度におかしなものだというわけではない。だが、五感は無魔化させても、第六感　《セラを司る感覚器》は、事ここに至って取り返しをつかないレベルにまで無魔化しが利かない。ついさっきまで発動してさえいなかった感覚器。それが突然、何の突拍子もなく、強引に開かれた扉のように発動したのだ。つまりこの女はついさっきまではそこにおらず、僕がこの角を曲がると同時に、《一瞬にして出現した》ということに他ならない。

「……むてこち」

開口一番、ソイツは何事かを呟いた……が、何と言ったのかは僕には分からない。どこか異国の言葉だろうか。

それは結局分からないままだったが、一つ確かに分かったことなら、ある。

《コイツは敵だ》。

女は、頭に巻いていた鉢巻をとる。そこには。

「イエナ・カベ・ニアビー『オニズーバロウア』ぢに？　ヲチスはニアビーフィアベ『リウナヌアゲ』。……やっなや、ヲチスのさなびるきうどくれひぜやにうき」

やはり意味の分からない発言をしつつ鉢巻を外した、そこには。

「ナンバー……？　！」

額に描かれていた数字、就中、ギリシャ数字の刻印。それは、紛れようもない第一期ナンバーズの証。セラが安定していないが故に、危険度が高いとされる　二日前にその事実を文字通り痛感したファーストナンバーズとの、あまりにも唐突すぎるエンカウントだった。

だが……おかしい。ファーストナンバーズの生き残りは二人だけのはず。既にナンバー？と？が存在している以上、それ以外の生き残りがいるなど。

（違う！）

そうではない、本来《ナンバー？は破棄されて存在しないはず》の欠番　！　ということとは、ファーストナンバーズの《本当の》生き残りは？と？の二人なのだ　！　そして、それが今まさに、僕の目の前に確たる敵意を以て起立している。

……それはそうと。

（額に、？つて……）

コン・バトラーVかよ。

これはないだろう……センスがひどすぎる。

……だが、笑うな。

ここはシリアスな場面なのだ。

そんな行為は許されない。

「イエナ・カベ・ニアビー」「オニズーバロウア」、くしみはうはつんやりうぬくち。えりむひにうぎ……すあどやりえ」

相変わらず言っている内容は理解できないが、ナンバー？はその言葉と殺気だけを残して　。

《消えた》。

そして、次の瞬間には僕の目の前に迫ってきていた。

「　！？」

咄嗟に僕は後ろに飛び退く。更に次の瞬間には、ナンバー？は僕の顔を狙った横薙ぎのブローを繰り出していた。完全にまぐれだったが、後ろに避けたのは正解だった、左右に避ければ拳が命中していただろう。

しかし、今のは！

（瞬間　！？）

完全に音速は超えていた。

だが……緋姫の時とは違い、『音の壁』を突破した音は響かなか

った。

物理法則を無視している。

それは 幾何学要素を無視する僕の切り札・瞬転とあまりに似通っていた。

だが、似て非なるものだ。何故なら。

ヤツは、《それを二回連続で行ってみせたのだから》。

僕が回避した攻撃が当たらないと分かったナンバー？（能力名は未だに分からない）は、再び超高速で最初にいた場所まで移動していた。

むしろ、僕の錯覚だったかのように 僕が勝手に攻撃されたのだと勘違いして後ろに飛び退いただけで、実際は何も起こらなかったかのように。本当に、一瞬の出来事だったのだ。

それでも、移動したセラの残滓だけは、欺きようがない。ヤツは間違いなく物理法則を無視した超高速で肉薄し、僕を攻撃して、元いた場所に再度戻ったのだ。

雷光の如き速度で行われる、ヒットアンドアウェー。能力の詳細は不明だが……、『ヴァンパイア』ほどではないと希望的観測をしても、怪物的な存在であることに変わりはない。対する僕は、セラをほぼ喪失し、身体能力も常人レベル。『エナジードレイン』は使えるだろうが、その能力も触れなければ発動できない。触れる、というだけの行為。しかしこの場に於いて、それは雲を掴むどころか光を掴むような話である。

その両者の差の……なんと大きいことか。

それでも まぐれとはいえ、一度回避に成功した。更に今、両者には距離がある。加えて、ヤツはどこか訝しむような気配を纏っている。

……用心、警戒している？

ということとは。

（僕がセラを失っているということを知らないということ）
ならば、付け入る余地は どこかにはあるはずだ。

考える。この場を切り抜けられる術がどこかにはあるはず。それはなんだ？　UN事務所に連絡をとることか？　論外だ。携帯電話を取り出すような隙は、まず与えてくれまい。今こうして思索することができるといっただけでも奇跡に近いことなのだ。生憎と僕は超能力者ではないので、電波を飛ばすともできない。誰かに救援を求めるといっ選択肢は、まずないだろう。

ならばいっその、この場で背中を向けて逃げ出す？　それも論外だろう。相手は瞬間移動の使い手　二度使ったということは三度も当然、使えるだろう。おそらく、その超高速こそがナンバー？の真骨頂なのだろう。そんな、“速さ”という相手の土俵で戦うなど、愚か者のすることだ。

大声を出して、第三者を誘き出すか？　莫迦な。そんな一般人を巻き込むような真似ができるものか。仮にそんなことをすれば、大声を出した瞬間に僕はあの超高速の餌食になり、やってきた一般人も例外ではないだろう。そして、誰もいなくなったこの殺人現場で、ヤツは警察やUN事務所に捕らえられる前にそくさと逃げ出すに違いない。今までの考えの中で、最も論外だ。想定とはいえ、いくら追い詰められた状況下とはいえ、一般人を巻き込むような下策を考え付いた自分にほぞを噛む。

一か八か、ルシフェラーゼを使うか？　実のところ、使えるかどうかさえ分からない　この時点で早くも運の要素が強い。基質特異性を持っているルシフェラーゼは、サーチャャーを以てしても調査できず、極論してしまえば、僕にルシフェラーゼを操ることのできるセラが残っているかどうか。全ての問題はそこに集約されると言っている。自分の中では……五分だと思っている。よしんば解放はできても、自在に操れる自信は全くといっていいほどない。

「……にぞ、さにう？」

痺れを切らしたか、ナンバー？が重々しく、用心深そうに口を開く。全くの僥倖であったのは、どうやら彼女がどうにも用心深い、思慮深い性格であったということだ。……それでも、言っている内

容は全く分からないのだが。まあ、その事実も今はプラスの方向に作用している。言っている内容が分からないなら、反応のしようがない。その無反応が、用心深い彼女を更に用心させているのだ。

というか、お前はそろそろ喋らない方がいい。どうせ喋ったところで僕には理解できないのだし、もしもこの場面が小説化したら、読者にとっても筆者にとっても、凄まじく面倒で迷惑なことになる。

そんな余分な思考が見抜かれたわけではないだろうが、ついにナンバー？が活動を再開する　！

「リウナヌアゲ！」

何かの魔法のようなことを叫び、再びナンバー？の姿が消える。

そして、先程の仕切り直しのように僕に迫って

《こない》。

《降って》、きた。

まさしく　稲妻の如く！

まさか季節柄、というわけでもないのだろうが、荒れ狂う稲光を放ちつつ、明らかに人体の限界を超えた、人知を超えた速度で。

僕の頭上から　降り注ぐ！

回避が可能なはずがない。相手は、雷だ。せめて直撃を食らわないように、思わず身を低くして構えるだけ。それさえ、果たしてどこまでの効果があったものか知れたものではない。それでも、生物的な命の危険に、本能のレベルが行動を起こしていた。

刹那。

目も眩む閃光が奔る。網膜が焼き切れたかと思った。耳を劈く轟音が響く。鼓膜が弾け飛ぶかと思った。

思った……ということ　死んだ経験がないので確証はないが多分生きているということだ。

どうやら、僕は地をうつ伏せで転がっているらしい。視覚と聴覚が麻痺しているので、他の感覚が鋭敏になっているのか、転がっているというのは触覚で感じて、コンクリートが焼けるような鼻につく匂いを嗅覚で感じて、砂利の味という未知の味覚で感じていた。

物は試し、とは言うが、試してみて後悔しないという保証はどこにもない。

とりあえず、砂利は、とてつもなく不味い。

すぐさま起き上がる　　が、身体が言うことを聞かない。指先が痺れて力が入らない。当然だ、落雷に打たれたのだ、命があるだけでも御の字というものだろう。起き上がるうとして、しかし結局は全身を蝕む痛覚に尻持ちをついた。

そして、肝心のナンバー？はというと。

実は、とつくに僕の目の前にまで迫ってきていたりする。

「みしき、くしみ、らをうはき？」

言っている内容はひどく意味不明だが、なんだか馬鹿にされた気がするのはなんとなく伝わってきた。口許を歪めて、勝利を確信した笑みを浮かべる女。

こんな、所で。

こんな、形で。

僕の人生は……終わるのか？

こんな風に死ぬために……僕は要を手にかけたのか！

（まだだ……！）

目に力を籠める。せめて、眼力だけでも、何か一つだけでもコイツに勝ちたい！

女は更に皮肉げに笑って拳を握り締め。

そのまま、超高速を以て僕に振り下ろした。

（　　負けるものか）

成功体のナンバーズの腕力に際限なしの速度が破壊力を幾重にも増長させる。人並み程度の身体なら、どこに当たろうが致命傷だろう。

それでも、僕はまだ死を覚悟しない。

（　　負けるものか）

一切の躊躇もなく繰り出されたその無慈悲の拳撃は　　。
決して目を背けることもなく。

(負けるものか！)

真摯な祈りはどこに届いたのか。

《光速すらも超える神速を以て参じた、その影に遮られた》。

それは、起こり得るはずのない事態^{こっけい}。

影、といつても、黒ではない。

目に映るは、緋色。

翻る、長い緋色の髪だった。

その現実離れた光景に、僕はただただ瞠目せざるをえない。

「……なによ。翼」

あまりに見慣れた緋色の髪と。

あまりに聞き慣れた妙^{たえ}なる声。

「私を差し置いて……随分と楽しそうじゃない？」

まさかまさかの輝夜緋姫だった。

T o b e c o n t i n u e d …

9・2・「物は試し、というもので」強襲（後書き）

新しい敵が出てきましたが……苦しい！ 自分で考えてなんですが、書いていてこれほど苦しいキャラはじめてです。本編中に翼が思ったことは、そのまま私の魂の叫びだと思っして下さい。なんとやっているのかは次章で明らかになるので、それまでこの痛キャラをどうにか愛でていて下さい……無理にでも！ そして、援軍はまさかまさかのあの人。彼女も次章で大活躍するので、乞うご期待！

9 - 3 ・彼女の本気「人間業ではない。神業ですらない。」（前書き）

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・半角の（ ） で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・全角の（ ） で書かれている部分は主人公の情景補足
- ・《 》 で書かれている部分は傍点（強調）

9 - 3 ・彼女の本気「人間業ではない。神業ですらない。」

＊
お前には、これが楽しそうに見えるのか。

普段の僕なら、否、たとえ僕でなくとも、命が危うい状況下で投げかけられた『楽しそう』だという台詞に対しては、誰もがそうツッコミを入れていたことだろう。

でも……口が動かなかった。

それほどまでに、刹那にも満たない間に目の前で繰り広げられた光景は、あまりに異色で、異様で、異常だった。

「家に帰っても鍵がかかっていたから、仕方なく探しに来てあげたというのに……貴方ときたら、他の女との逢瀬と洒落込んでいるじゃない」

だから。

逢瀬なんかじゃ、ないんだって。

「全く笑えないわ。身体を張ったボケとしてはゲゲゲのゲよ」

「僕はどこかの鬼太郎かよ！」

不思議だ、あんなにも口が開かなかったのに、彼女のボケに対しては即座に反応してしまうのだから。

ここまで来ると、慣れとか性格とかの問題ではなく、生態としてツッコミが別腹として存在しているとしたか考えられない。

因みに、言うまでもなく、正しくは『下の下』。

「『僕はどこかの鬼太郎かよ！』ですって？ 何を馬鹿なことを言っているの。貴方は綺羅衣翼きしえ たすく、私の彼氏でしょう。どこの鬼太郎さんでも……、は、ま、まさか……。た、翼。しっかり。気を確かになさい。ああ、なんとということかしら。翼のあまりの頭のお粗末さがとうとう究極化して、記憶に障害をきたす次元にまで至ったとも言うの……こんなにも嘆かわしいことはないわ」

「いいやどうだろう！ 僕は今かつてないほどの嘆かわしさを胸に

抱えているけどな！」

「大丈夫よ翼。たとえ記憶を失ったとしても私の想いは変わらないわ。ちゃんと元に戻してあげるから安心して頂戴。いいこと？ 貴方の名前は翼、漢字で『つばさ』と書いて翼よ。正確なフルネームは綺羅衣・K・翼よ」

「もうその時点で安心できねえよ……知らない間にミドルネームが追加されてるじゃん。絶対後悔する自信があるけど、触れずにはいられないから訊いてやろう。そのKは何のKだ？」

「カマドウマのK」

「想像を絶する最悪だ……！」

ミジンコ、犬、ミドリムシと来て、カマドウマ。

常軌を逸した経歴の持ち主である。

便所コオロギだぞ。

「冗談は円高ドル安」

「ついに文字数すらも一致しなくなってしまったか……」

「東証株価指数トピックスの終値は930.38となっております」

「派生した!？」

「嘘よ。さておき」

「なんでだろうな！ お前が出てくると途端にシリアスな場がシュールになるんだが！」

最早緊迫したバトルシーンのムードも『さておき』という単語の形骸も残っていない。

「嫌だわ。私が和み系のキャラであることは自覚していたけれど、面と向かってそんなことを言われると照れるじゃない」

「待て、お前がまず真っ先に自覚するべきなのは、その認識が明らかかな誤認だということだ！」

「ああ、そうだわ。そんなことより聴いて頂戴。私はついさっき目から鱗の世紀の発見をしてしまったわ。今年の流行語大賞 いえ、ノーベル賞を狙えるかもしれない級の大発見よ」

「……お前のことだから、無理矢理にでも聴かせるんだろ。いいか

ら言ってみる」

「『ドモホルンリンクル』という単語を分解して並び換えてみて。

『ホルモン』と『ドリンク』という言葉が浮かび上がってくるのよ。すごいでしょう?」

「……………ああ。そうだな、す

ごい」

すごい、どうでもいい。

「まさに焼肉店のために産まれたような単語だわ、『ドモホルンリンクル』。『ワンドモホルンリンクル無料!』と銘打って看板を掲げれば千客万来間違いなしよ。ただでさえホルモン一皿とドリンク一杯が無料だというだけでもすごいのに、このキャッチフレーズは道行く人の目を一身に浴びることは免れないでしょう。これを用いることによって集客効果は五倍程度に膨れ上がると、私は目論んでいるわ」

「いや、でもな。百歩譲ってそんな看板が出来上がったとしても、『ホルモン』と『ドリンク』だろ? 『ル』が一文字余るんだが…

…」

「……………おお」

「おお、じゃねえよ! なんてお前はここぞという時につまらないポカをやらかすんだよ!」

「仕方ないわ。こうなったら翼の内臓の一部を『ル』と命名して売り飛ばすしか手は残されていないわね」

「なんで僕の内臓を売るのが!? まだ他にいくらでも手は残されるよ! しかも、その流れでいくと僕の内臓、無料で提供される羽目になるじゃねえか! ばらまくほど多くないよ、僕の内臓は!」

かなりの大盤振舞である。

というか、それ以前に単なるゲテモノでしかないだろう、その『ル』なる食物は。

と。

「……………くしみ、にぬやはぢ?」

すっかり忘れ去られていたナンバー？^{ファイブ}がとうとう耐え切れなくなつてか（遅い）、相変わらず理解不能な言語で口を開く。

……しまった、僕としたことが、バトル中だというのにもかかわらず、あまりに意表をついて突如として出現した輝夜^{かくなひめ}緋姫のボケに對し、いつもと変わらないツツコミを披露してしまった。二千文字近くにも及ぶ漫才を黙して傍観していたナンバー？の忍耐強さには、舌を巻くばかりだ。

「……ねえ翼？ この女、なんて言っているのかしら？」

「さあな……僕にもさっぱり分からないよ」

「ふうん……」

かくいう緋姫はいつもと変わらずマイペース。自分の頭の中で数秒思考した後。

「なるいおぜ、^{はつめまつて}ひずもみすと、^{なうつとかさえきすり？}なうつとかさえきすり？」

「……！？」「」

そんな、謎の言語を話したのはナンバー？ではなく、なんと緋姫の方だった。驚愕の表情を浮かべたのは僕だけではない、ナンバー？もまた、信じられないといった様相で後退する。超高速で。

「緋姫……お前、アイツの言っていることが分かるのか？」

「なんとなくの当てずっぽうだったけれど、正解だったようね。あれはシーザー暗号よ」

「シーザー暗号……？」

「古代ローマの将軍ガイウス・ユリウス・カエサル、英語読みだとジュリアス・シーザーね。彼が使用したとされる単一換字式暗号のことよ。一言で言うなら、『辞書順に文字をずらす』という至ってシンプルな暗号文。もっとも、シーザーは、三文字ずらして使っていたらしいけれど、あの女は一文字。彼女の話す言葉は、『全で一文字ずれて発せられている』のよ」

見つけた。

アウト・オブ・ナンバー『エナジードレイン』だな？ ワタシはナンバーファイブ『ライトニング』。……もっとも、ワタシの

言葉を理解できるはずもないか。

アウト・オブ・ナンバー『エナジードレイン』、貴様の命を貰いに来た。恨みはないが……死んでもらう。

何故、来ない？

まさか、貴様、弱いのか？

あれは、そう言っていたのか。『ライトニング』 稲妻。つまり、言うなればあの女は《光そのもの》、誇張でもなんでもなく、人の身でありながら《高速ならぬ光速を体現できるというのか》！

そう考えれば辻褄が合う。音速を遙かに上回るスピードを見せつけながら、『音の壁』を突破しないという矛盾。それは、彼女が自らの身体を《電子レベルにまで分解する》ことによって、その自家撞着は氷解するのだ。そう、『音の壁』をすり抜けることによつて。

それは……瞬転じゆんてんを無限に使えることとほぼ同義だ。ファーストナンバー。僕はその存在の恐ろしさを、改めてただただ痛感するばかりだ。

しかしながら、この場に於いて最も驚嘆すべきは、緋姫の洞察力と思考回路。彼女は僅か一言でナンバー？の言語法則を解読せしめ、それを自分の中で変換して、更にはそれを立て板に水を流すように違えることなく使用してみせたのだ。その頭脳の回転速度のなんと悪魔的なことが！

……それはそうと。

「……痛いな」

「痛いわね」

キャラが。

服装も……アレだし。

なんかこう……この世界にいていいキャラではないような気がひしひしとするのは、僕だけだろうか。

というわけで、ここから先は輝夜緋姫による副音声でお楽し

み下さい。

『ほう……まさか、ワタシの言葉を理解できる人間が存在したとはな。どこの何者かは知らないが、ワタシと会話ができたのは貴様がはじめてだ』

『あらそう。それは光栄ね。でも、貴様、とかあからさまな上から目線はやめてもらえるかしら？ 反吐が出るわ。貴女こそ何様のつもり？ ていうか、その口調、狙って言っているの？ だとしたら相当迷惑よ、貴女』

『ふん……問われて名乗るも烏滸がましいが、そういうわけにもいくまいな。この口調は、ワタシの構造的欠陥とでもいうべきものでな、遺伝子改造を行った過程でこうなってしまっただけのこと。狙って喋っているわけではない。正直に告白すれば、ワタシはお前と出逢えて嬉しいぞ。さっきも言ったが、これまでにワタシと真つ当な会話ができた人間など、いなかったものでな。そういつた意味で、貴様には好感が持てる。……こんな邪魔さえしなければ、対等な関係を築けていたかもしれぬのにな。ここで死なせてしまうのは、残念ではある』

『生憎と、好感を持っているのも対等だと思っているのも貴女の方だけよ。私は今のところ貴女に対して、嫌悪感しか抱けない。……死なせてしまう？ 馬鹿を言わないで。貴女ごときに私が殺せるとでも？』

因みに、これらの会話も全て一文字ずつずれて発せられているので、僕にはちんぷんかんぷんだ。

「翼」

と、緋姫が僕に呼びかける。これは普通の言葉で。ええい、とことん分かりづらいなこの会話！ ナンバー？ の設定の発案者出てこい！ 今すぐコイツの設定を変えろ！

……さつきから微妙にシリアスになり切れていない気がしないでもない。

ともあれ、背中越しに僕の名を呼ぶ緋姫。その声音はいつもとど

こも変わらないままで。

「私、貴方に出逢えて本当に良かった」

……まさかの死亡フラグだった。

「貴方は私を何度も助けてくれた。だから」

そう言つて、緋姫は振り返る。緋色の髪の毛をたなびかせて。

「翼。貴方は私が助けてあげるのよ」

微かに口許を緩めて、僕に笑いかけた。

その笑顔には一点の曇りもなく　その名に恥じぬ婀娜っぽい笑顔だった。

「少し退がつていて。あの痛い女の相手は私がするわ」

「な　っ!?　馬鹿言え!　相手はファーストナンバーだぞ!

?　お前なんか敵うわけが」

「《コッ》」

僕の言葉を遮るように。

緋姫は小さく、本当に小さく呟き　目を閉じる。

そして、その瞼をゆっくりと開き、双眸を露わにする。

「　掴んだのよ」

《妖しく光る　赤い双眸を》。

「　!?」

同時に解き放たれる、めくるめく視認可能なほどの高質かつ膨大なセラ。同時に巻き起こる、目を開けていることも叶わなくらいの強烈な風籟^{ふうさい}。まるで台風だ。緋色の髪が、螺旋を描いて天に昇つていくセラに呼応するように、宙に揺蕩うその有様は、まさしく。

すっかり失念していた。

闇に葬られたはずのファーストナンバーズ、ナンバー? ヲヴァンパイア』、あらゆる理論と法則を悉く覆す凄艶なる怪物　それが、輝夜緋姫の本性だったのだ……!

「翼が私の“吸血鬼性”を削ってくれたおかげでね。ある程度まではこの力をコントロールできるようになったのよ」

「お前……」

ファーストナンバーVSファーストナンバー。

稲妻と台風 奇跡のドリームマッチが、今ついにここに実現した。

「貴様……何者だ」

女 「ライトニング」が、思わずといった様子で、怯んだ様子で口を開く。何と言ったのかはやはり僕には分からないが……誰何の類であることは想像に難くない。

彼女の言葉に対し、緋姫は。

「何者……。そうね。《問われて名乗るも烏滸がましいけれど》、翼風に言っなら」

先刻「ライトニング」が口にした言葉を、そのまま丸ごと引用して。

「貴様を……^{デライト}消去する者よ」

「ほざけっ！」

そう言っって、「ライトニング」は右腕を振るう。瞬間。

《ぱりっ》！

静電気のような音を立てたかと思うと、ヤツの腕から一直線に高圧電流が放電される。幾条にも枝分かれして、蛇尾のように襲いかかる紫電。なんといつても稲妻だ、速度は光のそれ。一直線といえども、防御も回避も、目視すらも不可能であるのは自明の理！

だが今こそ知れ、秩序を識る者よ。その自明を覆すのが、「ヴァンパイア」。ありとあらゆる常識という常識を逸脱してこそこの輝夜緋姫！

緋姫は鬱陶しげに、垂らしていた腕を上を振り上げて。

ぱん。

その雷撃を……《弾いた》。

触れることすら叶わないはずの雷を……手の甲で、難なく弾き飛ばしたのである。紫電はベクトルを変え、天に昇り雲を穿つ。いくらセラによって編まれた擬似的な稲妻であったとしても……容易で

あるはずがない。

『……つまらないのよ』

緋姫は振り上げた腕をそのまま『ライトニング』の方に向けて。

『下手な小細工を弄していないで、《貴女が》来なさいよ。物の見事に玉砕してあげるから』

挑発的な声音で、赤い瞳を炯々と灯らせて、手招きしつつ言い放った。

『……言ったな。ならば見せてやろう。ワタシの最高速度を！』

そう言つて、『ライトニング』が消える。そう、それはまさしく『消える』という表現が相応しかった。自らの身体を自在に電子化できる『ライトニング』の速度は、“速さ”などという単純なパラメーターで測れるものではない。強いていうなら、それは《地上最速という速さ》だった。

涅槃寂靜ねはんじやくじやうにすら満たない、その十分の一にすら満ちていたかどうか 再び出現する『ライトニング』。その姿は、緋姫の 真正面！ なんの外連味もない単なる拳撃を以て 殴った。

《緋姫が》。

《二発》。

痛打に吹っ飛ぶ『ライトニング』。その速度は……光のそれではない。顔面に拳を浴びたことによる、純粹な物理的な吹き飛び方だった。

『……？ ……？ ……？』

地面を転がって、それでも尚困惑の表情を浮かべる『ライトニング』。殴られた痛みや衝撃よりも、殴られたという事実を現実のものとして受け取ることができない。そんな表情だった。

そして、それは僕も同じだった。『ライトニング』が緋姫の正面に現れたことまでは分かった。そして『ライトニング』は、先程僕にしたように横薙ぎのブローを繰り出そうとしたのだ。

だが……それよりも速く。

光よりも速く。

緋姫は ヤツを殴ったのだ。

しかも、二発。

緋姫は、『ライトニング』が姿を見せるや否や、拳を握ってヤツをストレートに殴りつけた。

《片腕で、顔面に、二発》である。

一発目を顔面に叩き込み、『ライトニング』がその衝撃で吹き飛ばよりも先に腕を引き、再度同じ軌道で、顔面に向けて二発目の拳を叩き込む。水の上を歩く理屈 片足が水の中に沈む前にもう片方の足を踏み出すというような、理屈の上では可能だというだけで、実現不能なはずの机上の空論。

それを難なく、何の魔術的要素すらなく、純粋な体術のみでやってのけたのだ。

「……言つたでしょう、翼」

啞然とする僕を尻目に、これは没になったけれど、と付け加えて緋姫は口を開く。

「私の反応は、二百を超えているのよ」

二回行動。

覆せるのは、何も……現実的なものではないということか 事実も現実も真実も、力も守りも速さも、関係なく例外なくねじ伏せねじ曲げる 張った死亡フラグさえも覆す、その出鱈目さこそ、『ヴァンパイア』の真髄！

『化け物め……！』

ようやく といつても、実際に経過したのは数秒だが 立ち上がる『ライトニング』。その顔は憤怒に歪んでいた。よもや自分が一撃を受けるなど想像だにしていなかったのだろう。それも、突如として現れた、何の戦闘訓練も受けていない少女から。

『化け物でも何物でも結構よ。……まあ、そういう貴女は痴れ者だけれどね。貴女、もう終わっているわよ、キャラ的に』

『なめるなよ化け物。いいだろう、今度こそ、貴様はワタシの全力

を以て消し炭に変えてやろう！」

憤怒は激怒へと昇華し、放たれるセラは、おそらく彼女本人も無意識のうちに高圧の電流へと変貌し、『ライトニング』の周囲でぱりぱりと爆ぜる。そのいずれもが、触れば黒こげになるくらいの轟雷である。

そう、相手は曲がりなりに、否、曲がりようもない、紛れようもないファーストナンバーズ。

物語終盤になって頭角を現した、凄まじい戦闘力を誇るヒロインを引き立てるための噛ませ犬などでは、断じて、ない。

「ふふつ、まだ自分の置かれている立場が分かっていないようね。ファーストナンバーズだろうと、『ライトニング』だろうと関係ない。貴女は私の翼を傷付けた。それだけが私にとって度し難い絶対不変の事実よ。」

さあ

「そう言つて、緋姫は不敵な笑いを浮かべて。」

「聴かせて頂戴。貴方はどんな断末魔を上げるのかしら？」
今朝決まったばかりの決め台詞が。

見事に決まった。

対峙する『ライトニング』は、その言葉が理解できたわけではないだろうが、持てるセラの全てを費やさんばかりに燃烧させて。

『ライトニング!!』

超《光》速でその姿を、消す。さっき口にした魔法のような言葉と殺気だけを残して。

己が真名のままに、持てる能力の全てを費やして。
己が身体を光輝を放つ稲妻と化し、天穹より降り注ぐ!

その瞬間、である。

緋姫は動いた。

動いた、と一概に言つても、それは広い意味での“動作”であり、取り立てて行動を起こした、というわけでもない。

ただ、宙空で掌を握り締めた。それだけでも見える。

先刻僕を強襲したように、地上に存在するありとあらゆるを薙ぎ払うというように、目も眩む稲光を伴って、『ライティング』は全てを焼き尽くす神雷となつて緋姫の頭上から降つて

《こない》。

《落ちて》、きた。

どさり、と音を立てて。

「イ、ギイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ！？」

悲鳴を、絶叫を上げて。

地を転がり回つて。のたうち回つて。

一文字ずれているのか、いないのか。

事ここに至つてそんな疑問は何の意味もなさない、それは断末魔の叫びだった。

「あらあら。思ったよりはいい叫び声を出すのね、貴女」

宙空で掌を握つたまま、緋姫は笑う。

残虐に。

残忍に。

そしてその手の中には、どくんどくと脈打つ、拳よりも一回り程度大きい歪な赤黒い物体。

心臓だった。

全身を電子化する、『ライティング』。電子とは、即ち素粒子である。それにより光速での移動を可能とするが、その特性故に、彼女は一時的にはいえ身体を素粒子レベルにまで分解する必要がある。

つまり緋姫は、その一瞬のうちに、《分解され素粒子化した心臓の部位のみを、宙空で掴み取つたということなのか》。

人間業ではない。神業ですらない。

それを可能にするのが、『ヴァンパイア』。神すら屠る、規格

外の怪物！

緋姫は、掴み取つたままの心臓を、真紅の双眸で眺めつつ。

「ふふふ……、さて、《これ》をこのまま放つておいたら貴女、ど

うなるかしらね」

笑う。

冷血に。

冷酷に。

この上なく 無慈悲に。

それはまさしく、人の死を愉悦とする者の笑み。吸血鬼としての笑みだった。

その腕を。

ようやく身体の自由を取り戻した、僕が掴んだ。

「……やめろ、緋姫」

自由を取り戻した、といっても、辛うじて立って歩けるだけのレベルだ。身体中が痛いし、できればもう少し横になるか、せめて座っていたいところではある。

それでも、止めなければ。

今止めなければ、意味がないのだ。

「お前……今、自分が何をしようとしてるのか、分かってるのか……？」

「翼……」

「お前は、《また人を手にかけるつもりか》？」

養父母の時のように、命を奪うつもりか？

「お前は……同じ過ちを繰り返すのか？ これ以上やったら、引き返せなくなるぞ」

「……翼」

赤い瞳が……色を失っていく。同時に、緋姫の手の中にあつた『ライトニング』の心臓も、元あつた場所に還るように消失した。

のたうち回っていた『ライトニング』は、ようやく活動を停めた。まるで生命活動を停止してしまったかのように身動き一つしない。それでも、垂れ流されるセラは残っている。つまり、息はある。

間に合ったか。

「……あ、私、何を……ごめんなさい。わ、私……。貴方が傷付け

られたのだと思うと、つい頭に血が昇って……目の前が真っ赤になつて……ごめんなさい」

「……いいよ」

動揺してしきりに謝る緋姫を宥めつつ、僕は寄り添って緋色の髪を撫でた。どうやら緋姫は無自覚だったようだ。自分でも自分のやったことを恐れるように、身を震わせている。

『ヴァンパイア』の能力　ある程度コントロールはできるようになったとはいえ、まだ御し切れない部分は多いのだろう。特に、どうやら凶暴性が増すらしい。

この力は　強大過ぎる。危険過ぎる。

徒に使っていい力ではない。

ならば　そのための『エナジードレイン』だ。

僕は、緋姫がある程度落ち着いたのを見計らって彼女から離れて、倒れ伏す『ライトニング』へと近付く。

「どうするつもり？」

「決まってるだろ……^{デリート}消去するんだよ」

『ライトニング』の身体に触れて、目を閉じ精神を集中させる。それに呼応するように身体が熱くなり、“異能殺し”としての綺羅衣翼が目覚める。

身体に流れ込んでくる『ライトニング』のセラ。全身を瞬く間に駆け巡り、全身を苛んでいた痛覚が薄らいでいくのを感じた。

……今までは気にしたことなかったが、『エナジードレイン』はやはり『^{ドレイン}吸収』なのだ。対象のセラを吸い取り、自分のものにする能力。

(《あの手紙》に、書いてあったな……)

そんなことを考えつつ、じっくり時間をかけて『ライトニング』を《吸い尽くす》。緋姫の時のように一気に能力を励起させる必要はない。

ほどなくして。僕は『ライトニング』の全セラを吸収し終えた。その証拠に、彼女の額に刻まれていた(あのナンセンスな)?の刻

印は消え去っている。

対して僕は、失っていたセラのほとんどを取り戻していた。それほどまでに、莫大な量のセラだったのだ、ナンバー？のそれは。

(しかし……)

《ほとんど》、である。

即ち……全快ではない。

ファーストナンバーズのセラの全てを吸収しても、全快しない許容量。^{バシテイ}容量。

僕 アウト・オブ・ナンバー 『エネルギードレイン』は、ファーストナンバーズさえ上回る量のセラを誇っているのだ。

それ故の、禁忌。あの手紙に書かれていた、『エネルギードレイン』の暴走は。

「……翼？」

「ん……ああ、悪い。なんだ？」

「いえ、難しい顔をしていたから……身体は大丈夫？」

「いや、なんでもないよ。身体も特に問題はない。……とにかく、所長に連絡だな。行方不明だったファーストナンバーズの片割れを確保したとなれば、かなり状況は好転するな」

そう言っ僕はポケットから携帯電話を取り出して、所長に連絡をとる。あとの処理は、UN事務所に任せておけば何とかなるだろう。

要点だけを伝えると、すぐさま使いの役員を寄越すという。それに《元》ライトニングを引き渡せば、僕の仕事(この場合は仕事とはいえないかもしれないが)は終了というわけだ。

その間に。

「緋姫」

「なに？」

僕は真剣な顔で緋姫に向き合う。

「言ったよな、僕はお前を許さないって。だから、お前がナンバーズとしての力を僕の許可なしに使うのも、金輪際絶対に許さない。

約束できるか？」

緋姫は一瞬面食らったような顔を作ったが。

「……ええ。約束するわ。二度と……使わない」

素直に従う緋姫。らしくもないが……その場凌ぎでの口約束でもないだろう。彼女自身、この力には引け目を感じているのだろうか。

僕はその言葉に満足して、緋姫の頭を撫でてやった。くすぐったそうに目を細める緋姫。

願わくば、この力が二度と使われないことを。

そう考えた瞬間、要の遺言が脳を過ぎった。

それが使われる日が訪れないことを切に願っている。

確かに要が、本当に僕のことを想っていたのなら、そして、あの手紙に書かれていたことが真実なら、あれは使われるべきではないだろう。

とはいえ、あれは疑う余地もない真実ではある。僕自身、それが本能の領域で理解できている。僕としても、一生使う気はない。

『エナジードレイン』の暴走。

それを使えば、綺羅衣翼は死ぬのだから。

Episode 9 : LIGHTNING - end

9 - 3 ・彼女の本気「人間業ではない。神業ですらない。」（後書き）

戦闘中にギャグを織り込むという、自分でも未知のジャンルに挑戦してみた章でもあります。勿論、あの痛いキャラをこれ以上書きたくなかったというのがあります。ともあれ、この章では初となる緋姫の戦闘を描きました。これもずっと書きたかった場面なので、一安心です。あからさまな伏線も張ったところで、次章の更新はいつになることやら分かりませんが、今後の展開に（それなりに）期待して下さい。

EXTRA (前書き)

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・半角の（ ）で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・全角の（ ）で書かれている部分は主人公の情景補足
- ・《 》で書かれている部分は傍点（強調）

EXTRA

*
ハメラれた。

人間ってやつは往々にして、そう気が付いた時には時既に遅しの後の祭りで、普通の人間ではない僕もどうやらその摂理には逆らえない運命にあるらしい。

そんなことをつらつらと前口上として述べていても、何がなんだかさっぱり分からないだろうから、とりあえずまあ、僕が今置かれている状況を説明しようと思う。

僕 綺羅衣翼きらえ たすくは現在、UN事務所、正式名称『アンチ・ナンバーズ事務所』の所長室にいる。

一人で、である。

僕をここへ呼び出した張本人でもあり、この部屋の主でもある所長 真田真正まきた まさただの姿はない。……代わりに、所長が普段使っているデスクの上には、こんなメモ書きが置かれていた。

『登場人物の紹介をしる』

……今更かよー！

そうツツコまずにはいられない。だってそうだろう？ 文字数にして既に二十五万文字も書いた後だぞ？ 紹介するまでもなく、みんな重々分かっているとと思うんだけどなあ……。

でも……一応は正式な仕事ではあるらしい。報酬と思しき福沢さんが、茶封筒に入ってメモ書きと一緒に置かれていたからだ。また出た、必殺給料前払い式。逃げ道を予め用意させてくれないのは彼の得意分野だというのは分かっていたのに、僕はまんまと罠にかかってしまったというわけだ。給料が発生している以上、一役員としては悲しいかな、長の命令には服従せざるを得ないのである。

しかも……なんだろう、なんだか、こう、うまく言葉にはできないんだけど……何かしらの意図を感じるんだよなあ。テレビ番

組とかで例えるなら、所謂アレだ。時間稼ぎ。そういうディレクター的な立場の人間の、決して褒められたものじゃない類の悪巧みの匂いがする……。

……勘繰りすぎだろうか？

まあいいや。幸い、これまでに登場したメインキャラはそんなに多くないし、こういう面倒事はスパッと片付けてしまつに限る。

限るのだが……いきなり挫折しそうになっている僕がいた。順番的に真つ先に紹介しないといけないのはやっぱりヒロインなのだが……、僕が思っていることを丸つきり包み隠さずここで明かしてしまつと、凄まじく身の危険を感じる。アイツのことだ、当然このことも耳に入るだろうし、もしかしたら今この瞬間リアルタイムで、僕の身体はどこかに盗聴器でもつけて一言一句聞き違えまいとしている可能性も捨て切れない。最悪、本編に戻つたら主人公が原因不明のまま不在でエンディングを迎えた、なんていう前代未聞のホラー劇として幕を下ろすことだってあり得る。事実、僕は今、なんだかやけに嫌な汗をかいている。かといって、後回しにするとそれはそれで怖いしなあ……。

ええい、ままよ。このままでは一向に先に進まない。両手で頬を叩いて喝を入れる。よし、準備オーケーだ！

一人目のキャラクター。ナンバー？^{テン}「ヴァンパイア」こと、輝夜^{かぐや}緋姫^{ひめ}。僕が軽はずみでつけた、「悪辣毒舌吸血姫」という二つ名がどうやら公認されたらしい。何はともあれ、これだけは言っておかないとなるまい。緋姫は僕の彼女だ。きっかけは……まあ、語る必要もないよな？

……赤くなつてなんかないやい！

緋姫はれつきとしたナンバーズ、わけでも第一期^{ファースト}ナンバーズの人なんだが、諸事情あつてそれを知らずに普通の人間として生きてきた。小さい頃に施設で輝夜老夫妻に養子として引き取られて、でも中学卒業直前から、彼女のナンバーズとしての“吸血鬼性”が表れ始めた。そうして徐々に芽吹き始めた吸血衝動は緋姫を苛み、つ

いには最悪の展開を迎えることになってしまった。力が暴走して、養父母を手にかけてしまったのだ。この辺りは僕も本人から聞いただけで、詳しく知っているわけじゃあないんだけど、とにかく緋姫にとってはそのことが猛烈なトラウマになってしまっている。今は　僕のおかげ、って自分で言うのも傲慢だけど　マシにはなつたみたいだぜ。とりあえず、過去に縛られ続けていることはなくなった。でも、つい先日。これは間違いない僕のせいで、になるんだろうけど、緋姫が『ヴァンパイア』として再び暴走した。そりゃあもう暴れに暴れて、僕もとんでもなく酷い目にあつたけど、色々な人の助力を得て無事に理性を取り戻すことができた　こうやって振り返ると、とんでもない奇跡だよな。今じゃある程度まで『ヴァンパイア』としての異能をコントロールできるようにまでなつた。ただし、かなり凶暴性が増すので、無闇やたらと使つていい力じゃあない　って言つても、今でも十分こわ

(　!　?)

な、なんだ？　今一瞬、血まみれになつて倒れている自分の姿が目に見えかんだんだが……多分アレだ、よく漫画とかである、《殺気だけで相手に死を錯覚させる》やつ。危ない危ない、緋姫の勘の鋭さは折り紙付きだからな。軽はずみな言動は慎まないと。うん、緋姫は僕の理想の女性さつ。……このキャラも無理あるな、却下。普通にいこう。

後はそうだなあ……。すぐにエロい妄想に突っ走ると、やたらとオタク系なのと、常人離れた行動の突飛さと用意周到さ、いつそ死にたくなるくらいの毒舌に、時折出してくる凶器　本人曰く乙女の必須道具（これまでに出来たのは鞭、鉈、空手裏剣、麻酔銃型腕時計）が玉に瑕……っていうか、ここまでくると瑕だらけの玉って感じだな。つい最近決まつた決め台詞とかもあるけど、その辺りはみんな本編を読み返してみてくれ。

しまつた、緋姫の解説に時間を取りすぎた。まあいいか、一応ヒロインだし。

二人目の登場人物は実川音葉。みのりかわあしは『神さえひれ伏すクイーン・オブ・委員長』の二つ名（これも僕が軽率な考えでつけたものだ）で、天才の中の天才の中でも一際天才な天才だ。なんでも、音葉があんまり模試とか受けないのは、他の受験生に絶望を味わわせないためだとかなんだとかいう噂だぜ。九百点満点のテストでうっかり千点取っちゃうまいそうな、そんな一周回って馬鹿みたいな頭の良さに、聖母や菩薩のように清く正しい心根の持ち主だ。かといって、正しいこととは正しい、悪いことは悪い、という線引きは彼女の中で明確にされているらしく、それを破る者に対しては誰であれ容赦はしない、緋姫とは違う意味で怖い女だ。何を隠そう、僕がはじめて出会ったナンバーズ、ナンバー24『リジエネレイト』で、その時コイツときたら自ら率先して銀行強盗の人質に名乗りを上げて拳銃の果てには説得まで試みようとしたもんだから、そう考えると実は頭悪いんじゃないか？ って気もしなくはない。ともあれ、その事件で僕と音葉は知り合って、その事件で僕は救われたと同時に、今のところ生涯唯一の黒星がついている、ってことだけは説明しておこうか。医療目的で造られた『リジエネレイト』は委託可能だが、うまくいかなかったたのでその行為は禁則事項ってことになってる。まあ、それのおかげで暴走した『ヴァンパイア』を止められたっていうのは事実だ。誇張でもなんでもなく、他人のために命を懸けられる真性のお人よし、性善説の権化みたいな奴だな。まあ一言で片付けちゃうなら、聖女、って感じかな。ああ、言い忘れたけど、緋姫とは幼馴染。あ、だからぶっ飛んでるところとか、似てるのかね。よく分からんけど。

次。今僕にこんな無茶な仕事を振ってきたところの所長、UN事務所所長、真田真正その人である。基本的に仕事ができ理解もある良い上司なのだが、思い込みが激しくすぐに脱線したり自虐に走ったりするのが難点。ただながちよっとお茶目なところもあることに最近気付いた。亡き真田正長博士の息子で（この前までは、弟と身分を偽っていた）、彼自身ナンバーズ、しかもナンバー？『ロックオン』

の能力者。でも最初の一人目だけに、自在には能力を使いこなせなくて特殊な薬で調節しているらしい。どう見ても三十代半ばにしか見えないが、テロメアが短くなったため老化が早まってしまったようで、実はまだ二十一歳なんだってさ。ま、所長についてはこれくらいでいいだろ。

同僚にシヨット・G・スカイハイっていう残念な女がいるんだが……やっぱ彼女についても説明しないとイケないよな。いつの間にか公式設定として、『打って撃って討ちまくる、ノンストップエクспレス』っていう二つ名がついているらしい。まあ、確かにらしいっちゃらしい二つ名だな。彼女の何が残念かっていうと、身長だろ？ 胸だろ？ でもやっぱ一番残念なのは、何かにつけて口癖のように『が先か××が先か』っていう例えを用いることだろうな。『答えの出ない押し問答』とは本人が言うところだが、そう思っているのはまさにその本人だけだ。ナンバー410『シヨット』の能力を持つていて、身体能力もずば抜けて高い。実の姉であるナンバー409『ブレット』を殺され、以来復讐のために世界各地を転々としていたところを僕が確保した、というのがおおまかな経緯その『ブレット』の形見である十発の弾丸・ブレットの威力は……超絶の一言に尽きるな。うち一発は、紆余曲折あつて僕が消去しちまったから、残りは九発。今は『ヴァンパイア』戦で傷付いた身体を療養中である。

そうそう。シヨットと比べて勝るとも劣らない強敵だったのが、私立相楽森学園に名立たる『天下無双の生屠会長』、轟虹色だ。見てくださいかなり威圧感があるし、口調も乱雑。性格も豪放だが人材としては極めて優秀で、六年間に亘って生徒会長を務めてきた。実はナンバー13『バッドラック』、加えて代々続く陰陽術師の家系である轟家独特の魔術『詩霊』^{ヴァース}で苦しめられたもんだ。通常の五十倍の速度で喋ることが可能な、伝家の宝刀『即口』^{そくく}も身につけており、平たく言つて、五・七・五調で詠いさえすればそれが真実になる、しかもそれは一瞬で口にできるってことで、一度に一つの対象

にしか効力を発揮できないとはいえ、こと戦術の多さに関してには彼に勝る相手はいないだろうよ。僕が勝てたのも、半ば運みたいなものだし。まあ轟が司っているのは不幸だし、実は案外墓穴掘ってるのかもな。実は釈迦堂の……っと、これは口封じされてるんだった。悪い悪い。

で、その連れに釈迦堂唯ゆいっていうのがいて、彼女は轟の『バッドラック』を一身に背負っているせいとにかく史上稀に見る不幸体質の少女だ。誰がうまいことを言えと言ったのかは知らないが、『天上天下唯が独損どくそん』っていう二つ名は相楽森学園では有名だ。今年から生徒会書記を務めている、ナンバー100『ヴォイド』の能力者。『ヴォイド』は、まあ俗に言う結界のこと。緋姫が暴走した時はこの能力のおかげでどれだけ被害が抑えられたことか……。わけあって四年以上前の記憶を失っているそうだが、本人は取り立てて気にしていないらしい。純粹に轟の近くにいられば、本能的に満足しているんだろうな。

……で。要かなめについても説明せざるを得ないよなあ……。正直うまく説明できる自信がないから、端的に事実だけ述べることにする。奇羅衣きろえ要、『ナンバーズ・チルドレン計画』に携わった権威的研究者の一人で、同時に『アンチ・ナンバーズ計画』発足者でもある。僕の産みの親で、三年間僕を“異能殺し”として徹底的に鍛え上げた、不器用すぎる男。……今はここまでの説明で勘弁してくれ。今となつては故人だが、音葉の教育責任者でもあったようで、彼女の常識は要が教えたものだそうだ。

その要に産み出された人造人間に、ナツメという女性がいた。要の妻・奇羅衣なつめ要の遺髪から造り出された、どちらかというところクロールに近いタイプ。僕を造り出すに当たつての試作プロトタイプ型でもあり、僕にとっては師であり母であり姉だった。……もつとも、それももう三年前の話だ。

とまあ、長々と説明してきたな……。もうこんなところでいいか？
え？ 僕？ 僕も自己紹介しないといけないの？ ……まあ、主

人公らしく大取りを飾ってみるのも悪くないか。

僕の名前は綺羅衣翼。こう見えてもまだ六歳だ。超特異能力『エナジードレイン』を先天的に持つて人工的に産み出されたアウト・オブ・ナンバー。武器は霊装・銀麗系ルシフェラーゼ。自画自賛になるかもしれないが、今現在地球上にこれに勝る兵器はないと思っている。特技は……特技と呼んでいいのか分からないが、ツッコミ。なんかこう……天啓かなんかに恵まれているのかな、条件反射以上のレベルであらゆるボケに対しても的確なツッコミを入れられるという。待て、『エナジードレイン』がすごいのか、ツッコミがすごいのか分からなくなってきた。とにかく、あらゆるナンバースの力を悉く分解して吸収する、それが『エナジードレイン』。一応その他にも、切り札・術式瞬転しゅんてん。幾何学的要素を無視して強引に距離を縮める一步を習得している。あまりの燃費の悪さ故に、一日一回しか使用できないけれど。轟戦でその縮尺版、一瞬生じた《拳圧だけ》を瞬転しゅんてんさせる瞬拳しゅんけんって技も編み出した。あとまだ隠し玉があるにはあるんだけど……どうせ使う機会もないだろうから、スルーさせてもらう。

とまあ、大してうまく紹介できたとも思えないけど、僕の周りにいる個性的なメンバーはこんなところだ。挙げれば挙げるほどにキリがない個性派揃いだと思うよ。果たして僕は影が薄いのか濃いのか、正直分らないからなあ。笑ってくれても泣いてくれても、僕は一向に構わないぜ。文句ならディレクター（？）に言ってくれ。何にせよ、もっと詳しいことが知りたいっていうんなら、本編第一章から読み直してみな。

僕は不敵に笑って言い放った。

EXTRA（後書き）

ちよつとしたおまけ、です。え？ やだなあ、時間稼ぎなんかじゃないですよ。まったく翼は何を言っているのやら。……実は、こんな分かりづらい登場人物紹介を書くくらいなら本編を執筆してれば良かった、と後悔しております……。ともあれ、次回、本編の方の更新をお楽しみに

10-1 意外な編入生「夢は、世界征服です」(前書き)

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・半角の() で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・全角の() で書かれている部分は主人公の情景補足
- ・《》で書かれている部分は傍点(強調)

「ねえ、ちよつと訊きたいことがあるんだけど」

事の発端は十月一日月曜日。いよいよ十月に入り、古い呼び方をすると神無月だったり神去月だったりするが、島根は出雲では日本中から八百万の神々が集まることから『神在月』と呼ばれるというのはあまりにも有名な逸話だが、実を言うと『神無』というのは当て字なのである。他に有名な語源としては、新穀で新酒を醸すという意味の『醸成月』^{かみなんつき}、勤労感謝の日、つまりは新嘗祭^{にいなめさい}へ向けて準備を始める月である『神嘗月』^{かんなめつき}とかが説として挙げられる。雷のない月、という意味で『雷無月』^{かみなかりつき}などとも呼ばれるらしい。先日僕を襲った『ライトニング』のことを思い出すと、お前はもう少し後に登場しておけば良かったものを、などといついでに考えてしまうのは見方が穿ちすぎだろうか。何はともあれ、そんな十月の最初の朝。緋姫と一緒に通学している最中に背後から投げかけられた、そんな一言が始まりだった。

背後から、なので、声の主は勿論緋姫ではない。彼女はいつもと変わらず日傘片手に僕の隣を歩いている。因みに 聞き覚えのない声だ。まだ幼さを残した若干ハスキーな声色だった。

振り返ると。

そこに立っていたのは、果たして、まだ年端もいかぬ少年だった。褐色の肌に真っ白い髪、くりくりとした深い藍色の瞳、容姿からして日本人でないことは分かる。小学生高学年くらいだろうか いや、それでも僕よりは年上ってことになるんだけど かなりの小柄で身長は140cm程度、虫も殺さないような無邪気な笑みを顔に張り付けて僕らを交互に見やっっている。

「うん？ どうした？」

「うん、訊きたいことがあるんだ。教えてよ」

随分と尊大な態度の子供である。丁寧語さえ使っていない。だがまあ、なにせ相手はまだ少年と呼んで差し支えないくらいの年齢だ、敬語がどうこうとかは通りがかりの人間が言ったところで聞く耳持たないだろう。緋姫はどう考えたところで子供が好きそうな性格ではないので、僕は努めて明るく返す。

「おう、兄ちゃんに分かることならなんでも答えてやるぞ」

実際に年上なのはこの子の方なのだが、そんな揚げ足をいちいち取っていたらキリがないので、無視する。

少年はつぶらな瞳で僕を見上げつつ、ポケットから一枚のメモを取り出す。そこで気付いたが、その両手には黒い革製の手袋がはめられている。年頃の子供にしては、少しそぐわない。海外流のファッションだろうか。おそらくは乱雑にポケットに突っ込んだり取り出したりしていたためだろう、皺だらけのメモに視線を落とし、そこに書かれているらしい内容を読み上げた。

「えっとね、ソウガクモリガクエンってところに行きたいんだ。知ってる？」

「……ソウガクモリガクエン？」

……やばい、知らない。ガクエン、とついているから、おそらくはどこか近所の学校のことなのだろうが、如何せん僕が知っている範囲内には確かそんな名前の学校は存在しなかったはずだ。

だが、さつき大見得を切って『なんでも答えてやる』と言った矢先なので、ここで正直に『分からない』と答えるのはいくらなんでも情けない。

と、いうわけで、今この場に於いて求められるのは大人らしい対応。困った時の人頼みである、僕は緋姫に尋ねようとして（これが本当に大人らしいかどうかは微妙なところだが）。

「相楽森学園のことじゃないかしら」

僕の考えを先読みしたのか、いつになく無愛想な不機嫌そうな顔で、僕が問う間もなく、一瞬の逡巡もなく緋姫は口にした。「『相性』の『相』に『喜怒哀楽』の『楽』。それに『森林』の『

森』のことじゃないの？ それは、『さがら』って読むのよ」

（ああ、成程。確かに小学生には読めない漢字かもしれないな）
「……………」

と、一瞬納得しかけたが、僕は緋姫の発言にふと首を傾げる
勿論、発言そのものがおかしいわけではない、確かに的を射ている
のだが……どこか違和感があった。彼女はいつもと変わらぬ あ
るいはいつも以上に感情を表に出さない鉄面皮、口調もいつになく
平坦だった。

しかし、そんな僕の困惑は露知らず、少年は教えてくれたことが
嬉しかったのか相好を崩す。

「ああ、そうなんだー。お姉ちゃんすごいねー。そうそう、その相
楽森学園っていうところに行きたいんだよ。どうやったら行けるの
かな？」

にこにここと、笑顔を絶やさない少年。しかし緋姫は、それ以上何
も言おうとしなかった。むしろ褒められたことが気に入らなかった
かのように、より一層、あからさまに態度を悪くしてとうとうそっ
ぽを向いてしまう。

小学生の男の子をガン無視する高校三年生女子。
最低である。

「え、えつとな。実はそこ、僕達を通ってる学校で、今からそこに
向かうところなんだよ。良かったら、一緒に行くか？」

恋人のフォローはせざるをえまいと思い、とりあえず少年の機嫌
まで損ねないようにと細心の注意を払って僕は内心焦りつつもそう
口にした。

しかしなあ……緋姫のやつ、ついさっきまでは別に不機嫌そうで
もなかったのに。何か変なことを言った覚えもないし、やはりこ
ういう純粋な子供は嫌いなのだろうか。

「本当に？ 連れて行ってくれる？」

そんな僕の大した好意から出たというわけでもない発言に対して
も、ぱっと目を輝かせる少年。

……うむ、確かにあどけなさすぎるというのも問題かもしれん。下手したらこのまま誘拐されるかもしれないというのに、この食い付きぶりは少々警戒心というものが希薄すぎる。僕でさえ今まで周囲にいなかったタイプだ、どう対応するのがベストなのかよく分からない。緋姫が苦手とするのもなんとなく頷けるような気がした。

まあ、僕はやましい考えなどないから、無垢な少年の期待を裏切らないためにも、ここは紳士的な心で接しなければ。

「ああ。じゃあ、一緒に行くか」

「うん！」

少年は満面の笑顔で大きく頷くと、僕らの隣に並んだ。……言うまでもないが、僕が真ん中、右に緋姫、左に少年という形である。

「でも、どうしてこんな時間にそんなところに行くんだ？」

道すがら、それだけは訊いておかなければならないことだろう。

時間といえば、まだ普通の学生が通学するには幾分か早い時間帯である。僕と緋姫は、間近に迫った学園祭の準備のためこうして早く通学しているが、自分の学校はどうしたのだろう、まさか大掛かりなサボリというわけでもないだろうが……。

その質問に対して、少年は。

「うん。実は僕、今日からその学校に編入するんだ」

と答えた。

「へえ？」

僕はその言葉に、少なからず驚く。ぱつと見はどう見たところで正真正銘の小学生並みだが……実は中学生だったのか。でも、あんまり追及するのは野暮というものだろう。もしかしたら、この子自身、外見にコンプレックスを抱いている可能性もあり得るからだ。少なくとも、これくらいの歳の子が、実年齢より下に見られるのは面白くないだろう。

そうこうしているうちに。

「着いたぞ。ここが相楽森学園だ」

私立相楽森学園、正門前に到着。

「へー……」

少年は興味深そうに学校の全景をひとしきり眺めて。

「いいところだね」

やはり素直に、そんな感想を口にした。

「どうする？ 編入なら、職員室まで案内してやるのか？」

「ううん、大丈夫。ここまで来れば一人でも行けるから」

そう言い残して駆け出す少年。数メートル走った先で振り返ると。

「案内してくれてありがとう！ お姉ちゃんもね！」

小さな身体で大きく手を振り、僕達に礼を言って、その返事も聞かないまま風のように走り去っていった。

なんだ、結局は素直ない子じゃないか。

そういえば、名前も訊かなかったな……。まあ、この学校に編入ってことは、そのうち会う機会もあるかもしれないし、その時はまた優しく接してやればいいだろう。

「翼」

僕が無邪気な少年との別れに感傷的になっていると、今の今まで口を開かなかつた緋姫が僕の名前を呼んだ。

これは流石に露骨すぎる。一言苦言を呈してやらねばなるまい。

「お前な……、確かにああいう子供は嫌いなものかもしれないけど、

いくらなんでももう少し大人げつてものを」

「あの子……おかしくなかった？」

「……緋姫？」

さっきまでの不機嫌そうな顔から一変 否、不機嫌そうな顔は変わっていない、そのグレードが上がったという感じだ いったんなく真剣そうな口調で遮られて、僕は思わず呼び返していた。

「よく考えてみて。『相性』の『相』に『喜怒哀楽』の『楽』。《この説明で分かるような賢い子供が、本当に『さながら』を読めないと思っ》？」

「……あ」

さっきの違和感の正体。

言われてみれば緋姫は、《わざと分かりにくい例え》で『相楽』という漢字を説明していた。あの時はまだ、小学生だとばかり思っていた子供に対して、である。頭の切れる緋姫が、そんなことに気を回さないはずがない。

「それにあの子、私のこと、なんて呼んでいた？」

「え？ いや、普通に『お姉ちゃん』だろ」

「じゃあ、翼のことは？」

「……呼ばれてない」

「《あんなに懐かれていたにもかかわらず、一度も》？」

「……………」

そう考えると……確かにおかしい。

「ねえ翼、本当に何も感じなかったの？」

「……少なくとも、セラの気配は全くなかったよ」

先日僕を襲った『ライトニング』の時は、あんなにも鋭敏にセラを感じ取っていた。僕の自由意思とは無関係に、否応なしに発動するセラを司る第六器官。しかし今日は、別段何の異変も起こっていない。もし仮にあの少年がナンバーズだとしたら、その感覚に引っかけられないわけがない。

「考えすぎだろ。この前襲われたばかりだから、神経過敏になっただけだよ」

「……そうかもしれないわね」

渋々、あるいは無理矢理納得した顔を見せる緋姫。しかし、僕に嫌な予感を抱かせるには十分すぎる表情だった。

そして。

嫌な予感ほど、的中するものである。

*

「突然だが、転入生を紹介する」

我が三年B組の担任教師、晴れの初にして驚愕の台詞に、教室内からはかなりのどよめきが起こる。当然だろう、学期途中の、し

かも文化祭を前にしたこんな半端な時期に転入してくる生徒がいるというだけでもかなりのインパクトだし、そもそも高校三年生にまでなつて転入・転校をする生徒自体が今となつては珍しい。

「なんでも、海外の学校を四年飛び級で進級した天才君らしい」

実川みのりかわもつかうかして負けるなよ、などと脳天気と言つ担任。クラスメイト達はツボにハマつたようので、一気に盛り上がりを見せる。

僕と緋姫、今朝の出来事を僕らから耳にした音葉おとばの三人だけを除いて。

「入りなさい」

その声に応じるかのように、教室の前の扉が開く。それと同時に担任教師の出番は永久に潰えることになるのだが、今の三年B組の生徒達にとつて、そんなことはどうでもいいことだった。

わー、外国人だー。

キヤー、かーわいー。

何あれ？ リアルシヨタ？

入ってきた転入生を見るや否や、クラスメイト達は好き勝手に騒ぎ立てる。

……聡明な読者諸君には、言わなくとも通じるだろう。

転入生の正体は、どこからどう見ても小学生にしか見えない、褐色の肌と真つ白い髪の毛が特徴の、今朝僕がこの学園まで案内した少年その人。

少年は、教壇に上つて黒板にチヨークを走らせる。如何せん身長が低いので高いところまでは手が届かないが、僅か六文字を書き切るには、黒板というものは大きすぎる。

僅か六文字 最早如何なる名乗りよりも明らかに、其の真名を表す六文字を。

大 地。

そして、それらの文字を書いた少年の手には手袋はなく、晒された手の甲に記されていた

《813という数字の刻印》。

「はじめまして、八百十三大地やおとみ だいじです」

少年 大地は、屈託なく。

虫も殺さないような笑顔で。

殺した虫の数さえ考えたこともないような笑顔で、言い放つ。

「夢は、世界征服です」

あまりに唐突で、突然の、驚愕の『ジ・アース』の襲来だった。

*

僕達四人は、屋上にいた 普段なら施錠されていて立ち入り禁止のはずだが、僕のルシフェラーゼを以てすれば難なく這入り込める 僕、緋姫、音葉、そして…… 大地の四人。

「……こんなところに呼び出して、僕に何か用かな？ いじめはかつこ悪いよ？」

緊迫した雰囲気の中、当事者である大地だけが飄々としている。

飄々とした 笑みを保っている。

僕は思い切って口火を切る。

「……随分と大胆な演出の登場してくれたもんだな？ 八百十三大地、いや、『ジ・アース』！」

「『ジ・アース』？ うーん、僕にはなんのことだかさっぱりだなあ……」

「とぼけないで。まさか事ここに至って白を切り通せると、本気で思っているわけじゃないでしょう？」

緋姫も、目つきは鋭く射殺さんばかりの迫力で大地を見据える。

『ヴァンパイア』としての能力がなくとも、緋姫の威圧感が変わら

ない。

「答えて、八百十三君。今になってようやく、こんな形で私達に接触してきた目的は何？」

音葉の顔もまた、いつになく険しい。僕は同席を勧めなかったのだが、彼女は珍しく頑として譲らなかったのだ。

「ふう……」

大地は嘆息一つ。

「やれやれ……、四面楚歌とはまさにこのことだね……。分かったよ、白状するよ。改めまして、こんにちは。僕はナンバー813『ジ・アース』。ご存知の通り、『ナンバーズ・チルドレン計画』を台無しにした張本人だよ。でも、できれば『ジ・アース』じゃなくて、八百十三大地、って名前前で呼んでほしいな。僕が考えたんだ、結構気に入ってるんだよ」

飄々とした態度そのままに。

無垢無邪気な笑顔もそのままに。

放つオーラだけを、豹変させた。

悪びれもせず。

反省もせず。

後悔もせず。

ただ、純粹無色の“力”として。

「『エナジードレイン』、『ヴァンパイア』、それから、えっと……」

……『リジエネレイト』だっけ？ 僕がこうして出向いたのは、勧誘のためだよ。光栄に思っしてほしいね」

「……勧誘？」

そう、と頷いて大地は。

「僕は、さ。“万能”なんだよ」

傍から聞けば、傲岸不遜甚だしい発言を、何の迷いもなく言い切った。

「僕は何でもできるんだ。思ったことはなんだった。望んだことはどんなことだって叶えてきたし、願ったものは全て手に入れた。……」

…でも、結局は僕だって人間に造られた存在でしかないんだよ。“万能”じゃ足りないんだ。……だから僕は、ずっと、どうすれば“全能”になれるか、それをずっと考えてきた。それで、さ。思い付いたんだ。世界を滅ぼせばいいんだ、って。そうして全てが滅んだ世界で、新しい世界を造り出せばいい、って。そうすれば、僕は唯一存在になれる。唯一、即ち“神”だよ。そうすれば、僕は“全能”に“全き者”^{まった}になれる。だから

「だから……世界を滅ぼそうっていつのか」

「そう。そこで、だよ。『エナジードレイン』、それに『ヴァンパイア』。君達には資質がある。僕が造る新世界の担い手たるに相応しい力を持っている。だから……君達には是非、僕の下についてもraitたいんだ。共に世界を。こんな紛い物の下らない世界なんて滅ぼして、僕が統治し僕に選ばれた存在だけが君臨する真に正しく美しい世界。それを一緒に切り開こうじゃないか」

絵空事。

そんなものは、幼稚な子供が夢見る儂い幻想に過ぎない。どんなに綺麗事を並べても、行き着く先は人類の撲滅、世界という秩序の崩壊でしかない。それでも。

大地は。そんな絵空事を本気で、心の底から信じ切っている。

人の命の重みを、まるで理解していない。

産まれつき、根底から、徹底的に、絶対的に^{おわ}狂っている、破綻者。

「……そのために」

と、沈黙の帳を破ったのは、音葉だった。常の柔和さは欠片も残っていない、まるで別人のような声。

「そのために、大勢の人間の命を奪ったの？ 八百十三君は」

その問いに対し、大地。

「そうだよ？ だって、腐った雑草は間引いておかないと駄目じゃないか。《邪魔なだけだよ、あんなものは》」

何の躊躇もなく、言つてのけた。

「ふざけないで。八百十三君。それは悪だよ。たとえどんな願いが、どんな祈りが、どんなに崇高な目的があつたにせよ、人の命は奪つていいものじゃない。ましてや、それを何も感じずにやってしまうだなんて。笑わせないで。そんな貴方に神様になる資格なんて、ありはしないよ」

自身の中で、正しいことは正しい、悪いことは悪いという常識が完成している音葉である。“悪いこと”をした者に対しては、悪鬼にも羅刹にもなるのが実川音葉だ。大地が行つてきた殺戮、虐殺を看過できるはずもない。

「……なに？ 『リジエネレイト』の分際で、僕に説教するの？」
だがしかし。今回ばかりは相手が悪すぎた。大地は、人殺しを“悪いこと”ではなく、“当たり前のこと”だと心底思っているのである。

大地は、無邪気な笑ひそのままに、瞳にのみ冷酷さを宿して。

「生意気だな……。殺そ」

勘、だった。

間一髪、といつてもいい。

僕は咄嗟に瞬転を使って音葉に肉薄し、彼女を押し倒したのだ。次の瞬間、今まで音葉が立っていた屋上の床は、まるで巨大な鉄球でも降ってきたかのように陥没していた。まともに喰らえば……潰れたトマトどころでは済まなかつただろう。『リジエネレイト』でさえ即死は免れまい。

重力塊。局地的に圧縮した重力を降らせたというのか。

地球を統べる者『ジ・アース』の、これが力の片鱗だった。

「音葉、無事か？」

「う、うん……。大丈夫……。ありがとう、綺羅衣君……」

僕はすぐさま立ち上がり、音葉を背後に庇うように大地と対峙する。

「なんのつもりだ、大地……！」

「あーあ、避けられちゃった、つまんないの。なんのつもりも何も
ないよ、『エナジードレイン』。目障りな虫は殺すのは当たり前じゃ
ない？」

殺気は感じなかった。これが、『呼吸と同じように人を殺せる』
ということか。

……だが。

セラも感じなかった。ナンバーズとしての能力を発動させた以上、
それまではどんなにうまく隠していたとしても、その瞬間は隠すこ
となど絶対にできない。にもかかわらず、大地は一切セラを使用せ
ず、ナンバーズとしての能力を使ったというのだ。

「……ありえない。大地、お前はどうかやって今までセラを隠し通し
てきたんだ。ナンバーズにとって、セラは言ってみれば生命線。そ
れを無視して力を使うことなんて」

「できるよ」

と。問わずにはいらなかった僕に、大地は呆気なく答えた。

「だって、僕が使っているのはセラではないからね。……僕は、《
マナを司りし者だ》」

「なに……！？」

「僕の体内にはセラが流れていない。《そんな下らないもの》は、
とつくの昔に捨てたさ。その代わりに、僕は《地球を流れる霊脈から
マナを無尽蔵に吸収することができるんだよ》」

「なっ……！ そんな莫迦な……。マナとは地球を巡る超自然的な
力の根源。それを吸い上げるだなんて」

「できるとも。それを可能にするのが、この僕、『ジ・アース』の
力さ」

端的に説明するなら、セラとは人工的な魔力、それに対して
マナとは自然的な魔力の総称。言うなれば、セラはマナの氷山の一
角ということになる。

その言葉が真実ならば、八百十三大地の魔力には《底がない》。
だが、マナとは純粹な“力”そのものである。一人の人間に扱いき

『シヨット』の銃声が木霊する。

T o b e c o n t i n u e d . . .

10-1 意外な編入生「夢は、世界征服です」(後書き)

本編に戻って、いよいよ満を持して『あの人』が登場します、果たして今後の展開は？ 風雲急を告げる中、翼達はどう動くのか？
そして、彼の目的は？ そんな感じで期待を持たせつつ、次章をお楽しみに

10-2・「天に祈る神がないのなら」迫る決戦の日（前書き）

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・半角の（ ）で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・全角の（ ）で書かれている部分は主人公の情景補足
- ・《 》で書かれている部分は傍点（強調）

10-2・「天に祈る神がないのなら」迫る決戦の日

*

何度も繰り返すと、まるで僕が以前自分で言った内容を忘れてしまったかのようであり、あるいは何度も繰り返して言わなければ伝えることができない馬鹿というレッテルを張られそうに汗顔の至りだが、敢えて僕は言う。暴走した『ヴァンパイア』こと輝夜緋姫めとシヨット・G・スカイハイとの対決　否、対決というのは実力にも精神的立ち位置にも差がありすぎたが　九月二十三日日曜日のことだ。そして、今日は月を跨いでこそいるものの、まだ一週間しか経過していない十月一日月曜日。緋姫の不死性や、実川音葉みのりかわあとは『ナンバー24』リジエネレイト』の再生能力でもない限り、薄皮一枚でも完治には至らない程度の日時しか経過していない。加えて、シヨットは今にも死にそうなくらいの重傷を負っていたのだ、立って歩けるだけで、それは凄まじい新陳代謝の活力と言えるだろう。

そんな、最悪に近いコンディション下に於いてさえ、彼女の切り札『ブレット』に匹敵しかねない威力の、会心の『シヨット』を撃ち出した彼女を讃えるべきか。

そんな、超絶的な威力を持った一撃を背後から強襲されて尚、視線をそちらに移すことすらなく、空中に造った魔力の障壁のみで千々に霧散させた、ナンバー813『ジ・アース』こと八百十三大地いちを讃えるべきか。

判断の迷いどころである。

色々な意味で。

「はっ　！　はあっ、はあっ……！！」

シヨットは、真正正銘全セラを使い切ったよう　全身の負傷も相まって　着地というには無様すぎる、接地というには鮮やかすぎる前転をして屋上の床に倒れ伏した。　もっとも、地上一階

から屋上まで一足で跳躍したことを考えると十分に誉れに値する身体能力は持ち合わせているということになる。

「『ジ　アアアアス』……！」

それでも、地に伏して尚、シヨットの殺意は止まらない。地の底から響いてくるような恐ろしい声と、ただただ無限の憎悪を漲らせて大地を見据えるその形相、まさに鬼。

「はぁ……」

そんな、憂鬱そうにため息を漏らす大地。

「まったく……礼儀がなつてないなあ。人を後ろから狙撃してはいけません、つて学校で習わなかったのかい？」

　　普通は習わない。

そんな僕の心のツツコミはさておいて、僕と緋姫、音葉の三人は倒れ伏すシヨットの許へと駆け寄る。

「シヨット、大丈夫　」

「触るなっ！　綺羅衣っ！」

助け起こそうとした僕の手を乱雑に振り払い、シヨットは激しく拒絶する。まるで、自分一人の力で事を成し遂げなければ意味がない、とでもいうかのように、それはある種の呪縛であり強迫観念だった。無理もない、実姉の仇敵が今目の前に立っているのだ。正気でいられるはずがない。

「『ジ・アース』……質問は一つ、一度きりだ。どうしてお姉ちゃんを　ナンバー409『ブレット』を殺した！？」

手負いの獅子といえは聞こえはいいが、今のシヨットの傷はそれにしたって深すぎる。半死半生とはまさにこのことだ。

「『ブレット』？」

対する大地は飄々とした顔を、ここでようやく崩した。うーん、と見た目相応のあどけなさで首を傾げる。

しばし黙考して、彼は、やはり笑顔で。

「ごめん、誰だっけ？」

「……」

ショットが辛うじて残っていた最後の理性を。

粉々に打ち砕いた。

最早自力で立つことすらままならないはずのショットはしかし、憎悪のみを滾らせて力の限り 命の限りその身体を勢いよく起こし、骨が折れているはずの左手を 痛みも顧みずポケットに突っ込み、そこからブレットを取り出す。

《残る九発、全てを》。

「一二三四五六七八九重ねて十番！！ 消えてなくなれ！ この悪魔があああ！！！」

事ここに至って、ショット・G・スカイハイに正気など欠片も残っていない。自身の身すら擲って、妄執に取り憑かれたナンバー4 10は切り札を全て解き放たんと右腕を突き出す。

そのショットを。

僕はルシフェラーゼで一瞬のうちに束縛し、動きを封殺する。

いつぞやの再現、である。完膚なきまでに関節を縛り上げ、身じろぎ一つ許さない。

全身を余さず七千本の糸で封じ込められたショットはしかし、それでもあがくのをやめない。

「綺羅衣え！ 邪魔するなあ！！！」

「無茶だ、ショット。今のお前の身体でブレットを操れるわけないだろう。第一、場所を考えろ。こんなところでそんなもん使ったら、日本地図が変わるぞ」

僕は努めて冷静に諭す。そんなもの火に油を注ぐようなものだと分かってはいても、こんな荒療治でもしない限り今のショットは止まらない。

「それにな、仮に今僕が止めていなかったら、《死んでいたのはお前一人だけだ、ショット》」

「……なんだって？」

「へえ。《分かっちゃった》？ 流石は『エナジードレイン』ってことなのかな」

大地は言葉とは裏腹に、別段驚いた表情を見せることもなく。

「来るんだ。44、283、654、701」
その瞬間。

どこからともなく　と言っても精々が屋上の影だったり近隣住宅の屋根の上だったりで、僕には既に分かっていたことなのだが

四人の男女が颯爽と大地の周りに集まるように姿を現した。

一人はすらつと背の高い、鳶色の総髪が特徴的な痩躯の青年。

一人は身の丈二メートルを超えようかという、筋骨隆々の男。

一人は顔中に覆面を張り付け修道士のような服装をしている、性別不詳の人間。

一人は身長も背格好も取り立てて特徴があるわけでもない、ただ口許に不遜な笑みを湛えた唯一の女。

いずれもが……ナンバースである。僕は最初から気付いていた、大地を護るように周囲に身を潜めていた四人。改めて対面すると、四人とも、相当な手練なのだろう、見に纏うセラはファーストナンバーズに引け目をとらないほどに多量かつ高質だ。

「紹介するよ。僕の忠実なる従僕、『六天道士』^{りくてんどうし}達だ」

大地は言う。続けて。

「もつとも、今となつては僕の下にはこの四人しかいないんだけどね。一人はどうやら『エナジードレイン』、君を襲って返り討ちに遭っちゃったみたいだし」

「僕を、襲つて……？　まさか」

この時、同時に緋姫の眉もぴくりと動いた。

「そう。貴重なファーストナンバーズの一人、ナンバー^{ファイブ}?」
「ライトニング」だよ」

「あの女は……お前が差し向けた刺客だったのか?」

「そうだよ?　本人から聴かなかった?　それとも、本人があんな喋り方だから、伝わらなかつたのかな。でも見事君はそれを退けた。まあ、噂の『エナジードレイン』がどれほどの実力だったかを調べる尺度でもあつたし……もういらないや、《あれ》」

大地は。

遊び飽きた玩具を、何の躊躇もなく捨て去る子供のように『ライ
トニング』を切り捨てた。

こともあるように、ファーストナンバーズを、である。

正確には、『ライトニング』を打ち破ったのは緋姫であり、
僕は消耗し切っていたせいで文字通り手も足も出なかったのだが
全力で戦っていれば勝てたかどうかは分からないが　そんなこ
とを教えてやる道理はどこにもない。

「あともう一人は……」
そう言つて。

大地ははじめて、僕達の背後に目を向ける。

「そろそろ出てきたら？ 《いつまでも盗み見とは》、いくらなん
でも趣味が悪すぎると思うけど？」

「……ちつ。気付いてやがったか」
と。

僕達の後方から聞こえたのは、ドスの利いた腹に響く濁声。

まるで、闇の中から染み出したかのように　たつた今そこに出
現したかのように、ナンバー13『バッドラック』轟虹色とんがらにこと、ナン
バー100『ヴォイド』釈迦堂しゃかどう唯が姿を見せた。

「轟……それに釈迦堂……」

僕でさえ気付かなかった二人の登場。そういえば、彼らはセラを
隠すことに関しては他の追隨を許さない隠身術を身に付けているの
だった。

ならば何故　八百三十三大地には露見した？

そんな僕の、訝しげな表情を読み取つてか。

「綺羅衣翼たすく。コイツを一般常識に照らし合わせて見るのはやめてお
いた方がいいぜ。つい今さっき聴いての通り、コイツが操ってん
のはマナ、地球を流れる根源的な属性だ。理論上では、コイツは地球
の裏側にいる人間の気配すら察知できるってこつた」

轟は、唾棄するように憎々しげに言い放つた。

「やあ、『バッドラック』。久しぶりだね、四年ぶりになるかな？」
まるで十年來の旧友に再会したかのように顔を綻ばせる大地に対し。

「……けっ、オレはテメエにや二度と会いたくなんざなかったがな
どの面下げてオレの前にやってくるかと思えば……まさか、こんな
ふざけた登場すつとはな、相変わらずひねたガキだ」

轟は不機嫌そうに（事実不機嫌なのだろう）切り捨てた。

轟への挨拶は終わったかというように、大地は轟の隣に立つ釈迦堂へと視線を移す。それに対応して、釈迦堂はびくつと小さな身体を大きく震わせた。

「『ヴォイド』お。会いたかったよ。君が『バッドラック』に『拉致』されて以来、僕はずっと探していたんだよあ？」

轟が旧友ならば。

釈迦堂は恋人であるかのように。

大地は相好を大仰ともいえるほどに崩して歓待の意を表明して釈迦堂に呼びかけた。

「ゆっ……唯は……」

震える声で、震える身体で釈迦堂は言葉を返す。

「ゆ、唯は、あなたのことなんて、しっ、知りません……。唯は……唯は……」

「ああ、『バッドラック』に記憶を消されているんだっただね、そういえば。大丈夫だよ、君が僕にとって重要な同朋であることに変わりはない。君は」

「しっ、知りません！ 唯は、唯は、あなたのことなんて」

「ジャリ子、」

その言葉を待っていたかのように。

釈迦堂の身体が、その場で糸の切れたマリオネットのようにならずおれた 気を失った。

「けっ……。やっぱ唯を、テメエの前に引き合わせたのは失敗だったな」

聞き取れなかったが、どうやら轟は、今の一瞬で即口そくくを使って詠うたつたらしい。かつての忌まわしい記憶がフラッシュバックしかかっていた釈迦堂を、強制的に黙らせたのだ。

「あはは、お兄さんは大変だねえ、『バッドラック』？ それにしても、相変わらず面白い能力だね、君のは。どうだい？ 君も、僕の下につく気は」

「願い下げだ」

大地の言葉を最後まで待つこともなく、きっぱりと轟は言い捨てた。

「テメエに傳かすくくれエなら　オレは綺羅衣翼につくぜ」

そう言つて。

轟は、僕の隣に並んだ。

「轟……」

「勘違いすんなよ綺羅衣翼。今はただ単に一時休戦つてただけだ。テメエに気を許したわけじゃねエんだからな」

……ツンデレだ、ツンデレがいる。

困ったことに、男なので、萌えないが。

そんなことより。

「あーあ……」

退屈そうに。

憂鬱うゆうそうに。

残念そうに。

「結局、全部空振りかあ……つまんないの。理解に苦しむっていうか、理解できないっていうか……どうせ僕に従わなければ、死ぬだけなのに……。それとも、もしかしてみんな自殺志願者？」

大地は独り言のようにそうのたまつて。

「分かつたよ」

頷いて。

「戦争ゲームを、しよう」

何の前触れもなく、そう宣言した。

「げ、ゲーム？」

「そう。僕ってさあ、ゲームが大好きなんだよね。特にRPGとか。やっぱり、ゲームにはラスボスが必要でしょ？ 悪い勇者と正義の魔王の、命を懸けた壮絶な殺し合い。どう？ 面白そうじゃない？」

「どちらが勇者で。」

「どちらが魔王なのか。」

「それは分からないが。」

「形式は五対五の勝ち抜き制にしよう。僕側は、この四人と僕の、合わせて五人。君達は……『エナジードレイン』、『ヴァンパイア』、『バッドラック』と、そこに寝ているお嬢さん。『リジエネレイト』は……戦力になりそうにないし、『ヴォイド』を戦わせるわけにはいかないから、あと一人、誰か連れてくるといいよ。」

「……………」

「あはは、燃えてきた燃えてきた。楽しいゲームになりそうだな。八百十三大地は。」

ナンバー813『ジ・アース』は、心底愉快そうに、笑う。

容姿に似合って。しかし内面とは似ても似つかず。

「日にちは追って通達するよ。そこのお嬢さんはまだ回復していないようだしね。どうせなら、万全の状態で叩き潰したいからさ。それに、そろそろ。」

キーンコーンカーンコーン。

まるで場違いな、気が抜けるようなチャイムが鳴り響く。

「休み時間はおしまいだ。授業に戻る、っと。転入初日からサボりは嫌だからね。」

そう言っつて。

大地は身を翻し僕らに背中を向ける。あまりにも無防備に。

しかしそれはまるで。

殺したいのならばいくらでも殺せ、と。

殺せるものならばいくらでも殺してみろ、と。

どんな言葉よりも雄弁に、物語る男の背中だった。

*

「成程、な」

放課後。

UN事務所所長真田真正さなたまさとは、僕からの『ジ・アース』に関する報告を聞いた後、重々しく厳肅に頷いた。

「マナを操る、か……。道理で、いくらサーチャーを使って探索したところで発見できないわけだ」

今この所長室にいるのは、僕と緋姫、そして所長の三人だ。音葉は申し訳ないが、今回ばかりは足を引っ張るだけだと自ら引き下がった。シヨットは限界を超えて使役していた身体の防衛機能が直後に気絶してしまい、今では地下病室で絶対安静の状態だ。轟は、まあ素直にここに来る柄でもないだろう。必然、轟と行動を共にする釈迦堂も然りというわけだ。

「しかし……。大胆不敵とはまさにこのことだな。言ってみれば、敵の本丸に単身で攻め込んできたことになるというのに」

「……でも、アイツがそれに相応しいだけの實力を持っていることは、確かだよ。相対してみても実感した」

「ふむ、お前がそう言うのなら、間違いなくそうなのだろう。果たして……。それが暴走したとしたら、想像するだけで怖気が奔るな」

そんなことを言う所長に対し、僕は。

「いや所長。その心配は杞憂だと思っぞ」

「うん？ それはどういう意味だ？」

「さっきも言ったように……。大地は何の躊躇いもなく、音葉を殺そうとした。呼吸と同じように人を殺すことができる破綻者。その意味がようやく分かったよ。つまり八百十三大地は、《存在しているだけで既に暴走しているんだ》」

人として。

ナンバーズとして。

徹底的に。

決定的に。

狂っている。

狂っている。

取り返しのつかない領域にまで、堕ちて 朽ちている。

「……そうか。そうだな。成程。……なあ翼。参考までに訊いてもいいか？ 本人の目の前でこんなことを訊くのは、少々憚られるが……」

そう言っつて、僕の隣に立つ緋姫を見るが、彼女は。

「構わないわ」

内容を聴いたわけでもないのに、そう促した。緋姫のことだ、続く言葉はあらかた予想しているのだろう。事実、このタイミングで質問することといえば、限られてくる。

「ふむ。では訊こう。暴走した『ヴァンパイア』と、暴走^{している}『ジ・アース』。どちらの方が強いと思う？」

予想通り。

だから、僕も用意しておいた回答を返す。

「比べられないな」

「……………」

「そもそも、根本っつていうか、属性が違う。『ヴァンパイア』は“破壊”に特化したナンバーズだけど、『ジ・アース』は“殺戮”に特化したナンバーズだ。天秤にかけようにも、かけるべき天秤がそもそも違う……違いすぎる」

「そうか」

所長も所長で、この返答は予想していたのか あるいは、どちらが強いかなど分かったところで意味もないことだと判断したのか、一つ首を振っただけで終えた。

「ところで……どうするよ。五対五の戦いを申し込まれた件に関しては」

「受けざるを得まいな。お前の話を聞く限り、背後も寝込みも、ど

んな奇襲も『ジ・アース』には通用しまい。ならば、正面きつての決闘をあちら側から申し込んできてくれただけ、まだマシというものだ」

「それならそれで問題があるだろう。あつちは五対五で決闘を挑んできたんだぜ？ 《ゲーム感覚で》勝負を持ちかけてきた以上、どんなに大地が不利な状況になっても成立しないと思う。多分だけど、大地は自分一人でも十分だと考えているはずだ」

故の余裕と自信であり。

故の『ジ・アース』だ。

「しかも、能力が分からないからなんとも言えないけど『六天道士』の四人は、少なくとも全員相当な手練だ。UN事務所内に、そんな実力派のナンバーズ、いる？」

決戦は、『ヴォイド』内部を於いて他には考えられないだろう。

現実世界でそんな戦闘行為を行えば、被害は考えたくないレベルにまで凄まじいことになる。そうすれば、それに参加する最低条件はナンバーズであることだ。……もっとも、ナンバーズ以上に腕の立つ人間がいるのなら、是非見てみたいが。

さておき、僕の問いかけに対して所長は。

「いる」

と。簡潔に、しかし確信を持って答えた。

「私だ」

「は？」

「何度も言わせるな。この私、ナンバー？^{クン}『ロックオン』真田真正が打って出る」

「あ、あんたが……？ いやでも、あんた、面と向かって言うのは悪いと思うけど、身体能力は皆無に近い失敗作なんじゃなかったのか？」

「ああ。だがな、UN事務所の長として、この決戦には出向かざるを得ないだろうよ。真田博士が父がついぞ成し遂げることできなかつた悲願、私が必ずや成し遂げてみせる。これは私の義務で

あり、矜持だ」

『アンチ・ナンバーズ計画』。僕はその申し子として産み出されたが、志半ばで逝った真田正長博士の息子である所長もまた、その申し子と言えるのだろうか。

「加えて言うなら、その『六天道士』、ナンバーは44、283、654、701と言っただろう?」

「……ああ、間違いない」

「その中の一人 敢えてここでは焦らして教えないが、一人能力を把握してある人物がいる。その一人と私が一対一で戦えば、『勝利は『ロックオン』に約束される』」

「それは……どういう?」

「言っただろう。ここでは教えないと。その方が展開的に燃えるし、色々な人にとつての楽しみが増える」

ものすごく作為的な発言だった。

大丈夫か? この発言。

「ねえ翼」

と、所長とそんなやり取りをしていると、さっきから口数が少ない緋姫が話を振ってきた。

「確認のだけれど。私は、『使って』いいのかしら?」

「……できれば駄目、って言いたいところなだけだな。今回ばかりはそうもいかないだろう。なにせ、相手が相手だ、ここで負けたら地球滅亡っていう瀬戸際、出し惜しみはしてられない。ただし、絶対に相手を殺すな。この絶対条件は撤回しない」

「承知したわ」

確と頷く緋姫。

「とにかく、最優先すべきなのはシヨットの完治だろうな。彼女があの調子では成り立つものも成り立たん。ああそうだ、翼。これも確認しておかなければならぬだろう。シヨットと『ジ・アース』が戦ったとして、どちらが勝つと思う?」

「それは、間違いなく大地だろうな」

これには確信を持てる。

「悪いが、シヨットには勝ち目がまるでない。大地が操ることができるのは セラだろうがmanaだろうが 本来なら地属性の力だけのはずだろ？ なのにアイツは、ブレット並みの威力を持った銃弾を《空中で》弾き飛ばしたんだ。実力差は明白だろう」

「なら、お前が戦ったら、どちらが勝つと思う？」

「……………」

こっちの質問が、本命か。

相変わらず、こすいやり方だ。

八百十三大地に勝てるか否か。

自信は、情けないが、まるでない。

実力は まだ力の片鱗しか見ていないから分からないが、これまでに戦ってきたどんな相手よりも上であるだろうことは間違いない。

それでも、大地と僕では背負っているものが違う。

勝って当たり前前の戦いと。

負けが許されない戦い。

願望を成就させるための戦いと。

命と遺志と誇りを継いだ戦い。

だから僕は。

「《負けないよ》」

「……………」

「奇羅衣要きじえいの名かなめに懸けて………… 綺羅衣翼は絶対に負けない」

「……………」

「そうか」

所長は、満足げに頷いて。

「その覚悟があるのなら、私はこれ以上何も言うまい」

そう言った。

僅かに、微笑みを湛えて。

十月一日月曜日。

神無月である今日この頃。

祈る神がいらないなら 何に祈ればいいのか。そもそも、僕は無
神論者なので、神に祈りを捧げる気など、はじめからないけれど。
死後の世界も、死者の魂も、信じてはいないけれど。

天に祈る神がいらないのなら、その分、天にいる《誰か》に、その
祈りは届くような気がした。

決戦の日は、近い 。

10-2・「天に祈る神がないのなら」迫る決戦の日（後書き）

ようやく綺羅衣パーティーが全員集合ということになり、相手さんも姿を現したわけですが、書いている最中に気付いていたのですが、この章では緋姫の台詞がかつてないほどに少なく、音葉に至っては登場しているにもかかわらず一切台詞がないという、極めて異例の事態になってしまいました。まあ、緋姫は次章で活躍する予定なので、そこで思う存分遊んでもらうとしましょう。決戦直前のギャグパートということで、盛り上げていこうと思うので、お楽しみに！

10-3・「あつてない」宣戦布告（前書き）

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・半角の（ ） で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・全角の（ ） で書かれている部分は主人公の情景補足
- ・《 》 で書かれている部分は傍点（強調）

食事時。

*

「ごちそうさま」

「おそまつさま」

そう言つて、緋姫が《僕から離れる》。

食事は食事でも　みなまで言う必要はないだろうが　《そつち》である。

五日に一度、と決めはしたものの、実際に五日間カウントするのは面倒なので、論議の結果、毎月一日、六日、十一日、十六日、二十一日、二十六日　と、明確に血を分け与える日を定め、時間も五分間までという縛りを設けた。ただし、今月のように三十一日まである月や二月は間が五日ではなくなつてしまつたため若干変則的で、三十一日まである月に関しては、翌月の一日に六分間与え、二月に関しては三月一日に飲ませるのは四分間、とした。かなり仔細なところまで徹底しすぎていると思うかもしれないが、ナンバー？^{ナンバ}『ヴァンパイア』の恐ろしさを僕は文字通り痛感しているので、最低限このくらいはしておかなければおちおち安眠もしてられない。もっとも、これは緋姫も同意の未での決定であり、僕の独断では決まてないということだけは言っておこう。それに、最初に厳密に定めておかないと、法や規則というものはどこまでも際限なく緩む。この辺りは、どちらかという僕ではなく緋姫本人からの申し入れだった。

「……………」
緋姫は僕から離れたつきり口を開こうとしない。帰宅時も、夕食時もそうだった。今日の緋姫はとにかく無口なのである。

僕は対応に困る。いやまあ、喋つたら喋つたで対応には困るのだが、気は紛れるから無言よりはいくらか楽だろう。

彼女は何を考えているのだろうか。

いや、何を考えているのかは分かっている。

八百十三大地のことだ。

あんな突拍子もなく大胆不敵極まりない登場をしつつ、傲岸不遜な態度を隠そうともせず僕達に誘いをかけた、『ジ・アース』こと八百十三大地。

轟の時もそうだったが……あの手のタイプは、緋姫が苦手とするタイプだろう。しかも緋姫の場合、『ジ・アース』に対する私怨や義務感が皆無なのだから、加えて轟のケースと違い、性格や人格にまつわる予備知識もないのだから、余計にタチが悪い。

生理的に受け付けられない、そんな感じだ。いるのだ、このくらいの年齢になると少なくとも一人や二人は。

だからといって 大地のことを考えていることが分かるからといって 大地の何についてを考えているかまでは流石に僕だつて分からない。

だから僕も迂闊に声をかけられない。

やがて。

「……ねえ、翼」

時計の長針が九十度ほど回転したところで、ようやく緋姫が重い口を開く。

いよいよか、と僕は身構える。

さあ聞かせてもらおうか輝夜緋姫。お前のその悪魔的な頭脳の牙えを以て導き出された、『ジ・アース』という存在のなんたるかを。

「私ね、今年はお笑いブームが来ると睨んでいるのよ」

「全く関係なかった!!」

唐突すぎる!

脈絡がなさすぎる!

悪魔というか、小悪魔だよこの女は!

「い、いや、でもな。今年って言ったってあと三ヶ月切ってるし、

そもそもお笑いブームならもう
「そこで私は考えたのよ」

どシカトだった。

華麗とさえいえる見事なスルーだった。

ある意味では、当たり前のおチである。

「世の中には変な日本語つてたくさんあるじゃない？ 『右に左折』
とか『頭痛が痛い』とか『お前を殺す』とか」

「いや、最後のはどう考えても某新機動戦記の主人公の名台詞だけ
だよ……」

仕方ないので乗ることにする。

「言つてしまえば『あるある』シリーズも同じ類でしょう。そこで
私が考えたのは『あるある』シリーズに続く、まったく新世代のお
笑いネタ 『あつてない』シリーズを」

「……『あつてない』シリーズ？」

続いでるんだから、その時点でまったく新しいわけではない
のだが、そこを突っ込んだところで今の緋姫は止まらない。

「ええ。あるじゃない？ 世の中には、あつてないようなものが。
それを私が独断と偏見に基づいたジャッジで選出したものよ。これ
からどんどん言っていくから、翼はそれに応じて的確なツッコミを
入れて頂戴」

「無茶振りこの上ないな……。まあいい、ここで止めようとするの
は、それこそ僕の学習能力のなさを露見させるようなものだからな、
受けて立つよ。言ってみろ」

「なかなかに見事な順応性じゃない。翼も私の取り扱い方が堂に入
ってきたわね。……それじゃあ、いくわよ」

すう、つと静かに呼吸を整える緋姫。そして、『あつてない』よ
うなものを口にする。

「『マリオの防御力』」

「あつてない！」

なにせ、亀と体当たりして負けるからなあ……。

「『ルパン二世』」

「あつてない！」

三世があんなにも有名だからいるはずなのに、耳にしたことがない。

「『ジャイ子の本名』」

「あつてない！」

いや、そもそも『ジャイ子』が本名なんじゃなかったっけ……？

「『八十八星座占い』」

「あつてない！」

国際天文学連合、通称IAUが定めた星座は確かにアンドロメダ、いっかくじゅう、いて、いるか、インディアン、うお、うさぎ、うしかい、うみへび、エリダヌス、おうし、おおいぬ、おおかみ、おおぐま、おとめ、おひつじ、オリオン、がが、カシオペヤ、かじき、かに、かみのけ、カメレオン、からす、かんむり、きよしちょう、ぎよしや、きりん、くじやく、くじら、ケフェウス、ケンタウルス、けんびきょう、こいぬ、こうま、こぎつね、こぐま、こじし、コップ、こと、コンパス、さいだん、さそり、さんかく、しし、じょうぎ、たて、ちょうこくぐ、ちょうこくしつ、つる、テーブルさん、てんびん、とかげ、とけい、とびうお、とも、はえ、はくちょう、はちぶんぎ、はと、ふうちょう、ふたご、ペガスス、へび、へびつかい、ヘルクレス、ペルセウス、ほ、ぼうえんきょう、ほうおう、ポンプ、みずがめ、みずへび、みなみじゅうじ、みなみのうお、みなみのかんむり、みなみのさんかく、や、やぎ、やまねこ、らしんばん、りゅう、りゅうこつ、りゅうけん、レチクル、ろ、ろくぶんぎ、わし、の合計八十八種類だが。

占いコーナーだけでニュースの時間、終わるっつーの。

……しかし、こうしてよくよく考えたら、変な星座もいっぱいあるよなあ。

なんだ、かみのけ座って。

それに、ちよくこくぐ座とちょうこくしつ座って明らかにかぶっ

てるだろ。

あと、IAUの連中、どんだけ南好きだ。

浅倉南あさぐらみなみの影響か。

タツチ、世界進出の瞬間だった。

「『ざます』」

「あつてない！」

そんな語尾がそもそもありえないし、だいたいにしてそういう語尾を使うマダムは外国人だろ。

意図的に翻訳しているとしか思えない。

あとは、中国人の『アル』とかな。

「3ホウ×3ホウが5」

「合つてない!?!」

「サザンが五」

「それは合つてる!?!」

人数が、な。

……今更だけど、大丈夫か？ この発言。

「三年前の私と翼」

「会つてない!?!」

「実はどこかで会つていた可能性も……」

「あつてない……いや、それはない!!」

だって、その頃の僕はまだ富士の樹海の地下にいたもん。

当時は普通の中学三年生だったはずの緋姫が人生に疲れた拳句、

最果ての地に来ていたというのなら、話は別だが。

「とまあ、こんな感じかしら。本当はまだあるのだけれど、『あつ

てない』シリーズはこれくらいにしておきましょう。次は『感動し

切れない』シリーズよ」

「……『感動し切れない』?」

ネーミングからして際物っぽい。

というか、コイツが発案した時点で、それはもうまともな範疇内には間違いなく入らない。

「ええ。あるじゃない？ 世の中には、感動し切れないものが。それを私が独断と偏見に基づいたジャッジで選出したものよ。これからどんどん言っていくから、翼はそれに応じて的確なツッコミを入れて頂戴」

「コピーアンドペーストかよ……。ていうか続編があるのか……。それは想定外だったぜ。どうせ僕には拒否権が与えられやしないんだから、しっかりついていくさ」

「ええ。……それじゃあ、いくわよ」
「すう、つと静かに呼吸を整える緋姫。そして、『感動し切れないものを口にする。』」

「『わたし、パパのことだーい好き！ でも、パパとお風呂に入るのだけはイヤ』」

「感動し切れない！」

無邪気な子供の残酷な一言。

おそらく、彼が同じ服を二日続けて着る日は二度と来ないだろう。
「『貴方は私がお腹を痛めて産んだ子じゃないけれど……私達が一番懐を痛めて育てた子よ』」

「感動し切れない！」

ARMSの『笑う牝豹』ラフイング・パンサーこと高槻美沙お母さんの名台詞が、こんな形でネタとしてパロディーになるとは。

さぞかし不本意だったろう。

でも、『プロジェクト・ARMS』と『ナンバーズ・チルドレン計画』には、いくつかの共通項が見受けられるような気が……。

まあ、偶然だろうが。

というか緋姫、知らない間にジャンプからサンデーに宗旨替えか？

「『世界の中心で愛を駄弁る』」

「感動し切れない！」

真剣に話せ。

「『助けて下さい！ 主に無償で』」

「感動し切れない！」

しかも派生した。
ケチケチすんな。

「『ここを通りたければ、俺を助けてからにしろ!』」
「感動し切れない!」

せめて、自分で助かる努力をしろよ努力を。

暗に、『自分の身は自分で守れ』『人任せにするな』という訓戒を含んだ、何気に深い一言である。

「『君のすね毛に……乾杯』」
「感動し切れない!」

せめて瞳に乾杯しろ。

もつとも、今時このフレイズを真剣に使う人間がいるとしたら、ソイツは間違いなく勇者だ。

僕が保障する。

「とまあ、『感動し切れない』シリーズもこんなところかしら。このようなことを踏まえた上で、私はずっと気になっていたのよ。あの男……八百三十三大地のことが」

「は? いや、いや、お笑いが流行るっていう話はどこに行ったんだ……?」

「何を言っているの。こんなタイミングでお笑いの話なんかするわけがないでしょう。私は至って真面目な話をしているのよ。こともあるのに、それを馬鹿にするつもり? ふざけるなどは言わないけれど、時と場合というものを考えて頂戴。いくらまだ六歳だからといって甘えないで。もう少しその場の雰囲気というものを読むようにしなさい。恋人だからってなんでも許されるといっわけじゃないのよ」

……怒られた。

かなり理不尽な理由で、怒られた。

「綺羅衣翼君」

「……はい」

「謝りなさい」

「……ごめんなさい」

「今後気をつけて。分かった？」

「……分かりました。でも、どうして緋姫さんはお笑いの話なんて始めたんですか……？」

「そんなの聴くまでもないでしょう。いきなり堅苦しい話を持ってきたくなかったからよ。言ってみれば、前座ね」

「そ、その割には随分と長いことどうでもいい話で引っ張った気がするんですけど……」

「あれはあくまで、会話の潤滑油程度よ」

「い、いや、摩擦係数は少なければ少ないほど良いというものでもないと思うのですが……」

「なら、彼氏の目の前で他の男の話を突然始めるのに抵抗があったという、織細可憐な乙女心ということでもいいわ」

「お、乙女心ですか……」

綺羅衣翼、びびりまくりの巻。

さつきからどうしてか、丁寧語である。

「とにかく、私が言いたかったのは、八百三十三大地のことよ。……ねえ翼。本当にあのム力つく男が、件の『ジ・アース』で間違いないの？」

ム力つく男。

織細可憐な乙女心とはおよそ対極に位置する単語が発せられた。

「それは、間違いないと思う　いや、間違いないな。お前も見ていただろうが、音葉を攻撃しただろ？　多分、あの力は『ジ・アース』で正解だろう」

いつの間にか丁寧語がなくなっていた。

真面目な話になったということだ。

「……でも、どう考えたところで、さつきのお笑いの話には結び付かないような。」

「なら、あの腹立たしいシヨタ男は、これまで翼達がずっと追いかけてきた人物ということでしょう？」

「……………ああ」

ム力つく男が、腹立たしいシヨタ男に進化していた。

このままグレードアップし続けたら、どんな罵詈雑言になるのだろうか。

考えたくもない。

「それで、目的は世界沈没、と」

「そう言っていたな。轟も言っていたから、多分本気なんだろうと思う」

「おまけに、この日本が最後、とも言っていたわね」

「……………何が言いたいんだよ」

潤滑油がまるで役に立っていない。

「おかしいと思わない？ 《どうして彼は、私達の前に姿を現したのか》」

「それはだから、僕らを勧誘……………というか、従わせようとしたんだろ。轟の時もそうだったじゃないか」

「だとしても、よ。《わざわざ学校に編入してくる理由が》、どこにある？」

「……………」

考えたが。

思い付かない。

それこそ。

「……………《あつてない》、な」

「そういうことよ。私達を手下にしたいのなら、単独で私達に接触してくればいい。それが理由じゃないのなら、これまで同様、ずっと身を潜めたまま黙って世界を沈めればいい。この間翼を襲った痛い女も、どうやらあの男が仕向けたものだったらしいし、とにかくあの男のやっていることはどうも、無駄が多すぎる」

「……………確かに、もつともだな」

少なくとも、相楽森学園に編入してくる理由はどこにも見当たらない。八百十三大地、なんてあからさまな偽名も使って（変な日本

語、である）、経歴もおそらくは改竄しているものだろう。余程明確な目的でもない限り、そんな大層な手間をかける人物には、少なくとも僕は、思えなかった。

「……ひよつとしたら、友達でも欲しかったんじゃないのか？」

僕は冗談半分で言ってみた。言ってみて自分でも馬鹿馬鹿しく思っただけで笑ってしまう。これから世界を滅ぼそうとしている奴が、全能になりたがっている奴が友達だなんて。

だが、緋姫は笑わなかった。

「案外、正解かもしれないわよ」

「……え」

「あの男は、それこそひよつとしたら、だけれど、理解者が欲しかったのかもしれない。“唯一”ということは同時に“孤独”ということだから。人の上に立つ者は、少なからず抱く感情よ。……もつとも、あの男に人の上に立つ才能があるとは思えないけれど。極端に言ってしまうえば、あの男は《寂しい》のよ。勿論、無自覚でしようけれどね」

「寂しい……」

「寂しいなら寂しいと、正直に言えばいいのに」

「……………」

緋姫のその独白は、聴こえなかった振りをした。

「翼は、あの男を見て何を感じた？」

「これといって、何も感じなかったけど……」

今朝も似たような質問をされたばかりだ。僕は即答で返す。

「私もよ。実際に向き合ってみて分かった。《あの男からは本当に何も感じられなかった》」

「……なんか、さつきから奥歯に物が挟まったような口振りだな。

言いたいことがあるならばつきり言えよ。どっちみち僕らには作戦会議の時間が必要なんだから」

「別に焦らしているわけじゃないのよ、本当。ただ、思ったのよ。

あの男の内面には、何も無い、と。何も感じていない、と。完全に

虚無だ、と」

「……人を躊躇なく殺したり、世界を滅ぼそうとか思ったりしたら、人格が破綻して虚無になった　いや」

僕はそこで、ようやく緋姫の言葉の真意に気が付いた。

「《逆か》。最初から何も感じていないから、躊躇なく人を殺せたり、世界を滅ぼそうと思ったりできたってことか」

「そういうことよ。それが行き着くところまで行って　堕ち付くところまで堕ちて、寂しさを感じるようになったのかもしれないわね。……もつとも、これはあくまでも私の個人的な予想だけで、

確信があるわけではないのだけれど。本当のところはどうだかわからないわ。分かるうとも分かれるとも分かりたいとも、思わないし」

「いや、でも貴重な証言になったよ。これまで『ジ・アース』は徹底的に手の内を秘匿してきたからな。生き証人がいるってだけで、UN事務所にとってはプラスだ」

「……抵抗があったのは」

「うん？」

「貴方の前で、他の男の話をすることに抵抗があったのは、本当よ」

緋姫は。

いつものように唐突に話を切り替えて。

らしくもなく、若干すねたように顔を赤らめて、蚊の鳴くような声で呟いた。

「……分かってるよ」

僕は手を伸ばす。

手を伸ばせば　届く距離。

僕だけに、許された距離だ。

「僕は緋姫のことが好きだし、緋姫が僕のことを好きだっただけ分かってるから、いちいちそんなこと気にしなくていいんだよ」

そう言っただけ、僕は緋姫の緋色の髪を撫でた。さらさらで気持ちがいい。撫でられている緋姫本人も気持ちがいいのか、片目を瞑って口

許を綻ばせた。そして
どちらからともなく。唇を重ねていた。

「ん……」

艶っぽく喉を鳴らす緋姫。一度離れて、すぐにまた重ねた。

「ん、んん……ぷはあっ……」

何度も口づけを交わしてから、やがて顔を離すと同時に、緋姫は大きく息を吸った。半開きの目もとろん、としている。

「一応教えておくけど、キスしてる間は息しちやいけない、なんて法律はないぞ」

「わ、分かってるわよ……」

いつになく顔を紅潮させて、鼻が触れ合うくらいの間近に緋姫がいる。

それがどうしようもなく 嬉しくて、幸せで。

「なあ緋姫」

「なに？」

「卒業したら、一緒に暮らそうか」

なんて。思わず口走っていた。

「え？」

「いやさ、ここ一週間くらいずっと考えてたんだよ。僕は大学なんて通うつもりないから、春になれば社会人だろ？ だからそうなるよ、もう世間体もそんなに気にする必要ないかな、って。この家は、僕の一人暮らしを前提に所長が紹介してくれた物件だけど、貯金なら結構あるし、もつとちゃんとした広い部屋探して、ちゃんとした家族としてさ。こんな中途半端な生活じゃ、息が詰まってしまうからねえや」

緋姫は、らしくもなくぽかんと口を開けて（かなり貴重な絵だ）、言われた内容を脳内で反芻している様子だ。

「私と……翼が？」

「他に誰がいるんだよ。それとも……嫌か？」

「ば、馬鹿っ！ 嫌なわけないじゃない！ 嬉しくて……」

怒鳴ったかと思えば、今度は尻すばみに小声になっ
ていき。

「嬉し、くつて……………」

あつという間に。目の端から、ぼろぼろと大粒の涙が溢れ出した。
「お、おい、緋姫？ なに泣いてるんだよ？ 僕は別に泣かせるつもりなんて……………」

「ちがつ……………、違うの……………。嬉しいの。嬉しくて……………すごく嬉しくて……………。翼と私が、本物の家族になれるんだって考えたら、嬉しいのが、どつと一気に押し寄せてきて……………。な、泣くつもりなんて、なかったのに……………、ごっ、ごめ……………ごめんなさい……………」

『家族』。

緋姫にとつて、その言葉がどういう意味合いを持つかを僕はよく知っているつもりだし、だからこそ僕はずつと言うタイミングを計っていた。緋姫にとつての家族というものがどれだけ大切か分かった上での、これは生半でも軽率でもない発言だった。

知っているつもりだった。

でも つもり、だけだった。

まさか……………こんなに号泣するほど喜ぶとは思ひもしなかった。彼女が人一倍泣き虫だということを差し引いても、これは大号泣と形容する他に相応しい単語が見当たらなかった。

それほどまでに 喜んでくれたのだ。

最高のタイミング、だったろう。

「あーもう泣くな泣くな。お前は、笑ってるのが一番可愛いんだからさ」

そう言つて、僕は緋姫を腕の中に抱き締める。しゃくり上げる声
がしばらく聞こえていたが、それは決して耳障りな音ではなかった。
それが、緋姫が僕に向けてくれていている気持ちの大きさを代弁に
他ならないのだから。

僕はそれが……………愛おしい。

どうしようもなく、愛おしい。

彼女が口にしない代わりに、僕はしっかりと口にする。

「緋姫。僕はお前が大好きだぞ」

迂闊だった、と言わざるを得ない。

僕は勿論のこと、緋姫も普段の頭の冴えがあれば気付いていたはずだ。

最高のタイミング、どころではない。最悪のタイミングだと。そもそもこの話は、してはならなかったのだと。いつの時代も。

戦争が始まる直前に話す将来は、死亡フラグと相場が決まっているのである。

*

「お嬢さんの具合はどう？」

にこにここと。無邪気にも見える微笑を湛えて大地が話しかけてきた。

本日十月十三日土曜日の放課後。いよいよ二週間後に文化祭を控えて盛り上がりも最高潮に達しつつある相楽森学園。

勿論、三年B組として例外ではない。僕と緋姫と音葉が考えて決定した出し物に向けて、クラス全体が一丸となって着々と準備していた。

……そういえば、よくよく考えてみれば、うちのクラスが何やるか、まだ説明してなかったな……。どうしよう。

まあいい、とにかく今は大地の相手が最優先だ。お嬢さん、というの言うつまでもなくシヨットのことだろう。彼が編入してきたから二週間近く経過するが、僕達のことを名前で呼んだことは一度もない。一応必要最低限の常識は持ち合わせているのか、周りに生徒達がいる只中で能力名を呼ぶこともなかったが。

「順調すぎるくらい順調だよ。今にも飛び出しそうな鉄砲玉みたいで、見ているこっちも冷や冷やものだ」

事実、シヨットの回復力は凄まじかった。宿敵との対決を目前に

控えている以上、おちおち休んでもいられないという心境なのだろうが、根性論でどうにかなる次元を遙かに超えている。『アナリス』などは、逆に呆れ返るくらいで、一度解剖して精密検査してみたいとまで言い出す始末だ。

加えて言う。

「もう全快、って言ってもいいくらいだ」

「ふうん。そっか」

大地は、笑みを絶やすことなく頷いて。

「それじゃあ、今日しようか」

まるで。

ちよつとゲーセンにでも行こうか、くらいの軽いノリで、宣戦布告をしてきた。

拍子抜けするほど、あっさりと。どこまでも自然体で。

「今夜零時に、ここの正門前に集合にしよう。面子はもう決まってるよね？ 言われなくても分かるとは思うけど、『ヴォイド』だけは忘れちゃダメだよ？ あはは、いいね。盛り上がってきた盛り上がってきた。祭りの前の景気づけて感じかな。もっとも、君達が負けちゃったらその祭りそのものがなくなっちゃうんだけどね。なんて、意地悪な言い方しちゃった。あはははは」

こうして。

地球存続か、あるいは滅亡か。

人類の命運を懸けた頂上決戦の幕は、こんなにも軽々と上がったのだった。

戦闘が。

否。

戦争が、始まる。

To be continued...

10-3・「あつてない」宣戦布告（後書き）

はい、前章の後書きで述べた通り、今回は輝夜さんの口も冴えまくってます。正直、ここまでうまくいことこじつけられたのは自分でも驚きというか……勿論、ネタはオリジナルなわけですが、やってみればなんとかなるもんだなあと思いました。そして、あからさまな伏線第二弾！ 聡明な読者様にはオチが見えてきたかな？ そんなわけで、次章からは最終決戦……とはいかず、一拍置かせてもらいます。まあ、決戦前夜という形でお送りすることになるでしょう。どうぞご期待下さい！

10-4・開戦に先駆けて「負けないための戦い」(前書き)

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・半角の()で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・全角の()で書かれている部分は主人公の情景補足
- ・《》で書かれている部分は傍点(強調)

10-4・開戦に先駆けて「負けないための戦い」

＊

ナンバー24『リジエネレイト』みのりかわあとは 実川音葉は僕が実際的にはじめて出会ったナンバーズであり、これまでに唯一僕を打ち負かして土をつけたナンバーズである。同時に僕にとって非常に大切な友人であり心の恩人であり、きつと未来永劫をかけてその恩を返していかなければならないであろう存在だ。

「そう……今晚、ね……」

ナンバー813『ジ・アース』こと八百十三やあてみ大地だいちからの宣戦布告を受け、僕はそれを音葉に報告していた。曲がりなりにも当事者の一人である音葉には（しかも、彼女は一度大地に殺されかかっている）説明する義務があると判断したからだ。

「本当……嵐のようにやって来て津波のように押し寄せるよね、八百十三君って。いくらなんでも性急すぎるっていうか、何かに急かされているような感じがするよ」

「まあ、クラスじゃ大人しく振る舞っているけど、本性は知っての通りあんなだからな。まさに思い立ったが吉日って性格だよ」

「……性格、の問題だけなのかな？」

「うん？」

「このおよそ二週間、綺羅衣君は八百十三君を見ていて、何か思い当たる節はなかった？」

「……ひめ緋姫にも何度か似たような質問をされたよ。要するに、アイツからは何も感じない、って言いたいんだろ？」

僕の回答は、しかし満点ではなかったようで、音葉は首を傾げる。「何も感じない……、確かにそれもあるんだけど、私はもつと根本的なことが問題のような気がするんだよね。具体的にどうこう、っていうわけじゃないんだけど、あの子はなんだか、生き急いでいるように　ううん、死に急いでいるように見えてしょうがないんだ

よ

「……死に急いでいる？　おいおい、いくらお前の言うことでもそれには納得しかねるぞ。アイツは世界を滅ぼそうとしているんだぞ？　むしろ思いっきり率先して生きようとしてるじゃないか」

「いつだったか、自分のことしか考えていない人間なんて一人もいない、と思ったことがあったが、八百十三大地に関してはその例外だ。あの男はまさに、『自分のためだけに』行動している。」

本能の赴くまま　破滅を望んでいる。

極限にまで　破滅願望を抱いている。

「それなんだけどね。私には、そんなもの後付けの理由に思えてならないのよ。なんだか……見ていてひどく儂げな印象を受けるの」「儂げ……」

緋姫が一日に言っていた、『寂しい』という言葉と重なる部分がある。この女傑二人がそう言うからには、何かしらの説得力があるが……。

「でもまあ、それも今夜の決戦が終わってから考えればいいことだろ。今は何は置いても作戦会議だ。音葉は直接的に戦闘に参加はしないけど、一応意見だけは訊いておこうと思っただけ」

「戦闘に参加するのは、綺羅衣君、緋姫ちゃん、シヨットさん、真田さん、轟君、の五人でいいのかな？　あ、でも釈迦堂さんは戦闘要員じゃないけど参加はするのか……そうすると六人ってことになるんだね。でもさ、どうしてわざわざ一人一人から意見を訊いて回っているの？　全員でまとめて話をすれば、もっと手間が省けるんじゃない？」

「理由は二つある」

「言われるまでもなく、そんなことは承知の上だった。だから僕も予め用意しておいた返事を即返す。」

「一つ目の理由は、このメンバーがどうにも我が強すぎる顔ぶれだっただけだ。特に所長と轟なんて、顔も合わせたことないような繋がりしかないからな。下手に全体で対策を練ろうとすると意見が正

面衝突して收拾がつかなくなっちまう。別に何も、僕が指揮官として出しゃばってまとめようとするつもりは更々ないけどさ。むしろ指揮官なら、轟や所長の方が向いてるだろうけど、今回に限ってはそうもいかない。なら、ひとまずの代表として僕が矢面に立っている、ってわけだ」

「うん、綺羅衣君って、なんだかんだ言って最後には全体をベストな形にまとめてくれるタイプだもんね。流石じゃない」

「……いや、面と向かってそう言われると結構恥ずかしいんだけど」

それに、人脈だけで物を見るとしたら音葉の方がよっぽど適任なんだ。ただ今回の場合、目的に付随する戦闘行為が前提にある以上、彼女にそれは事実上不可能だというだけで。

「それで。二つ目の理由ってというのは？」

「あ、ああ……。どちらかというところの方が肝要でさ。大地は、この戦争を勝ち抜き制だつて言っていたけど、十中八九そうはならない」

「え？ それって、どういうこと？」

「この戦い、僕の見立て通りならそんなに甘いもんじゃない。生半な覚悟で挑めるわけがないだろう？ かなり軽いノリで幕が上がっちゃったが、その性質は名実共に地球存続を賭けた、少数精鋭の殺し合いだ。五対五である以上、一人の力を惜しまず一人に向けて使い切った方がいい。徒に二人勝ち抜きとか期待するのは、希望的観測が過ぎるってもんだ。実際、大地の連れ 『六天道士』^{りくてんどうし} だっけか。大地には及ばずとも、四人が四人、相当な使い手だ」

「成程……。確かに、八百十三君に選ばれし者、だもんね、私なんかと違って」

「音葉、そんな言い方は」

「え？ ああ、ごめん、ちょっと自虐入っちゃってたね。そんなつもりじゃなかったんだけど」

そう言って、自分の失言を恥じるように頬をかく音葉。

「とにかく、話を戻すぞ。実質一対一の勝負になるんだから、相手

との相性を考えた上で、ベストとなる采配が必要になってくるわけだ。まして、所長なんて誰かは分からないけど、ピンポイントで名指ししてるくらいだ。だったら、全体でまとまるだけ無駄だ。そんなわけで、この対策会議は《誰を誰にぶつけるべきか》っていうことを決めるものなんだよ」

「でもさ、あつちの人達の能力は分かかっていないわけでしょ？ だったら、誰を誰に、なんて決められないんじゃないの？」

音葉の当然の疑問に対し僕は。

「いや、あつちの能力は^{カード}大まかにだけど掴めちやいるんだ」

「え？ ど、どうして？」

「この仕事長いことやってるとさ いや、長いつて言っただって精々三年程度なんだけど。隠されたりすることなく一目見れば相手の性質つてのがだいたい見えてくるもんなんだよ」

時間は短くても。

密度はどうしようもなく、濃い。

だからこそ。

「あの四人の能力は、既におおよそ予想がついている。だから、こつちもそれに最適な能力を^{カード}ぶつけるだけのことだ」

「す、凄いね……。あんな数分で、そこまで見抜いていたんだ……」

「イカサマだなんて言うなよ？ 向こうの手札が分かっているから、それに相応しいものを当てていくからって」

僕が冗談めかしてそう言うと、音葉は激しく首を横に振る。サイドに束ねられたポニーがそれに合わせてぶるぶると揺れる。

「い、言わない言わない！ それはイカサマじゃなくて、もう目利きのレベルでしょう？ 盗み見たとかならまだしも、それは悪いことじゃなくて技術の領域だよ」

「そっか、そう言ってもらえると安心した。まあ、あくまで漠然と分かっているだけだからな、参考にはなっても正解にはならない。

あんまり買いかぶるなよ。……ああ、それとこれは確認事項だ。音葉に、どうしても確かめておかないといけないことがある」

「うん？ なに？」

「『リジエネレイト』の委託。音葉、あれは」

「使わないよ」

僕の言葉を遮って。

実川音葉は決して揺るがない毅然とした態度で、きっぱりと言いつ切った。

「あれはそもそも禁則事項だからね、本来なら一度だって使うことを許されていないものだもの。私だって自分の命は可愛いし、緋姫ちゃんの時みたいなさまな不正行為をするつもりはないよ。それに、そんなもの使ったらあからさまな不正行為じゃない。たとえ天秤にかかっているものが人類の命運だったとしても、私はそんなアンフェアな行為は認めないよ」

「……そうか。《安心した》」

僕はほう、と安堵の息を吐き出す。

「わざわざ《釘を刺す》必要もなかったな。僕が知ってる音葉なら、そう言うに決まっているもん」

僕は、『リジエネレイト』の委託は《間違っても使うな》、と言おうとしたのだが、そんな考えは彼女にとっては言わずもがなだったようだ。また音葉に命懸けの禁則行為をやられたらどうしようかと思っていたのだが、どうやらそれは杞憂に過ぎなかったらしい。

「……歯痒いな」

ぼつりと。

音葉は、珍しく俯いて声を漏らした。

「綺羅衣君や緋姫ちゃん達に任せっきりで、何にもできない自分が……歯痒くて、悔しい」

下唇を噛み締め、膝の上で掌を握り締める音葉。

確かに……コイツの性格を考えると、傍観していることしかできないってというのは何にも勝る苦痛だろう。

でも。

違うよ、音葉。

「何もできない、なんてことないだろう？」

「え……？」

「信じるよ。僕らの勝利を。護るものがあるってことは……それだけで心強いもんだぜ」

僕は、音葉の目の前で固く拳を握って、宣誓する。

「約束する。僕は、お前以外のヤツに負けたりしない。絶対の絶対だ」

音葉はしばしの間、眼前に突き出された拳と僕の顔を交互に見や
つて。

銀縁眼鏡の奥の目を細めて。眩しいくらいに笑みを浮かべた。

*

ナンバー13『バッドラック』轟虹色にじいろとナンバー100『ヴォイド』釈迦堂唯ゆいは血の繋がった兄妹である。この事実が轟と僕しか知らない極秘情報であり、釈迦堂本人ですらそのことは知らない否、覚えていない。かつて大地の下にいた釈迦堂は、轟の能力によって四年以上前の記憶をこっそり失っているのだった。その決断をするのにどれほどの覚悟が必要だったか、僕なんかには計り知れない。それ故に、轟は大地、即ち『ジ・アース』に対する恨みは一入のはずだったが……。

「今夜零時な。ああ、分あった分あった。で、オレはどいつと戦やあいいんだ？」

なんて。僕から一通りの説明を受けた轟の反応は実に淡白で、拍子抜けするくらいにおざなりだった。

「……轟。お前は大地と『ジ・アース』と戦いたいんじゃないのか？ なんだかあんまりやる気が感じられないぞ」

「じゃあねエだろうよ。オレにだって腹決めるための時間くらい必要なんだ。今回はあの野郎に指名されちまったから逃げ出すわけにやいかねエが、本当ならもうちょっと計画的に戦いたかったんだよ」

轟虹色は、豪放ではあっても決して無謀ではない。最短距離を選

ぶが、それは一直線に進むことを意味しない。そういうタイプだ。それでもなければ、六年間もの長期に亘って生徒会長など務まらなかつただろう。

「それにな、綺羅衣翼^{たすく}。オレよりもテメエの方が強い以上、オレは『ジ・アース』の相手としちゃ甚だ不適合ってことだろうよ」

「……いや、あの対決は決して僕の完全勝利ってわけじゃないから、一概に僕の方が強いとは言い切れないだろうが……」

「けっ、よく言うぜ。あの時だって、テメエはその気になりゃオレごとき一捻りだったはずだぜ？ たまたま《不幸》が重なっただけで、な」

なんだろう、轟のこんな消極的な発言は。僕と戦うまではなんにも勝気で強気で怖いもの知らずだったのに、今ではそれらがすっかり鳴りを潜めている。

正直……彼らしくない。

「ま、過去の話してもしやあねエか。本題に戻ろうぜ。結局、オレはどいつと戦えばいいんだ？ テメエにや、あちらさんの能力もだいたい把握しているみてエじゃねエか」

……まあ、闘争本能そのものがなくなつたわけではなさそうなので、今ここで深く追求するのはやめておこう。

「……僕の読みだと、お前と相手をするようになるのはナンバー4 4だと思う。なんていうか、お前のセラとナンバー4 4のセラが似通っていた。同じ属性同士のぶつかり合いなら、純粹により力の強い方に軍配が上がる」

「は、随分と高く買ってもらつてるみてエで悪イがな、確実にオレの方が力が上だとは限らねエぞ？」

「オンリーワンであるが故にナンバーワン、なんじゃなかったのか？」

「……………」

轟は言い返さない。ちょっと前までの彼なら、間違いなく強氣になつていただろうに。

やはり、らしくない。そしてそれは、おそらく僕のせいなのだろう。

僕が轟に、《勝ってしまった》から。

五百年間負け知らず。

五・七・五調に詠うことうたのみに特化した最強の陰陽術師の家系という看板を背負っていた彼は、確かにそのせいで己の視野をひどく狭窄させていた。だが、それは同時に轟にとって、完全無敵の絶対的自信でもあったはずだ。

それを僕が　打ち砕いた。

最強という幻想を、僕がへし折ったのだ。

勿論、あの場に於いてはあれが最善であったのは間違いないし、負けるわけにはいかない戦いではあったのだけれど、どんな形であれ、僕に負けたという事実が空翔ける覇者の翼を汚してしまったというのは覆りようのない厳然たる真実だ。

そしてそのせいで、今の轟は揺れている。

自分に対する絶対的自信が　揺らいでいる。

タイミングが　悪すぎたのだ。

「綺羅衣翼。念のため言つとくがな、オレがこの戦争に参加するのは、『ジ・アース』の野郎をぶつ飛ばす最高の機会だからだ。オレはオレなりの流儀でやらせてもらう。もしオレが負けて、それで結果的に負けることになったとしても、オレは一切責任を取らねエからな」

「……ああ、分かってるよ」

……以前の彼ならば、『もし自分が負けたら』なんて弱気な発言は絶対にしなかったはずだ。轟虹色は、自身に対する絶対的自信があったからこそその轟虹色、だからこそ『天下無双の生屠会長』せいとくかいちようだったはずなのだから。

僕は、一抹の不安を覚えずにはいられなかった。

「ジャリ子」

「は、はひっ？」

釈迦堂の名を　轟が普段人前で釈迦堂に対して使っている呼称を使って、轟は何かを放り投げる。

放り投げたのは……。

「か、会長……これは？」

「手錠だ。見りや分かんだろ」

おそらく釈迦堂は見ても分からなかったから尋ねたのだが、

轟はかなり投げやりな態度で口にした。

そして、《それ》を手錠だと認識できる人間が、果たして世界中に何人いるものか。

その手錠は、銀製の小さな楕円状の輪っかだった。輪っかの数は一つだけ、鎖もない。およそ連想される、警察官が持っているような手錠とは程遠い形状をしている。

「ソイツにや、オレのセラが籠もってる。掌を合わせて一度ソイツをはめりや、オレが命令しない限り絶対に外れねエ。つまり、ソイツをはめている限りに於いては、お前がビビって『ヴォイド』が解かれる、なんてことはねエってこった」

「会長……」

不安に揺れる釈迦堂。縹色の巻き毛を所在なげにいじくっている。……「つたく、んな顔すんじゃないよ、辛気臭エ。安心しろよ。お前が傷付くことはねエよ。『ジ・アース』の野郎にとって、お前はかなりの《お気に入り》だからな。それに　」

「……それに？」

「……いや、何でもねエ。忘れる」

「は、はあ……」

それに、オレはもうお前を失いたくねエ

轟は、そう言おうとしたのだろうか。

言いたくても……言えなかったのだろうか。

不安に揺れる妹と。

自信を失くした兄。

「……とにかく、伝えたからな。遅れるなよ。今夜零時だ」

部外者である僕は、ただそう言い残してその場から立ち去ることしかできなかった。

*

ナンバー410『シヨット』シヨット・G・スカイハイはかつて、実の姉である『ブレット』を目前で大地に殺され、それ以来単身で『ジ・アース』を追って世界各地を転々と探していた。その途中で義賊集団『銀の暁』を立ち上げ、僕に確保されてからは『銀の黎明』というワシントン条約保護団体へと活動を一変させた。緋姫が暴走した時も、彼女のおかげで、彼女の一喝のおかげで、僕は僕にできることが見つかった。今となってはもう、その想いに応えることはできないけれど、それでも僕にとってはかけがえのない仲間だ。

「……………」
僕から一通りの説明を受けてもまだ、シヨットは口を開かない。

彼女にとっての生涯を懸けた最大の仇敵との対決を前にしても、先日とは異なり彼女は冷静だった。

「……………確認したいんだけどさ」

ようやく重い口を開いたシヨットだが、その顔は優れない。受け入れがたい、受け入れたくない、けれど受け入れざるを得ない現実を前にした、歳相応の少女の顔だった。

そして、直球を投げてきた。

「綺羅衣。アンタ、あたしを『ジ・アース』に当てるつもりないだろ」

「……………」

「いいよ。正直に言って。文句言ったり駄々こねたりしないから……………ああ。確かに、僕はお前と大地を戦わせるつもりははじめからない。大地とお前じゃ、実力差が大きすぎる。はつきり言って、お前に勝ち目はないよ」

ブレット級の威力を持った一撃を、いとも容易く防ぎ切った大地に対し、シヨットはあまりにも無力だ。たとえ残るブレット九発全

てを一斉掃射したとしても勝ち目は五分だし、第一、ブレットには一、二発ならまだしも全弾となると、装填までの時間がかかる。最低でも数秒。しかしその最低で十分なのだ、大地がそんな大きな隙を見逃すはずはないだろう。

「そう……」

シヨットは前言の通り、不平を言うでも反駁するでもなく、僕の言葉を受け入れた。

内心では、悔しいはずだ。それこそ、断腸の思いのはずだ。それでもこの少女は冷静だった。はじめて戦った時からそうだ。内心ではマグマのように煮え滾った感情が迸っていても、こと戦闘になると彼女は常に最優の選択肢を選ぶ。この前の強襲はなかったものとして、過程に残念なミスは多くても最終的には優秀なところに行き着くのがこのシヨット・G・スカイハイという少女なのだ。

「確かに、あたしじゃ『ジ・アース』の相手は無理だろうね……。こないだは頭に血が昇ってたけど、改めて考えてもあたしには荷が勝ちすぎる相手だ。背後からであれなんだ、正面きつてのバトルじゃあ、どう分析したところであたしに勝ち目はない。そうだろう？」

僕は黙って首肯する。彼女は賢くも、自分の身の程というものを弁えている。ならばこれ以上僕が何かを言うのは蛇足だろう。

「それで？ 一対一の対決になるだろうことは分かったけど、あたしは誰を相手にすればいいのさ？ あたしはアンタみたいな観察眼も持っていないし、それ以前にこの前はそんな精神的余裕もなかったしね。戦うべき相手なんて、自分じゃ分からないよ。だから、綺羅衣の指示に従う」

「ああ。お前には、ナンバー283の相手をしてもらうことになるだろうよ」

「283っていうと……あの覆面かぶった修道士みたいな服装したヤツ？」

「そうだ」

「一応理由くらいは、訊いておいてもいいよね。アンタのことだけか

ら、そう決めたからにはちゃんとした理由があるんだろ？」

「まあな。理由は簡単、アイツが『六天道士』の中で唯一、お前が大地を強襲した時に《反応を見せた》からだ」

「反応を……見せた？」

「まだ周囲で身を潜めていた時だけだな。本人は隠していたんだろ
うけど、あるいは無意識下だったんだろうけど、一瞬セラが揺らい
だんだよ。ごく小さなものだったけどな。その後姿を見せた後も、
執拗にシヨットに向けて殺気を放っていた。多分『シヨット』の能
力 あるいはもつと単純で広義的に“銃”というものに何らかの
思い入れがあると見た」

「あの状態で、完全に気配を消していた状態で……そんなところま
で見抜いていたってどういうわけ？」

「ん？ まあそうだが」

半信半疑といった様子でシヨットが尋ねてくる。僕は何も特別な
ことをしたつもりはないのだが……。

「綺羅衣。アンタはそう思っていないかもしれないけど、それって
とんでもなく凄いことだよ。一体どれほどの修羅場潜り抜けてきた
ら、そんな洞察力を身に付けられるのさ」

「そう言われてもな……できるもんはできるんだからしょうがない。
強いて言うなら、要の特訓の賜物かな」

「なんか……次元の違いを見せつけられたようでムカつくな……。
ともかく、あたしの相手はナンバー283っていうことでいいんだ
ね？」

念を押すように確認してくるシヨット。

「ああ。お前くらいの戦闘感覚があれば、相対すれば分かるだろう
が……僕の見立てだと、ナンバー283の能力はおそらく銃と対極
に位置するもの つまり、刀剣の類だろう」

「綺羅衣がそう言うのなら、きつとそうなんだろうね」

そう言って、シヨットはふん、と嫌味たらしく鼻を鳴らす。

「上等だよ。』銃は剣よりも強し』っていう格言を思い知らせてや

る。そもそも、あたしはあんな風に素性を隠すような真似をする奴が大嫌いだね。こそそと暗躍する奴は反吐が出る。あの覆面ばかり剥いで、その面しっかり拝んでやるよ」

実に頼もしい言葉だった。『ジ・アース』と戦えないことで戦意を喪失することを懸念していたのだが、どうやらいらぬ心配だったようだ。

「綺羅衣」

と。シヨットが僕の名を力強く呼ぶ。僕はそれに、なんだ、と返す。

「あたしはあたしの戦いを全うする。だから　あたしの代わりに、お姉ちゃんの無念を晴らす役目は、アンタに託すよ。もしも負けたりしたら……ただじゃおかないからね」

そんな風に僕を激励して。

シヨットは、最後の決戦に備えるべく仮眠をとると言って、僕に退室を求めた。

*

ナンバー？^{ワシ} 『ロックオン』 真田^{まきただ}真正^{ただなか}は、奇羅衣^{きろえ}と共に 『アンチ・ナンバーズ計画』 を立ち上げた真田^{まきただ}正長^{ただなが}博士の息子であり、現UN事務所所長にして最高司令官である。どこからどう見たところで三十過ぎのおっさんだが、実年齢はまだ二十一歳。第一のナンバーズであり遺伝子改造を行った結果、テロメアが短くなってしまい、老化が早くセラも安定剤を常用しなければならぬくらい不安定らしい。身体能力向上が見られなかった失敗作と自分で言うておきつつも、彼は既に勝利を確信している。

「……で。結局アンタが相手にするナンバーズっていうのは一体どんな能力者なんだよ」

「ふふ……、まだそれを教えるわけにはいかないな。こういうものは勿体ぶって期待を持たせた方が効果的なのだよ」

だから、誰にだ。

正面にいる僕ではない誰かに語りかけているような気がするの、
錯覚だろうか？

「それに、私の作戦通りに戦闘を進めるためには、お前達にも手の
内を明かさないう方が成功率が上がる」

「あ？ それはどういう意味だよ」

「だから、それを今ここで暴露するわけにはいかないと言っている
のだ。お前は私の策と勝利を信じていてくれれば、それでいい」

「確かにアンタは、予め逃げ道を作らせてくれないので有名だけど
さ……」

僕も懲りずに、何度も引つかかったことがある巧みなトラップだ。
卑怯卑劣、とまでは言わないが、決して褒められたものでもない
のは間違いない。

「とにかく、私が前線に立つのは今回が最初で最後だろう。ならば
こそ、徹底的に手の内を秘匿させておく必要があるのだよ。ここで
お前に種を明かしてしまえば、どんなに隠し通したところで一挙手
一投足に疑いを持たれる可能性がある。はっきり言って、私は弱い
とんでもなく弱い。扉に指を挟んだだけで死んでしまうくらい弱く
脆い」

「い、いや、流石にそこまで自分を虐げなくても……」
いくらなんでも誇張が過ぎる。

「いやいや、笑えないことに、これが事実なのだよ翼。私は弱い。
それは覆りようのない確固たる事実だ。……だからこそ、勝利には
万全を期し万難を排す必要がある。お前の口が堅いことは重々知っ
ているが、故に私は、お前すら信用するわけにはいかないのだ。す
まんがな」

「……分かったよ」

うまいこと丸め込まれた気がしなくてもないが、ここは所長の意
志を尊重しよう。今に始まったことではないが、彼の言葉には聴く
者を威圧する不思議な説得力がある。それほどまでに弱く脆く、こ
れまでは専ら指令を発するだけの人間だった彼が最前線に立つ覚悟

を決めたその心意気を、無駄にすることなどではしない。

「じゃあさ、これだけは教えてくれ。所長、アンタは一体どいつと戦うつもりなんだ？」

ナンバー44は轟が。

ナンバー283はシヨットが。

それぞれ担当することに、暫定的とはいえ決まっている。

もしもそれとかぶるようなら、改めて作戦会議を練る必要があるが……。

「ああ、私が標的としているのはナンバー654の男だ」

「ナンバー654って……あの筋肉の塊みたいな大男か!？」

意外だった。扉に指を挟まれただけで死ぬと豪語する彼が、あんな大男を相手にしようというのか。

「身長二メートルを超えようかという、筋骨隆々の男だったな、お前の報告によると。だが私の手元にあるデータに誤りがなければ、私が相手取れるのはその男しかない」

「どうして……ってというのは訊いちゃいけないんだっけか。ともあれ、所長の敵はナンバー654でいいってことだな？」

「いい、というか、それ以外に担当を回されたら困る。繰り返すが、私は弱いからな」

「……分かった。僕はアンタを信頼してるから、きつと今回もなんとかしてくれると信じてるよ」

「ああ、助かる。今夜零時だったな？ それに備えて、私も薬の調節をしておこう。少しアナリシスの世話になるとしよう。というわけですまないが……」

そう言って、所長は申し訳なさそうに退室を促す。

「ああ分かってる。最後に一応言っておくけど所長、まさか相打ちになるつもりじゃあないよな？」

僕の問いかけに。

「当たり前だろう。まだUN計画は中途段階だ。ここで私が抜けたら、それこそ部下達に示しがつかん。必ず生きて帰ってくるさ」

その言葉に満足して。
僕は所長室を後にした。

*

ナンバー？『ヴァンパイア』^{テシ}輝夜^{かくや}緋姫は僕の恋人だ。きつかけはなんであれ、今の僕にとって緋姫は誰よりもかけがえのない女性であり、装飾ない言葉で言ってしまうえば、僕は彼女のが大好きだ。もう緋姫以外の女性のことなど考えられないくらいに僕は彼女に夢中で、だからこそ、彼女に対してはこの戦いに向けて付言する事項が一つある。

一通りの説明をした後。

「緋姫。お前に限っては個々に作戦会議をしていた理由がもう一つある。彼氏として訊いておかないといけない確認事項だ」

「なに？」

いつもの表情で　あまり感情を表に出さない鉄面皮のまま、緋姫は尋ねる。

「この戦い……《下りてもいいんだぜ》、ってな」

「……………」

そう。

緋姫に限った話で言えば、彼女はこの戦いに参加する理由がない。下りる権利があるのだ。

僕や所長は、UN事務所としての義務感で。

シヨットや轟は、それぞれ異なる形の私怨で。

それぞれに、参加するだけの理由がある。

だが　緋姫には、それらが一切ない。私怨もなければ、義務感もない。大地に指名されはしたものの、それを馬鹿正直に受諾しなければならぬ事情はどこにもないのである。

それに……できることなら、彼女を危険な目に遭わせたくはない。確かに『ヴァンパイア』の能力はこの上なく力強いが、そのメリツトよりも緋姫の命の危険を　彼女の喪失を僕は恐れる。

だからこそ。

「ねえ、翼」

「……なんだ？」

「ちよつと来て」

と。ちよいちよい、と座ったまま僕を手招きする緋姫。僕も座っている状態だったので、膝でずると床を滑って近寄っていく。

そして、彼女の手の届く範囲にまで近寄った瞬間。

「てい」

「!?」

額に衝撃を受け、僕は後ろに転がる。痛かったわけではないが、突然の衝撃に不意を突かれた。

「な、何すんだよ!？」

「でこぴん。乙女の必須道具よ」

「でこぴん!? 最早道具ですらねえ! ていうか、なんでお前普通の人間くらいの力しかないのに、人一人を吹っ飛ばせるんだよ!」

お前は鬼塚栄吉か!?

「いえ、私はGTOよ」

「久しぶりに心の声を読まれた!? ていうか、GTOっていったらやっぱり鬼塚で正解じゃねえか!」

「甘いわね翼。GTOを『Great Teacher Onizuka』の略だと決めつけるのは早計というものよ。イニシャルを取っているだけなのだから、他に捉えようはいくらでもあるはずだわ」

「い、いや、確かにもっともな意見ではあるんだけど……。だったら、お前が言うところのGTOって何の略だ?」

「『頑張って 立ったよ お母さん!』の略よ」

「間違っちゃいないがツツコミどころが多すぎる!」

一言でまとめると、全く意味が分からない!

「翼」

表情を切り替えて。

真っ直ぐに僕を見つめてくる緋姫。

「言ったでしょう、貴方のことは私が助ける、私が護ると。ならどうして、最終決戦の時、貴方の隣に私がないなんて状況が起こるというの？」

「……………」

怒っているような。

叱責するような声で、僕に言い聞かす。

加えて畳み掛けるように。

「これ以上の理由が、一体どこにあるというの？」
と言っ。

「……………愚問だったな」

「愚の骨頂よ」

「なら、僕はもう何も言わないよ。ただし、大地の相手は僕がする。『ヴァンパイア』の力の制御はまだ十分とはいえないからな。そんな未発達の状態で『ジ・アース』の相手をさせるわけにはいかない」「本当の理由は？」

僕の思惑など全てお見通しだと言わんばかりに。

僕の《建前》を聴いて、緋姫は間髪入れずに返してきた。

「……………お前を危険な目に遭わせたくないからだよ」

それが、綺羅衣翼の嘘偽りのない本音。

それを聴いて、どこか嬉しそうな笑みを浮かべる緋姫。

……………くそ、全部この女にはお見通しか。

なんか悔しいな。

「だから、お前にはナンバー701の相手をしてもらうことになる」

「取り巻き四人組の中で、取り立てた特徴のなかった、あの女？」

「ああ……………実のところ、あの女が一番《読めなかった》。でも僕の勘で言わせてもらって構わないのなら 『六天道士』の中で一番強いのは、あの女だ」

最初に見た時から、あの女に匹敵できるのは僕か、あるいは『ヴァンパイア』しかないかと直感していた。

理屈ではない何か、あの女には秘められている気がしてならぬのだ。

「できるか？」

「違うでしょう」

「は？」

「私は、貴方が『やれ』と命令すればいくらでもどんなことでもやるわよ。だから、ここで私に言うべきなのは『できるか？』ではない『できるな？』よ」

輝夜緋姫は。

全ての承知も覚悟も踏まえた上で。

僕の心の内を　読み切った上で。

そう、言ったのだった。

「……前言撤回だ。できるな？　ナンバー？　『ヴァンパイア』輝夜緋姫」

そう言い直した僕に対して緋姫は。

「委細承知」

極めて端的に。極めて了解の意志を表明した。

「じゃあ……ほら」

そう言っ、僕は襟首をめくって、首筋を晒す。

「……今日は《その日》ではなかったはずだけど？」

「規則があるってことは特例があるってことだ。いいから飲め」

屁理屈もここに極まれり、って感じだったが、今日ばかりは法がどうこうとか規則がどうこうとか言っていていられない。吸血鬼が血を吸うのを渋るといふのは、結構見ない光景のような気がしたが、とにかく僕は無理矢理納得させた。

緋姫はゆっくりと僕に近付いて。

僕の首筋に、歯を立てる。

「この戦い、負けないわよ。翼」

寸前に、そう言っ、今度こそ歯を突き立てた。

そうだ、これは勝つための戦いではなく。

負けないための戦い。
護るための 助けるための戦いだ。
役者は決まった。

ナンバー13 『バッドラック』 轟虹色はナンバー44を。
ナンバー410 『シヨット』 シヨット・G・スカイハイはナンバ
ー283を。

ナンバー？ 『ロックオン』 真田真正はナンバー654を。
ナンバー？ 『ヴァンパイア』 輝夜緋姫はナンバー701を。

アウト・オブ・ナンバー 『エナジードレイン』 綺羅衣翼は、
ナンバー813 『ジ・アース』 八百十三大地を。

^{デリート}
消去する。

*

深夜零時。

私立相楽森学園正門前に、十一人の人間 否、人でありながら
人でない、埒外の存在達が集結していた。

大地は口火を切って言う。

「うんうん、ちゃんとみんな時間を守ってくれて良かったよ。時間
にルーズだと、社会でやっていけないからね」

事ここに至って尚、大地には余裕すら見て取れた。

「隔離範囲はどうするんだ？ この相楽森学園内か？」

「そんな大地に向けて、僕は問うた。しかし大地は首を振る。

「まさか。そんな狭い世界じゃ、この戦争は収まらないでしょ。ス
ケールは大きくやらないと面白くない。……範囲は日本大陸全域、

戦場はこの日本全土だ。できるよね？ 『ヴォイド』？」

釈迦堂に向けて、不気味な笑顔を作る大地。釈迦堂はそれに、び
くつと大きく身体を震わせるだけで、何も言わない。

「……ジャリ子。やれるな？」

轟が、サポートするように確認の言葉を言う。そのおかげで少し
はリラックスできたのか、大きく頷く釈迦堂。

「安心しなよ。『ヴォイド』内部で起きた破壊は現実世界に一切影響しない。その代わり、『ヴォイド』内部で起こった生産も同じく影響しない。だから、この機に日本に要石を設置するような真似はできないから、さ」

「……別に訊いてねエよ」

吐き捨てるように言う轟。掌を合わせて結界の展開を整えた釈迦堂に、例の手錠をはめる。

「これで『ヴォイド』が強制的に解除される心配はない。準備は万端だ、八百十三大地」

僕言葉に大地は頷き。

「それじゃあ……さあ！ 始めようか！ 終わりを！」

待ちわびた、というように大きく目を見開いて声を張り上げた。釈迦堂が口を開く。

開戦の、合図を。

「 空間、閉塞 」

Episode 10: the dawn of the war

10-4・開戦に先駆けて「負けないための戦い」（後書き）

綺羅衣翼リーダーによる個別指導です。まあ、表向きの理由は本編で翼が言った通り。裏向きの理由はページ稼ぎです。ええ、ぶつちやけますよ。ともあれ、次章からはノンストップバトルが繰り広げられますので、決戦前夜のそれぞれをお送りしたかったというのは本当です。ちょっとしたギャグパートも入れてあるので、楽しんで下さい。さて！ ついに幕を開けた世界の命運を懸けた頂上決戦、（次章から）はじまりはじまり。。。

EXTRA - 2 パトン編（前書き）

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・半角の（ ）で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・全角の（ ）で書かれている部分は主人公の情景補足
- ・《 》で書かれている部分は傍点（強調）

*
ハメラれた。

二度目だつていうのに、どうしてこう僕は引つかかってしまうのだろう……。学習能力はある方だと思っていたんだけどなあ……。しかもなんだよ、今回の仕事は。えーと……。バトン？ バトンってあれか？ なんかいくつかの質問に答えていくっていうやつだよな？ 誰だよ、こんな無茶ぶりしてきたのは……。時系列的に、僕は今、死闘を繰り広げているはずなんだが……。どうにもこの空間、そんな理論はお構いなしでやってくるパラレルワールドらしい。まあいいや。細かいこと気にしているといい感じにダウンになってきそうなので、そろそろ質問に答えていくかな。

……。変な質問が来ませんように。

Q1 貴方の名前は？

あ、良かった。最初はまともな質問じゃないか。えーっと、改めて言うのはなんか照れるな……。名前は綺羅衣きろえ翼たすくです。

Q2 名前の由来は？

……。今度はそういう切り口で来るのか。要かなめにつけられたから、って答えるのが一番簡単なんだけど、そこにも紆余曲折あるんで、詳しくは本編をどうぞ。

Q3 自分はどんな性格だと思いますか？

性格っていうか、体質になるのかな。専らツツコミに回ることが

多いです。

Q4 生年月日を教えてください。

うーん、これは僕自身も分かってないんで、答えられないです。

Q5 何歳ですか？

六歳です。っていつても、見た目はちゃんと大人ですよ。逆コナ君みたいになってますが、気にしないで下さい。

Q6 兄弟は居ますか？

いません。人造人間なんで。強いて言うなら、ナツメが姉ってことになりますね。

Q7 じゃあ、好きな人は？

..... あ、なんか殺意を感じた。いますいます！ 僕は緋姫ひめにぞっこんですから！ 無駄に大声なのは気のせいです！

Q8 どんな人？

す、すごく..... いい人、です、よ？

Q9 へえ。今度会わせて下さいよ。

い、いや、お勧めと命の保証はできないんで、やめときます。

Q10 冗談です。

..... 言っていい冗談と悪い冗談が世の中にはあるってことを、知った方がいいですよ。僕の立場をもう少し考えて下さい。

Q11 嫌いな人とか居ます？

..... 要、ってことになっちゃうのかなあ.....。嫌い、っていうか

いや、駄洒落じゃないですよ？ 憎い、っていつか……。

Q12 何処が嫌い？

そろそろこのバトンに疲れたんで、やめていいですか？ あ、ダメ？ ですよー。何処が嫌いか、ってうまく言葉に表せないんですけど、育て方が悪かったんでしょうね。

Q13 好きな食べ物？

基本的に、食べ物の好き嫌いはないですよ。一ヶ月間断食したこともあるんで、食にこだわりはありません。

Q14 嫌いな食べ物は？

だからないって。

Q15 癖とがあります？

癖かどうかは分かりませんが、よく不敵に笑うことが多いです。

Q16 口癖は？

職業柄、「貴様を消去する^{デリート}」って言う台詞ですかね。しかし、なんかこうして自分を振り返ってみると随分と物騒な発言してるな……。

Q17 寝癖は？

特にこれとってないです。というより、僕の髪の毛についての描写がこれまでに一切ないので、そこには触れないで下さい。

Q18 幼馴染みは？

いやいやいや、僕、まだ六歳ですよ？ なんか質問おかしくありません？ まあ、付き合いが長いっていう意味なら、所長と音葉^{おしほ}が

該当するんでしょうけど。

Q19その人は大切ですか？

音葉は勿論大切ですよ。僕の恩人ですから。所長も……まあ『大切』のカテゴリに入れても問題ないでしょう、それくらいには信頼してます。

Q20苦手なものは？

特に夏場、台所とかによく出没する黒いアイツが苦手です。この前なんて、危うく思わずルシフェラーゼで粉微塵にしてやりそうになりましたよ。

Q21特技は？

特技……特技なあ……。『エナジードレイン』は特技に入りますか？

Q22趣味は？

特にありません。少なくとも、マゾヒストではないので、念のため。

Q23自分は実は だ！

実は、も何も、さっき言ったでしょうが。自分はまだ六歳の人造人間だって。

Q24へえー。そうだったんだ…。

……貴方、本当に本編読んでますか？

Q25あ、いえ、何でもありません。

そうですか。その割にはさっきからこの小説のURLを暗記しようとしているのは、きっと僕の被害妄想ですね。

Q26 そろそろ終わりですね。

そうですね……って、さっきから最早質問じゃなくなってるような気が多々するのも……そうですね、僕の被害妄想ですか。

Q27 長い質問ですみません。

いえ、むしろ僕の方が勘違いしてばかりですみません。

Q28 このバトンを誰に回します？

僕の対人関係狭いからなあ……。緋姫や音葉、所長やシヨット、あと轟とどろや釈迦堂しゃかどうに回してみるのも面白そう。

Q29 では、最後に作者に一言！

緋姫はいつになったらデレるんですか？

Q30 お疲れ様でした。

こちらこそ、お疲れ様でした。

……と、僕がやったらこんな感じになったんだけど、どうなんだろう……。なんかこの仕事は所長じゃなく違う人から回された仕事らしいんだけど……ベル？ 確かそんな名前だったような……。

おっと、そろそろ大地だいちとのバトルに戻らないといけない頃だな。なんだかんだ言っても、やってみると面白いもんなだな、バトンって。時間潰し……というより、潰しちゃいけない時間を潰してしまっただ感が否めないけど。

そんな感じで、こんなところだ。何にせよ、まずは本編ありきな。まずはそつちを読んでくれ。

僕は不敵に笑って言い放った。

EXTRA - 2 バトン編（後書き）

暴露するとぶっちゃけ、時間稼ぎです。二ヶ月以上更新していなかったのも、そうだった意味ではこのタイミングでバトンを回して下さった如月文津さんには感謝でいっぱいです。どうもありがとうございます。白状します。さて、本編はそろそろ翼達のバトルが始まります。白状すると、先陣切って戦うのは虹色です。近々更新するので、どうぞお楽しみに！

11-1・先鋒「テメエはオトす」(前書き)

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・半角の() で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・全角の() で書かれている部分は主人公の情景補足
- ・《》で書かれている部分は傍点(強調)

11-1・先鋒「テムエはオトす」

青。

無限の青。

空虚な青。

どこまでも広がる。

どこまでも深まる。

隙間なく。

絶え間なく。

世界を浸食する、真正にして神聖なる巨大な波紋。

しかして無限であり空虚である青。

これより、血に染まる。

*

*

先鋒

「さて」

だん、と。

八百十三大地やぶとみ だいちが震脚のように地を踏み鳴らす。瞬間、その地面が

隆起し、塔のように峨々と天高く伸びる。

「僕は見えての通り背が低いからね。それに、やっぱりラスボスは高いところで待ってるのがセオリーってモンでしょ？　というわけで、僕は高みの見物と洒落込ませてもらうとするよ」

そう言っつて、塔の頂上に造られた玉座のような椅子に腰かける。

まさに　そう、まさに、RPGに於ける最後の敵であるかのよう
に。

「それじゃあ、誰からいく？」

あくまでも雑談の延長線のように飄々とした態度を崩さない大地。
その言葉に対して。

「僕がいけますよ」

と。真っ先に名乗りを上げたのは、総髪が特徴的な青年。背が高くひよろつとしているにもかかわらず、その佇まいからは微塵も非力さを感じさせない奇妙な威圧感を放っている。

ナンバー44である。

「『ジ・アース』？ いいんですよね、僕が全員殺してしまっても」

「ああ、構わないよ。その時はその時で面白いからね」

強気に満ちた宣言をするナンバー44と、それに平然と受け答える大地。そこに割って入るかのようにな。

「ちっ……………」

そんなあからさまな舌打ちをしたのは、言うまでもなく轟虹色ウツロコである。ナンバー44に対しては轟をぶつけるように決めておいたのは僕なのだから、それが相手に向けられたのか僕に向けられたのかは、今の轟からは察することができない。かつての覇気を全く感じられない、《今の》彼からは。

「会長……………」

ナンバー100『ヴォイド』 この密閉空間を形成しているところの釈迦堂しやくかだう唯がゆい呷く。彼女も僕同様、轟に対しての接し方を測りかねているようだ。

「……………」ま、取り様によっちゃ真っ先に役目を終わらせられる、ってのは楽じゃああるよな」

そう一人ごちて。

轟は一步を踏み出す ナンバー44の方に向けて。

「綺羅衣翼きしえ。他の全員にも言っとけよ。余計な横槍入れるような真

似すんじゃないエぞ。『ジ・アース』の野郎は常に気を張り巡らせて

やがる。《ゲームの邪魔をするような奴》は、速攻でぶち殺される

ぞ

「……………」

確かに。

それはさっきから僕も気にしていたことだ。大地は『高みの見物』

と称して一見何の意味もないようなことをしているが、アイツの性格からして助っ人の介入などは例外なく認めないだろう。《マナを張り巡らせて、僕らの一挙動に目を光らせている》のがいい証拠だ。もしも誰かが一対一の決闘の邪魔をするようなことをすれば、間違いない抹殺に動くつもりでいる。

「……ま、精々死なねえように善処するさ」
「そう残して。」

彼らしからかぬ、弱気な一言を残して。

轟虹色は、ナンバー44の男と対峙する。

先鋒。ナンバー13対ナンバー44。

*

「ナンバー13『バッドラック』だろ？ 僕はお前のことを知っているよ」

「あん……？」

ナンバー44の言葉に訝しんだ様子で、首を傾げる轟。

「詠うことに特化した最強の陰陽術師、轟一族の末裔。轟虹色だっ

け？ 『ジ・アース』は『バッドラック』と呼んでいるようだけど、

僕はお前のことを名前で呼ばせてもらうよ」

「……何が言いてエんだよテメエ。回りくどい男は嫌われるらしい

ぜ？」

「轟、と名乗れば分かるかな？」

びくり、と。轟の薄い眉が持ち上がる雰囲気が出た。

「轟……？」

「轟家の分家だ。確か、喚ぶことに特化した陰陽術師の家系、だっけか。陰陽術っつーよりは召喚術に近いよな」

僕の呟きを拾ってか、轟が口を開く。

「覚えておいてくれて光栄だね。改めて自己紹介をするよ。僕はナンバー44轟介輔、能力名『サモン』だよ」

「……………」

なにはおいても。

どうなんだ、そのネーミングは。

「『サモン』 召喚、ってことか。確かに、オレの能力と似ちやいるわな」

「勘違いしないでもらいたいな、轟虹色。お前の陰陽術師としての能力は詠うことに特化した『詩霊』^{ヴァース}、そこにナンバーズとしての異能力『バッドラック』^{アルファ}が重なっているだけだろう。言うなれば、+^{プラス}だ」

ナンバー44『サモン』、犇介輔は、特徴的な総髪をキザったらしく掻き上げ、自信満々に口にする。

「僕の陰陽術師としての能力は喚ぶことに特化した『七聖』^{しちせい}。それに加えてナンバーズとしての異能力も『召喚』^{サモン}だ。つまり、言うなれば僕は^{カケルアルファ}さ！ 僕と君とじゃ、絶対値が違うんだよ」

「ごちゃごちゃと」
くん、と。轟が地を蹴る。その姿が霞んで見えた一瞬の後。
「るせエンだよ！」

間合いを詰めた彼が、大きく体幹を捻り、一気呵成の回し蹴りを繰り出した。怒号と共に。

轟虹色の体術。どれほど墜ちても鷹は鷹、どれだけ覇気を喪失したところで、アイツの実力が衰えるわけではない。空を裂く音さえ響かせずにナンバー44の側頭部を狙い打ったのである。

「おっと」

だがしかし、相手も曲がりなりにナンバーズ。格闘系の異能力こそ持っていないが、それでも一直線の蹴撃を涼しげに後ろに跳び退き難なく躲していた。長い総髪にすらかすっていない。

「ごちゃごちゃ御託を並べてねエでかかってこいよ。オレもテメエも陰陽術師。言を紡ぐのは術ン時だけで十分だろうがよ」

だらりと両手をぶら下げて。

追撃をかける素振りも見せないまま。

面倒臭そうに、吐き捨てるように言っただけだ。

覇気を失くしても。

殺気は失くさずに。

「……はっ、言うことだけはもつともだな。……いいよ、僕も前々からお前とは白黒つけたいと思ってたんでね。！」

十分に轟との距離をとった上で、轟は身構える。

ファイティングポーズではなく、指で印を組むように、身構えた。

「【来々、玄武】」

と。そう詠った。否、喚んだ。瞬間。

ずん……！

腹に響く重低音を立てて、《ソレ》は四足で地に降り立った。

巨大な……あまりにも巨大な、亀。人間一人くらい、一噛みで砕いてしまいたいほどに大きく割れた口。覗く杭のような牙と同じく、甲羅からも無数の棘を生やした魔力の塊。

これがナンバー44『サモン』の力、喚ぶことに特化した陰陽術『七聖』の能力か！

「まずは一つ目、『七聖』の一、玄武だ。さあ行け玄武！ 容赦は

いらぬ、噛み殺してやりな！」

「！」

応、と頷くように短い四本足が地を踏み締める。直後、飛び出したソレ。玄武は、亀とは到底思えない速度で轟に襲い掛かった。

「は」

大きく口を開けて、轟に迫る玄武。くぱあと開いた口は、誇張でもなんでもなく人間一人を飲み込むのに十分なサイズだ。

それに対応して、轟は跳んだ。

横でも、後ろでもなく。

あろうことが、前へ。

「どんなに外が硬かろうがよ」
拳を握り締めて。

口内目掛けて、拳撃を繰り出す！

「ロン中が柔いのは、変わんねエだろうが　！」

牙と牙とが、ぶつかり合うより前に。

その凶悪な顎あごが、交錯するより前に。

爆発的な破壊力を伴って、拳を叩き込む！

ほん！　と破裂するような音を立てて。

吹き飛んだのは……玄武の上顎。飛び散る肉片とセラの雨。

魔力で喚ばれた異形であるが故に、血潮が舞い散ることはなく、跡に残ったのはただ頭部を失った“亀らしき物体”だった。

僕は、轟を甘く見ていたのかもしれない。前回矛を交えた時は半ば僕のラッキーパンチも混ざっていたし、『ヴァース』の補正もかかっていた。彼の本気というものを本当の意味で理解はしていなかったようだ。

まさか肉体を、拳のみで文字通り粉碎するとは思ってもいなかった。

魔力を帯びた轟ぼんの拳撃は、『ヴァンパイア』にすら匹敵する　！
やがて、頭部を失った玄武は霧のように消滅する。召喚された時とは違い、音もなく、静かに。

「……まさかこれで終いじゃねエだろうな？　『サモン』さんよ」
拳を振り上げた姿勢そのままに。顔を俯かせたまま轟は、相変わらずの腹に響くバスボイスで口を開いた。そして気だるげに、ゆらりと体勢を整えて。

「まだあと六個あんだろ？　出し惜しみしてねエでとっとと出せや」

右親指で。

奈落を指した。

「轟イ……テメエはオトす」

鬼気迫る、という表現があるが。

その表現ほど、今の轟虹色に相応しいものはないだろう。

いや、あるいは。

その表現すら、今の轟虹色には相応しくないのかもしれない。

「…………お」

今のアイツは、まさしく本物の鬼。

「オオオオオオオオアアアアアアアア！！！！」

荒ぶる神魔　！

この世の全てに響き渡るような咆哮を上げて。

轟が炎の中から蘇る。そして一気に地を蹴り。

肉薄するは、紅蓮の双翼をはためかせる怪鳥。

『七聖』の四、『朱雀』である。

「スズメ風情がギヤアギヤア、煩エンだよ」

巨大な嘴を両手で掴み取り。

文字通り、鷲掴みにし。

「テメエの炎で焼かれろやア　！！！！」

まさに、雄叫び。遠雷の如く轟く雄叫びを上げて。

『朱雀』を……………《引き裂いた》。

力任せに、己が暴力を以て。

ナンバー44『サモン』の使い魔『七聖』の過半数を、完全消滅

させたのである。

「……………凄まじい」

知らず、僕は口を開いていた。

そう、凄まじいのだ。それ以外に形容のしようがないほどに。

今の轟虹色の強さは……………圧倒的だった。

……………だが。

「ハアー……………ハアー……………」

「……………」

肩で息を整えている轟に対して。

息一つ乱すことなく見据える犇。

既に手札の半分を失っているにもかかわらず、犇介輔は平坦な

ともすれば冷淡な　視線で、轟を見据えているだけだ。

理由はごくごく簡単。

「ハアー……………。ナニ呆けていやがる、犇介輔さんよオ……………、あと三

つしかねエンだろうが？ もうちつと焦れや」

「三つ《しか》？ 三つ《も》、の間違いだらう轟虹色クン？ そんなポロボロの身体で、随分と大きく出たものだね」

そう、轟は、既に満身創痍なのだ。

『七聖』の一、『玄武』を無傷で倒せたまでは良かった。逆に言っ
てしまえば、良かったのはそこまでであり、あれも思い返してみれ
ば運良く無傷で済んだだけなのかもしれない。

二つ目、『白虎』が持つ鋭い牙や爪、更にはその疾風の如き速度
に翻弄され。

辛うじて捉えた左足で、『白虎』の腕を粉碎。

三つ目、『青龍』は『水神』 奴の手から放たれた一粒の水滴
は次の瞬間、一発の魔弾と化して轟を貫き。

辛うじて回避に成功した一瞬の隙を突いて、『青龍』の胴体を左
手刀で両断。

四つ目、『朱雀』を前にして勝利を収めることができたのは、奇
跡に近い偶然だ。それほどまでに、轟の攻防は直情的すぎた。命そ
のものを削って力を得ているような錯覚に捉われそうな、向こう見
ずな行き当たりばったり戦法。

……違う。

僕の知っている轟は……あの猛禽類を彷彿とさせる霸王は、《こ
んな戦い方》をする男じゃない。単調に見えるがその実、刻一刻と
変化する戦況を見極め、悪辣なまでの狡猾さで獲物を追い詰めるよ
うな計算高さを持っていたはずだ。

こんな、猪突猛進を絵に描いたような……まるで、死に急いでい
るかのような愚かしい戦い方を、誰よりも嫌っていたはずだ。

ナンバー44『サモン』の能力は『七聖』 つまり、七体の使
い魔だと分かった上でこの体たらく。

コイツは……本当に轟虹色か？

「……君には失望したよ。轟虹色」

ナンバー44の口が、ゆっくりと開かれる。同時に、瞳に宿した

感情も、別のものへと変わっていく。

落胆の色が。

変わっていく。

侮蔑のそれへと。

「『オンリーワンであるが故にナンバーワンの陰陽術師』の力が、この程度とはね……本当に、がっかりだよ。僕はね、一応認めてはいたんだよ、君の家系が最強だっということは」

ゆっくりと。

まったりと。

のんびりと。

最早緩慢にさえ近いほどの速度で構えを取る、犇介輔。

胸の前で。

印を組む。

たったそれだけの小さな動作。

しかしそれこそ、彼のファイティングポーズに他ならないのである。

「ただ、最優であることは決して認めていなかった。だから僕は証明しないとイケないと思っていた、『陰陽術に関しては、我が犇家の方が優れている』と……。でも今となっては、そんなもの証明するだけ馬鹿げているということに気が付いたよ。今の君を打倒しても、何の誇りにもなりはしない」

「……ごちゃごちゃと。饒舌な男はダサイぜ？」

「詭弁を弄するだけの今の君よりは、よっぽどイケてるよ、《ナンバー13》……。終わらせよう」

それは、本当に一瞬で。

僕にすら、視認できないほどの弾指の間の出来事。

印を完成させたナンバー44が。

「【来々、一角】」

『×の異能力』を以てして。

詠った 否、喚んだ。

雄々しくそそり立つ一本の角が燦然と輝く。
神代の伝説にのみ名を残す一角獣。即ち、『麒麟』を。
その角が。

ドツ。

と、音を立てて。

轟の胸を、串刺しにしていた。

「ああ、言い忘れていたけど」

既に轟のことは眼中にないかのように。

表情を浮かべず、犇介輔は言い放つ。

「『七聖』の四つ目まで、つまり『四聖獣』はほとんどがお遊びの相手ですね。『一角』から上は格が違うよ」

一本の角を持つ伝説の四足の獣に貫かれた轟の右腕が。

末期の力を振り絞っているかのように、宙を彷徨う。

もう駄目だ。

誰もがそう思ったに違いない。

僕も。

緋姫も。

所長も。

シヨットも。

大地や、他の六天道士までも。

轟虹色本人でさえも。

諦めかけた、その刹那。

「ん！！」

唯一希望を捨てていなかった人物が、ありえない叫びを上げた。

あるいは、それは必然。

そう、この場に於いて、『唯』一の例外。

釈迦堂唯！

11-1・先鋒「テメエはオトす」（後書き）

お待たせしました！ ようやく本編に帰ってきてこのバトルを書く
ことができました。いやー、ちよつとやることが多くて……ウダウ
ダ。ともかく、ようやく辿り着いた最終決戦、先鋒として挑むのは
轟虹色！ しかし、よく見てみると短いし、轟弱いし……いいんだ
気にするな！ さて、虹色はどう切り返すのか！？ 唯の叫びとは
なんなのか！？ というわけで、次回をお楽しみに！！

11-2・先鋒決着「勘違いしろよ」（前書き）

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・半角の（ ）で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・全角の（ ）で書かれている部分は主人公の情景補足
- ・《 》で書かれている部分は傍点（強調）

11-2・先鋒決着「勘違いしろよ」

*

NIJIIRO

あア……、マズったなア……。

五体か……もうちよい踏ん張れっと思ったんだけどよオ、オレは所詮、この程度の野郎だったってわけか……。

でも、この胸の傷は、ちよいとばかり深すぎだわ。傷つつーより、出血がひでエ……致命傷だ……。

終わんのか、ここで。

呆気ねエな……、マジで、呆気ねエ……。

……でも、まあ。

一度負けンのも二度負けンのも、大して変わらねエよな？

見るかよ？ 綺羅衣翼。この不様な死に様を。

どっちみち、一度はテメエにくれるはずだったこの力と命、最後まで使い切ってやったぜ。

あとのことは……テメエに任せても、いいよな？

唯のことを……頼むぜ。

なア、唯。

お前は、いつだってオレの側にいてくれたよな？ 感謝してるぜ。

記憶を奪っておきながら、都合の良すぎる話だとは思っがよ……。

せめてもう一度だけ できることなら、何度でも。

その巻き毛、優しく撫でてやりたかった、な……。

お袋もよ、お前とよく似た癖っ毛だったんだよ。

もことからドジだったお前に、全ての『不幸』を押しつけて……。

悪かったな。

でも、もう自由だ。オレが死ねば、『バッドラック』は消える。

好きに、生きろよ。

……唯。

そんな悲しそうな面、してンじゃねエよ。

笑ってれば、お前はそこそこ可愛いンだから、な。

最後の最期だ。

最期の刻くらい、唯の側で。

動け、オレの腕。

最期くらい、ちよつとでも唯の近くで死にてエ……。

ちよつとでも、唯に。

「《お兄ちゃん》！！」

「な」

ありえない。

この場にいる全員、同じ気持ちだっただろう。

いつだってオレの背中に隠れるように立っていた唯が。

いつだってオレに護られていたはずの唯が。

何より、オレが記憶を消したはずの。

オレの血を分けた妹が！

涙を必死に堪えながらも、小さな胸を堂々と張って、オレを呼ん

だのだ。

……嘘だろ？

幻聴か？ オレが自分の都合のいいように産み出した、妄想の産

物ってかよ？

その思考を、読んでいたかのように。

胸の内を読み通して、全否定するかのように。

更に、唯が口を開く。

「唯は……唯は知ってます！ お兄ちゃんはとても意地っ張りで、

乱暴で、意地悪で、口も悪いけど」

唯……。

「本当は、誰よりも負けず嫌いで」

お前……。

「誰よりも優しくって
記憶が……。」

「誰よりも、唯のことを想ってくれてるんだって!!」
オレの命が消えかけてるから、異能力ふういんも消えかけてるってことか
?

……莫迦じゃねエか。違エだろ。

そんな、理屈や理論でどうにかなるモンじゃねエだろ、コレは。
どうにかしていいモンじゃ……ねエだろうが!

コレが、“絆”ってヤツだろうがよ !

唯が、こんなにも、血を吐くような思いでオレのことを信じてく
れてるってのに。

「だから……だか、ら……っ」

オレは。

オレは、なに勝手に諦めようとしてンだよ !

オレの命は、オレ一人のもんじゃねエだろうが !

「負けないで !!!」

負けるかよ!

オレは行き場を失くしたように宙を彷徨う腕で。

『一角』の角を オレのことを串刺しにしてくれやがった角を掴
んで。

ありつたけの魔力を注ぎ込んで。

とっておきの。魔言を紡ぐ。

「【テメエはここに ありえない】」

*

「なっ !」

轟とつと吹き荒ぶセラの嵐。轟と『一角』の周囲を、眩いばかりの
光の渦が包み込む。

この場の誰もが息を呑んでいた。

完全に死に体だったはずの轟から。
膨大な魔力が放出され、一瞬にして戦場を席卷したのである。
だが、しかし。今の『ヴァース』は……。

(七・五調!?)

轟の異能力は、『五・七・五調で』詠わなければ効果がないはずだ。にもかかわらず。

「……チツ、ジャリ子の分際でこのオレ様に向かって知ったような口、叩きやがって……」

「お、お兄ちゃん……」

ナンバー13『バッドラック』、そして『天下無双の生屠会長』こと轟虹色は。

「お前のおかげで」

全身から、溢れんばかりのオーラを漂わせて。

「目エ、覚めちまつたじゃねエか」

不死鳥の如く、霸王として蘇った！

「ば、馬鹿な……! 『一角』は確かに、貴様の心臓を貫いたはずだぞ……! なのに、どうして生きている!? いや、それ以前に……!」

思わず、といった様子で後ずさるナンバー44『サモン』犇。今はやはり、その心中が分からないでもない。

「どうして……『貫いたはずの胸の傷が消えているんだ』……!?!」

そう、『一角』の角に穿たれたはずの轟の胸に、穴は開いていなかった。それ以前に戦った『四聖獣』から負った傷は消えていないが……。

「『一角』? 胸を貫いた? は、奇妙なこと言ってくれんじゃねエか」

轟は。

さも平然とした口調で。

「言っただろうが。『ンな奴はありえない』、ってよ」

口許に笑みすら湛えて、不遜に言っただけだ。

つまり轟は、さっきまで胸を貫いていた『一角』を、《はじめから存在していなかったことにした》のだ。彼の能力 『ヴァース』を以てして。

存在していないものから傷を受けることはない。即ちこれは。過去の……改竄！」

轟虹色が。

最強の陰陽術師が。

その異能力『詩靈』が ！
進化したということ！

「お、お兄ちゃ

「勘違いしろよ、《唯》。テメエのためなんだからな
今ここに。

誇り高き鷹が、静かなる完全復活を果たした。

対峙するだけで、その場にいる者を物理的なプレッシャーすら伴って威圧する、暴君が。

口許に微笑を湛える轟と。

涙に濡れて、それでも満面の笑みを浮かべる釈迦堂。

かつて分かれたれた兄妹が。

今ようやく、再会した。

「もうちょっと待ってな、唯。……すぐ、そこまで行くからよ
当然、面倒事は片してから、な」

「待ってます！ いつまでだって……！」

この二人の間に、最早多くの言葉は不要だった。

轟は改めて轟の方へと向かい合い。

「つーわけで、急いでんだ。さつさと来いや、犇介輔。残りの手札
は二枚だけだろ。……テメエの底は、もうスケスケだぜ」

「……ほざけよ。そんなちやちな兄妹愛なんて、すぐにぶち壊して
やる。たかだか『一角』を打ち破ったくらいで

犇は。すぐさま胸の前で印を組む。目にも止まらぬ技量と速度で
印を完成させ。

「僕に勝った気でいるのは……大間違いなんだよ！」

己が使い魔を 喚ぶ！

「【来々、明王】」

ずし、と。どこからともなく降臨したのは。

二本足で地を踏みしめ、四本の腕にそれぞれ武具を持つ
魔を討ち破るとされる、古より日本に伝わる降伏の諸尊！

「僕の『七聖』の中で唯一、人の形をした使い魔だ！ どうだ轟虹色！ 神をも操る陰陽術、これが我が犇の真のちから」

「……何度も言わせんなよ」

轟は。その場から動いてさえいなかった。

いや、正確には動いていたのだろう。

ただそれが、化け物じみた速さで行われたヒットアンドアウエーだったというだけで。

僕でさえ、おぼろげにしか見切れなかった。

まさに、瞬殺。

『七聖』の六、『明王』は、喚ばれた際に生じた一瞬の隙を突かれて消し飛んだのだ。

「オレら陰陽術師は言を紡いでナンボ。御託を並べるのはサンシタのやるこつた」

「そ、そんな……馬鹿な……」

これが、迷いを捨てた轟虹色の真の実力。運命に翻弄され続けた兄妹の究極の絆が産み出した、極限の力！

「言つたらうが、犇イ……」

今の轟に。その絶対的な重圧に。霸王の闘気に。

「テメエは、オトす、つてな」

一切の揺るぎなし！ まさしく一騎当千！

「……まだだ。まだ、僕には最強のカードがある……！ 今こそ見るがいい！ 『七聖』の七を！」

不屈の闘志を燃やすナンバー44が、最後の手札を切る。印の数も、これまでとは桁違いだ。

陰陽術師同士の威信を賭けた、最後の頂上決戦！

「【来々 玉藻^{たまも}】！！」

そして、ソレは受肉する。最初に喚び出した『玄武』などは、サイズも魔力量も雲泥の差だ。

現世に降り立ったソレ。

伝説の妖狐。

「九尾の狐！」

「！！！」

吼える、九尾。その叫びが生んだ大気の震動だけで、並みの人間なら跡形もなく消え去っていることだろう。

「言っておくがな、轟虹色！ この『玉藻』はこれまでの『七聖』全てを集めても足許にも及ばない力を持っているぞ！ これが僕らの力、『ジ・アース』に極限まで鍛え上げられた最強最悪の力だ！

……一度解き放たれたが最後、コイツは僕の意味とは関係なく殺戮を始める！！」

「ふーん……」

それでも轟は動じない。その佇まいは、決して揺るがぬ不動の大木を連想させた。

その表情からは……余裕すら窺える。

「ちっ……どこまでもおちよくりやがってえ！ 余裕見せていられるのも今のうちだけだ！ 地獄に落ちるのは貴様の方だ、轟い！！」
ナンバー44『サモン』はそう叫んで。

最後に縛りつけていた、九尾の鎖を解除した。

そして、『玉藻』の凶悪なまでの魔力が解放される

「……お前、アホだろ」

直前に。僕は確かに轟の呟きを聴いた。

襲い掛かる『玉藻』。九本の尾が四方 と言わず八方から

否、更に逃げ道をも封殺しようと、九つの方向から。

大陸をも切り裂く、巨大な鎌鼬と化して襲撃する　ただ一点、
轟虹色のみを狙って！

巻き起こる。

魔力の大爆発と。

同時に生じた、爆風と爆煙。

もしもこれが『ヴォイド』内ではなく現実世界で起こったならば、
核兵器並みの破壊力を起こしていたことだろう。

「お、お兄ちゃん　！」

釈迦堂が絶叫にも近い悲鳴を上げる。本当ならすぐにでも『ヴォイド』を解いて兄を助けたかったはずだ。

でも、できないし、今の彼女なら、できたとしてもきつとしない。

何故なら。

「は、はははははは！　どうだ轟い！？　これが僕の力だ！　跡形もなく消え去っただろう！？」

轟は勝ち誇ったように高笑いして、僕達の方を見やる。

「今度は貴様の番だぞ『エナジードレイン』！　泣いて許しを請うてももう遅い！　『玉藻』は純粋な破壊衝動のみで動く怪物だからな　！」

「……そうだな、確かに跡形もなく消え去ったな」

釈迦堂唯は、轟虹色のことを誰よりも信頼しているのだから。

轟が釈迦堂を信じているように。

釈迦堂もまた、轟を信じている。

自分の兄は、この程度の逆境を乗り越えられないほど弱い男ではない、と！

「アンタご自慢の『七聖』が、見事に全滅だ」

「な……なに？」

「　そいつを聴いて安心したぜ、轟介輔」

その声に過敏に反応して。

ナンバー44は振り返る。

先刻まで轟が 否、《『玉藻』が》いた場所に、向き直る。
霞む煙の向こう側。

そこに立っていたのは。
「これでも動物は好きな方なんでな。あんまし無益な殺生はしたくなかったんだが……」

「あ、あ、あ……」

「飼い主が『怪物』だって言うなら、大して心も痛みやしねエ
死神の如く君臨する、無傷の轟虹色。」

「ど、どうして……」

ナンバー44が。

轟介輔が。

あれほどまでの大口を叩いていた、六天道士の一角が。
戦慄していた。

ただただ恐れ、慄いていた。

「『どうして』？ 変なコト訊くヤツだな、テメエは。自分で用意
してくれたんだらうが。《触れられる箇所を九ヶ所も》」

「……！！」

「まさか、忘れてたとは、言わせねエぜ？ 轟家伝家の宝刀
即口』をよ」

あの爆発は……轟が起こしたものだ。一瞬すら短い間に、
十七文字の詩を詠って、それで生じた大気とセラの爆発。

《触ることのできる箇所が一ヶ所でもあれば》、それが轟虹色の
絶対支配領域なのだ！

「だ、誰だ……お前は……」

一步、また一步と。

じりじりと 恐らくは自分でも気が付かないうちに後ずさりす
る、ナンバー44 轟介輔。

そう、違うのだ。『四聖獣』を相手に苦戦していた轟と、
『玉藻』をいとも容易く打破した轟とでは、絶対的に違っている。

「オレの名前を、忘れたか？」

事ここに至って、形勢は完全に逆転していた。

犇は、もっと早くに気付くべきだった。気付かなければならなかったのだ。

手負いの獣ほど恐ろしいものはないと。

「いいぜ。知らねエってんなら教えてやる。忘れたってんなら思い出させてやる」

轟は口の端を不気味に歪め、放言する。

「オレの名前は轟虹色！ 強固な護りを脅威で突き崩す恐怖の狂人、轟虹色だ！」

そう、それこそが轟虹色。最強を詠い最恐を示す最狂の君臨者！

「もう、言葉は要らねエ」

首をコキコキと鳴らして。

「あとは語り合おうぜ……拳と拳で、とことんな！」
「う、う、あ……うううあああああ！！！」

破壊的なプレッシャーに正気を失くしたのか、この世のものとは思えない類の絶叫を上げ飛び掛かる犇！ 大上段に跳び上がり、上空から轟を狙う！

「【この攻めは】」

そこから先は、全てがスローモーションに見えた。

「【命中すれば】」

頭上から襲ってくる敵に対して、轟の右足が爆発的な瞬発力を生み。

「【即死級】！！」

上からの攻撃に対するカウンターとして、《更に上》という選択肢を定めたのだ。

犇介輔の側頭部を狙った。
超強烈な。

大上段浴びせ蹴り！

しかし！

「おおおおおおお！！！」

敵も真つ当な相手ではない。陰陽術師といえど、体術を疎かにしている理由はない。ましてや彼は六天道士の一人。『ジ・アース』こと八百十三大地から手解きを受けたナンバーズ。

ただでは終わらない。

犇は、何も無い宙空でぴたりと止まり、轟の一撃を間一髪で避けていた。大きく空振る、轟の右足。

「ははは！ かかったな轟虹色！ 僕の陰陽術が喚ぶことだけだと思ったら大間違」

「……【残念無念】」

野生の鷹は、決して『攻め』を一撃に懸けたりはしない。慎重に狙いを定めて、獲物の決定的な隙を待つものだ。

犇は、ここでも選択を誤った。

否。そもそも。

《空の王者に空中戦を挑む》こと自体、愚行以外の何物でもないのだ！

『詩^{うた}霊』はまだ。

終わっていない！

『不幸』の。

重ねがけ！

轟は空振った蹴撃の勢いそのままに、身体を横に回転させて。

全体重に全魔力を上乗せさせた左手で。

必殺の裏拳を繰り出す！

「【おとといきやがれ】！！！」
炸裂する！

必殺を喰らった犇は、悲鳴を上げる暇すらなく、触れ合った瞬間に衝撃で気を失い、ボロ雑巾のようになりながら錐揉み状態で地面に叩き付けられる。そのまま地面を転がり続け、数百メートル先でようやく止まった。

辛うじて息はあるようだが……誤審の余地は皆無だろう。
空の敗者は……ただ、《オトされる》のみ。
それを見届けた轟は軽やかに地に舞い降りて。
静かに両手を合わせて。

目を瞑り。

「字余り御免」

決着。

先鋒戦。

勝者、ナンバー13『バッドラック』。

Episode 11 : S U M M O N - e n d

11-2・先鋒決着「勘違いしろよ」（後書き）

轟虹色の大逆転劇です。やっぱこういう圧倒的な逆境を覆す展開で燃えるよね！ 前章とは反対に、今度は犇君が完全なる噛ませ犬状態になってしまいました……。最後の戦いくらいこんな急展開があってもいいのだ（勝手な都合）。そんなわけで先鋒戦決着編、如何だったでしょうか？ 次章からはショットのバトルを予定しております。乞うご期待、です！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6780i/>

きっと僕にできるコト

2011年9月30日20時45分発行